

無敗の悪戯好きとコックさん

零課

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ウマ娘の小説が面白いので息抜きがてら投稿です。アニメは見ているのですが、アプリは未だできていません。おのれスマホ容量。

エアプ勢ですがちよつとやってみたくて書いてみました。よければどうぞ。

目次

このウマ娘は悪戯好き	1
居着いてしまう無敗の王者。ただし、学園の負担は考えない	13
コックさんはトレーナーへ。王者は炎上する	35
リギルへ突撃隣のお手伝い	47
チューンナップ開始	58
黄金鍛錬	70
改めて、金持ちなんやなあ	89
鍛造と絞り	101
大炎上。でも対岸の火事扱い	114
再分析とプール	129
疲労抜き	144
レース前	153
世界への入門	163
生ける伝説	179
レースを終えて	195
訪問戦争と巨星	204
時代を作り出す	213
私らアメリカさいくだ	228
サンデーの一日	239
女王様とのデート	253
勇者か変態か	264
逃げ切りシスターズ&対策班	274
トレセン学園御用達商店街	290
後継者みつけた	300

ばれちやった&お前ら世界を見ろ

サンデーサイレンスって靈感ありそうですよね

春ノ風神、ターフの女王帰国

中央トレセン学園御用達農園

322

342

351

362

このウマ娘は悪戯好き

そのウマ娘は国の評価を変えた。

「このトロフィーもらっていくわ」

そのウマ娘は負けなかった。どこへ行っても。その強さでねじ伏せ、時には最高の敬意をもって送り出される。文句のつけようがなかったのだ。その走りに。

「うーん…なんだか気恥ずかしい。こういう掌返しは嬉しいけど」

どこまでも走り抜け、その結果が凱旋門賞。ジョッキークラブ。ミラノ大賞。キングジョージ。全ての大会を制覇。更に言えば凱旋門賞は連覇という偉業を達成。イタリア、イギリス、フランス。欧州の大レースを手にし、世界にその名をとどろかせた。

どんなに過激なレース後でもすぐに呼吸を整え、無尽蔵のエンジンを持つウマ娘と称えられ、その末脚はミサイルのようだと言われるほどの爆発力と速さを持つ。

フランスのシーバード、アメリカのセクレタリアト。それに並ぶと言われ疑われない。世界規模で見ても最強の一角と言われ、生きる伝説となったそのウマ娘の名前はリボー

現役無敗を誇ったまま引退し、イギリス、アメリカでトレーナー、モデル、役者、テレビと引つ張りだこであり。そのギャラの高さやスポンサーの強い願いでひたすら飛び回る毎日。そんな彼女は。

「……めんどくさい……………」

心底、気だるげに仕事のキャンセルをしていた。165センチの背丈に、初見の人であれば元レースの覇者とは思えない。モデルどころか栄養失調を思わせるほどの細い体格。しかし出るところはしっかりと出ているせいで非常にグラマラスな肢体は誰もを魅了する。

黒みがかった栗毛を伸ばし、リボンでまとめた髪は美しく、あの「BIG RED」の名を受け継ぐ超弩級の怪物ウマ娘セクレタリアトのいるアメリカでも多くの人が受け入れた。

そんな彼女だが悪戯好きの気分屋の気質が強く、気が乗らなければ仕事をキャンセルというのは日常茶飯事。マネージャー兼元トレーナーもその気分屋ぶりは現役時代から振り回され、一度衝突があつた時はあわや三戦目のレースで無敗記録に泥を塗りかけるなどその程度のひどさは業界でも有名。

アメリカに来てからというもののその気分屋ぶりはさらにひどくなり、アメリカでは彼女の気分をのらせるにはどういうプレゼントや仕事ならいいだろうかと議論されるほどだ。そのプレゼントや企画を考えるバラエティー特番が生まれ、そこにアメリカの名バタたちがそろって議論を交わしたりしたと言えばその度合いがわかるだろうか。

「はあーあ・・・あー・・・あの人に会いたいなあ・・・」

当の本人はその議論をよそに気分が乗らずに大きな胸を揺らし、椅子の上で船をこぎながらぼやく。最近気分が乗らない理由。それは食がアメリカ式なのは合わず、どうにもおっくう。早い話が舌が美食に飢えている。

世界最高の力を持つアメリカ、そして多くの料理人がいるゆえにその料理のレベルも高いのは確かだが、美食の本場イタリア、フランスでの生活が長いリボーにとってはやたら分厚くかたいステーキや激

甘すぎるお菓子、バターの塊を揚げるといふ狂気の料理に闇夜で光るケーキなど、珍味どころかどうしてそれを再現したといたい食品や料理。その奇天烈さにうんざりしていた。

今欲しいのは仕事でもらえる報酬でも、聴衆からの賛辞でもない。美食。それも少し小さいところに日本で出会ったあの人。トレーナーとしてか、あるいは料理人か。どちらの道を選んでいるかはわからないがいまだあの味は記憶に思い出せる。リボーはその味を欲していた。妄想すればよだれが出そうになるほどに。

「んっ……ぐ……ふう……はぁーあ……おお……？ 着信……
ジャスタウェイからだ。何々……「探し人見つかる」……！」

そんな中、凱旋門賞を観戦していた際に見かけ、何でか仲良くなれた日本のウマ娘ジャスタウェイ。メル友となっていた彼女から持たされたメールの内容と添付されていた写真。それを見るやりリボーの赤い目はカツと見開いて釘付けになる。

幼いころ、日本最強のウマ娘たちを見るために来た日本で出会った、料理人兼トレーナーを目指すと言っていた年上のお姉さん。その足取りがわかりようやく、昔の約束を果たし、あの料理を食べられると胸を躍らせる。

当時の若き新星シンザン、ハリボテエレジー。その走りに負けないほどに刻まれた料理の味。あれをもう一度。思うだけで耳がピコピコと動き、しつぽがべしべしと椅子を叩く。

「よし……いこう！ 目指せ日本トレセン学園！」

この後、リボーは億単位で貯金を日本円に変え、緊急記者会見で芸能界からの引退も発表。「今仕事無いから日本でエンジョイしてきま

す」そういつて嵐のよう去って行ってアメリカどころか世界を仰天させる騒ぎに発展。仕事がないのは当の本人が気分が断っていた故だというのに。

マネージャーにも今までのレースや仕事で貯めに貯めた貯金のいくらかをお礼として渡したがそれどころではなく、鳴りやまない電話とかつてないほどの突発的行動に頭を痛め、その対応に追われるのを見ては流石にリボーも対応を手伝い、結局日本に行くのは記者会見後の1か月後となる。

私は料理人だ。そしてウマ娘のトレーナーでもある。努力もしてこの日本最高のウマ娘の学園。トレセン学園のトレーナーにもなった。

「はい大学芋30人前できました！」

「いいわよ美柚樹ちゃん!! 次、ジャガイモコロツケ300個作って頂戴！」

とはいえ、トレセン学園内のトレーナーとしては鳴かず飛ばず。精々がトレーナー助手としての手伝い。おハナさんやあの・・・才能あるウマ娘を見るやつい触ってしまう悪癖のある人と中央のトレーナーの中でもさらに天才が多数いたり、先輩が私が担当していたウマ娘を横取りしたりで散々だった。

そこにたづなさんや理事長の勧めもあって私はトレセン学園食堂の料理人となって鍋を振るっている。もともと東京のド田舎の方で大家族、沢山の兄弟、姉妹に囲まれ、農家の娘として過ごしていたの

で大人数の料理を作るのは慣れているし、何より私はある意味この世界では異色の存在。

いわゆる転生者なのだが、その元の世界がこの世界では漫画となっていた「トリコ」つまりはグルメ時代絶頂期のころの料理人としての記憶と経験。そして超人ゆえの能力がつかえた。だからこそキロ単位で食べまくるウマ娘のマンモス校であっても対処できる能力と、味を振る舞える。

「コロツケ完成しました！ おひたしの補充作ります！」

「よろしく頼むわ！ グラスワンダーちゃんとオグリちゃんがすごい勢いで食べているの！ あ。スぺちゃんもお代りね？ 了解」

一応ランキングは最高500位。世界の総人口何十、何百億億人、道を歩けば料理屋さんや食品店が並ぶあの時代でこれは誇つていいはず。野菜料理、特にニンジンスイーツも売りとしていた「キヤめろつと」での経験。そして能力は記憶にある食材を自分のエネルギーを使って再現できる。というもの。

これである美食の世界のいくつもの食材を再現し、料理を振るう。更に言えば、その知識で星新一氏の作品にある、うまい肥料を使うことでより良い食材を生み出す。この技術を確立し、独占することで私の実家の野菜、家畜は世界最高峰の食材となり、トレセン学園御用達の農園となってウハウハだ。

表立って能力を使うつもりはないが、こつそり水晶コーラや赤毛豚。ベーコンの葉などを生み出し、それを私の鍛えるウマ娘にご褒美、あるいは食育で鍛えて最高のウマ娘を育てる。つもりだったがそれは気持ち折れてしまい、今は食堂でウマ娘の笑顔を見ることが楽しみであり、そこに実家の食材を使い、私の家も、ウマ娘も笑顔でい

られるのが生きがいだ。

……訂正。あともう一つある。小さいころに見たレース。そこで出会ったあのウマ娘。今や世界最強の一角。殿堂入りしてその後、気分でそこかしこを振り回し、人懐っこい性格と笑顔で魅了したあの子。リボー。彼女と私は約束を交わした。

「私はトレーナーと料理人として頑張る」

「じゃあ私は欧州最高のウマ娘になる！」

あの後、リボーの家族とレース後のライブを見て、帰りの飛行機便が明日に延期になったので我が家に泊めて料理を振る舞ったが、あの時のリボーの笑顔は本当に可愛かった。後その際に「絶対リツチになって貴女を私の専属料理人にする」という追加約束もして別れることに。

私はどうにか二足の草鞋を達成したがトレーナーとしては半端もいないところ。しかしあの子は見事に目標達成をして、この前の大炎上の記者会見をもともせず日本についたそうなの。

今頃日本各所の美食でも食べているのだろうか。徳島県は甘い野菜、果物が多いし、大いに食べているかもしれない。私も会いに行きたいのだが、いかんせんこの学園がマンモス校なのと、私の料理を欲しいがるウマ娘、そして私の手際があつてなかなか有休がとれない。取るものなら食堂のおばちゃんたちとウマ娘から悲鳴が上がる。その理由は……やはり私の料理。

「人参ケーキ、ドリンクはいりまーす！」

私の声をウマ娘たちの優れた聴覚で聞けば全員耳がピンと立って

視線を集める。私の得意料理はニンジンを生かした料理。特に我が家で採れたの最高甘々人参「はつこいおとめ」（妹命名）を活かしたケーキとイチゴ、人参、その他野菜果実を使用した野菜ジュース。

甘いさっぱりとした上品な甘味はいくつもの顔を見せながらも不快感を与えない。舌を通り過ぎてても口や鼻に残る甘い風味は脳にずっと幸せの信号と甘さを伝え続けてくれる。小さいころから家族に振る舞い磨いてきた。前世も含めればそれこそ向こう百年近く練り上げてきた自慢のスイーツだ。

それに合わせるためのこれまた我が家の牛乳を使って用意した生クリームを使って最後の色どりを付けていく。これを担当するのは主に私とスイーツ店で鍛えていたというおばちゃんで行う。週に1回だけなのだが、この時はいつも戦場の食堂が更に激戦区。それこそソナム、ヴェルダンの戦いと言ってもいいほどの苛烈さとなる。

「おかわり！ 人参ケーキセットください！」

「私も！」

「わたくしもですわ！」

「ゴルシちゃんもだぜ！」

「わ、私も」

ウマ娘きつての大食い娘たち以外にもみんなが殺到して我こそはとねだる。万が一にでもなくなる前に確保しておきたいとウマ娘の行列が出来る。

あの淑女たるべしと心掛けているメジロマックイーン、大人しいサ

イレンススズカも目の色を変え、しつぽがブルンブルン暴れまくる。学園きつての奇人のゴールドシップですらこの時は大人しい。いや、その直後にすぐさまやりたい放題し始めるので何とも言えないが。

このケーキセットはおひとり様一つまで。ただし、地方レース、鍛錬などで学園外に出ているウマ娘たちがいた場合、余った分はウマ娘たちにくっそり振る舞う。若しくは、学園内でレースの練習があった際に賞金、商品の代りとして持つていくことがある。この時のウマ娘たちの目の色の変わりようは本番そのものになり、良い餡になるとトレーナーたちは言ってくれる。

このケーキだけで私は世界でも名を知ってもらえているが、このケーキは基本学園限定だ。一つはウマ娘たちの消費が多すぎると、私の実家の農園も大農園となるほどに成長したが、それでも一つの農園。他のお客様もいるし、やはり生産できる量には限りがある。

だから基本人参や牛乳などの量がそろわないとできないし、それを調理できるのはグルメ時代の技術を持つ私だけ。そういうこともあってトレセン学園限定の宝石と言われたりもする。

「嬉しいんだけど・・・今ばかりはなあ・・・」

評価されるのは嬉しいし、それもウマ娘の活力となり、トレーナーからもいい発奮材料。栄養バランスもいいから助かると言われるし天職だろう。ただ、今はまたリボーに会いたい。会ってこのケーキを振る舞いたいのだ。

覚えているかは不明だが、それでもトレセン学園の料理人。社会的地位とウマ娘のリボーなら関わろうとしてもおかしい点はない。だからこそ今有休を使ってでも追いかけていのだが、学園がそれを許してくれない。

「む……これは冷蔵庫に入れておきますね。あと、ジュースは結構量が出来たので皆さんに……」

全員にケーキセットがいきわたり、その後には在庫を見れば無心に作ったせいで少し多めに作ったか、幾つかケーキが余り、ジュースも3リットルほどある。これは食堂の料理人の皆さんに振る舞うことにして、ウマ娘たちに気づかれないうちに冷蔵庫に入れておく。

あらかた冷蔵庫に入れて残った最後の一つ。それも冷蔵庫に移動しようとしていたのだが、そこに一人のウマ娘が出て指をさす。

「お姉さん。私にも一つくれないかしら？」

「えっと？」

「ああ。怪しいものじゃないよ。ほら。入場許可書」

白黒のジャージに身を包み、細い体格にハンチング帽をかぶってサングラスをつけたウマ娘。許可を得て入っていることやその風貌から外部の、ウマ娘のトレーナーだと私は思った。

引退後にその知識と経験を生かしてトレーナー、ウマ娘の靴や勝負服のデザインに関わる道を選ぶウマ娘は意外と多い。私も見たことがないので新卒、もしくは地方の方が来たのだろうかと思ひ、人参セットを渡す。

「失礼しました。では、どうぞ」

「ありがとうございます。ところで……美柚樹さん。でいいんだよね？」

「ええ。この学園で料理人をさせてもらっています」

「ふうん……!!……ああ。この味だ、いや、もつと上……
覚えている？ あのレースの日と、私の事……」

「!!」

その言葉に私は驚きを隠せず、硬直してしまふ。それを見たそのウマ娘は悪戯成功だと言わんばかりに笑顔を見せ、その後急に急いで走ってくるたづなさんと理事長でもうおおよその理解は出来た。

私の目の前で帽子を脱ぎ、サングラスを外してその美貌を見せてほほ笑むウマ娘。

今話題沸騰。日本各地でリポールの場所をSNSであげてぜひ一目でも見ようと追っかけさえも出ている伝説にして最強の一角。そして私と幼いころの約束を交わした人懐っこい子。

「覚えているわ。私はトレーナーとしては難しかったけど、料理人としてここで頑張っている」

「私は無敗のままどうにかここまで来た。お久しぶりだね。美柚樹お姉ちゃん」

黒みがかった栗毛に、イタリアでちびっこの意味を持つ「イル・ピッコロ」と言われるほどに細い体躯。けれど大人らしく成長したそれは美しく、人懐っこさを見せてつも整った美貌。それが私の前でケーキを食べ、満足げに食べている。

同時に、食堂は大騒ぎだ。何せまあ、生涯無敗。かの皇帝、シンボリルドルフですらできなかつた滅茶苦茶な偉業をこなし、しかも高名

なウマ娘たちのいるレース、大きな大会、凱旋門賞、欧州のあらゆるレースで暴れに暴れた孤高の存在が食堂の、そろそろ三十路になりそうな私に会いに来たと思わせる言葉を放つのだ。そりゃあ、ハチの巣をつついたどころか爆弾テロが起きたような混乱と騒がしさにもなる。

どこか遠くでシンボリルドルフとエアグルーヴが止めようとしているが、流石にすぐには止まってくれない。歌手でいえばマイケル○ヤクソン、野球でいえばベー○ルースや王○治。そんなレベルのレジェンドがいるのだ。ご飯を食べて元気はつらつなウマ娘のエネルギーで興奮しているのだから熱量がすごい。もうオーラとなって見えそうなくらいに。

「聞いているよ？ 色々あったのは。調べたし。でも、中央のトレーナーの資格を手にして、料理人としても世界が認める・・・私より難しいことをしたんだよね。私との約束のために」

「あなたの偉業に比べればなんてことはないわ・・・ふふ。久しぶりに、料理でも作ろうか？」

騒ぎをものともしない、慣れているのか外野の騒ぎを完全無視した。いや、耳を時折後ろに向けたりしている当たり、事情は説明するつもりだろう。悪戯好きかつ自由人な節はあるが根性はあるし、気遣いもできるのは少し調べればわかる。

ただ、今は私しか見ていない。そんな感じだ。

「うん。それと、もう一つの約束。ん・・・」

「・・・えっ？」

そんなリボーだが不意に私の頬にキスをして、満面の笑みを浮かべる。可愛らしい笑顔が更に美しくなるが、これまた私は思わず思考停止になり、その後でキスされた場所をそれとなく触れる。

「私の専属料理人にするために、スカウトするために来たの。その約束も果たしてくれるよね？」

「あ、ああ。そつちでしたか。ふふ・・・そうですね・・・それなら」

この後、とうとう耐えきれずに私たちの間に乱入してきたウマ娘の皆さんに、特にオグリキャップ、スペシャルウィーク、メジロマツクイン。トウカイテイオー、あとシンボリルドルフたちに学園を出ないでくれと言われ、理事長たちからも懇願。

昔からの約束だとりボーも主張し、相談した結果リボーはトレセン学園のトレーナー兼私の実家の農園に収穫時や種まきの際に手伝う臨時社員となった。

居着いてしまう無敗の王者。ただし、学園の負担は考えない

「さて・・・かの王者と美柚樹さんのことについてだが・・・」

「最悪・・・の一步手前で踏みとどまっているのが正直な感想。と
いったところででしょうか」

「その通りだ・・・」

生徒会室。そこに腰かけて心底疲れたと言わんばかりの顔を見せるエアグルーヴ。そして、普段は凜として毅然。皆の支えとなる頼もしい背中を見せるシンボリドルフ。なのだが今回の件ばかりは流石に不安を覚えるものがあり、どうしたものやらと頭を抱えていた。

その悩みの種は当然。突如来た無敗の王者リボー、そして美柚樹との関係と美柚樹の過去、トレセン学園どころか日本のウマ娘は愚か業界そのものが危ういかもな厄ダネの爆発が迫っていることに頭をうならせる。

「リボー氏は聡い。同時に、気分屋で感情屋の部分もあるが、同時に人懐っこいことでも有名だ・・・その王者の・・・今なお追いかける。王者の原点の美柚樹さんの過去を知れば・・・」

「トレセン学園から美柚樹さんを連れ出す、自分の元に置くためにその過去を公表。地元のイタリアと既に第二の拠点たるアメリカに根回しをしたりすれば間違いなくこのトレセン、ひいては日本のトレナーの評価は地に堕ちますね」

ウマ娘であり、頂点を目指すのなら必ず聞く、何なら耳にタコがで

きるほど聞く存在。シンザン、セクレタリアト、シーバード、そしてリボー。誰もかれもが魅了する走りや強さを見せ、その戦いぶりに、美しさに伝説として刻まれたまさしく世界に君臨する王者たち。その一角のリボーと幼いころ約束を交わした美柚樹。

彼女のトレーナーと料理人としての二足の草鞋を目指し、そして見事に資格を獲得して鳴り物入りとしてトレセン学園の職員となったのはシンボリルドルフたち高等部の生徒たちが当時中等部に入りたての頃。明るい未来を見れるだろう。食育とトレーナーの観点からも食べすぎるウマ娘たちの増量過多対策、よりワンランク上の肉体づくりへの道を拓く。そう思われていた。

心優しく。そしてツツコミを欠かさない苦勞人氣質。支えたくもなるが、気が付けば支えているその人柄に当時のウマ娘たちは彼女に選ばれたウマ娘たちが羨ましかった。まだまだ新米ゆえに拙さはあつたが、その努力が見え隠れする説明や、料理で頑張る姿に発奮した。が・・・それなりに経験を積み、馬娘たちを世に送り出した先輩のトレーナーたちにそのウマ娘たちの指導権を裏から取られ、取り返す間もなくあれよあれよと手元から離れていく。

その後も多彩な才能に妬みとチームの維持のためのあれこれがあつたのだろう。ウマ娘のトレーナーになろうとしても次の日にはすでに先約済み、チーム結成どころか、ウマ娘一人も取れないという異常事態を当時のシンボリルドルフたちは鮮明に覚えている。

「ちやんとウマ娘の才能を見る目があつたし、説明下手は否めないが、絵にかいて、あるいは自分で実践したりして説明し、二人三脚で歩こうとした。自然、料理も腕をかけたゆえに惹かれる人が多かつたが・・・」

「それを妬み、うまく当時の理事会を動かしての干しを敢行・・・ト

レセン所属トレーナーで誰一人として長く続かなかったという悪評もついてどうとう料理だけを専念……」

今でこそ明るいが、料理のおばちゃんになってもよろしくね。そう言つて笑う美柚樹の煤けた笑顔に当時の皆がいぶかしむがすでにチームに所属して頭角を現していたシンボリドルフたちは移籍もままならずに見るしかできず、結局理事長やたづなが動くことでそのトレーナーたちと理事会の一部は処分を受けることで終了。

多才な若き女性によって自分たちの地位が脅かされるかもという心理もあつて動いたとされるその事の顛末はトレセン学園高等部のメンバーは話したがらない暗い話であり、教師、トレーナーたちも口を紡ぐ。

それゆえに外部には漏れていなかったことだが、今は違う。

トレセン学園にいながら世間の評価を集める料理人であり、実家も農園として成功している美柚樹。彼女との約束を起点に伝説へと上り詰めた王者がいる。王者、リボーからすればまさしく美柚樹の料理と言葉は宝物であり、大切なもの。その恩人の道を閉ざし、歪めたやつらがいると知れば怒るだろう。そして、やもすればそれを見逃した学園を許さないかもしれない。今の日本のようになめられていたイタリアの競バ界のイメージをその実力で欧州、そして世界の見る目を変え、掌ドリルさせた世界のトップスターの怒りだ。

間違いなく世界中のファンはブちぎれる。王者の道の出発点であり求めていた思い人を汚した学園。と。

「私たちが事情を説明しつつ、美柚樹さんからも説得、最悪この話をしないように頼んだりするのがいいだろう……しかし」

「駄目ですね。もうこの話で持ち切り。口の軽い高等部生がもう話しているかも・・・」

それがどれほどのものかと想像すると思わず小さく肩を震わせるふたり。リボーが美柚樹がトレーナーとしての道を断念したことを問い詰め、そこをどうにかごまかす、正直に話したとしても、宥めてもらえるように説得することも考える。けど、その時間はあまりないかもしれない。あの衝撃的な登場からのプロポーズのような専属料理人へのスカウト。

しかもまあ、ご丁寧にリボーと美柚樹の写真を撮るウマ娘もいれば既に学園はこの話で持ち切り。十数年越しの再会。一応は料理人とトレーナーとして動ける美柚樹と、欧州最強どころか世界最強の一角に上り詰めたリボー。ロマンチックな話かつその当事者たちが片や学園中の胃袋をつかむ人気者。片や生きる伝説だ。人の口に戸は立てられぬ。それはウマ娘も同様で既にうわさとして広まっている。

ここから過去を知るウマ娘が話を盛り上げるためにぼろつとこぼし、そこから伝言ゲームでどんな話か盛り上がり、リボーに伝わり、美柚樹へ伝われば・・・今でさえ。パラツチや記者の対処に理事長たちが追われているのに記者が増え、更にはトレセンの過去をほじくり返す輩も増える。間違いなく。結果がどうであれ、学園に余計な負担と気苦労が増えるの白目。

「今度私から美柚樹さんに伝えておく。汚点なのは確かだし、対処はしたと言えども怒るのも分かる過去だ。だが・・・関係のない中等部の生徒、トレーナーまでこのせいで練習に支障が出ては申し訳がない」

「私の方でもあまり過去の話であることない事話さないよう伝えておきます。リボー氏もしばらく学園にいるそうですが、美柚樹さんの

そば。すぐにあれこれすることはない・・・と思います」

その対処は結局当事者の美由柚樹に何かあつた際にリボアの対応を頼むことと、過去の事で余計な尾ひれをつけるな、確かなこと以外は話すな。それでなくても必要以上に言うなど生徒たちに伝えるしかなく、優秀な二人の頭脳ではそれが何度目かの結論であることもあつて重いため息をついた。

「後は・・・できれば全部ひと段落した後にはリボア氏が我が学園にてほしいのだがな。あの実力と指導力。そして美柚樹さんもいなくなる。彼女の料理と人柄は癒しだ」

「そこは同意です。昔練習終わりにこつそりくれたあのデザートの手詰め合わせセットの味は今でも・・・」

「む？　もしかしてあの・・・」

「はい。プロテインバー、野菜ジュース。そしてハーブティーセット。日持ちするカップケーキ各種。あれ以上のスイーツはとてとても」

「ああ・・・あれは素晴らしいものだ・・・リボア氏も魅了されたのだろうか」

二人とも学園のダメージへの話はどこへやら。もう頭も心も疲れさせいで話をするのも嫌になったか、その後は自然とスイーツの話となり、いつか頼みに行くことになった。皇帝と女帝と言われようともまだうら若い乙女。ましてやよく食べるウマ娘。甘いスイーツの誘惑は強敵なのであろう。

「大変なことになっちゃったねー美柚樹お姉ちゃん」

「互いに互いだから何とも言えないけど、そうねー」

あの後、すぐさま私を専属料理人にしようとはしゃいでいたリボーに学園のメンバー、特に世界でも注目され始めているウマ娘たちと理事長の引き留めと、私自身もトレセン学園に愛着がわいているからしばらく考えさせて。と説得をした。

リボーは私といられるならいいよとOKサインを出したけど、同時にこのトレセン学園への滞在許可をもぎ取った。まあ、実際にプロワイエも認めた実力者、多くの超新星。皇帝の後を継ぐかもしれない才能。そしてリボーの推薦でドバイのレースに出た際に覚醒して勝利をもぎ取ってきたジャスタウェイ。まさしく黄金時代といえるこの学園を見るのは引退してもウマ娘としての、トレーナーとしての感性もあるからなのだろう。

未だ皇帝シンボルドルフの強さとレースも強いが何よりもライブでの多芸ぶりと自分のレース、ハリボテ記念を作り上げたハリボテエレジーなど世界に知られている才能は知らないが、リボーの口から広がればさらに面白いことになると思う。

「で？ 今夜は何を作ってくれるの？ デザート楽しみだよ♪」

「焦らない焦らない。今夜はシュークリームとドーナッツよ♪ん
ふふ〜♪」

そしてまあ、ひと悶着が終わり、授業が終わる間理事長たちと

ポーはトレセン学園を見学。私は晩御飯の仕込みで忙しく、晩御飯になれば私とリポーへの質問攻めで楽しいではあるが落ち着いた食事をとれはしなかった。なのでここでデザート時間を過ごそうということに。

「じゃ・・・食再現・・・ん・・・よし・・・」

私の能力でグルメ時代の食材を再現。今回使う食材は当然ゴールドにんじん。本当に金色に光るところか金塊そのものなニンジンで癖のない甘みが特徴だが、私が再現したゴールドにんじんはちよつと違う。上空2万メートルにある野菜の楽園ベジダブルスカイで自生していた特別製。あれを使って簡単なおやつにする。私も疲れているのと、まさかりポーが来るとは思わなくて仕込みもしていないね。

ちなみに、あそこには自分でどうにかたどり着いて生還する際にオゾン草以外の野菜の味を全部再現できるようにしたのと土壌の火山灰を収穫。後日私のレストランで再現できるようにしておき、この世界でもそれをしたのでうちの野菜の栄養価は頭二つ、三つ飛びぬけている。

まずはゴールドにんじんを千切りにして、それをミキサーにかけて細かく、それこそスムージーよりも細かく砕く、シェイクする。そして次にそれを濾していくのだがその際に甘味を引き出すために湯せんを使いつつする。大体60度前後だろうか。その温度に2分ほどつけておくと甘さが一層強まる。節乃様に教えていただいた工夫だ。

その間に搾りかすのにんじんだが、これはまだ栄養も甘味も十二分残っている。なのでこれは後日パウンドケーキの生地練り込むために一日冷蔵庫で寝かせておく。砂糖も使わずに普通のパウンドケーキよりも甘く、栄養もまんべんなく取れるのだからこのにんじん

はありがたい。

湯せんであったためにんじんエキスを一度ゆつくりと冷ましている間に今度はチョコの油田で薄味かつ、ミルク風味の強いものを再現。溶かしていく。そして次は少しレベルは落ちるが実は作っていた生クリームとシュー生地を取り出す。その間にドーナッツを揚げていく。揚げ物は赤子、あるいは手間のかかる子供のようなだというがまさしくそうだろう。何せ手を抜けば焦げて美味しくならず、早すぎても食べられない。程よいタイミングと温度を見極めねばいけない。けれどそれが出来ればまさしく伸びしろも味の工夫もできる。

「ん〜いい香り♪ ねえねえ。あの農園も今いい感じなの？」

「ええ。トレセン学園御用達になって兄弟も両親も儲けているといつも言うわ。だけど人手が足りないからトレセン学園でバイトのできる子に短期バイトの募集をかけてと収穫時期はよく言われちゃうのよ」

「あーフランスとかで農夫募集、農耕用トラクターのCMの撮影したけど、大きな農園はやっぱりそうなんだね〜」

「ふふ。機械化が進んでいるけど、やっぱり人手、それもウマ娘の皆の体力は頼りになるもの」

部屋を満たしていく揚げ物の香りとチョコ、そしてこの世界じゃ私とその農園でしか味わえないにんじんの匂いに耳もしっほも期待で揺れるリボー。もう少し時間がかかるのでその間話していると農園の話に。やはりというか、ウマ娘、リボーほどの有名人だとその手合いの話もよくあるそう。人より並外れたパワーを持つウマ娘。力強さやレース場の手入れなどでこの手の機械を使う時があるのでアピールするキャラクターとしてはいいものなのだろう。しかも基本

彼女たちは見目麗しい。

力強く、綺麗で、そしてよく食べる彼女たちは結構食品や農業関連のCMに出る機会が多い、ついでに言えばバイトも。私自身もあの世界の体力を引き継いでいるから人の数十倍は働けるし、ウマ娘たちなら人基準で辛い重量ですら軽々と動かすので収穫作業は本当に助かる。なので収穫時期は土日、レースの無い日程の日に短期、日雇いバイトを募集するし、よくゴルシちゃんとジャスタウェイちゃん、サイレンススズカちゃんとスペシャルウィークちゃんは参加してくれる。

その際にジャスタウェイちゃんからはこけし・・・こけし？ のような何かをもらったたり、腰を痛めたお父さんのためにギプスをその場で作り始めたゴルシちゃん（お代はにんじんで請求された）などなどネタには事欠かないし、楽しい。

バイト代とどうしても規格外、傷などが原因で出荷できない野菜などはおまけでつけてあげるのだが、これをみんな喜んでもらってくれるのでうれしい。あと、最近はハルウララちゃんも来たりで賑やかだ。

しかし、リボアのCMか・・・アメリカのはちよこちよこ見るし、前の特番で見たが、トラクターのCMはまだ見ていない。後で動画サイトでチェックしておこう

「所でリボア。貴女、私といるためにトレーナーとしても動くと言ったけど、いいの？」

「いいのいいの。どうせ一時だし、アメリカ、イタリア、あっちでのトレーニング技術の基礎とかくらいだし、模擬レース溶かしながらアトバイスをするくらいよ。だめでも美柚樹お姉さんの居候しつつ農園の手伝いをすればいいし」

「あの大騒ぎをしてまで日本に来たものね。ちよつとした長期休暇ということで羽休めしつつのんびりここのレースを見てもいいと思うわ。あと、商店街周辺もおいしいご飯が多いのよ？ おっと・完成♪」

リボアの指導なんて短期だとしてもみんな受けたいと思うのだけど・・大丈夫なのだろうか？ 短気だとしてもトレーニング法。それも世界を認めさせた選手のものだ。凄いことになりそうなものだが。まあ、その際は私も手を貸せばいいだろう。なんやかんやトレーナー資格はまだ持っているし、治療用の食材も多く再現できるから助けにはなれる。

話している間に完成したドーナツツにチョコ油田とゴールドにんじんエキスを混ぜた専用の上から塗り、そこに色とりどりのビターチョコチップをパラパラ。生クリームとこれにもにんじんエキスを混ぜたものをシュー生地の中に注入してしまえば完成。

「ゴールドチョコドーナツツと、激甘にんじんシュークリーム。どうぞ召し上がれ♪」

改めて、この香りと見た目、私の本能にガツンと殴りつけてくるこの料理は心を躍らせてくれる。スポンサーやお偉いさんに招かれて食べた三ツ星レストランのデザートよりもずっと。

綺麗に焼けたドーナツの上にかかる金色のチョコクリームに色とりどりのチョコの欠片。揚げたてのチリチリと聞こえる音に、しっかりと鼻腔に入ってくる甘い誘惑。いわゆるジャンクフード、手軽なお菓子の一つのドーナツツのはずなのに、その香りと音、見た目の良さは高級スイーツに引けを取らない。

そして、もう一つのシュークリームはふわふわとした雲のような生地を見た目に冷気に混じってくる匂いと、食べればその冷たさとまろやかなクリームと生地の味わいを楽しめそうなのが想像できてしまう。しばらく眺めていたくなるデザートに思わず見入るが、ドーナツは冷めてしまってもったいないし、シュークリームも中身が温まるよりは冷たいうちに食べるのが一番。

「いただきます。ん・・・っ！ んっ、んうううっ♡」

「ふふ。美味しい？」

まずはドーナツからと食べたが、口の中がうま味の情報でパンクしてしまう。そう思えるほどのいくつもの風味が駆け抜け、熱々のうまみが口の中で踊る。歯を立てればザクザクと音を立てるほどに歯ごたえがあるのにすぐ碎けて程よい食感を与え、油と小麦粉の心地よい香りと風味が来る。その後に私の知っているにんじんではありえない。けどにんじんとしか言えない味。まさしく次元の違う甘さのにんじんの味が強く口に響く。

にんじんの強烈な旨さと甘さの下地を整えてくれるのは甘さ控えめなチョコの部分。アメリカでは甘すぎるチョコが多かった故にこの素朴さとカカオの風味を際立てるビターのチョイスがとてもおいしい。ドーナツの食感、溶けたにんじんエキス配合チョコの液体、そして両方の風味、香りのうま味のトリプルパンチが立て続けにヒットして、それぞれの良さを損なわずに引き立てる。にんじんエキスを主役としているが全員が名助演賞をもらえると云っていいだろう。

おいしすぎてすぐに呑み込むが、その後も必要以上に甘味が口に残らずにさわやかな後味を残す。味は残りすぎないが記憶にはいつまでも残る最高のドーナツ。あつという間に一つ平らげ、残るのも

う一つ。

「おいしいー！ こんなさわやかなにんじんスイーツ初めてよ！ このドーナツだけで一週間いけちゃうくらい」

「うふふ。虫歯と太るのは注意よ？ さてさて・・・お茶もわいたし、どうぞ」

「はい。じゃ、次はシュークリームを・・・つと・・・はあああ・・・♡ 幸せえ・・・」

そのままドーナツを食べたい衝動を抑え、今度はシュークリームに手を伸ばす。指先に感じる冷気は先ほど出来立てのドーナツを食べた私手に心地よい感触と冷えをくれる。暑い日の練習や仕事を終えた後にこれと冷えた紅茶、もしくはコーラなどをグイッと一杯など最高だし、はまるだろう。

シュークリームをかじれば先ほどのザクザクとしたドーナツの心地よい歯ごたえとは別で歯を立てればすぐに沈むのだが、その際になる音が心地よい。

もう少し深く歯を立ててクリームをこぼさないようにかじってクリームを口に入れば先ほどのにんじんの甘味がまた私を襲うが、先ほどのインパクトとは違う。ファンクで強い味を叩き込んですぐに去っていく嵐のような感触とは違う、緩やかな川の流れのように緩やかに、でも力強く味が残るし、何よりチョコ以上に優しく味を引き立てていきながらカスタードクリーム以上に口の中に居残りするこのクリームが何時までもその余韻に浸らせてくれる。

合間に舌と歯で生地を潰せば優しく生地の香りもふんわりと広がっていつまでも幸せな味の音楽を演奏してくれる。最高のコン

サートではないか。しかもこのシユークリームがある間は何度もア
ンコールが可能。これはファンが増えるだろう。

「甘さが何時までも残るのに、嫌じゃない・・・さっきのドーナツ
とは真逆なのに。しゅごい」

「わざとクリームの粘度を強めましたが、どちらもお口にあったよ
うで」

私が一息ついていると美柚樹お姉ちゃんは紅茶を入れてくれた。
優しい紅茶の香りは先ほどまで甘味一色に満たされていた私の気分
を切り替えてくれる。甘さを続けては麻痺する。切り替えるという
意味でも紅茶という存在はデザートには欠かせない。

「んっ・・・ふう・・・落ち着く・・・そして、またすぐにドーナツ
を食べたくなっちゃった」

「のどに詰まらせないでね？ ふむ・・・今度は生地をもう少し固く
して食感を増してもいいかな・・・」

淹れてくれた紅茶を飲めば甘味よりも香りと少しの苦みが来るが、
逆にこれがいい。この香りと味が甘味に浸された私の舌をリセット
してくれる。リセットされれば当然記憶に刻まれた甘味たちを欲し
くなってしまう。

ドーナナツツ、紅茶、シユークリーム、紅茶の順番で食べていき、
あつという間に完食。

「はぁー・・・おいしかったあ・・・こんなのをいつもトレセン学園
の皆は食べているの？ ずるいなあ」

「これからは毎日料理をしてあげる。ふふ。あ。そう言えば最近トレンセン学園で減量や体重調整のためにサボテンステーキなどもやるかと考えているけど、どうかしら……」

「い、いやーあれは癖も強いよ？ 専用のソースもあるけど、日本のウマ娘たちの舌に合うかなーって。テレビの企画で食べたけど、好みは分かれちゃうから食堂ではちょっと」

この後、美柚樹お姉さんと夜中まで色々語り尽くし、その中で久しぶりにご家族の方に電話をして、臨時バイトとして農園の手伝いに受かった。そして、時差ボケ矯正とはしゃいだせいかな。すぐに寝ちやった。

「というわけで、美柚樹シェフにはトレンセン学園にいてもらうためにゴルシちゃんの魂の叫びを聞いてもらおうと思ったんですよ」

「うん……そのことはよくわかったわ」

深夜。急遽スマホの通信が鳴りやまず取ろうとした瞬間に私の部屋の蛍光灯から開けられて入ってきたのはゴールドシップことゴルシちゃん。私の料理を良く出店に出したり、歩き売りしていることがあるし、その奇人ぶりは滅茶苦茶で周りを振り回しまくるハジケリストかつ天才ウマ娘だ。

で、まあ、すっかり寝ているリボーを起こさぬように別室に移動す

ればゴルシは私をトレセン学園に留めるために演奏をするみたい。だけど……

「でもね、なんで……なんで、木魚？」

「それはゴルシちゃん百八式の秘密……乙女のひめゴト……それを聞くなんて……エツチ……」

「え？　え？　え？」

木魚で魂の叫びと言ってもそれはむしろ魂の安寧のための曲ではないか。そう思ったのだが何かに触れたのかゴルシちゃんはほほを染めて口元を隠してもじもじし始めた。

本当に見目麗しい。ウマ娘界でもトップランク。世界を回ったりボーも認める美貌でそれをされればきつと世の男性陣はイチコロだろう。……中身を知らなければ。

「ご、ごめんなさい……そ、それじゃあ」

「そう……知るには相応の手順が必要……だから……クイズで応えてもらいましょう！　さー始まりましたゴルシちゃんクイズくく!!　イエーイドンドンパプパー!!」

一応、彼女も何らかのことがあったのだろうと素直に木魚の音色を聞こうと思ったら私にクイズ帽をつけて、そばに「へえくボタン」を起き、何か商品を置き始めた。え？　あれ？　そんな安っぽく晒しちやっつていいの？　ねえ？

「え!?!　あの、クイズでさらしちやっつていいの？　てか今丑三つ時！」

「なーに言ってるの。乙女のお秘密と木魚がどう関係するんだよ。晒していいだろ。商品はこのメロンパン入れ。さあ。早速クイズに……デデン！」

第一問。生徒会長のシンボリドルフですが今日はなつたダジャレ……ああああ！ クイズなんかやめだやめええ！ 今すぐ中止だああっ!! それより私の木魚もってこい！ ゴルシちゃんの荒ぶるパッションで演奏してやらあ！」

「メロンパン入れとクイズカードぶん投げたー!? ああつ！ ガラスが!!」

あの番組の商品を用意して着替えたと思えばクイズを読む途中で頭を掻きむしってクイズカードとメロンパン入れをそりやあ見事な蝦ぞりでぶん投げて私の部屋も窓ガラスを破壊。ああ……！ また。もう、これで何度目かの臨時出費。むなしく用をなさなくなった窓から隙間風が入り込み、そして始まった木魚の演奏会の音色が夜空に溶けていく。

ピタゴラスもアルキメデスも計算できないこの流れに呆然としていたが、本当に木魚の音色と演奏はうまい。はあ……もう、今夜はこれを聞いた後に間違いないく押しかけてくるウマ娘の皆に事情を説明して寝よう。窓は……その後で……

「って本気で僧衣を纏っているし！ そして……マックイーンちゃんを吊っているー!!! 死んでない。死んでないからマックイーンちゃん!!」

「うう……！ 止めねえでくれ！ ゴルシちゃんの悲しい真実を知った慰みの木魚を止めねえでくれ！ あれはそう……どうやって

美柚樹を引き留めつつ一緒にお遍路さんに行こうか考えていた時だ……」

なぜか片手に数珠を持ち、木魚を撃つ手を止めないので線香を焚き、メジロマックイーンが以前撮った(ゴルシちゃんが盗撮した)くるつと回ってワオ！ な写真を遺影に見立てていてもうお葬式のそれだ。不謹慎にもほどがある。そしてぶっ飛んでいる。

今度は涙を流しながらも木魚を叩くのをやめないゴルシちゃん。なんでグルメ時代の料理人の私でも抑えきれないのよ……！ あと、学園に留めようとしながらお遍路さんの企画を考えている当たりで既に学園は離れちゃうし……！

「そのメンバーにマックイーンを入れようとしていた時に、俺の頭の中に赤と黒のチャライマスクの男がささやいたんだ「ゴルシちゃん、マックイーンと側についておじいちゃんちの畳のように落ち着くのは、実はゴルシちゃんのおじいちゃんちの生まれ変わりなんだよ。俺ちゃん嘘つかない」と言ってな……あたしの大好きなおばあちゃんちの生まれ変わり……」

「おじいちゃんどっか行っちゃった!? てかそのマスク誰!?!」

割と意味不明かつマックイーンちゃんへとよく側にいる理由がわか……いや分からない……分かってたまるか。流石に防音効果も高い社員寮とはいえ、私の方は栗東寮に近いし、窓ガラスも割れて音は駄々洩れ。……なんでかスクリーンとガムテで応急処置されているけど……どたどたと音が近づいていく。

間違いなく足の力強さでウマ娘だろう。そして、声からして……

「美柚樹さん！ 大丈夫ですか!? ゴルシちゃん！ またこんなこ

としてー!」

「ゴールドシップさん! うるさいですわよ! 一体何時だと…
な!? なんでその写真をもつて…! わ、私に寄越しなさい!!」

「またかゴールドシップ! 美柚樹さんの部屋にいたが今度は社員
寮の床を全部音の鳴る床にでもしに来たか!!」

「今何時だと思っっているのよー…」

まずはジャスタウエイちゃん。その後にはマックイーンちゃん…は
あのポーズの写真に赤面。すぐさま見事なヘッドスライディングで
写真を奪取。そこからエアグルーヴちゃんにダイワスカーレット
ちゃんとワイワイ来た。もう、深夜だというのに大騒ぎに発展中。あ
はは…もう眠気とこのテンションのせいでどうにでもなーれな
自分になつてきているのがわかっていく。

「よーしみんな集まったな! 美柚樹シェフを引き留めるために皆
で一緒にこれを見て応援するぞ! ライトアップ!!」

「「そこ光るの!!」」

そして、どんどん集まる人を見てゴルシちゃんは急に立ち上がり、
耳当て? がばかりと開いて光をスクリーンにあてて何かを見せて
いく。そのアイテムは一体何なのだろうかと小一時間問いたいが遠
慮なく映像は流れていく。

『ゴルシちゃんシアター 二人の床屋さん』

「なんか変なの始まった!」

ゴルシ「はあー・・・お客さん来ないわねえ〜・・・ゴルシちゃん憂鬱〜」

ジャス「もうゴルシったら。昨日もたくさんきたでしょ？」

ゴルシ「あんなスポーツ刈りで終わる奴ら客じゃねーよ。仏様のパ
ンチレベルのガッツのある髪か、貞子レベルの髪じゃなきやうどんを
打つよりも詰まらねー仕事だー・・・あーメケメケメケメケメケ・・・
ピロツチ・・・！ 客の予感」

お客さん「すいませーん。カットお願いします〜！」

ゴルシ「お前元からハゲじゃねーか!! オラアカットしてやるとこ
ろねーんだよ！ カットしてやる前に植毛だおらあ!!」

お客さん「ぎゃあああああ!!」

ジャスタ「シャー芯が頭に刺さっていくー!! あ、ああ・・・えー
と・・・お客さん。どれくらいで・・・？」

お客さん「うう・・・ご、5ミリカットでお願いします・・・」

完

『次回、二人の床屋第二話。情熱のバラ へ続く』

「ぜんっぜんわからん!!」

「私、こんな撮影した覚えないわよ？ え、CGなの？ そして

シャー芯で植毛してのカットだけど自作自演なの？ この謎のシネマムービーと内容合わせての意味なの？ そして情熱のバラの次回予告と映像がまるで噛み合わない。ときめきやくざハイスクールって何よ！」

次回予告の絵面すらも分からない、滅茶苦茶過ぎる映像と私たちの会話内容に一ミリもかすりもしないようにリボーが寝ているのを忘れて思わず声を荒げ、ジャスタウェイちゃんもいよいよスイッチが入ったかツツコミが入る。ほんと、普段は真面目で聞き訳がいいし大人しいジャスタウェイちゃんとゴルシちゃん。真逆なのになんて仲がいいのかしらね。マブダチレベルで。

「何言っているんだよ美柚樹シェフ！ わかるだろゴルシちゃんのパッションを！ 一緒にうまいからしラーメンを食べるために残ってほしいんだって！」

「いらんわそんなラーメン！ おでんにでもねじ込んできた方がいいって！ 食べるたびにむせそうなラーメン激辛ラー油マシマシ系でオツケイだよ！」

「こんな怪文書と毒電波を流す前に帰りましょうゴールドシツプさん。もう・・・あふあわ・・・何時だと・・・」

「そうよお・・・もー・・・んにやあ・・・眠い・・・」

すすれば麺を吹き出しそうなラーメンのために涙目で懇願するゴルシちゃんとスイッチ入ったジャスタウェイちゃん。中等部組のスカレットちゃんとマックイーンちゃんは目をこすって早く戻ろうという。そりゃあ、夜中の三時なんで眠いですよ。私も眠い。リボーは多分熟睡しているせいで起きないだけ。

「いやいや、もうひと押しだつて！ イタリアかアメリカかわからないけど、シエフに私たちの情熱をお見舞いするぞし続けなければいづれ」

「んーゴルシちゃん。じゃあ、今夜は一緒に寝るといふことで、もう休まない？ ここで寝ていいように布団もあるし、欲しがっていたルービツクキューブもあるよ？」

このミッドナイトゴルシちゃん劇場をどうしたものかと考えていたらジャスタウエイちゃんがいつの間にもやら予備の布団を取り出して敷いていた。

「わっほーい！ みんなでパジャマパーティーだな？ 任せろ。ちゃんと眠るためにこのルービツク百物語で……え？」

そこに飛び込み、何時仕入れていたのか8×8×8のルービツクキューブを手取るゴルシちゃん。その直後にすぐさまジャスタウエイちゃんがゴルシちゃんを毛布で巻き、その上からいつの間にもエアグルーヴちゃんがロープを持ってきてその上からグルグル巻きにしていく。

「では、お願いします副会長」

「エアグルーヴでいい。ジャスタウエイ。私は悪いがゴールドシツプを自室に押し戻して休むが、メジロマックイーンとダイワスカーレットの二人を送ってもらっていいか？」

「了解です。それと、ゴルシちゃんが迷惑をかけました。私もあとでしっかり言っておきますので……」

芋虫のようになってじたばた暴れるゴルシちゃんの口にガムテ

プを貼りつけてから私の部屋を後にするエアグルーヴちゃん。まあ、これ以上の騒ぎでのご近所迷惑は駄目だからね。ぱつと見、誘拐事案にしか見えないけど。

そして、ジャスタウェイちゃんもマックイーンちゃんとスカーレットちゃんにもう大丈夫だからと伝えて二人の背中を押しながら部屋を出て、最後に私に一礼してから退出。台風一過。そうとしか言えないほどに暴れまわった。正直寝たいのだけど、今から寝たらたぶん起きれない、そして食堂の朝は早いのだ。

「・・・起きていよ」

しょうがないのでそのままリボアの弁当とケーキをすることにし、紅茶をキメながらの過ごしでの徹夜敢行。その後は半日有休をもらい、昼前までに夜の分の仕込みも終わらせてからベッドに沈み、気が付いたら夜まで爆睡していたわ。

リボーが起こしに来て、ほっぺを膨らませる姿がかわいかった。

コックさんはトレーナーへ。王者は炎上する

「それではリボーさんは本当に人探しでこの日本に？」

「はい。それも無事に見つけてスカウトをしたのですが決心がつかないということで私もちょうどいいと長期休暇を取った形ですね」

フラッシュがうるさいし、まぶしい、何度も何度も受けたが、このまぶしさはなれない。イタリアの太陽や海の輝きは心地いいのになーエアグルーヴも強いフラッシュは苦手だし、うーん。サングラスつけて・・・はマネージャーに怒られちゃったしなあ。

「しかし、貴女はもはや世界の大スターですし、あのBIG REDや世界の大レースを制したスターたちのトレーナー補助、テレビなど様々な仕事があるはずですが」

「それもしばらく休んでいたのと、ちゃんと折り合いをつけてきているので問題ないです。そもそも、私の場合セクレタリアトの事務所に居候していた形ですし何かあれば彼女らが対処します」

おおーと記者たちがしれっと私がセクレタリアトの名前を出せば驚いてペンを走らせる。いやいやいや・・・フィッシャーマンもいるあの事務所の話は有名でしょうに・・・あー・・・いや、私からじかに聞けたからなのかなあ？

今は私の来日に関しての記者会見。トレセン学園に住み込み、マネージャーはブンブンの刑・・・げふんげふん。もとい、美柚樹お姉さんの実家で食育とヘルシー食生活の勉強。日本トップのウマ娘養成施設御用達の農園の品質を学ぶために住んでいる。真っ黒アフロに褐色肌のマツチヨマンだが日本文化オタクなのでまあ、問題はないでしょきつと。今頃趣味のピザ料理をあの農園の食材で調理してい

るはずだ。

私にもほしい。ぜひ。今飲んでいる美柚樹お姉さんからもらったコーラがうますぎるのだ。これとピザは間違いなくアメリカのやつらもガンギマリするに違いない。現役ウマ娘も太る悪魔の飲料であり天使の味だ。

・・・話がずれた。まあ、正直な話、私がずっとトレセン学園にいらることどうわさがとうとう漏れたので正直に言いつつ、理由を世間話話してほしいという理事長の頼みと、パパラッチや記者たちの対処。自主練や学園外で思い思いに過ごすウマ娘たちの休憩も練習も身が入らず、しつこい質問をされてちよつと問題になったので私がこうして記者の質問に答えている。

「ところで、リボーさんはトレーナー、練習相手としても活躍していました。既に一週間ほどトレセン学園に過ごしていると聞いています。どうでしょうか。日本のウマ娘たちは。伝説を築いた貴女から見て」

この質問に皆のぎらついていた眼が真剣になる。炎がより明確な形と指向性を持ったというべきか？ まあ、日本は世界的に見てもまだまだ舐められているのは事実。最近はそれも払しょくされつつあるのだがこびりついたイメージと過去の実績から来る思い込みの呪縛は内外問わずに重いものだ。

嘘偽りない言葉を話すつもりだが、慎み深いと言われる日本の方々。後・・・まあ、思うところはあながしっかり受け取ってほしいね。

「正直、芝、ダートの国ごとの違いなどはありますが誰もが遠征してその場所になれればすぐさま賞を取る実力者。才能に溢れています

ね」

「リボーさんほどの方か見てもですか？」

「ええ。わかりやすいものでいえばジャスタウェイのドバイ優勝。キンイロリヨティは香港優勝。エルコンドルパサーはフランスでも確かに怪鳥の爪痕を残し、そして戻ってきたサイレンススズカはアメリカでも話題ですし、よくみんなで話しをしていましたね。彼女ほどの才能、走りは美しく強いと」

少し不安そうな記者を安心させるようにここ最近の日本勢のウマ娘での活躍と、スズカの話を私は話す。実際にあの無謀ともいえるような逃げをしつつ差しさえもするという戦法。しかも私に弟子入りをしようとしてきたツインターボも逃げ。現在では難しいと言われている逃げをあそこまで育ているのかとセクたちみんなで盛り上がったし、ツインターボの事をこの前電話したらますます大盛り上がり。

「そして、あのブロワイエにスペシャルウィークは勝利をしています。私達海外のウマ娘からも今日日本の才能は注目を集めています」

これもまた事実。そしてトレセン学園のメンバーは才能の人口密度過密どころかおしくらまんじゅう状態。練習のレースなどの動画を見るために日本の動画サイトを漁るウマ娘、トレーナーも増えていると言えば驚くだろうか。

「私の上の世代は日本では確かシンザン。そして、次の世代ではハリボテエレジーとギンシャリボーイが世界の強豪相手に勝利を見せつけ、その後にシンボリルドルフとエアグルーヴたちが多くの精鋭たちを育て、そして今芽が出ました。これから日本はどんどん注目されるでしょう」

「ほ、本当ですか？」

「ただし、用意を怠らないことと、スケジュールをつめすぎないことを重視すれば。ですがね」

海外の芝の違い。それは地続きのイタリアとフランス、そして一応海を隔てているイギリスでもあったし。ましてやアメリカなんて広すぎて国内レースの芝の感触すら違う時もざらだ。重賞を遠征でもぎ取るのなら本当にひと月は最低、ふた月かけて芝を慣らすくらいの気持ちが無いとやっていけない。

私の戦歴を知っている。もつと言えばその戦い続けた国レースの数とその国を知っているのなら私の言葉の意味の重さもくみ取ってくれるはず。

記者たちの表情は自然と明るいものとなり、みんなが希望を持つような感じに。確かトウカイテイオーの大勝利がつい最近だったし、スペシャルウィークの勝利の後もどんだん才能が目を出し始めた。あれなのだろう。今いる黄金時代のメンバーを集めて外国に軍団で殴り込みをかけることが出来ないかとか考えているのだろうか。

「あー・・・そろそろ記者会見も終わりますし、質問もそろそろ締め切りを・・・」

約30分ほどだけど、面倒な記者会見が終わりそうではっとしていた。アメリカや大きなレースではパフォーマンスも兼ねて派手にやりつつ思いのたけや真意をぶつけていたが、説明会みたいなノリはどうにもなれない。最後だとコーラを飲んでいたら記者の一人がぐさま手を挙げて質問をしたがっていたのでどうぞと一言。

「あ、あの。日本のウマ娘たちが世界にも通用する器だとリボーさんほどの方から背中を押してくれて、本当に自分の事のようにうれしいです」

「いいいえ。元選手として、トレーナー職を経験しているものとして評価を曲げたくはないですから」

「それでなんです、リボー氏の狙う想い人は判断がつかずにそれに合わせる形でリボーさんも学園にいます。今後、指導や模擬レースの相手、トレセン学園で教鞭を一時でも振るうなどの考えはありますか？」

考えてはいたが、要は自分の経歴を買ってトレセン学園から海外、欧州欧米のトレーニングを取り込んで私が認める才能たちを磨くのかという質問。

これに関しては最初は少し面倒だと思っていたが、いい子たちが多く、やれ訴訟だのなんだのとうるさいことがない、気楽に過ごせて美食みれの日々。やってもいいかと思っているし、太る体質ではないのだが身体を動かしたくてうずうずしているのは事実。

シンボリルドルフもなれた日本の芝で走る姿を生で見れるし、学園側からもいい刺激を与えてくれと頼まれている。やってみてもいいだろう。

「たどえあつたとしてもこの国でのトレーナーの資格はないのであくまでも手伝い、雑用でしょう。それにトレーナーとしては若造だとアメリカでもさんざん言われたのでウマ娘としての経験とトレーナーの知識の二刀流でやってやりますよ。かの宮本武蔵のように」

ちよつとウケを狙った言葉を話せば笑ってくれた。よかった・・・

ほんとジョークやいい返しをしないとイケないけど私センスないし。もう走りと踊りで突っ走るしかなかったのがなあ。うーん。

「それでは、時間にもなりましたしこれで・・・」

ちょうど記者会見の時間も終了となり、私も席を立って出ていこうとすると今になって思いついた質問を出そうとする記者さんがちらほら。カラオケだったか。あれで時間が近づくと急に歌いたい歌を思い出す現象を思い出す。

「あ、最後に！ 練習の手伝いの際にレース相手、模擬試合などはするのですか!?!」

「んー・・・場合によつては？ とはいつても、ないとは思いますが」

最後に投げられた質問に切れ始めた集中力と緊張感のせいでピザの事を考えながら軽く答えてしまったが。後日私はこれで大いに面倒に襲われたのだった。ちくせう。

「私がトレーナー復帰ですか?」

「はい。リボー氏もこちらで一時的に教鞭を振るうということですが、彼女は日本のトレーナー資格を持っていません。なので、リボー氏は助手。美柚樹さんを正規トレーナーということをやっているかと思えます」

リボーの生中継での記者会見を聞きつつ、私はたづなさんから前もって聞かされていた話をもう一度聞いている。トレーナー復帰。

それは嬉しいことだし、素晴らしいことではあるのだが、問題はある。

「ですが、すでにウマ娘たちは自分のトレーナーを持ち、あるいはチームに所属しています。その中で今更新顔の私たちが来ても大丈夫でしょうか？」

すでにトレセン学園のウマ娘たちはみなトレーナーや所属チームを決めてしまっている。それこそ新入生たちが入らない限り私達はトレーナーの、チームのウマ娘たちを横取りするような形となってしまう。それだけはごめんだ。

「はい。それでなんです、いわゆる渡り鳥トレーナーとなったりボーさんがいる間はそちらが行きたいチームのサブトレーナー、リボー氏はさらにそのサブとしてやっていく形で皆さんの手伝いをしてもらうのと、すでに一名熱心な子が一時預かりを希望しています。あと、嘆願書がこんなにも」

「うわぁ・・・」

しかし私の不安は杞憂だったようで、いわゆる日雇いのお手伝いさんという形だろうか。で基本は私とリボーの気持ちで決めていければいいと。そして、その次に既に私たちの方に鍛えられたいという子もいるし、我がチームにという嘆願書が段ボール二つ分は優に出てきた。

「なのでまあ・・・基本的には海外での戦いを制したりボーさんの経験とその圧力、遠征先での過ごし方などを感じ、学んでもらいつつ美柚樹さんは皆さんの疲れのケア、ドリンクや食べ物などでチームを支えてくれればと」

「まさしく日雇いの家政婦&海外のコーチのコンビと。うわ・・・り

ギルからも来ている？ おハナさんまでわざわざ……はあく……」

たづなさんの話を聞きつつ嘆願書の送り主を見てみればまあすべてのチームが来ているんじゃないかと思う程。かつすでに実績をあげまくりのチームも多数。

まあ、リボアのネームバリューが強いのと、その経験がそれを物語るのだろう。実際日本最強格が多く集い、経験豊富なチームリギル。それでもルドルフちゃんは遠征した際には6着。エルコンドルパサーちゃんも凱旋門賞で勝利できず2着。海外遠征というものはそれだけコンディション管理が難しいし、プレッシャーも違う。その上で同格かそれ以上の強者たちとホームでの戦い。同じ芝、ダートであつても別物に感じるかもしれない。

だけどリボアは生涯無敗。公式でも非公式でもだ。更に言えば、その戦場。レースはイタリア、フランス、イギリスの伝統ある大レースに遠征しても尚負け知らず。アメリカでも引退したとはいえ番組の企画で現役ウマ娘たちとレースしても勝利。引き分けもあるがそれ以外は負けはなく。それは遠征で違う芝や土質、生活リズムの変化やアウェイでのストレスをもともせず勝利したということ。引退後のアメリカも含めれば実に4か国をまたにかけての大立ち回り。

そしてその国々のウマ娘との経験を積んだりボアは遠征先の情報と感覚。引き出しを持っている。海外に向けた調整、マッチアップ相手としても最適。世界の实力を知るという意味でもこれ以上ない相手だろう。

私は……そのリボアの練習で疲れた皆を労うためのマッサージや食事でのサポートになるか。プロの按摩師の技術、ツボ押しはどうか覚えた。癒しの国ライフでの治療、健康、美容食材もある。コンディションに関してはどうにかなる。

「わかりました。渡り鳥トレーナーとして動いて行きましょう。と
りあえず戻ってきたリボーと話しつつ、リボーへの弟子入りを頼んで
いる子のいるチームトレーナーとも相談ですね」

「お願いします。．．．そして、おかえりなさい。美柚樹さん。今度
は私たちもしっかりと守りますよ」

たづなさんと握手を交わし、その後はとりあえず嘆願書を運ぶため
に台車を借りておくと、週一のスイーツデーは続行の事を伝えて移
動。

私の代りに料理人、学校給食調理の経験者を新規で雇うことで対応
することなので今まで私が作った食堂でのレシピを渡しておい
てひと段落。その後、リボーから今朝わたしたコーラ。私の再現した
水晶コーラのお代りをねだられ、ゴルシちゃんとジャスタウェイちゃ
んから焼きそばの仕込みを手伝わされた。

「何ツ．．．じゃこりゃー!!!」

「あちゃあー．．．」

朝、昨日の記者会見の後に出された新聞とニュース。これを見てリ
ボーはブちぎれて新聞を破り捨て、私も思わず呆れる。

『無敗王者リボートレセン学園トレーナー就任!! 世界へ通用する
人材育成へ!!』

『伝説の王者日本で出走表明!? リポーター記者会見でレース参加発
現。日本へ格を見せつけに来たか』

『レズビアンの追っかけリポーター。トレセン学園のシェフ美柚樹氏と
の熱愛疑惑』

『日本にやって来たリポーター氏。後継者発見のためか？ トレセン学
園に本格的参加。日本から世界打倒へ』

まともな内容を放送しているニュースや新聞はあるが、どれもこれ
も余計な水増ししたり、記者会見の内容を歪曲したような物ばかり。
学園にいるから迷惑というのなら高級ホテルに泊まって対処したり
してもいいのにわざわざ応じて世界から見た日本競バ業界の評価を
話し、やんわりと対応していたというのにこれは酷い。

先ほどからスマホにもクレームやら文句、質問が数々飛んでくる。
そりゃあそうだ。世界で名だたる名バでありトレーナー。教えつつ
何だったら練習相手としても対応できる稀有かつ引退して尚実力が
衰えないのだ。教えてもらいたいという人は数多だ。

だからまあ、手伝い、

「大レースの前だとわざと大げさに表明したり煽ったりして盛り上
げたりとかショーのために頑張るけどさ……わざわざ日本での過ご
す時間を減らすような、海外の怒りを受けるような内容にするのか
なー……訴訟されても文句言えないよこれ」

実際、最後の一言に関しても編集していたりカットして放送する番
組もあつたりでもう余計な盛り上げと本人への配慮がまるでない。

リボーも言っていたが余計な煽りやこの手の内容を出して本人がキレればアメリカではすぐさま出版社が傾く、つぶれるくらいの訴訟で叩き潰すのはある話だとか。それを理解しつつも許可を取ったり、うまい具合に言葉を引き出したりするのがあちら流らしいが。

「ああー・・・イギリス王室クラブからも来ているし・・・もう・・・ミラノ、凱旋門からも・・・くっそー・・・契約金詰むから来てくれて・・・金で来たんじゃないんだよこちとらー・・・やり返してやるか」

ただまあ、やられたままで終わらないのがリボー。すぐさま体を起こして電話をあちこちにかけていく。

この後世界中に向けた放送でリボーは「日本はあくまでも人探しであり、その場所がトレセン学園にいたということ。人材育成はしているが本格的レースに参加する予定は現状ない。あそこまで大きくことを言ったつもりもない」と発信。

アメリカでリボーと付き合いの長いメンバー、イギリス王室契約のウマ娘チーム、フランスのブロワイエにサンバイザーなどなど、アメリカからもリボーの所属していた事務所からのクレームをぶっ飛ばさせ、更には録画していた記者会見を動画サイトにもぶち込んで水増し、歪曲記事を書いた出版社を大炎上。

「こつちを炎上させたんだ。される覚悟はあるよね？」

そういつて微笑むリボーのストレス発散でにんじんステーキを作ったりつつ今回の対応に爆笑しながら答えてくれたセクレタリアト、今はNOKでウマのお姉さんということであくさんみたいなのをしているハリボテエレジー曰く

「本気でリボアのへそ曲げさせたらやばいよ」

と言っていたが、なるほどと改めて納得させられた。ただまあ、これで余計な邪魔も入らずにみんなの手伝いが出る。さてさて、まずはどこの手伝いに行こうか・・・この嘆願書の山・・・もう、くじ引き感覚でやったほうがいいのかと思うつつ。ハンバーグを焦がしすぎないように頑張る。

リギルへ突撃隣のお手伝い

「今日はよろしくお願いします。おハナさん」

「ええ。貴女とリボー。二人のコンビはともうれしく思う」

私に向かって笑顔で握手をしてくる美柚樹。彼女のトレーナーの素質は人柄も含めて悪いものじゃない。練習は優しさゆえに甘やかす節こそあるがそのケア、食育などでのコンディション管理とトレーニングを続けさせる、故障を起こさないための技術は特に目を引くものがあつた。

それが料理の腕を磨いて戻ってきた。ウマ娘も私たちも虜にするあの甘味、料理を使いつつ指導をしてくれる。リギルへの刺激をくれるにはとてもありがたい。

更にはリボー。エルコンドルパサーが負けた凱旋門賞を連覇した負けなしの怪物。彼女の存在の刺激はいずれ海外のレースへのリベンジ、重賞獲得を目標にしている私たちにとって千金どころか万金に値する。伝説の指示。知識を引き出せれば今度こそシンボリルドルフにも海外での勝利を与えてやれる。

「私の方は補助用具と食事、休憩用のドリンクを用意しますよ。リボーはすでに動いているので問題はないでしょう」

「ええ……それはいいのだけど……彼女はどうしてここに？」

「ハヒく……ハヒイ……」

ただ、本来はあちこちのチームやウマ娘たちに関わり、ケアと足りないところを見るコンビのはずなのだがなぜか一緒にいるツイン

ターボ。彼女はチーム・カノープス所属のウマ娘のはずなのだが。

「ああ。彼女も私たちと経験を積むために、チーム外からでも見えるものを学ぶために一緒に同行してしまして。お邪魔でしょうか？」

「いえ、ある意味あの元気さと逃げのスタイルはそういうウマ娘たちとの試合があつた際の想定にはなりませんので構いません」

練習メニューの調整をすることになるが、これもしようがないと頭の中でメニューを新たに組み立てる。ツインターボ。よそのチームに練習メニューが流れる可能性もあるがそれはリボーがいる時点でお察しだし、何よりリボーも逃げをできるし、サイレンススズカという逃げの大天才という器も出てきた。

ヒシアケボノなど逃げもできる選手は今もおり、世界を狙える戦術。強豪選手にそれをできる相手がいることも考えればプラスになると気持ちを切り替える。

・・・ただ、ウォーミングアップの時点で既に息切れしてへなへな彼女の走りは大丈夫だろうかとの心配もあるが。

「エルちゃん。筋肉付けているのはいいけど関節の可動域が狭い。もつと柔軟さを持たないとそんな走りじゃ加速は鈍るよ」

「りよ、了解デース」

「グラスちゃんは体重増えちゃった分走りを強くしない。怪我も少し前にしているっていうし、今は地道な筋トレで筋肉をつけて骨への負担軽減。ついでに飯食ってもカロリー消費できる肉体づくりをし

たほうがいいかもね」

「はいー！」

「タイキちゃん。ターボちゃんとちよつと短距離走ってきたらいいわ。この子限界しらずでぶっ混んでくると、明るさはいいい刺激よ」

「イエア♪ ターボちゃん。私と一勝負です♪」

「分かったぞ！ ターボの走りが最強だって見せてやるからな！」

圧巻。まさしくそうとしか言えない。リボー氏が来るや否や、すぐさまメンバー全員のウォーミングアップを見て、軽く流した走りだけで全員のコンディションを把握。その上で少しの聞き込みで必要なものを次々投げていく。

私、シンボリドルフとおハナさんの指示しようとしたものもやっている辺り、トレーナーとしての技術と、何より遠征に遠征を重ねた経験、先行からの差してミサイルと言われた末脚を炸裂させるためのレースコントロール能力からの観察眼の賜物だろう。

「残りのメンバーつと……んー……流石ね。ほとんどみんな見てもいいコンディションの仕上がり。流石日本最高の学園の最強チーム……か」

「それをすぐ見抜くあなたも異常だ。伝説の目線で見てそう言ってもらえるのは励みになる」

「もっと皇帝と呼ばれるのならどっしり構えなさい。すぐ見抜けたのは貴女たちがそれくらいわかりやすく仕上げているから。マルゼンスキー、フジキセキ、ナリタブライアン。貴女と女帝を除けばこの

メンバーの仕上がりなら少し調整すればイギリスでも勝利狙えるわ」

あの炎上からの炎上返し騒ぎをしたりボー氏。しかしその実、人懐っこく、正直に評価をくれる。私達に親身に接し、同時に何より道具への配慮がすごい

「ところでシンボリルドルフ・・・」

「ルドルフ、もしくはルナと。どうしました？」

「貴方たちの靴ねくぼちぼち耐えきれないと思うから蹄鉄変えておきなさい。相当影で走っていたわね？」

「わかりますか」

「私が言うのもあれだけど、凱旋門賞制覇のブロワイエ。彼女を先に倒したのはまさかの中等部に来たばかりのスペシャルウィーク。リギルは海外制覇が出来ず、スピカの新星が先に倒した。負けられないと燃えていたでしょ？ おハナさんの注文メニユーを少しオーバーしちゃうほどに」

その道具から私たちの影の行動すらも見抜かれていたようだ。全く・・・どこまで見抜かれているのだろうか。

「どうしてそこまで」

「遠征つてのは道具の差し押さえとか、地元びいきも合って何があるかわからないからね。自前の道具の予備の徹底とか、コンデイションを整えるためにあれこれしちゃうのよ。だからこそね。私も現役時代、多分蹄鉄と靴優に100以上は履き潰したし」

「全く。国内で皇帝と呼ばれている私がまだまだだと思わせてくれますね貴女は」

「フォームと走りを見ていれば分かるわ。そのせいで疲れもたまっているし、貴女も足は強い方じゃない。少し今日はアイシングとマッサージは念入りによ……あ」

なるほど。世界を股にかけた遠征の日々ゆえに身に染みている道具管理と差異を見抜く経験を身に着けたゆえか。これは私にはまだ足りない部分だ。普通なら億単位の金を積んで呼ぶレベルの人材をこうして呼んでくれた美柚樹さん、その縁に感謝しないといけない。

そして、ウォーミングアップを終え、メンバーのフォームチェックをしていた私も走ろうとしていたが、ふとりボー氏が何かを思いだしたように走っているチームの皆から私の方に首を向ける。

「確かこういう時はこういうべきなのかしらね？ 満足すべき「皇帝」への「行程」はまだ遠い。」と

「んぶつぶううう!!? ふぶつ……! げつふ……!」

エアグルーヴのやる気が下がった。

「あー! エアグルーヴ。足が落ちたわよ! それじゃあ加速が鈍るわー!」

な、ナイスダジャレ!! まさかイタリア生まれのリボー氏が日本のダジャレを知って、しかも私のためのこれをくれるとは……! 素晴らしい出来だ。後でメモをして掛け軸に飾ろう。

「おお……これがジャパニーズジョーク。美柚樹お姉さんから聞

いていたけど、ルドルフ好きなのねえ。私はまだよくわからないけど、教えてもらってよかったわ」

「な、なるほど・・・いや、元気をもらえました。ありがとうございます
ますりボー氏」

「リボーでいいわよ。私も今後ルドルフ、もしくはルナと呼ばせて
もらうし」

この後先にフォームチェックしていたエアグルーヴたちと交換して走ったが、今までで最高の、それこそ重賞連覇した時くらいの素晴らしいフォームで動けた。やはりダジャレは心身をほぐしてくれるな！

「タイキちゃんいい具合だったわよ。これなら次のレースもばっちり。後、どうだったかしら？ ターボちゃんの走りは」

「イエス！ 元気ですしあの愚直なまでの真摯さは私も惚れちゃいます！ あと、そうデスね・・・あの技術は私も勉強になりました
♪ 美柚樹シェフのアドバイスもサンキュー♪」

「ま、負けたけど・・・ターボ・・・強かっただろ・・・ほひゆ・・・
み、水・・・」

私はタイキシャトルちゃんたち短距離組の走りと疲労を抜くために軽めに済ませていくメンバーのお手伝い。タイキちゃんとターボちゃんの走りはやっぱりというかターボちゃんは逆噴射をして壊滅。だけどその中で見せた技術と強みは既に見えていくので問題なし。

あと、その技術はやはりというかタイキちゃんのお眼鏡にかなう程だったので僥倖です。重賞のレースに出るのが当たり前レベルなりギルト、中等部かつその個性的過ぎる壊滅的逃げでまだ勝ち数を稼いでいない故に重賞レースに出れていないターボちゃんでは研究やマークされることはタイキちゃん、おハナさんのにも無ければチームでもない。実績が足りない故にレースで勝ちあうことが無いから。

でもやはりチームに入れるほどの実力と光るものはあるんですね。同時に彼女はちよつと気をつけつつ私とリボーで支えないといけない部分も見えたのでそこは当然フォローしておかないとだけど。

走った後にずべしやと倒れたターボちゃんを運んでくれたタイキちゃんとターボちゃんに塩飴と水を渡しておき、熱を取るために歩きながらも冷やせるように氷嚢を渡しておく。

「んぐっ！　んぐっ！！　ぶはー！！　はあー・・・は、走ったぞ・・・」

「お疲れ様。タイキちゃんの走りはすごかったわね」

「おお！　でも、いずれターボが勝つぞ！　ターボはいずれテイオーも倒すウマ娘になるんだから！」

食堂でもよく絡んでは名前を間違われて怒るというやり取りがよくみられることをしている二人ですが、はてさて、あの天才と言って差し支えない子にどうターボちゃんが戦うか、私とリボーでどう武器を整え、ターボちゃんのエンジンをチューンナップするか。一応食でやることは決めていますけど。

この後はみんなも練習が終わり、私からの料理の時間。今夜用意したのは豚肉の蒸し焼きと蒸したにんじんチップ。ライス、パン。そし

てコンソメスープを用意してみました。

「おお・・・これはまさか・・・美柚樹さんの農園の・・・？」

「ええ。規格外品を分けてもらいました。とはいえ、それだけで最高級品をもらっているのですぞ。チップと切り分けた豚肉と一緒にフォークでさして、たれをつけるとおいしいですよ？」

今回の使用したにんじんは「はっこいおとめ」の特Aレベルの味のもの。・・・から少し傷がついたり、形が悪い、サイズの大きさなどの理由ではじかれたもの。これでも普通に使えるし、なんだったらそこの屋台で1本1000円で売っても売れる。けどまあ、はじかれるものはじかれるし、間引きで抜いた未熟なものも使用した。なので安く、でも味は文句なしのそれを使っている。

皆の練習が終わり、お風呂の後のご飯。かつ大好きなにんじんの高級品を食べられるということですよだれを垂らしそうになっています。そしてエアグルーヴちゃんが食べて。

「な、なんだこれは・・・！ 肉汁があふれに溢れて・・・醤油だれと絡み合って旨い・・・！ その後のにんじんの極上の甘味がスパイスと肉のうまみを引き合わせてまた噛むたびに甘味もうま味もパンチのあるスパイスも口の中で暴れる・・・！！」

「あはぁー♡ ハーモニーだわ。これよこれ♪ チーズとトマト、オリーブオイルの組み合わせに負けないほどの最高の組み合わせ♡
んふふ♡ ん？ タレの中・・・レモンも混ぜているのか。いいわね♪」

「おおおおお!! これはいくらでも入るぞ！ ガツガツガツガ・・・んぐっ!!?」

「oh! 大丈夫デースか? お水デース」

冷静な彼女が目を見開いて心底美味しそうに食べたのを皮切りに
どんだん皆さんが食べて絶賛。蒸し焼きの豚肉は疲労回復効果があ
るし、そこにクエン酸ばつちりのレモンを混ぜた特性だれ。一応大根
おろしもあるのでこれにぶっかけて肉に乗せ、にんじんでサンドして
からバクリと行くのも悪くない。

「んぐ…ん…普段の料理よりもよりおいしく感じるのですが…
やはり、ちゃんと仕込めるからですか?」

「メニューを貴方たち専用に絞って仕込みもできるし、自宅でもで
きる仕込みの範囲で済むからね。おかわりもあるし、食べていってね
?」

「よっしゃ! このチームのための専用飯だ! 食べて回復してや
るぜ! あああー…! 一口で甘味もうま味も醤油と胡椒の味も
レモンも来るのがたまらない…!!」

「ターボおかわり!」

「私も!」

「私もデース!!」

「私も一つ」

「私も。これは食べるすぎを抑えるのが大変そうだ」

どんだんおかわりをしてくれる皆さんに用意しつつ、私たちはまた

別のチームに移動するので移動してもケアをできるようにおやつを用意。

蜂蜜にハーブに、にんじん、イチゴ、リンゴ、レモン味の飴。そこにストレスを軽減できるハーブや、クエン酸のサプリで食品に混ぜて使用できるものを入れての疲労軽減のためのいわばサプリ飴玉。皆がゆっくり落ち着いて食べている間にその用意をしていくけど、これまたいい意味でみんなの注意をひく。

飴を作る際の甘い香り。それを幾つも同時に行うので色とりどり、香りも様々な甘い香りが部屋に満たし、ご飯で塩分と栄養を補給したら今度はおやつが甘い香りが欲しいというもの。それをもう悪魔的甘さで刺激してやる。さあさあ、この甘味と出来立ての、ちよつと熱いけどすぐに蕩けて舌の上を満たして侵略する飴が欲しいでしょう？

飴玉のための型に溶かしてできた飴を入れて冷やしている間に疲労回復用のレモン飴で飴細工を披露してウサギさん、ペロ2、ウルトラマンなどなどを作成。サクサクと出来上がったものを冷やしながらそばに置いておき、冷やし終わった飴玉を小瓶に分けながら詰めていけば終わり。

「はい。皆さんのおやつですよ。疲労を抜きたいときのフルーツ飴玉。リラックス、風邪対策のハーブ飴、マヌカハニー入りの牛乳飴を配ります。一人5瓶まで。ささ。並んでくださいな。おハナさんも」

そこからは飴細工の欲しいものを渡して、一応の説明メモを渡して皆は解散。そしてターボちゃんもリボーが引率して戻り、最後はシンポリルドルフちゃんに。

「はい。後これも」

「? これは?」

「リラックスする際に一度どうぞ」

彼女には生徒会長としても忙しいでしょうということでおまけのメモを渡しておいて今日は解散。明日の方もチーム訪問ですし、メニユーは何を用意したのか。

しかし、食器の片づけが向こう数年経験していない程に楽でありがたい。トレーナーもみんなの元気な姿を見てうれしいし、よかつた。

チューンナップ開始

「さーてと・・・データを集めたところで、ターボちゃんの強化プラン。どうする？」

「そうねーまずはスピカはただけどそれ以外のチーム全部、チームに入らずに活動しているウマ娘たちとの合同練習、ケアをしてきたけど・・・」

あれからいくつものチームにテレビ番組よろしく手伝いに行きケアをして、料理を振る舞い、お菓子で活力を与えて練習相手としてターボも同行させた日々。リボアの卓越した戦術眼と経験から磨かれた観察眼でウマ娘たちの個性を引き出しつつも悪い癖を矯正。

美柚樹は病み上がり、リハビリ中のウマ娘たちのケアとそのため必要な手当てを能力を使いつつ治療用の食材などをこっそり使用してウマ娘たちに奇跡と思えるような回復を与える。

そしてなんやかんや厳しい部分があるウマ娘のレース、アイドルとしての世界の中でひたむきに、がむしやらに爆走、突っ走って誰にも笑顔で接して負けても尚回りを励ますツインターボの存在は学園のだれもが癒され、活力を与えられ、負けられないと発奮させる。

ツインターボに関してはチーム・カノープスのトレーナー、そしてチームリーダーのナイスネイチャから「美柚樹たちとあちこちを回って練習相手を務めつつ、自分の経験を積んできてもらうよう指示をした」ということにしてもらい、代りに週一的美柚樹のスイーツデーに関してにはナイスネイチャ、チームの面々にこっそりキーキワンホールをお届けしている。

配達に関してはどこでそれを嗅ぎつけていたのかゴールドシッ

に頼むことに。本人にも配達料金ということでケーキを分けているが、まあ軽いものだ。

「まず、ターボちゃんに関しては毎度毎度限界知らず・・・というか極限の状況を楽しんでいる節があるわ。ブレーキ壊れているからそこを抑えすぎるのはもったいないけど・・・」

「あれを続けているといずれ心肺機能にがたが来ちゃうし骨にも無理がたたちやう。だから今後はハードワーク・・・全力疾走は練習でのレース以外では禁止」

その中で今のところ学園に滞在している間だけの期間限定の師弟関係のツインターボのデータ収集を終えて今後のプランを練る。彼女の目標の一つ、打倒チーム・スピカ。その若き新星、トウカイテイオー打倒のための肉体づくりだ。

「今後はインナーマッスルとボディバランスのための筋トレと、レース中終始全力で走り倒しても負けないほどのスタミナづくりを私で作る。まずは姿勢制御のための体幹。筋肉をつけるための下地の筋肉とそれを酷使できる心肺機能。私もターボちゃんと同じくらいの時期もあったし調整は問題ないわ」

「練習の際は？」

「レースに向けて調整する子たちの相手になる以外は今後ランニング、走り込みをさせる。今後本気で私の持っているエンジン、足を爆発させるための土台を作るわよ」

リボーの方針はまず中等部ゆえに未熟、出来ていない肉体の下地の下地、兎にも角にも短く中距離の適正に振るしかないターボの肉体を作っていく。リボー自身かなりウマ娘としては背丈はあるほうだが、

体格、骨格に関しては正直細い。そこらのモデルが逃げ出すほど細い。

そのせいで背が伸びるまでは「ちびっこ」のあだ名をもらい、アメリカにうつった際にはあそのこのパワフルかつ大柄なウマ娘が多いせいで「ちびっこ」のあだ名を卒業したと思えばアメリカではいまだ「ちびっこ」扱いだ。

だからそのころは小柄、体重が軽いことを活かした逃げで勝利を多く手にし、鍛錬を積んで成長していくにつれ幾つのレースをこなしてもすぐ回復できる心肺機能。「無尽蔵のエンジン」と言われ、背丈と釣り合わない体重を「ミサイル」と呼べるほどの末脚で一気にゴールに運ぶ戦法を確立させたが、逃げは今なお使う戦術。

更にはリボー自身が関節を痛め、同時に呼吸器疾患を患って一時期休養。寄りにもよって消耗品かつリハビリが手間な関節を壊し、一発引退もあり得る呼吸器疾患。この経験もあってリボーはケアの鬼となり、それが遠征でコンディションをベストに保つ念入りさと技術を手にすることに。

まとめるとリボーの経歴と経験、得意な戦術とツインターボに教える技術は噛み合うのだ。自身が小柄な時期だったころの経験も、そこから成長していくための鍛錬も必要なケアも。

「ただ、それでも心肺機能を鍛えるのと、何時でも全力のターボちゃんだから不安は残るわ。だから、その無理をさせても尾を引かない、それが身体を侵す負担ではなく血肉に変えるほどの肉体、回復とケアが必要・・・」

「それなら私の出番ね。そういう疲れを取り除きつつ、肉体を強化、特に骨を強化していくための食材はわんさか取り揃えているし」

ただ、それでもハードな鍛錬をする部分は出てくる。気づかないうちに体をむしばむ部分は出てくる。そこをケアしていくのは美柚樹のケアと美食、この世界では薬膳を越えた何かとしか言えないほどの料理をもってツインターボの肉体に余計な負担を残さない。鍛錬をもってすべてを骨肉の強化に変え、文字通り変えていく。

まだまだレースに耐えきれず逆噴射してしまうツインターボのエンジンを世界に通用する最高のターボエンジンへ。

「それじゃ、頑張りましょうか。マネージャーのヘリポスにももう頼んで用意をしてもらっているし」

「ああ。この前うちの近所の寺で座禅組んでいたそうだけど、もう来るの?」

「ええ。私達の馬鹿を受け止めてくれたからちよつとプレゼントをね」

二人でなんやかんや気に入ってツインターボの半ば専属トレーナーとなっている状況を楽しみつつ、しばらく東京の奥地で美柚樹の農園で農業体験したり、川釣りしたり、トト〇を探して山狩りしたり、寺で座禅を組んで花鳥風月を満喫していたりボートのトレーナー兼マネージャーも動いてくれるそうなの。

「それはいいけど・・・大丈夫かしらね?」

「あー・・・まあ、こここのトレーナーも濃いし、大丈夫・・・じゃない?」

少し不安を抱きつつも今後のツインターボのプランを一通り作り、

二人は寝ることに。なお、ジャスタウェイが販売しているあのへんなこけし型目覚まし時計。ウマツ〇ーにリボーがあげたところ無駄に受けてほしがる人が増えたとか。

「くー・・・くー・・・んおお・・・」

「まーたねて・・・大丈夫？ ターボ」

トレセン学園。ターボは最近授業中でも寝ることが多く、起きても呻いているときが多い。今始めている美柚樹、リボー、ターボによるチーム訪問サポートで対戦相手を務めているツインターボ。それ以外は個別メニューを組んでもらっているそうだが、それがどうにも元氣娘たるツインターボですら参ってしまうものらしい。

あの美柚樹シェフの料理を毎日貰い、お菓子をもたらしているのが羨ましいが、お菓子をもらうたびチームに差し入れて、ケーキも優先的にもらっているのだから最近是不調がない。エネルギーが滾っていない日がないほどだ。

「ふわぁ・・・大丈夫だぞ・・・」

「あのリボーからのしごきだもんね。今はマスクトレーニングだっけ?」

爆走し続けて問題ないスタミナづくり、兎にも角にも執拗なまでに下地の下地を作り上げ、狂ったと思うほどに体幹を鍛え、本気で走る

のは練習相手の調整くらい。ターボは最初は走る数が減ったとぼやいていたが、今は前向きにとらえて淡々とこなしている。

いやはや、ネイチヤさんから見ても厳しい、走る際は好き放題させているし、ケアの後は甘やかし放題な二人だが、練習中に関しては怖気が走るといふのを感じた。あと、ぱつと見でチーム全員のコンディションと癖を見抜いてすぐさま指示を飛ばすとかどうなっているのだ。頭おかしい。

「おー・・・ステイヤー張りのスタミナをつけて来いって・・・ふわあああ・・・ああー・・・よし！」

「でもよ、それもあのリボーに見てもらっているんだろ？ いいじゃねえか！ トレーニング内容はネイチヤのものだが、プロのトレーナー、あの伝説に見てもらっているんだからよ」

「そうそう。このトレセン学園でも成し遂げていない無敗かつ三カ国の大人気重賞を多く優勝、凱旋門賞に至っては連覇。最強と最強の惚れた料理人がいるんでしょ？ ネイチヤもターボも羨ましいわ」

ようやく目が覚めてきたターボに近寄ってきたのはウオツカとダイワスカーレット。あー・・・二人とも好きそうだもんね。海外に殴り込みを続けて勝利し続けた孤高の王者。舐められた評価を国ごとひっくり返した。レース後にはあの王室契約ウマ娘、女王陛下から最高の礼儀をもって待遇された映像は今なお有名。

一着にひととき強い執着を持つスカーレット、痛快な勝利劇を見せつけ、時には10バ身の大差をつけての勝利。まさしく両者には殊更強くあこがれを抱くものがあるのだろう。その伝説が私とトレーナーに頭を下げてターボの育成を頼み、代りにいろいろ融通を聞かせていると言えればちぎれそうな話だ。この前なんてお裾分けの飴を

食べたところあまりに食べすぎて一日でなくなつたと言つていたし。

「んーでも、ターボは未だし・・・じゃなくて、リボーさんからの指示はあまりないんだ。それに、練習試合でもまだ勝利がない・・・」

「いやいや。これからだって！ ネイチャたちのメニューとリボーさんのしごきだけ!? そして美柚樹シェフの料理だ。強くなるのは必ずだ！」

「そうそう。リボーさんの育てたメンバーは多いし、番組の企画でも自ら対戦相手として鍛えたりもしていたからね。・・・そこでも勝ちを譲らないところがらしいけど」

「私もそう思うな。多分今は基礎固めだと思うし、もう少し頑張ろ？」

今はひたすらにけがを防ぐ。これから鍛えていくターボの走りを受け止める骨、そしてそれを支える筋肉の下地。そして動かし続けられる心臓と肺。きつとここから筋肉の鎧をまとわせていく。その際にいろんな選手と戦う時に練習とはいえ無数の選手たちとハイペースで一緒に走る経験はきつと気づかないうちにターボの引き出しを増やす・・・はずだ。

流石に模擬戦とはいえ負けが込むのと疲労がたたつて珍しく落ち込んでいるターボだが、私たちがはげませばすぐに持ち前の明るさを見せる。

「そうだな！ 目指せ妥当スピカ！ そしてテイオーに挑んでやるんだ・・・いちぢぢいちぢぢ!!? あばばばあ・・・き、筋肉痛が・・・」

「おう！ いつでも挑戦は受け付けるぜ!! ・・・だがなあ・・・」

体いつになつたら来るんだよ……リボーさんに美柚樹シェフ……」

「そうね。私も相手になるわ。……そうねえ……ほかのチームやチームに所属していない子たちも既に指導を受けたりしているっていうのに」

自分にも気合を入れるためにガタリと体を起こせばすぐさま筋肉痛の痛さで変な痺れ方をしたような動きでへにやへにやと机に沈むターボ。こりや、少なくとも明日までこの調子だろう。そして、既に学園のほぼ全部のウマ娘たちに指導をしたと言っても過言じゃないほどに訪問指導をしている。大きなチームも実際残るはスピカくらい。

ただ、最近私も少し走りを見てもらいつつ聞くと「リボーをスピカに訪問させる際にはちよつとパワーをつけたいのだけど、その際の相手としていいのがいるからそれまでは下地をひたすらつけまくる」ということで最後あたりに残したようだ。

その影響で憧れの元スター選手の指導、最近学園内でみんなが大好評の美柚樹さんのスイーツとケアがもらえないと二人がぼやくのだからなんだか申し訳ない。

「リボーさんの弟子入りもできるかもだしよー一足先に凱旋門、ミラノ、キングジョージ、ジョッキークラブへの殴り込みからの優勝も」

「それはあたしよ。絶対にあの人に認めてもらって暴れてやるんだから」

「それはオレがだ！」

「いいえあたしよ！」

「まーた始まった。あんまり騒がないでよく・・・おっ？」

ライバルの二人がまたどっちが上かの喧嘩をしていたのを見ていたが、教室に入ってきた存在に意識が向き、次の瞬間には教室からどよめきが上がる。

背丈は180センチほどだろうか。色黒の肌にどこかのハジケリストを思わせるほどのボリユームのアフロ。○眼鏡をかけてバーテンドーの衣装に身を包んだ男がケース片手に突如教室に来たのだ。そりゃあ、女子高のトレセン学園にこんな来たら驚く。

その男は何やら目元スマホを交互に見ていたが私たちを見るやずんずんと歩いてびたりと止まる。

「な、なんだよおっさん!!」

「ちよ、ちよつと待ちなさいウオツカ! この人つて・・・」

その男に噛みつくウオツカだが、スカーレットは何か気づいたようでウオツカを抑える。一方でその男は腰を曲げて懐からここにいる私たちの分の名刺を差し出す。

「ハジメマシテ。ワタシ、ヘリポス。リボアのトレーナーシテイマス。あ・・・ナイスネイチャさん。ツインターボさんでヨロシイデスカ?」

まだ日本語が慣れていないがちゃんと聞き取れる言葉で話す(マルチリンガルなりボアがおかしいだけ)目の前の男はリボアのトレーナーヘリポス。生涯無敗記録を支えた名伯楽と謳われ、引退後のリボアと共に多くの選手たちの育成、補助をし続けた男。

私とターボは何度か見たが、基本レース前の調整と戦術はリボーに一任する代わりに道具やメニューの用意、目利きは最高峰といわれる男が私たちに用を持ってきた。それが驚きつつもちやんと対応しなければと気合を入れる。

「はい。私がナイスネイチャ。よろしくお願いします。ミスターへリポス」

「ターボだぞ！ よろしくな！ ヘリポスぎ・・・いちぢい！」

「ハイ。ヨロシクオネガイシマス。では・・・早速ですが、足の型をトラセテモラエマセンカ？」

そういつて、ケースを拓くと出てきたのは粘土板。え？ これでネイチャさんたちの足の型を取るんですか？ えー・・・まあ、スピカのある悪癖持ちのトレーナーに比べれば数段紳士的だけど。

「あー・・・まあ、構いませんよ。ただ、足を拭いていいですか？ ちよつと・・・恥ずかしいですし」

「オーケー！ あ、カメラOK？」

「オツケーだぞ・・・ネイチャ、ティツシユ頂戴」

まあ、何か理由があるだろうということで許可。靴を脱いで靴下を外して、ウエットティツシユで綺麗に両足を拭いておく。ターボもしっかりと足を拭いたところで撮影スタート。足を四方八方から撮られ、上下左右から粘土板で足をサンドして型を取る。

その後ウエットティツシユを渡して再度データをチェック。粘

土板をケースに収めた後になつこりと笑い頭を下げる。この人頭を下げると肩と顔がまるで見えない。どんなボリウムだ。

「アリガトウゴザイマス。これ、ソシナですが・・・あと、ソコノお二人ニモ。では、シツレイシマシタ」

その後下手な日本人よりも日本人らしい奇麗なお辞儀をびしりとした後に懐から差し出したのは・・・近所の商店街で使える商品券5万円分。それを5人分渡してすぐさま去っていった。

「・・・ハッ！ お、おいお前たち！ ヘリポスさんが今していたのつて、型どりだよな!？」

「あ、あーうん。そうね」

「つつ・・・つまり、え？ あ、これまさかそういうこと!? あー!! 早くスピカに来てよりボーサーん!!」

ヘリポスさんに私よりも数段詳しい二人はどうにも私達へしたことを理解して髪をかきむしって絶叫。この後クラスの騒ぎに戻ってきたテイオーにウオツカとスカーレットは興奮してまくしたて、もらった名刺を見せて自慢していた。

が、テイオーは「リボーさんたちもすごいけどもう引退したし、現役でもっと上を目指せるかいちよーの方がすごくない?」と返していたので論争を開始。これ、大丈夫かなあ。

「ね、ネイチャー・・・プールの時間だから連れて行って・・・」

「はいはい。おぼれないように浅い方であるくように今日は組んでいるから無理は駄目よー」

練習の時間になったのでこの後一緒にプールトレーニング。あまりにも筋肉痛が効いているらしく変顔をしながらも歩いているターボの姿が面白くて吹いてしまったが許してほしい。

あと、美柚樹さんから特性の大根漬けをいただいたけど、おでんのように美味しく、輪切りをそのままぼりぼり食べられた。おなかの具合と一緒に毒も吐き出したようで翌日は絶好調だったし、いやート
○オさんの料理を食べた人もこんな感じになるのかしらね。

黄金鍛錬

「はあく……」

「どうしたの？ テイオー」

「いやー正直さ。美柚樹シェフが来てくれるのは嬉しいし、リボーさんも助かるけど、なんか気が乗らなくて」

今日、いよいよスピカの訪問トレーナーに来てくれる美柚樹シェフ、リボーさん。そして少し前に急に表れてネイチャとダブルターボの足の型を取り、何でも商品券（足型をとらせてくれた報酬？ らしい）をくれたトレーナー兼マネージャーのヘリポスさん。誰もがいい人だし、その手腕はみんなが話す噂話、あのリギルのおハナさんの厳格にもほどがある指導の中に割り込んでも許すほどとカイチョー、エアグルーヴさんも話していた。

けど、けど僕にとって一番はかいちよー、シンボリルドルフ。皇帝なのだ。みんながかいちよーより上だというのは正直気に食わない。あの無敗伝説だって欧州とアメリカではそうかもしれないが日本で戦えばどうなるかわからないじゃないか。ブロワイエだってスペシャルウィークに負けたんだし。

「しかし、スポーツ医学もそうですが医食同源を極めたような料理かつ皆がここの食堂以上の味だと再度訪問を頼むほど。わたくしたちにもいい刺激、もしかすれば隠れている怪我を見してくれるかもしれないわ」

「そうだな。ぶつちやけ。あのおハナさんがああも好き放題口出して、ケアも任せる方がいいと素直に認めるなんざ明日は雪が降ると思つた。必ず面白いことになるだろ」

マックイーンもトレーナーもそういう。僕だつてわかっているさ。リギルの指導方針に一日とはいえあれだけさせて、再訪問を望むほどの手腕つてのはそういうものだ。それに・・・かいちよーたちからもらった飴。あれを舐めるとすごくリラックスできた。あのミルクと蜂蜜の飴玉。あれをもらえるかとも思い気持ちを高めていく。

「リボーさんはアメリカのテレビ企画とはいえ最強の一角、あのセクレタリアトとも引き分けにしましたし、G1優勝の人達も言っていました。あの人のケアでレースを勝てたと。名選手で名伯楽。そして今も支えるヘリポスさんも。一体どんな指導になるか楽しみ・・・」

「まさしく世界に認められる選手かつ名伯楽なんですねスズカさん！ 私も楽しみですよ！」

「あ・・・ああ・・・アタシは緊張してきたわ・・・し、色紙とペン・・・あ、ああるわよねウオツカ!？」

「も、もちろん！ 2ケースと予備で色紙は20枚だ！」

スズカ先輩のアメリカ遠征でもやはり好評のリボーさんのことにスペは目をキラキラさせているし、スカーレットとウオツカはあこがれのスター選手が来てくれるということだがちがちだ。

とりあえず12色マーカーセットを2つと色紙20枚は多すぎじゃないかな？

「ゴールドシップとジャスタウェイ先輩が迎えに行つたようだけど、遅くない？」

「ゴールドシップさんが何かしていなければいいのですが・・・」

「・・・あり得るな・・・あいつは変人な部分があるから」

「「お前が（あなたが）いうな」」

有望、才能のあるウマ娘を見るや足を無断で触れに行くトレーナーも大概だと思ふよ僕は。そうこうしていると、ゴールドシップが何でか持って行っていたリヤカーが見えてきた。あそこに美柚樹さんたちを乗せたのだろうか・・・いや？ 何かおかしいぞ。

「ゴールドシップさーん!!」

「ええ・・・!? ゴールドシップ?」

よく見るとリヤカーの上でゴールドシップは磔にされて顔面にパイを叩き込まれている。その横でツイインジェットが美柚樹さんから指示を聞いていて、リボーさんは横でゴルシちゃん号にのって移動。リヤカーを引くのは黒人アフロの大男とジャスタウェイさんという。何がどうしてこうなった。

「ごめんなさい皆。ゴルシちゃん。急に美柚樹さんのキッチンで好み焼き焼いたり、用意していたデザートにからしを入れようとしていたから私がついお見舞いしちゃうぞして、もんどりうったところ気絶したから連れてきたの」

「いやー流石。学園屈指の変人。読めないわね。ちゃんと罰は与えたけど。改めてよろしく。スピカの皆。私はリボー。隣のアフロマンは私の元トレーナー兼マネージャーのヘリポス」

「ハジメマシテ。ヘリポスデス」

「よし。水で洗ってあげるわよターボちゃん。チームの癒しを一つ無駄にしたゴルシちゃんへの罰は終わったしね？」

「おう！　せーのっ！」

「あーげばぶぶぶぶぶぶ！　溺れる！　おぼでるぶ！」

ジャスタウエイさんの訳が分からないけど分かっってしまう説明を受けて、礫のいきさつまでは分からないがまあいいやと流す。そしてゴルシちゃん号を降りてリボーさんとマネージャーというヘリポスさんがまず頭を下げている。

・・・その後ろで美柚樹さんがバケツに入れた水でゴールドシツプに水を浴びせ、起きたところですぐさまツインランボーとジャスタウエイさんがタオルで拭いていく。何だかカオスな絵面だなあ・・・

「こちらこそ。スピカのトレーナーをしているものです。しかし・・・ほうほう・・・」

「トレーナーさん。流石にアウトですからねそれでしたら」

「わ、わかっているよ・・・」

ジャージ姿とはいええ、ツインズジェットと、リボーさんの足は何やらトレーナーの琴線に触れたらしい。すぐさま腰を落とそうとしたのをスズカ先輩が抑えた。ふーん。引退してもう数年たつけど、それでもトレーナーから見てもいいものなんだろうね。

「?!」

「オートトレーナーの悪癖は大丈夫だったか。ゴルシちゃん失礼しな

「いか心配だったんだぜ？」

「それは開幕礫になるようなことをした貴女が言うことですか？
ゴールドシップさん」

「まあいいわ。じゃ、よければアップから始めてもらっていいかしら？ それとトレーナー、今日の練習でターボちゃんだけど・・・」

「あ、テイオーちゃん。お久。元気だった？」

「あ、美柚樹さん！ お久しぶり。うん！ 今日の料理、楽しみにしているね？」

回復していつものノリに戻ったゴールドシップとマックイーンのいつものやり取りが始まり、ヘリポスさんとリボーさん、トレーナーで三人何やら話し合いが始まった。

で、一方ですぐにリヤカーを片付けて走りに行ったジャスタウエイさん。美柚樹さんは早速何やら調理道具とリヤカーに積んでいたらしい道具を使っていく。僕を見るといつも食堂で見せた笑顔を更にきれいにして微笑んでくれる。

「テイオー！ 今日こそはターボと勝負してもらおうぞ！」

「はいはい。今日は軽く流すよう言われているからダメ。ツインジエット」

「ツインターボ!! 間違えるなテイオー！」

「まあまあ、とりあえず、勝負は今度、ちゃんとしたレースでいいでしょ。」

何でか覚えきれないんだよねえーターボの名前。まあ、ちゃんとしたレースまでに僕も仕上げればいいし、テイオー伝説。かいちよーに負けないほどのウマ娘になるためだ。僕と一緒に舞台に駆け上がったときには思い切りいく。まだ僕とだとしても出れるレースがかみ合わないようだし。

「・・・わかったぞ！ 今日ハシシ・・・じゃなくてリボーさんからもうやく筋トレにうつれるし、テイオーも無理はしないで頑張るんだぞ！」

「うん！ じゃ、気を付けてねー」

僕は僕でトレーナーからもらったメニューに打ち込んでいく。けど、筋トレかあ。野外だと自重を使ったものが多いけど、ネイチャ、あそこのチームは何を指せるよう指示したんだろう？

「11・・・12・・・」

「おらおら！ 遅いぞターボ！ もっとエンジン吹かせて叩き込むんだよお!!」

ターボちゃんの練習。リボーと話していたし、ゴルシちゃんを礎にしていくしていく過程でジャスタウェイちゃんと話していたが、今回から筋トレも解禁。その内容は・・・

「し、痺れるぞ・・・！」

「芯を外しているからだ！　しつかり真ん中に叩き込まないと打ち込んでも全く効果がないぞ！」

土手、もしくははレースで坂のコースを再現した場所に埋め込んだ丸太を片手持ちのハンマーでたたき込むというものだった。しかもリボーンがつて無駄にでかい丸太を二人してゴンゴン叩くせいで私の調理の音もあつてここがトレセン学園の練習場だというのが薄れそうなほどだ。

工事現場のような音が響き渡る陸上競技の特訓なんて投擲種目くらいじゃないかな。

「3・・・じゅっ・・・！　こ、これで終わったぞ・・・！」

「うーしこれでようやくお前もボクサー免許皆伝だな。じゃ、ジャスタウェイ！」

「はいはい・・・ターボちゃん。これをつけて、さあ、思いきり来なさい」

一方で1000メートルダッシュをスペちゃんたちとしていたジャスタウェイちゃんに声をかけるゴルシちゃん。すると道具入れから低酸素マスクとボクシンググローブとミットを持ってきてマスクとグローブをターボちゃんにつけさせ、ミットをジャスタウェイちゃんが構える。

「よーし、6R、ラウンドごとの休憩時間20秒。開始!!」

「ウオオオオオ!!」

「腰が入っていないわよ！ もっとねじりを入れて！ 腕振って！！
空いている手を下げない！」

あのへんなこけしのタイマーを入れて始まるミット打ち。ウマ娘のトレーニングだが、彼女たちはボクシングで世界を取るつもりだろうか？ リボー曰くこれはいい筋トレとのことだが・・・

「よーし。じゃ、頑張れよー」

それを見つつゴルシちゃんは隣で焼きそばのための具材の用意をしていく。いや、練習しようよ・・・あーでもトレーナーも何も言わないし、そういうもののかな？ レースで暴れる際は本当に強いし、疲労抜きをしているのか・・・も・・・？

「ウオツカちゃん。走りのパワーも速度もいい。ただ、自主練にかまけすぎてここ以外で教師たちの授業あんまり聞いていないでしょ」

「うぐっ・・・は、はい」

「ボディバランス崩しそうだし、ちよつとマシントレーニングでこと・・・この筋肉を鍛えておいたほうが走りが安定する。蹄鉄のすり減りもちよつと差が出ていると思うから後でチェックね」

「ウツスー！」

「スカーレットちゃん。今の走りすごくいいわ。でも、負担が増えていきそうだからトモの後ろ側と、内側の強化。後確かちよつと前まで初等部だったのでしょうか？」

「はい！ 光栄です！」

「今後、小魚アーモンドもおやつに入れるようにしてカルシウムを取るようにしなさい。その走りは背丈を伸ばせばよりキレを増していくと思うし」

僕たちの走りを見て、すぐさま弱いところ、いいところを見ながら必要なデータをタブレットを見せながら指示していくリボーさん。正直な話、なるほどウオッカとスカーレットの二人が心酔するのも分かる。後でサインあげると言ってから更にテンションを上げてオーラさえ見えるような二人をひらひらと手を振って見送るリボーさん。

「マックイーンちゃんは流石の天才ステイヤー、欧州でも行けるわ」

「光栄ですわ」

「でもその分下手すればほかのレース以上に疲労がたまるし、その走りのペースは怖いものがある。靴をもう一度選ぶのと、靴下も衝撃を抑える厚地ものにしなさい。あと、足のケアは人一倍気を使うように」

「うーん・・・今から変えていくのは・・・」

「今後遠距離を走るのなら練習でもレースでも慣らしたほうがいい。難しいのならケア重視、リラククスアロマ、そういう効果のある飴を美柚樹お姉さんに頼みなさい。ケーキ食べるよりは甘味味わえて減量しやすいわよ」

「な、なんでそれを・・・！ う・・・うう・・・た、頼んでおきますわ」

マックイーンのスーツ好きを知つての釘指しと、ステイヤーの怖さを知つての道具の交代かあ。履きなれた靴の方がいいけど、けがを抑えるために靴下も徹底・・・さすが遠征のプロ・・・なのかな。あと、僕たちの事もよく知っている辺り下調べもいいのかも。

「テイオーちゃん」

「なに？」

「その走りとはね、柔らかさは私もちよつと記憶にないほどの柔らかさ。天性ものといつてもいいわ」

「えへへー♪ でしょ？ なんてたつて無敵のテイオー伝説を作る走りだからね！」

僕の番になるとほめてくれる。あー・・・なんだろう。やっぱり、褒められるのは気持ちいいし、リボーさんレベルの人に言われるのは違うね！

「でもね、その走りに身体がついていくかが怖い」

「え？」

「貴女の走りは普通よりもばねとしなりが利く分負担が骨にダイレクトに来るのよ。レース前後の調整は軽めに流しつつ、必ず病院で精密検査を受けること。いいわね？」

「え・・・あ・・・あー・・・はあーい・・・」

確か関節を壊して、ついでに呼吸器疾患したりボーさんだから故障

の不安だろうけど・・・怖いこと言わないでほしいな。テンション下がっちゃうよ。病院も・・・う・・・レース後のケアは大切だけど・・・だけどなあ・・・

とりあえず走った後の流しをしてから1000メートルダツシユにうつることに。

「はー・・・まるで彼女らの肉体をMRスキャンやレントゲンで見ているのかといたいほどにズバズバ当てていくな・・・」

「リボーハバトルの組み立てもテンサイデシタカラ」

「トレセン学園で手伝いとはいえ指導されると聞いて世界が動くのも納得ですね」

「はい！　まるでトレーナーさんのように私たちの事を言い当てていきます！」

名伯楽。一か国にとどまらずに世界中で暴れまわってイギリス王室からの敬意をもらい、アメリカからも招待がかかったという実力と経歴は伊達ではない。俺もなんやかんやトレセン学園のトレーナー、このチームの一員という自負があるが、それでも実戦で磨かれた観察眼と経験と知識の融合はとんでもない。

だからこそ、だからこそ気になるのだが。

「そんな彼女がなんでツインターボにあの指導をさせているんだ？　いや、それでもゴールドシップのやつは勝つんだが」

「あー・・・ゴールドシップさん、スイカを指で割ったり、休憩中のジャスタウエイさんと将棋指したりとか、練習をしませんものね」

スペシャルウィークの言う通り。自分で言うのもあれだがゴールドシップは強いし、あのパワーと加速をし続けられるスタミナ、怪我もしないしで天才といえる。が、練習内容は正直こちらもお手上げなくらいの自由ぶりと奇行ぶりだ。

土手に丸太をハンマーでたたき込むトレーニングを大真面目にツインターボにやらせ、かと思えばミット打ち。ウマ娘の格闘技もあるが、そこに転向させるつもりか？

「ワタシとリボーでキメマシタガ、ねじりにツヨイマッスル。ボディバランスの調整。短距離でゼンリヨクデ腕を振り続けるためのタンレンデスネ」

「ねじりにツヨイ筋肉・・・??」

「イエス。走る際に前に走るパワーをくれる腕が落ちないためのミット打ち。走り続けてもブレナイバランス。ブレテモ戻せるフィジカル。ソレニアレハ握力、上腕二頭筋、胸筋、広背筋も使えます。そして、お腹の横の筋肉」

「・・・つまり、上半身を鍛えて加速を鈍らせない、全力で暴れ続けるためのものであり、その際に思いきり動かしても問題ない、ぶれないためのサポーターと戻すためのばね・・・」

つまりはまあ・・・あの滅茶苦茶な筋トレすらも合理的な部分を見出してツインターボにさせている。スズカも認めているし、すぐあの奇行から特訓になると見抜いたのか・・・

「確かに長いレースでは後半腕が落ちそうになりますから。それをさせないための練習？」

「ソウデス、スペシャルウィークさん。それに、シバラクターボチャンは練習相手以外ではアンマリハシレマセンデシタノデ、ストレス解消の意味合いもアリマス」

「しばらく、ターボさんの練習の話を書きましたが、筋トレは体幹メイン、スタミナをつけるためのマスコトレーニングが主だったと聞いています。好きな逃げの練習は余りと言っていました。．．．ようやく下地ができ始めた？　へりポスさん」

「へりポスでオーケー。その通り。私はあまり長くターボチャンを見ていないですが、今日は大化けさせるためのひと段落、そのためにスピカを遅くしたとも言っていましたね」

「徹底的に芯を鍛え、土台を作り、ようやくここから肉の鎧と技術を纏わせていく。そしてツインターボがライバル視しているテイオーの練習風景を見せて発奮材料を補充ないし、爆発させていくと」

同じ逃げ、いや大逃げの戦術を使うスズカだから気になって調べていたのだろう。スズカの言葉とへりポスさんの言葉を聞いてわかることは、かなりの手順を踏んだ逃げの育成。ただ、ターボの性格を考慮すれば素直だが我儘。必要とはいえこの練習でたまったフラストレーションを変わった練習で気分転換。そしてライバル視している相手の才能を間近で見せてモチベーション維持、もしくはアップを狙う。

カノープスのメニューと聞いているが、間違いなくリボーたちの指示だろう。そして、おそらくだがまだそこには仕込みがある。まだまだ

だ公式、非公式含め、もっと言えば訪問先での練習相手でも勝利をできていないターボだが・・・間違いなく、化けていく。

「・・・私、ちよつとターボちゃんと一緒に走ってきます」

「あつ、スズカさん。私も。トレーナーさん、ヘルポスさん！ 失礼しました！」

「イエイエー」

「お前たちはこれ走った後は流してからダウンだぞー、スズカもスぺもこの前走ったばかりだからな」

ミット打ちを終えて大の字になっているターボの元に走っていくスズカとそれを追いかけていくスぺ。アメリカでいろいろ聞いていたであろうスズカは何かを感じたのだろう。まだまだ完成には遠いが世界を掌返しさせた女傑が手をかけたターボの完成。これは楽しみだ。天才テイオーとの対決。負けるつもりはないが同時に知りたくなる。

逃げも差しも先行もお手の物な怪物が逃げしかしたからない一極特化をどう仕立て上げるか、その肉体を、走りを。

「・・・これはテイオーのライバルが増えるかもしれんな」

「モテモテデスネーテイオーさん」

「そりゃあ、うちのかわいい天才さんですから」

ヘルポスさんと一緒に笑いながらリボと一緒に指示を飛ばしていくことに。

「よーしお前ら！　ちゃんと焼きそばは食ったな？　ゴルシちゃん特性焼きそばを食った後は私も手伝った美柚樹シェフ特性デザートのお披露目でい！！」

「一部はゴルシちゃんの暴走で消えたけどね。もう」

「まーまーそう固いこと言うなよ。粉落としより固いぞジャスタウェイ」

今日の練習は終わり、ダウンもお風呂も済んで野外で食事できる場所のでゴルシちゃんの焼きそばも完食。料理人として、あの出来の良さは素直に驚いた。ゴルシちゃん特別ソースといい、本当に多芸かつ器用だ。

この世界ではなんやかんやいろいろ作っていた分経験値もあるのだけど、料理人として負けるとは。ぜひソースの秘訣を知りたい。怪電波もらうかもだけど。

「はーい皆さんおまちどお。特性アップルパイ。小麦粉は私の実家、リングゴは卸の知り合いに頼んで最高のを都合してもらいました。ささ。どうぞ召し上がれ」

まあ、とりあえず今回はこのリングゴを使って楽しんでもらおう。こっそりビックリアップル（びっくりレベル40）を再現して顔は見せないようにカットして作ったアップルパイだがここは嘘をつこう。

正直な話、あの世界のびつくり食材の中でも無駄なインパクトでい
えばいいところ行くし。

「いったきまーす。あむ……ん……んっく!! な、なんです
かこれ!? 私も食べたことないですよ!!?」

まずは先陣を切ったのはスペちゃん。北海道生まれ、あそこでのと
れたての食材を知らながらこの反応。うんうん。上出来なようで。

「ほんとか? ターボも……おおお? うまい! うーまーいー
ぞー!! あぐっ……!! ううぐっ!? ま、まだのどに……」

「だ、大丈夫ターボちゃん? 私も……はああ……上品な甘味……
サクサクの生地が厚さがいい……」

「おおお!? なんだこれ? 前にマックイーンの家でもらったス
イーツよりうまくねえか!」

「……本当ですわ……ねつとりとしたジャムの強い甘さ、リンゴ
のしゃくしゃくとした食感、そこに絡む生地のザクザクとした感
触……食感もいいのに、どれも甘さが引き立て合って……美柚樹
シェフのパイの方がおいしい」

「生地だけでもいけちゃうくらいおいしいわね〜」

みんなが一気に食べ始めていけば先ほどまで焼きそばを見ている
こつちが腹いっぱいになりそうなほど食べていたのにまたすごい勢
いで食べていく。女の子にスイーツは別腹というけど、ウマ娘は本当
に牛のように胃を複数持っているんじゃないかといいたい。

「うんうん♪ おいこーん♪」

「ほれほれテイオーちゃん。これまた美柚樹お姉さん特性蜂蜜入りレモネードだぞ♪」

「え!? マジ! 頂戴リボーさん!!」

「あいあい。・・・甘い!」

「ぐわああああ目がああああ!!!?」

「あーあー・・・」

そしてすっかり打ち解けたリボーとテイオーちゃん。好みも分かっているようで特別製ロイヤルゼリー入りのレモネードを渡そうとしたりボー。の後ろからレモネードにからしを入れようとしていたゴルシちゃんを察してすぐさま振り向いてからしを奪い目に発射。

悶絶して転げまわるゴルシをよそにレモネードを注ぐリボー、みんなのパイのおかわりを運びつつジャスタウエイちゃん。

「美柚樹さん。おかわりです!! できれば2枚!」

「わ、わたしも・・・」

「私も!」

「うぐ・・・こ、これ以上は流石に・・・で、でも・・・」

「あー? 何だよマックイーン。食べねえの? じゃーゴルシちゃんはその分も貰うからくれ!」

「ターボはレモネード頂戴。けぶ・・・」

で、すぐさま飛んでくるおかわりの嵐。スペちゃん。おながが出るほど膨れているけどいいの・・・？ で、マックイーンちゃんは体重調整でたじろぐけどゴルシちゃんが食べるので負けて食べて、幸せそうな顔を見せる。

ジャスタウェイちゃんは一切れ食べてから残りは後で食べるというのでその分は残しているのだけど・・・これ、予備の分も大丈夫かしら？

「はいはい。ここで一気に食べないでも後で食べられるよう箱詰め、その分残しているから食べ過ぎ厳禁よー。あと、疲労抜きのための特性ミックスジュースも作っているからもらって行ってねー」

「寮に帰ってから休みながら食べるんだぞー」

この後はみんなにパイの箱詰めとミックスジュースをボトル詰めしたものを一人一人にプレゼント。ジャスタウェイちゃんにはこっそり倍の数渡したけど大丈夫よね。

「テイオーー！ 今日の走り見たけど、やっぱり強いな!!」

「ふふーん。そうでしょ?」

「でも、ターボも早くなって追いつくから待ってるよ!」

「それはボトルを持てるくらいの体力を残してから言うべきじゃないかなあ?」

帰り際、こんなやり取りしていたけどもターボちゃんは丸太打ちで

握力がなくなつたのでゴルシちゃんにケーキとジュースを持ってもらいながら帰宅。

「……………あ」

私も帰ることにしたけど、ふと思い出してしまう。

「どうしたの美柚樹お姉さん」

「明日スイーツデーだ……」

「…………マックイーンちゃん。南無…………でいいのかしら」

翌日。やっぱりというか私が用意した人参ケーキを見て「連日これ以上の甘味を食べては…………でも週一のスイーツデーでこの味を…………ぐぬぬ…………！」な顔してから誘惑に負けて泣きながらおいしいとパクパクケーキを食べる姿が。

オーバーワークしないようにトレーナーさんに言うておきましょう。

改めて、金持ちなんやなあ

「これ、どーしよっかトレーナー」

「どうすると言われても・・・好意を受け取るほかないでしょう？」

早朝、食事を終えて休暇のチーム・カノーパス。リーダーの私ナイスネイチャ、そして南坂トレーナーでチームの部屋で頭を抱えている。

目の前にあるのは数々の道具。蹄鉄、ブーツ、靴下、靴紐、テープングなどなど、私達4名しか所属していない故に予算も限られる中堅チームには大変助かる。助かるのだが・・・

「でもさー・・・まさかウマ・テジオ製の高級道具にサブリ、道具！

これらのセットだけでうん十万軽くいくわよ!!!」

「いやはや・・・まさか総本社社長直々、マリオさんの直筆とブランド割引券もあるとは」

そのものが問題だった。イタリアに本社を置く大財閥にしてウマ娘のレース、スポーツ用品、シューズ関連で世界に名を馳せるウマ・テジオ社。そこからの差し入れと日本で販売されるブランド品の割引券をウン万円分。これだけでもやばいのだが更には少し前のヘリポスさんの足の型どり。それをチーム・カノーパス全員分やっていたらしく、それを元に送られてきたのが・・・

「さらに、私たち専用の勝負服に合わせた特性シューズ。中敷き、蹄鉄の予備に紐、ぶつちやけこれだけで引退まで使えそうなレベルのものを・・・百万超えそうなくらいだわ」

「今更ですが、リボーさんが財閥の娘かつ最強と言われたウマ娘。祖母たちから愛されつくした娘だと言われていたのを忘れていましたね」

「テジオ製のオーダーメイドでしかも日本支部でカードを渡せば調整も修理も無料・・・ターボへの指導権渡して、私達への指導料だっていうけど、色々厚遇しすぎて怖いわ」

世界を股にかけて引退後もあちこちで走り倒した。レース経験は優に10年を超えるリボーの実地経験とケア、走りやすさとけが予防のために送られた無数のデータをもとにつくられるテジオのシューズは性能も最高だがお値段が高い。そりゃあかなり高い。

世界最新の技術と量産できることで値段と使いやすさを両立したアメリカのブランドも人気が高いが、昔ながらの職人技術と一人一人に合わせたシューズの作成ではテジオには及ばない。それゆえに普段は別メーカーで調整。最終チェックに向けてテジオシューズで走るウマ娘も欧州、欧米問わず多いのだ。

そんなまだまだ活躍も多くできていない、同期のスペシャルウィークやエルコンドルパサーたちのような華々しきがない自分、そのチームにこれほどの厚遇をしてくれる。混乱したり取り乱したりしたっていいはず。

「本人は『このデータや日本のウマ娘のデータも財閥の糧になるし、宣伝のお礼だと思えば安いから使いつぶしてねー』っていうけど、いやあ・・・小市民のネイチャさんには素直に受け止め切れないですわ」

「それでも使わなくてもリボーさんは悲しむでしょうし、思いきり使いましょー」

「そうしましょうかあー・・・っはあー・・・イクノちゃんとか、マチカネちゃん。大丈夫かなあ」

もつと言えば『おじいちゃんに私の知り合いが日本に増えたと報告するし、友達が楽しく走ってほしいと助けるのは当然』と言っていたが、もうテジオ氏はいない。幼いころにお亡くなりになったそうだが、人懐っこい部分と、気分屋なのに勝負で嫌にクレバーな部分は、この影響もあるのだろうか。

日本でいえばメジロ家。それと同じかそれ以上の名家中の名家、大財閥で影響力は計り知れない。忘れていたわけではない。リボーさん以外にも多くの名手がいて、リボーさんはここしばらく気分屋のせいで仕事がない分表舞台に出ていないかったゆえに抜け落ちていた。

改めて、そんな大物からのこの厚遇とプレゼント、トレセン学園にいても奇跡のような確率でのサプライズに皆目を回しているのではないだろうか。

「きつと届いたものが信じられずに押しかけてきそうですね」

「いやあーそうするでしょ。何せ世界ブランドメーカーからの依頼という形でオーダーメイドシューズ作成とか・・・あ・・・」

噂をすれば聞こえてくる足音と声、間違いなく二人だ。さてさて、ネイチャさんはどうやって二人を落ち着かせようか。

「あはは。いやはや、名誉あるメジロ家にお招きいただき感謝しますよ」

「こちらこそ。テジオ家の令嬢。歴代最強と名高いリボーさんと話せて光栄です」

先日のんびりとしていたらマックイーンちゃんから呼ばれ、聞けばなんでもあのメジロ家の現舵取りをしている祖母から私を明日にでも招待してほしいと言われ、翌日には誘導されるがまま黒塗りの高級車にのせられあれよあれよという間にメジロ家邸宅に到着。どうにかお土産を用意したのはいいが、ほんと驚いた。

こうして互いに茶をしばきながら向かい合って話すが流石名門メジロ家。本人もステイヤーとして名をはせた名選手であるのと同様に感じる覇気は鋭くも重い、無駄にまき散らさない分洗練されたそれを感じる。

世界を渡り歩いて大物、怪物、名門たる人物には何名もあつてきたが何でこう、老いを衰えとせず強さに変えていく人が多いのか。英国のあの死神に中指立てているような元気さの女王陛下など現役時代の自分を振り回したぐらいだし。

「私なんてただの放浪かつ放蕩娘ですよ。家の事をほっぽりだして好き勝手にアメリカでトレーナーとタレントまがいをしていたろくでなしです」

「貴女の功績をそういえば、私含めてほぼすべてのウマ娘がろくでなしですわ。貴女に続く凱旋門連覇のアレッジド、アメリカ二冠のプレザントコロニー・・・ほかにも多くのウマ娘たちを育て上げた怪物。その際のデータも財閥を大きくさせていますし・・・テジオさんは貴

女の事を痛く気に入っていましたわよ」

互いに紅茶をすすり、のんびりと観察していたが、こうもトレーナーとしての成果を言われると笑う。が・・・おじいちゃんの事を言われると思わず反応してしまう。名門同士、知っていておかしくはないけども。

「まあ、私のような放蕩孫娘の我儘を聞いてくれましたからね。おかげで美柚樹お姉さんからマックイーンちゃんたちにも出会えました。しかし、そこまでですか？」

「ええ。『なんとなくだが、私のリボールは一廉のウマ娘になるぞ』と普段は名門として厳しかったのに嬉しそうに言って・・・事実、こうして最強の一角としてこの極東の国ですら知らない者はいない。きっと彼も天国で喜んでいるでしょう。貴女はテジオ家の集大成です」

「そうですね・・・貴女がそう言ってくれるのならそうでしょう。私はあまりおじいちゃん与会えませんでしたからね。嬉しいですよ」

おじいちゃんは私にとって幸運のレールをひいてくれた人で、美柚樹お姉さんとの出会い、そのきっかけとなるシンザンのレースを見たという私の我儘を聞き、家族の中でも小柄でレースに出れるか不安なほどの私を愛でてくれた。私のデビュー前に亡くなったし、多忙な人ゆえにあまり触れあえなかったが、ここで話が聞けたのはそれだけで千金の価値がある。

私の気まぐれで進んできて、今は日本にきた。後悔はしていないけどおじいちゃんの言葉を聞いて尚更嬉しい。今度実家にデータと一緒に土産多めに送ってやるか。墓参りも・・・したいけど、私が戻るとメディアと後輩たちがな・・・のんびりできやしない。

「本当にうれしい話をありがとうございます。．．．ところで、マッククイーンちゃんに何か不安があるのですか？」

「．．．．．」

「私は今訪問トレーナーとして動いていますが、誰かを有利にするために故障を誘発させるほど狭量でもなければ、私個人マッククイーンちゃんは好きですよ」

メジロ家総帥としての話は終わり。今度はただの祖母としての顔を見せてきた気がしたので問いかけてみたが当たりだ。彼女自身は才能もあるし、まさしく最強ステイヤーと言われるのも分かる。

それでも、それでも不安を感じてしまうのだろう。あの学園の才能の集まり具合を知れば知るほど、この日本のレースのレベルの高さは世界で見てもかなり水準が高い。孫娘の曇った顔なぞ見たくはないし、けれど素直に聞けないから名家同士のつながりでタイミングよく日本にいて、かつトレーナーとして、元選手として見れる私に声をかけたと考えるのが妥当かな？

「．．．メジロ家は虚弱気味になる子も多いのです。マッククイーン之母もそれで悩まされました」

「．．．マッククイーンちゃんもステイヤーとして戦うつもりです。それでいて虚弱気味ゆえの負担のでかさが心配．．．ですか」

「私もメジロ家の長として最新の医療技術、人材を用意しています。資金も人脈も、あらゆるものを使い家を最高の状態で持たせていくつもりです。それを恐らく継ぐのはマッククイーン。ですが．．．」

「名家の重荷は前へと進ませる推進力となるか、心身を潰す枷となるか・・・」

虚弱体質が出やすい家柄だけど長距離選手として身を投じるマツクイーンちゃん。涙ぐましい体型維持も知っているし、天皇賞への並々ならぬ熱意も分かる。それを常に背負っているのをおばあちゃんの彼女も知っている。か・・・面倒だねえ。名門ゆえに素直に甘やかせないのは。

私なんてイタリアの田舎娘、一国で無敵とイキっているだけとか、競バ世界最高のイギリスには敵わないとか、終始舐められまくりの選手生活だったのと、好き放題していたからここらへんはあんまりだなー・・・でもまあ。プレッシャーの軽減をしてほしいというのなら、やれないこともない。

「勝手な望みなのは分かります。もし学園にいる間でいいのであれば子のケア、悩みを聞いてはくれませんか？ この老骨の頼みです」

「構いませんよ。私も現役を退いた老兵。無駄に時間と金を持って余す放蕩家が未来を走る若人を支えられるというのであれば支えましょう。私のおじいちゃんの事を聞けた恩もありますしね」

「感謝します。メジロ家を代表して礼を・・・」

「それはなしで。互いに互いの欲しいものを聞けたのでお相子。私のような馬鹿に貴方様が頭を下げずとも。逆に、私が頼みたいことはありません」

スピカの子たちは誰もかれもキラキラと輝いている。カノープス、リギルもいい子たちだし、本当に面白い出会いばかりだ。そんな子たちを支えるのは美柚樹お姉さんと一緒に楽しむ。悪くない。

頭を下げようとする総帥殿を抑えさせ、代りにしてほしいことを頼む。これは私では無理だ。

「私にですか？」

「ええ。短くてもいいので、貴女からの助言を。そして、ふふ…デートしてきてくださいいな。孫娘と一緒に甘味巡りとか」

「は、はあ…」

「自分の背中を見守ってくれるかっこいいおばあちゃんの言葉つてのは、そりゃあ活力になるもんですよ？ 私はこれで。あ。そうです。そうです。これ、トレセン学園1のシェフお手製のプリン。お孫さん達の間もあるので分けてくださいいね？ では」

私の背中をおじいちゃんが押してくれたように、マックイーンちゃんを甘やかしてほしいね総帥殿には。きつと、笑顔で喜ばず。気合が入りすぎたら私らやチームの皆が支えるさあ。最後に美柚樹お姉さんから渡されたプリンを渡して退出。

世界でも有数の名家をお年を召して尚引つ張る重圧があるとはいえきつと孫に似て甘味が好きだろうに。思いきりこれを食べて心を軽くして孫と触れあつてきてほしいね。

「さてと…ウマッターでマックイーンちゃんの好きな野球選手は…いや、ちょうどいい。ここで聞いてから帰るか」

野球好きなのはゴルシちゃんから聞いているし、さてさて、元氣と励みになるプレゼントを用意しましょう。

「ふう……ふー……ん……」

きつちりと厳しくメジロ家の当主として私に接していた。優しいところも見せてくれるが基本表情を変えたことをしばらく見ていなかったおばあ様が珍しく笑顔を見せ、一緒にプリンを食べ、デパートやブティックで買いたったものもした。一緒にスイーツも食べたし、とても楽しく、有意義な時間だった。

「はふ……あの方には感謝しないといけませんわ……」

その変化はおそらくだがリボーさんが原因だろう。おばあ様が私に頼むことなどなかったし、二人きりで何か話した際に変化があった。そうとしか思えない。彼女は憧れでもある。名門として生まれ、その期待を応えての大暴れ。奔放さこそあるがそれを持って尚家を大きくさせ、選手として、トレーナーとして大成している。いずれはわたくしも、メジロ家を背負う者として彼女のように強く、成果を残しながら家名を汚さずより輝かせなければいけない。

テイオーさんをライバルだというツインターボさんの我儘を見つつアドバイスもしているようですし、やもすればわたくしのライバルが増える。わたくし自身にもいくつもの発奮材料をくれる。同時に癒しもくれるのだが、あのスイーツを……美柚樹シェフからのお菓子のお裾分けで誘惑に負けて調整をし直すのはどうにか……いえ、これはわたくしの弱い心のせいですが。

とにかく、幾つものいい刺激をくれたリボーさんにはいずれ報いなければいけない。そのためにできることといえば、自分たちを見てくれて、ケアをしてくれた分選手としての晴れ姿を見せることしかできない。

「・・・とはいえ、もう今日は終わりましたよか」

しかしこれ以上は流石に疲労の方が怖い。もう今日の自主練は終わろう。

「あーいたいた。マックイーンちゃん。いいかしらー」

「えっ、えあ!？」

クールダウンのためにウォーキングしていたら隣を並走していたのはリボーさん。引退していてなお美しいフォームで走ってきて思わずびっくりする。

「ちよつと家の仕事頼まれた際にちようどいいやお土産もらったから、ぜひもらってほしいんだけど、いいかしら?」

「は、はい。もしかしてその大きな荷物ですか?」

「そうそう。私の実家の話の際に、スポーツ用品店にちよつと投資と融資をしがてらいろんな人にあつてねー」

世界に名を馳せるスポーツブランドにしてリボーさんの祖父の名前を取ったメーカー。その令嬢の一人がいるのならちよつとそれくらい頼まれごとはあるかもと納得。いずれ私もそうやって動く日が来るのでしょうか。

「ほら、マックイーンちゃん。野球の応援好きでしょ？ ちようど応援しているチームの選手からサイン貰えたし、あげる」

「……………これは!!」

そういつてクールダウンが終わるやカバンの中身を出してくるリボーさん。中身はユタカ選手の、しかもゴールデングラブ賞を手にした時のユニフォーム、バット、そしてグローブにボール。

「ライアンちゃんの方も用意したし、ほら。ユタカさんのサイン入りと、サイン&マックイーンちゃんへ。と書いてもらったわ。いやー株主として頼んでみるものね」

「い、いいんですの……?」

ボール一つですら宝物だというのに、グローブ、バット、ユニフォームまで全部サイン入り。何度も彼の直筆は見たし、サインも貰っているからわかる。本物だ。

「貴女のおかげで私も得したしね。もらってらつて。ファンのために書いたもの。もらわなきゃ勿体ないわ」

「感謝しますリボーさん！ あ、あの……こんな時に何ですが……よければまたわたくしに走りを教えていただけませんか？」

「ええ。いいわよ？ ターフの名優。その本番に向けた練習。間近で応援させてもらう。代わりにターボちゃんの面倒もよろしく。またうまい飯食べられるように美柚樹お姉さんに頼んでおくよ」

この後荷物を渡してさっそうと帰っていくリボーさんを見送り、わたくしは早速じいやに頼んでサイン付きセット一式を邸宅に、わたく

しへのエールつきのユニフォームはきれいに畳んで、汚れないようにビニールで覆う。わたくしの寮室の机に隠して、元気をもらいますの・・・

今夜寝ていたら野球の応援している夢を見て、自分の寝言で目を覚ましてしまいましたわ。

鍛造と絞り

「よしターボちゃん。今日までよく耐えに耐えてスタミナづくり、プールで拷問もかくやな鍛錬を耐えてくれたわね」

「お……お……ターボは……さいぎよ……だから、な……」

「うっわあ……傍目でもわかるくらいには追い込んだわねえ……リボー……はい。ドリンク」

「ん……ぷは……ま、これくらいはしないとね。ちゃんと骨肉には支障がないレベルよ?」

トレセン学園が休みの日。ちようど連休だったのでこちらで一本気で追い込んでおくかということに早朝にターボを呼びつけて800メートルダッシュ20本。超巨大重機のある採石場でタイヤを引きずったり、学園ではあまりできない2対1の高密度なトレーニングをできた。走りのフォームも矯正したし、ターボの強みも磨いたうえでもう一つ武器を乗つけることも完成。

おおよその下ごしらえは出来た。後はここから。美柚樹お姉さん謹製のスポドリを飲みつつ私も汗を流した分の水分を補給。あ……気を抜けばうまさで笑顔になっちゃう。目の前でよだれをこぼしてぶっ倒れているターボちゃんも笑顔になっているし。

「ここからだけど、プール、筋トレ、合同練習。このサイクルでやっていくわ。もうフォームはいいけど、まだまだ粗削り、こっからがりがりやすり掛けしていくからね」

「そ、それはいいけど……かふ……ターボ、本当に強くなってい

るのか？」

「タイムも早くなっているし、タフになっているけど」

「うーん・・・だけど・・・」

あー・・・模擬戦含めれば練習とはいえ百戦以上して、全敗。それくらい追い込んでいる状態。疲労の状況からしているとはいえ、回復してからのレースを基本させていない以上気になるのも当然か。ターボちゃんと関わってわかるけど、この子元気印な面で隠れやすいけど、臆病、不安を感じると落ち込むからなあ・・・

「あーわかったわかった。じゃ、今度一度完全に疲労を抜いたときに走らせてあげる。その際のタイム、フォームを私に弟子入りする前の映像を比べてみる。それでいい？」

「えー？ みんなの前で全力を出しちゃだめなのか？」

「どうせならちゃんと仕上がった状態で戦う方がいいでしょ？ テイオーちゃんたちもみんなもびつくりさせちゃうのよ」

「分かった。でも、必ずチームスピカと戦わせてほしいぞ師匠、美柚樹さん！」

「大丈夫大丈夫。模擬戦ってことでターボちゃんとスピカメンバー全員で戦えるよう調整しているから」

そのついでで私とリギルメンバーでのマッチングもしちゃう羽目になったけど・・・ま、日本の芝も慣れてきたし、アメリカでもテレビ企画以外でも草レースでバ鹿みたいに走り回っていたから問題はなし。現役のころのレコードも落としていないし。

あの国、デパートの回りにでかいアトラクションとか、色々規模がでかくてレース場がそこかしこにあるのがいいのよねえ・・・覆面ウマ娘で現役の連中が小遣い稼ぎ、ライブなしで楽しみ倒すために参加するからほんと勝負に集中して走れるし、レース数も毎日どこかでやっているから草レースツアーとか面白い。

話がそれた。まあ、美柚樹お姉さんの料理と、私、ヘリポスの指導とケアがいいのかチームメンバーの分担とか打診されたり。あのトレーナーの・・・特にスピカのトレーナーの愛情の深さは自分の懐が素寒貧になるほどなのだが、必要なら合理的と私たちを招くかあ。面白いから2ベネット位プレゼントしたけど。日本版コマ○ドーの面白さよ。

「それと、一度カノープスのチームの皆と練習したりしてリズム戻してきなさい。ここ最近ずっと私たちと練習だったでしょ？」

「仲間の皆も心配している。またしごくのもいいけど、私たちはどーしてもほかのメンバーの指導もあるからねえ。ネイチャちゃんたちにメニユーは渡しているから楽しんできなさい」

「んー・・・分かった！　じゃあ、師匠たちもほかのチームやみんなによろしくな！」

汗だくのまま歯を見せて笑うターボちゃん。いい子だわねえ。勝利を求めつつも明るく誰をも応援するか。トレセン学園は結構仲いい子多いし、ほんと癒されるわ。

「よーし。じゃ、帰る前に一応着替えて、汗拭いて車に乗るわよー」

「その後昼ごはんは私が用意するから。今日のご飯はあんみつ鶏肉

チャーハン。ふっふふ。自信作だから」

この後、みんなでチャーハンを食べたが、いや本当・・・イタリア、フランスの名うてのレストランよりもずっとおいしいのよね・・・このご飯を食べられていたトレセン学園の皆は羨ましいし、今は私と訪問先が独占してちよつと申し訳ない。

「ああー・・・疲れたぞ・・・」

「ターボ、ここ最近毎日こんな感じだよねー大丈夫？」

「気にしないで、いつもの事よ。むしろこうでないとおかしいから」

僕たちスピカの訪問練習からしばらく。僕も学園内でぶらぶらしているリボーさんからトレーニングの質問とか、あれこれを聞いたりして、みんなで頼んでまた再度訪問を依頼。そして一度カノープスに戻ってトレーニングをしていたターボがへばっている。

目にクマが少しできているし、疲労の色が見える。でもねいちちゃんはどうでないとおかしいという。どういうことだろう？ ネイチャは大丈夫そうだけど。

「あー・・・今私のチームでターボはちよつとスタミナを鍛えたけど、その分体力の底上げが出来た分ずつと動き回り続けるし、美柚樹さんのこの・・・「スモモンハニーミックス」を歯磨きする前と朝に飲んでるんだけど、それで回復力も増している分すぐね・・・？」

「美柚樹シェフの薬膳ドリンクと、ターボのスタミナ増強でより動

きまわれる分疲れちゃうと・・・大丈夫？ オーバーワークじゃない？」

「ダイジョーブだぞテイオー・・・ターボは・・・だい・・・スピー・・・すぴー・・・」

どうにも、ここしばらくのリボーさんと南坂トレーナーさんの鍛錬でスタミナがついた分もとの元気に拍車がかかって、更にはそこに美柚樹シェフの料理での体調管理と滋養効果・・・か。けどすぐ寝ちやっただけど大丈夫かなあ？

「まあ、そう見えるけど回復力も段違いなの。だからたぶん30分寝たら回復して元気に動くんじゃない？」

「はあ・・・訪問先で毎日あのご飯食べているらしいけど、体質改善もしていたのかなあ」

「そうじゃない？ シェフは確か管理栄養士の資格もあれば、病院食とかもできるようにしているようだから」

「なるほどね・・・その二人のコンビを見たかったなあ・・・」

用意していたであろうタオルケットをネイチャがターボにかけながら話す。もう手慣れているのだろう。頬杖をついて苦笑しつつも嫌な顔をしないそれは柔らかい。回復力までも底上げかあ。やっぱりあの二人は有能なトレーナーなのだろう。

本当にこの学園に来てくれてよかったと思う。ただ同時に思うことがある。あの人は、伝説の王者にして世界最強の一角であったりポー。彼女の走りはいかほどか。肉体も体質も強化するのに大いに助けをくれる美柚樹シェフの助けもあってベストコンディションに

した今の走りが知りたい。

「テイオー?」

「ああ。ごめんごめん。でもさ、トレーナーが言うんだよ。リポーターさんの動き足の運び方は現役を退いているとは思えないって」

「えーと・・・つまりはあのロケットブーストと言われた末脚。走りがまだあるかもってこと?」

「それって! つまりは世界トップの走りを見られる、相手できるってことですか!」

トレーナーの観察眼は本物だし、僕たちの状態を見抜いて緩急つけた指導もできる。そんなトレーナーが、おそらく世界を注目させた怪物たちの集う世代でも頂点でしのぎを削ったりボーさんの動きをそう評価するというのは、ある程度信頼していいかもしれない。

そこに食いついてきたのはスペちゃん。日本一のウマ娘を実現したし、ブロワイエを倒した。日本の意地を見せた自慢の友達だ。そりゃあ気になるのも分かる。

「まーまー落ち着いてスペちゃん。あのトレーナーの言うことも確かだろうけど、引退してはや5年近く過ぎた選手だよ? 歩き方は癖かもしれないし」

「そ、そうですかあ。でも、実際リボーさんの持つ空気はこう・・・大きくて、すごいです」

「わかるわかる。ああいうのが伝説を残すんだろうし、いずれは僕もあれくらいの空気は纏わないと。って背中を押される気分になる

し」

「アタシにはできない話ねー・・・あんなキラキラしまくり、引退しても尚夢の始まりの人を見つけて暴れた人にはとてもとても」

いつもどこか斜に構えているネイチヤがやれやれといったふうに息を吐き、スペちゃんはリボーさんの大きさを改めて理解。僕は：改めて目指す場所の高さを肌で感じられた。リボーさんが指導中に話してくれた『もし現役でかち合ったら負けていただろう』と言っていたほかの怪物たち。セクレタリアト、シーバード、そして今や日本の教育番組の顔。ハリボテエレジーさん、ギンシヤリボーイさんたちともいずれ会ってみたい。

「話は変わるけどさーターボと模擬レースするってほんと？ こっちは乗り気だけど」

「あーその話？ うん。僕たちスピカとターボの模擬試合。一応細かい日程とかはリボーさんたちですり合わせて決めるそうだけど、軽めに一回だけって話」

「ターボちゃん。ここ最近ずっと頑張っていますもんね。私も是非一度本気でレースしたいです。スズカさんやタイキさんも面白いと言ってターボチャンを目にかけていますし、凄いい逃げを見せてくれるかもですよ」

「今のところ、僕にはステイヤーを目指しているんじゃないかと思う程だけどね」

スズカ先輩や、ほかの逃げを得意としているメンバーはみんなターボを気に入っている。でも、あの逆噴射ぶりはレースでも戦績を残せないのが納得だし、ほかの練習でもへろへろだと聞くけど・・・なん

だろう？ その気になるものは。

僕が見る限りはゴールドシップのあのへんな筋トレをして、ひたすらにスタミナをつけていたようにしか見えなけれども……

「ふわああー……あ……あふほ……おお？」

きっかり30分で目を覚ましたターボ。うーん。一体どういう風に仕上がってるんだろう？ 模擬レースが少し楽しみだね。スズカ先輩を見ているし、どんな逃げなのやら。

「はあ……まさかですが……おハナさんはリボアの顔に泥を塗りたいので？」

職員室、そこで持ち掛けられたないように大人げなく戦意を出してしまう。グルメ時代、なんやかんや現地で食材を狙い死闘を繰り広げたころのそれを出してしまい、おハナさんをたじろがせてしまう。

「そういうわけではないです……ですが、軽く、軽くでいいのでは非ともマッチングのためにリボアさんに相手をしてもらいたくて」

リボアとリギルの模擬レース。恐らくスピカの話から来たのだろうけど、すでに引退をして数年を越す相手にあの日本最強格がおおく、世界も狙えるリギルのメンバーをぶつける。リボアのアメリカでしていたことを考えればまあ、わかるのだが。

「草レースや指導の一環で確かにリボアは走っていますけども……日本に来てからはそのレースも一部だけです。大丈夫ですか？」

「あの覇気を纏い、今なお衰えない肉体と観察眼。そこから来る重圧は世界を舞台に戦う際にリギルに必要なものです。それに・・・3か月前にテキサスのチャリティーですがみせたレースでの走り、タイム。どれも現役ウマ娘の中でもトップ。むしろ円熟された経験と実力をリギルの皆さんに感じさせたくて」

あのおハナさんがこうも食い下がるほど。しかもまあ、動画サイトを漁って見せつけたやつはまさしくリボー。一応私がトレーナーだし、まずは私からリボーへレースへの乗り気を出そうという感じか。そしてあわよくば指示も貰いたい。そりゃあそうだ。鍛えた子たちは凱旋門や多くのレースで勝利を重ねている怪物ばかり。糧になる。

「わかりましたわかりました。じゃ、ちよつとりボーに連絡を取りますよ。・・・もしもしリボー？ 美柚樹だけど、ちよつといい？」

『はいはいーどうしたの美柚樹お姉さん』

「リギルから模擬レースの申し出があつてね。リボー、今は私に付き合う形で手伝っているけど本来は長期休暇でしょ？ それに引退して長い。この練習試合どうするって」

「お願いしますリボーさん。リギルのためにもあなたの走りを・・・で、スピーカーにしてから連絡すればリボーも出てくれる。確か、今は江戸前寿司ともつ鍋を楽しみに言っているはずだが、幸いだ。機嫌は良さそう。」

『ふーん・・・ま、いいわよ？』

「ありがとうございますリボーさん」

『アメリカでもだけど、企画で勝負は多かつたし、公式無敗の私を非公式とはいえ引退後に企画でガチメンバー組んでのレースとかで倒そうとしたのとかあったのよ。負けなかったけど。これくらい安い安い。リギルでしょ？ 芝2000〜2400くらいはどう？ 海外のレースの距離を想定して』

「じゃ、私もしばらく食生活チェックとケアのために道具用意しておくわ。リボーもごめんね。今度またあの大根の味噌汁作ってあげる」

『あ、じゃあ赤味噌で。それじゃねー』

そういつて電話を切るリボー。うーん。負けるつもりはないのと、考えていたんだろうなあ。日本の才能たちと触れるうちに。

私と裏で仕上げてはいたし、問題はなさそうだけど。

「そういうわけですし、予定を煮詰めましょうか。出来ればスピカとターボちゃんの練習もあるので同時にしたいのですが」

「わかったわ。じゃアリギルが動けるのは…この日と、この日…」

2チームの模擬レース。スピカのトレーナーさんにも打診のメールを送り、私たちは私達で予定調整。

「リボーさんとリギルのレース…？ やばいやばい！ これ皆に伝えないと！」

ただ、たまさか私たちの話をウマ娘の優れた聴覚で拾ってしまった誰かのせいで後日また大変なことになるけど…

「おかえりリボー。もう今日のご飯は出来ているわよ」

「ただいま美柚樹お姉さん。おおー♪ ちょうどターボちゃんたちの様子を見てきたからお腹空いていたしありがと」

食い倒れの旅を終え、ヘリポスは風呂に沈め、私はシャワーを済ませて戻れば美柚樹お姉さんの料理に腹を鳴らす。ああー・・・幸せ。

「今日は枝豆のクラムチャウダーとパン。そしてうちの菜園の野菜サラダにベーコンのキュウリ巻き。いただきますしよう」

「いただきますーす・・・ん？ 豆の強いうま味がいいし・・・癒される・・・サラダも新鮮でいいし、今まで食べた野菜は古いのかといたいほどねー・・・あぐ・・・んっぐ・・・けふう」

枝豆というが、これ一つで十分なうまみを持つし、それを優しく包むソースに引き立てる野菜。うんうん・・・ここにパンの食感もいい具合。今日は鍋と寿司で結構濃いもの食べたし、野菜でお腹も心も舌も休めるのはちょうどいいや。

「ところでレースだけど、リボーとターボちゃんの方。行けそうかしら？ 私が行けると思うけど」

「私はちよつとしばらく独自の方法で調整するからできれば美柚樹お姉さんの特性ドリンクとかほしいかな。ターボちゃんは・・・ええ。70%完成。フォームも疲れている間にも叩き込んでいるから全力からへばろうともフォームは崩さないようにしたし、ボディバランス

もいい」

「骨の強度もいいし、あともう一息か。無駄な脂肪を落とすつつ、クツシヨンとなる分を作り、小柄ならではの強みを生かせるようにした」

「刀剣でいえば刀身のおおよその形を作り、余分もそぎ落とした。後は冷やして、研ぎ澄ませばひとまず現状でできるターボちゃんの完成」

腹に流し込まれる幸せな温かさに癒され、緑茶を飲んで息を吐く。現状できることはしたし、何だったらターボちゃんの同世代に負けなほどのものは用意した。が。足りない。

もう一押し、熱したままの刀剣をそのまま使えば曲がるし、研ぎもしなければ切りたいものを切れる切れ味はない。最後の追い込みと微調整。それが必要になってくる。それさえ完成すればリギルのメンバーも認めるほどのものを見せられるとは思うけども。

「じゃあ、その間はカノープスの皆に任せていく感じ?」

「うんにゃ、2週間前から私が指示を送る。それまでは改めてチームの皆と楽しく過ごしてほしいわ。まだ12、3歳の遊び盛りだし。その間はあのスペシャルミックスフルーツドリンク送って回復と、身体に余計な負担を残さないようにしておいて」

「任せて。多分今頃筋肉痛とかで風呂場で悶えていそうだしね」

まだまだ中等部、みんないい子ばかりだし、私たち大人組に挟まれていく時間よりのびのび青春したり、楽しむのもトレーニング効率につながるし、やる気維持にもなるでしょ。一応湿布とプロテイン

バー、リラックス用のドリンクと小遣い渡したけど、大丈夫かなあ。

「まー・・・私自身現役メンバーと余計な下心なくぶつかれるのは楽しいし、久しぶりに晴れ晴れとした気分で行けそうよ」

「アメリカはお金の規模もでかすぎる分、あんまり出来なさそうね」

「チャリティーとか、一部くらいねえ。変なものを背負わずに走ったのは」

「まー今度の模擬レースは気楽にしていきましょう。マスコミの余計な目もないし」

そういうながらパンのお代りを食べてのんびりといい時間を過ごして就寝。このままのんびりここでトレーナーもどきで過ごすのもいいかなーなんて。

だけど翌日

『リギルVSリボー！ 皇帝の率いる日本最強のメンバーとイタリアの無敗の女王のレースが行われるという話が今SNSで話題になっております』

「「なんじゃこりやあああああ!!!?」

思わぬことで私たちの模擬レースはマスコミ、日本の目にさらされる羽目に・・・はあ・・・こりや、もう思い切りやるしかないか。

大炎上。でも対岸の火事扱い

「陳謝ッ！ リボー氏、ヘリポス氏、誠に申し訳ない……！」

「あー……気にしないでいいわよ。理事長」

「ハイ。こればかりはある意味で私たちのせいでもあります」

「しかし、このような形で……」

誰かが拡散した情報のせいでリギル&スピカVS私、ターボちゃん
の模擬試合が広まってしまったせいで日本はちょうど重賞レースが
ない中で聞いたこの話で持ち切り。連日テレビで騒ぐし、火種をさら
に増やすしで、いやー……この速さはアメリカ張りね。

ぶつちやけ、私自身は慣れているし、なんだったらあーやったか。
くらいにしか思えない。ただまあ、問題はとことん学園の負担と、生
徒たちの負担だ。ルドルフちゃんなんて今頃頭抱えていないかしら
ね。

「私はこんなの現役時代何度も味わったし、アメリカでも引退後に
テレビ企画でお笑いものにされるために出されたりでしょつちゆう
だから大丈夫。負けなかったし。問題は生徒たちよ。私との模擬
レースについて相談は大丈夫？」

「無論！ リギル、スピカ両チームは問題ない。試合の予定も無け
れば皆楽しみにしているという。だが、あくまで善意で受けているリ
ボー氏。貴殿の気持ちを重視し、模擬レースはまたの機会にという話
も……」

「なら受ける。これだけ外野が勝手に盛り上がっている中、私が下

がってもチームが下がっても勝手な罵詈雑言がチームにも学園にも来るわ。なら、経験になるということで私が受ければいい」

「既にリボアの調整は始めていますし、タイムも今のところG1レベルに引けを取りません。レース用のシューズもあるので、理事長はむしろチャンスととらえてください」

「チャンスとは？」

もともと走るためにずっと足を錆びつかせないようにしていたし、びつくり企画的ノリでアメリカじゃ挑戦もあった。今更この程度でビビる必要なんざない。

どのみち、実行し続けても海外からのブライイング。強制的に断念しても学園とウマ娘たちの方に矛先が行きかねない。ならまあ、得をする方にもっていく。

「この話しを晒上げて盛り上げた連中巻き込んでレース会場借りてライブなしの興行。学園の懐潤すほうにしちやえばいいのよ。私もちゃんと頑張つて調整していい結果を見せるから、それがいいでしょ？」

「アト、ほかのウマ娘の皆さんもレースに向けての調整中。学園の方に入り込んだり、迷惑をかける人対策、リギル、スピカ、私たちのために大多数にいらぬ影響を与えないために」

「・・・むむ・・・苦慮・・・そのほうがいいのか・・・」

「確かに学園に不特定多数の人を一気に受け入れるのは余り・・・観客や野次馬のために野営場設置も・・・」

こうなればウイングライブはないけども対戦カードの豪華さ、チーム戦という物珍しさの興行で学園の懐入れておく方がいいでしょ。また私の家の方と、知り合いのつてに連絡して海外からの声で余計なものを抑えさせておけばいいし。

おじいちゃんもほんとこの調整がうまかったようだからなあ。魔術師と呼ばれるのは伊達じゃないか。

「表向きは2チームのレースを見たい方への場所の提供と、しつかりしたレース場で全力を見てもらうため、ひいては学園で勉学に励み、住んでいるほかのウマ娘たちの余計な負担をさせないための配慮ですと言えればいいわ」

「会場レンタルのための資金だと言えればいいデスし、何でしたらこちらからのポケットマネーで補います。次世代のためのお考えばこれくらい」

「却下!! 流石にこれ以上迷惑をかけてポケットマネーまで出されてはこちらの立つ瀬がない。日程通りに模擬レースを進めてほしい。分類としてもいわゆる非公式レースに近いものにするゆえに」

「了解。私としても日本最強のリギルと走れるのは楽しみだしね。あ。でもライブは駄目よ? 日本の曲と踊り、ほんと覚えていないし、今からの調整は無理」

基本教えていたのは走りばかりだし、歌とかはしていたけどダンスはあんまりアメリカでもフランスでもしていなかったしな...。たはは。日本のウイニングライブも盆踊りとかブレイクダンスをしたりと幅広いらしいし、尚更無理無理。

とりあえずまあ、私と走って、これからどこまでも走り抜けていく

若人の刺激になれば幸い。・・・負けるつもりは毛頭ないけどね？

「それはもちろん。では、そのように。あと、レース場も近場にしておきますので・・・」

「ええ。では理事長さん、たづなさんも失礼。私は私で調整してきます」

早速私は私で調整を。さてさて、大仰なマスコミに見られつつのレースはアメリカに來た直後以來だけど・・・なにしょつかない

この後、メディアを見れば海外からは、主に私が世界で暴れた国やアメリカから大ブーイングがマスコミに大集中するという面白事態に。ただ、そこでも私としてのぎを削ったメンバーはみんな似たようなことを言っていた。いやー・・・セクレタリアト。あんたが言うなどいいんだけどね。

「荒れたわねーマスコミ。んー・・・もうすこし煮込むか・・・この具を入れるのは・・・」

「全くです。私達も本格的な大舞台で模擬レースを。ターボちゃんと戦えたり、リボーさんの走りを見れるのはいいのですが」

「まーまーなったもんはしょうがねえだろ。やるだけやるってことよ。むしろ思わぬ形での経験と賞金が入るんだ。悪くはねえだろ？」

「私も・・・ターボちゃんと走れるのは嬉しいな」

あの大騒ぎからの翌日・・・の夕方。練習も上がって何でか来たゴルシちゃん、ジャスタウェイちゃん、スズカちゃんの三名。ちょうどいいのでたくあんとか漬物と、おやつになりそうな手作りケーキ。ついでにスープの仕込みをしておく。

スープの完成はしないだろうけどもとより時間がかかるものだし、合間合間のお菓子ならできそうだし。ついでに2日くらい寝かせないといけない。

「まあ、リボーもみんなと経験になるのならと了解。自分も日本の芝で走るのが楽しみといって認めさせたし、マスコミも変な煽りは入れない・・・とは思いたいわねえ」

「いやー無理だろ。既にリボーの描く勝利の芸術を阻むリギルの壁。それを碎けるか。とかの見出しもあるし、もうリギルやリボーさんへのガヤも多いのなんの」

「どれどれゴルシちゃん。・・・うわちゃ・・・リギルファンとリボーファンで引退して久しいリボーさんを見世物にしたのかとか、これに勝っても日本は笑いものとか・・・散々だわ」

「ん・・・でも、アメリカでは評価が違うようですね」

三人でスマホを除き込めばまあ、私もちらっと見たけど荒れること荒れること。まあ、練習だったはずなのにいろいろ配慮した結果レース場借りてのもの。それほど規模が膨らんでの中での勝敗と内容に盛り上がらないわけがない。

でも、スズカの見るアメリカでの評価は少し違うようで。

「セクレタリアトさんやギンシャリボーイさん、ほかにもりボーさんが育てたメンバーと、長くかかわったマスコミは『あの時代の伝説が何で伝説かを知ることになるでしょうね』・・・海外でも騒いでいるマスコミは半々くらい?」

「半分は勝負を楽しむに、残り半分は非難って感じか。・・・お。今日の非公式レースで面白ウマ娘登場? ダテ・ナオト。わはは! 虎のマスクにマント、ズボンまで色を合わせて用意した念入りようじゃねーの!」

「へえ。日本でも増えているのね。こういうの。アメリカでも非公式レースは多かった」

まあ、どう愚痴ろうがレースは行われる予定であり、基本レース、走ることが好きなウマ娘の皆にはこれ位以上どろどろした話はしたくないやとちようどよく舞い込んできたのが非公式レースで注目された覆面ウマ娘。

基本、協会の決めたレースなどとは違い、非公式、個人で開催、あるいは公式のレースのエントリー条件や功績に絡まないものが多いゆる非公式レースとなる。そこでは公式以外でもレースを味わいたいウマ娘や、引退しても走りたい方々、あるいは小遣い稼ぎなどで行われる。アメリカだと大牧場主や資産家が地方活性、あるいはニュースの提供などをもとに行われたりすることが多い。

その分賞金や活気も高いものが多く、非公式レースの運営が出来たり恒例になっていたり、それを目当て、あるいはそれで生活しているウマ娘もアメリカやフランス、ドバイなどの有名処は多いそう。

確か日本でも地域おこしに地元専用の商品券と、特産品を賞品にしたレースがいくつかあったような。オグリちゃんが参加して大盛り

上がりだったとか。言っちゃえば、チャリティーレースとかも含むし、結構世界各地で行われているのよね。

「へえー・・・おお、しかもこのダテ・ナオト選手。賞金は一部募金や引退、怪我したウマ娘の支援に寄付するってよ。豪気だねえ」

「もしかしたらグラスちゃんとか、タイキちゃんみたいな海外生まれのウマ娘なのかも？ あっちでは寄付も良くするそうだから」

「そういえばドバイでもいたなあ・・・リボーさんが日本に来て長いし、追っかけとか、ついでに日本旅行ついでにレースも味わいに来た？」

「ふふふ。だとしたら相当の日本通・・・いや、この際は漫画？ それともプロレス通？ もしかしたら、海外のウマ娘の格闘技団体のウマ娘かもね。ささ。出来たわよー私お手製キュウリの一本刺し。夜食にもいいわよ」

だとしたらまあ、レースすることも織り込んでの用意、もしくは・・・秋葉に行ったか？ その虎ウマ娘。まあいい。後でその記事見せてもらおう。私は私でスピカと来てくれた三人娘にお土産として漬け込んでいたキュウリにちよつと味付けのチエツクを済ませたキュウリ一本を冷やしながらつけていたものを竹串でさしたものをお裾分け。

シークワ―サー味、梅シソ味、たくあん味、浅漬け。これをとりあえず50本くらいつけたやつをクーラーボックスに入れて渡す。

みんな耳を立てて、しつぽを揺らすからかわいいなあ・・・こういう感情がよりわかるのもウマ娘たちのいいところ。かわいい。

「そういえば美柚樹さん。しばらくリボーさんなのですが、学園を離れるって本当ですか？」

「ウマ娘だけに耳が早いわねスズカちゃん。ええ。ちよつと沖縄にね」

「沖縄・・・なんで？」

「んぐっ・・・おぉー！こいつは一級品だぜ！」

早速ぼりぼりみんなの分を残すか不安な勢いで食べていくゴルシちゃん。スズカちゃんは早速私のこれからの移動先を知り、ジャスタウェイちゃんは首をかしげる。まあ、当然か。

とりあえず保管しておくためにスープの素を別の容器に移して冷蔵庫にうつしておく。

「知り合いの方から塩の専門店でいいものがあるから買いに来いってのと、沖縄とれたての柑橘類、野菜は興味深いからね。仕入れがてら、料理のレシピに加えるか吟味したいの」

「ああ・・・そういえば、あそこの柑橘類、いまアジアでブームが起きてるんですけどっけ？」

「実際、基地帰りの兵隊さんも沖縄の料理はよく話をしていました。と、特にマンゴーとか美味しいとか・・・！」

「ふふふ。大丈夫大丈夫。しっかりお土産用意してあげるわね？市場内で買える物でもあるみたいだし、新鮮なのをあげる」

スズカちゃん、アメリカで相当あちこち遠征ついでに聞けたんだろ

うなあ。ファンも増えたようで。ま、ちょうどいいし、南国の果実やお菓子、あとは帰ってきたらあのスープも振る舞いますかね。何でも珍しい塩も取りそろえた専門店・・・いやあ、グルメ時代を思い出すわ。腕がなるわね！

ぽふぽふと頭を撫でると二人とも嬉しそうにほほ笑んでくれて善きかな善きかな。で・・・

「あー・・・ゴルシちゃん？　ちゃんとキュウリ残しているわよね？」

「お？　おー大丈夫だぜシェフ！　ゴルシちゃん特性のマスタードもチョイスして最高の仕上がり・・・」

「・・・一人当たり一本になってんじやねえかあああつ！！　しかもこれキュウリじゃねえよ最早黄色い何かだよ！　一文字しかあつていないわああああ！！」

「おぐあああああ！！」

思いきりぼりぼりキュウリ食いまくったせいでスピカたちに皆に一本づつしかいないほどに減り、キュウリを入れていた容器にはもはやキュウリがまっ黄色になるほどになみなみと注がれたマスタード。

で、これを見てツツコミスイツチ入ったジャスタウエイちゃんが迷わずゴルシちゃんの顔を容器に突っ込ませ、ゴルシちゃんは目にからしが入ったのたうち回る。おなじみの光景だ。

「アメリカだってこんなマスタードマシマシで食わねえわ！！　これじゃ百歩譲ってホットドッグどころかホットマスタードだよ！！　ドッグどころじゃなくて黄色いアメリカンな鳥さんイメージで出てくるわ！　人気食品からはじかれちゃうドッグちゃんの気持ち考え

ているのか!?!」

「す、すみませんでした・・・おつご・・・!」

「あああああああ!!? 私の目にもマスタードがああああああ!!?」

そこから顔を上げさせたジャスタウエイちゃんに割と素直に謝るゴルシちゃん。だけどその際にジャスタウエイちゃんの頭にゴルシちゃんが頭突きの形となり、ゴルシちゃんはセルフ不意打ちでダメージ。ジャスタウエイちゃんはその際にゴルシちゃんの顔についていたからしが目にかかって今度は二人そろってのたうち回る。

・・・毎度毎度、私の部屋で大暴れするなあ。あと、ほんとジャスタウエイちゃんのスイッチ入ると豹変するのは何だろう? これが世界最高峰と呼ばれたウマ娘の勝負強さ・・・なのかしらね。

「す、すみません。せつかくのキュウリが」

「あーいいのいいの。一本丸かじりとはいかないけど、代りにこれあげるから」

食べられちゃったものはしょうがないので代わりに食堂に差し入れて渡すようだったお新香各種セットを渡しておく。箸でつまむことになるけど、味の方はちゃんと負けないものになっているし、みんなで仲良く茶をしばく際のおやつにしてくれれば。

とりあえずからし漬けとなったクーラーボックスを一度洗い、氷を入れなおしておしんこの入れたタッパーを入れる。

「じゃ、スピカの皆によろしくね。スズカちゃん」

「はい。さ、ゴルシちゃん。ジャスタウェイちゃん。帰りましょ」

「うーっす。じゃまたなー美柚樹シェフ」

「あいちちち…な、なんでゴルシちゃんはこんな回復早いのよ…し、失礼しましたー…」

「気をつけて帰るのよー」

蒸しタオルをゴルシちゃんとジャスタウェイちゃんに渡し、スズカちゃんはクーラーボックスを抱えながら出ていく。

その後は…散乱したマスタードを掃除しておけば準備はしてあるので後は出るだけ。

さあ、久しぶりね。食材を求めての旅行なんて。うふふ。ああー…南の島の鮮魚、多少な食事、それに沖縄は豚料理も豊富だし、亜熱帯地域だから夏バテ予防料理もある。料理人の血が騒ぐわ…！

「よしっ…！ リボーもターボちゃんも必ず最高の状態であげるために、ふふ。美味しい料理を求めていきましょう。あ。いちおう理事長とたづなさんにもう一度伝えて…」

二人の见たい景色、ひとまずのゴールへそこへ走り抜けるためのエネルギーは私が用意しないとね。

あと、お土産どれくらい用意すればいいかなあ…一応、お財布に結構ギチギチに詰め込んでおいたけど…足りるかな？

「…あ。ダテ・ナオト選手。2戦目の場所への参加を宣言してい

る。派手ね」

「えー!! リボー師匠も、美柚樹シェフもないのか?!」

「数日だけ少し学園を離れるって。リボーさんは自己調整。美柚樹さんは沖縄で食材調達と吟味ね」

「沖縄・・・! 南の島、南国リゾートですな〜」

「ですが、それぞれ数日で戻り、リボーさんはターボの調整もしつつ自分を短期間で仕上げ、美柚樹シェフはおそらく、より二人の疲れを抜くためでしょう。ターボ。貴女のためでもあると思いますよ」

学園の注目の的。人気者であったがさらに人気を増した二人が学園から数日離れる。それに一番ショックを受けているのは多分ターボ。

今も筋肉痛や疲労を見せるほどにトレーニングを続けて、ぶっ倒れそうなのにこれを聞くやすぐに体を起こして聞いてくるのだ。マチちゃんはそれでまあ、南の島ということに思いを馳せ、イクノは冷静に状況を分析してターボを抑える。

そしてイクノの言うことは確かだろう。伝説。あのキチガイ、天才、怪物がひしめく世界の最悪最強時代のメンバーの中で最強の一角と言わしめたターボの芸術家。リボーさんでもリギルは日本最強の現役メンバーがひしめく。

その模擬レースのために自分の調整ををしつつターボを仕上げる

には短期間で自分を一度仕上げ、その上で流しながらでもターボの面倒を見れるくらいにならないといけない。

「うゝゝゝでも、あのご飯とお菓子がないと、色々話せないのはターボはつらいぞ．．．いでで．．．！」

「それも今は一日すれば回復するんでしように．．．お菓子は飴玉と、ケーキを既にもらっているわ。一応、美柚樹の方は3日で戻ってくるみたい。お土産も用意しているみたいよ？」

「おおー♪ いいですね。ふふ。これで元気をつけたターボちゃんはもうスピカだって敵なしのはずですよ！」

「ええ。ターボ。今は私たちでやるべきことをしましょう。貴女が師匠と仰ぐリボーさんを安心させるためにも、帰ってきたお二人の指導をこなすために。あ、それとリボーさんからの指示ですが、日常生活でもこの靴になじませておけとの事です」

こんな風に呻いていても、風呂入って、飯食って、そんで寝る前に飴玉舐めてから歯を磨いているころには筋肉痛も和らいで、寝ていれば翌日は元気はつらつ。いやさあ．．．この超密度練習をして無事で、念のためにこっそりマックイーンに頼んであっちの医者健康診断してもらってもおぐしゆりの影も形もなく無事どころかやべーくらい強い心臓と肺になっているみたいだし。

私達も体質改善しているらしく、回復力はかなり増した。体調は常に最高。ほんと、魔術師なのかあのシェフ。そして、靴に関しても履きやすい、すんごく履きやすいし、足が楽。過ごしやすい。しかもレース用の靴と同じ中敷きだからすぐに全力疾走もしやすい。

イクノは体調管理が得意だけど、本人も驚くほど靴で日常生活の足

の負担を減らしつつレース用の中敷きを改良しているので勝負服、靴に変えても問題なくなじんですぐに走り回れる。今はこれをならしつつつ過ごすほかないだろう。

「イクノの言う通り、今は素直に過ごしながら待ちましょーターボ。その分、お土産とか美味しいご飯貰えるわよー」

「そ、そうか・・・？」

「もちろん。だってターボは頑張っていますし、レースも日程が決まりましたもの。ストレスと疲れを抜くために美味しいご飯をくれますよ」

「な、なら・・・ターボは、頑張るぞ！ で、イクノ、明日はどんなものをするんだ？」

びきばきと体を起こし、気合を入れなおしていつもの笑顔を見せるターボ。やれやれ。ネイチャさんのやることはしばらくこの子のやる気の維持と、せっついては知らせることね。まあ、そうでなくてもターボは走ると思うけど。

「まずはストレッチ30分。ミット打ち10ラウンド。フォーム矯正をしながら1000メートルダッシュ3本。小休憩をはさんでからタイヤ引き、フォームチェックをしながら400メートル走。チューブトレーニング土手をジグザグダッシュ。そのほかに・・・」

「お、おー・・・頑張るぞー！」

あー流石の練習量にターボも少し不安げ。大丈夫かなー。美柚樹さん早めに戻ってきて。うちのトレーナーも頑張るけど、やっぱり指導する本人がいるのと、あのマッサージとかのケアもターボ好きだし

さ。

ま、それはそれとしてカノーpusは好調。その大きな勢いをつけるためにもターボには頑張ってもらわなくちやね。

再分析とプール

「あー・・・さて、みんなひとまずマスコミも落ち着いたので今日改めて集まってもらった理由を・・・エアグルーヴ」

「はい。会長」

はあ・・・正直な話、まだ疲れが抜けない。あのまさかの情報すつぱ抜きのせいで東京レース場で決まった模擬レース。その対応が連日連夜続き、頭と胃が痛い日々。美柚樹さんの薬膳料理をもらっていなければもつと疲れていたか。

だがどうにか自由な時間を取れたので今回はモニターがある部屋を借りてリギルメンバーを招集。課題は当然・・・

「今日集まった理由はターフの巨匠。無敗の芸術家リボー対策。その走りを再分析するためだ」

この課題に皆が一瞬ざわめくもすぐに目を鋭くする。当然だ。もう引退して五年たつ。ウマ娘のみならず人間のアスリートとしてもこのブランクは大きい。ただ、彼女は並じゃない。天才の上澄みの上澄み。あの怪物世代の中で無敗を貫いた。引退後もなお続ける生ける伝説。

油断大敵。彼女に油断は敗北を意味する。そして千載一遇。あの伝説とレース場で走れるなどありえないことだったから。

「まずリボーの戦績から行こう。16戦16勝。しかもそれは三カ国の国々の重賞を総なめしてのものであり、引退して尚非公式レース、テレビ企画で現役と勝利して尚負けなしの王者」

「背丈は165センチとそれなりにありますが、体重は大変軽く細身。何度もレース前に健康診断された話は有名ですね」

「でも、彼女はそれがナチュラルウエイト。軽さと、あの体軀を活かした加速……」

「そうだフジキセキ。彼女は加速をしやすいし、その負担も同じ背丈のウマ娘に比べて極めて軽い。だが、決して非力ではない」

「ゴールドシップのやつは自身の重量と背丈をパワーで一気に運ぶゆえに減速しないし、スタミナもあるから常に上がる、船の加速のよくな感じだが、それとは逆。加速装置でもついているようだ」

モニターをつけて出していくのはリボアのデビューからのレースの映像。彼女をアップして映したのもや、俯瞰で見やすい、当時動画に取ってくれたものがあつたのでそれらもピックアップアップ。

その中でまず印象的な母国イタリアの一大レース。ジヨッキークラブ大賞。そこで連覇していたノルマンを15バ身引き離して優勝した映像。

この末脚、ミサイルのようだとされる加速の速さとその速度。これをそこらの相手ならまだしも国を代表するレースを連破した相手にこの差をつけての勝利だ。

「この映像のように一気に加速し、その加速も体重の軽さと、自身の心肺機能があつて長く続く。基本先行、差しを使う戦術で戦う。ここまでなら現代のレースでの王道を使っているように見えるが……それ以外にも切り札はある」

「彼女のデビュー時からしばらくは小柄で地元からもちびっこの意

味を持つ「イル・ピッコロ」と呼ばれていましたが、その小柄さを足の回転で補い逃げて勝利を連発。一時期故障をしても復帰して2戦目は10バ身つけての勝利・・・逃げを持っても一級のものを持っている。しかもスズカ同様、逃げと差しの複合すらも扱えるともていい」

「基本前に出てしまえばもう勝利のみ。かといって、抑えてもあの末脚での差で大差をつけてレースを逃がさない」

「最強の一角は伊達ではナイですネ」

しかもまあ、養生中に背が伸びてからは先行策も覚え、長くなつた手足を使って加速の質を高めていく。重賞レースであっても最後の直線で力を抜いての勝利だったものもある。グラスとエルの言う通り、モノが違う。最強と言える。

「つまり、だ。先行、逃げ、差し高水準で使えるし、しかも肝っ玉も小さくなければ経験もある。手を抜けない。それは分かる。会長。最近のレースは何がある？」

「ああ。最近だと・・・5か月前のアメリカのテレビ企画のこれがあるか。この映像にうつっているメンバーはどれもG1勝利経験者、ケンタッキーダービーやエリザベス女王杯、凱旋門経験者もいる豪華な試合だ」

映像を切り替えてここ日本に来る5か月前の企画。どれもこれも名を聞いたことがある有名人たちとのレースだが、これもまたリポールの勝利。アメリカの名選手たちすらもちぎって投げるその衰えない走りに皆が唖然とするが、ブライアン、タイキシャトルが気づいた。

「今までのレースを見ているが・・・疲れていない？ 手を抜いてい

るのか？ リボーさんは」

「少ししただけでもうケロリとしていマス。なんででしょう？」

「本人曰く、心肺機能と回復力は自信があると言っていた。事実、この後に組まれた特番では精密検査をした医者曰く、ずば抜けている。無尽蔵のエンジンを持っていると言っても過言じゃないと言わしめていた」

見返せば見返すほどに完成されている強さを持ちながらそのまま強くなる。衰えを見せないのが恐ろしいとしか言えない。どんなバ群、密集した状況からもその柔軟さとステップで抜け出して最大速度を維持するギンシャリボーイ。加速力に秀で、大外に膨らもうとも、クラッシュ寸前の状況からも復帰して暴れたハリボテエレジーなどもそうだが、あの時代あたりのメンバーはとんでもない技、知能、ぶざけた身体能力を持つものが多い。

個性と能力の融合を持つ才能たち。私やエアグルーヴも皇帝、女帝と言われるがあの時代の強者たちと同じであった場合どうなったか。

「ここから勝ちを狙いに行くにはく……ペースを乱して足を落とすに行くとかになりますかね？」

「マルゼンスキーの言うことももつともだが、それも危うい。引退して尚非公式でも走り続けた彼女はいうなれば私たちの倍以上のキャリアと戦績をもつ怪物と言っ正しい。逆にそこを狙って足元をすくわれるだろう」

「じゃあよ、思いきりなんも考えずにぶつかりに行くのが一番じゃないか？ 下手なかく乱をもらうよりそっちがやりやすいだろ!!」

「ボクもそのほうがいいと思うな。無敗の王者とのレース。思いきり自分たちの得意なものをぶつけたほうがいい」

オペラオーとアマゾンの言葉に私も頷き、皆も戦意を強く瞳に宿す。駆け引きはやれば負ける。呼吸に関してはあちらが上。壁の高さを知っても尚燃えるのは私たちウマ娘の性……と同時にリギル。最強のチームの看板を背負う者としての自負だ。

「その通りだ。相手は無敗の巨匠。しかも引退して衰えを見せない怪物。いいか。これからの練習レース。全てにおいてリボーを意識して、彼女の影を踏み、超えることを意識して練習をしてほしい。後でレース映像はUSBに移して配る。彼女の走りを追うことは、世界のレースを狙う我々リギルの糧に必ずなる」

「期間は短い、その間にできる限り仕上げる。場所は東京レース場。芝2000メートルと決まった。勝ちに行くぞ。みんな」

私とエアグルーヴの櫓で皆気合が入る。うむ……誰も気おされていない。これはいいことだ。

「タイキ。アメリカの知り合いからできればいい。こちらに来る前の。出来る限り最近のリボーが参加した非公式レース映像がないか聞いてもらえないか?」

「了解、レース! あ、もう来て……!? オーウ……見つける間時間つぶしにこれやるって……」

「お? なんなんだ? ……ハア!? 伝説のあのエキシビジョンマッチの映像じゃねーか!!? もうプレミアもんだろこれ!!?」

タイキの知り合い……これまたリボーの指導した一人。プレゼン

トコロニーのくれた映像。キングジョージ大賞でかの女王陛下とイギリス競バ会で用意したエキシビジョンマッチ。そこに集まったメンバーはすでに引退したリボーたちの世代、その上の世代の世界最強格が一堂に集い行われた。伝説のレース。

日本でも放送されたこのレースはシンザンの走りに魅了された我々を更に奮起させ、同時に世界の怪物たちのえげつなさを思い知るものとなった。それが観客席。パトロール車。ドローンの視点で見れる映像データ・・・余計な編集も入っていないものもあるところを見ると、おそらく関係者しかもらえなかった映像データのはず。

「アー・・・『公式、非公式問わず師匠が唯一引き分けに追い込まれたレース。見るだけでも圧とかやばさがわかるだろうから見ておけ』・・・だって」

「・・・このレース。会場で見るとはいくらかかるとは・・・」

ブライアンが軽く現実逃避しそうなほどのメンバーのレースまで見て私達は練習に入る。レースがここまで待ち遠しいのは三冠ウマ娘の称号へ王手をかけた時だろうか。最高の気分でトレニーニングに。久しくチャレンジャーとしての立場で行けるのに燃えてしまう。

(最高のレースにするために『さあ行こう』。・・・んふふ。体調も戻ったのとテンションでいいダジャレもできた)

リギルのやる気が下がった。

「うーし、揃ったな。じゃ、改めてターボの事について調べてみる

か」

「はい」

「うーす」

「了解です。あ。緑茶でいいですか？」

「ありがとうございます。ジャスタウェイさん」

今日はチームの休日。ただ、リボーとリギル、ツインターボと俺たちスピカの模擬試合が東京レース場で行われる。その前に一度彼女。巨匠の弟子らしいと言われるターボの現状分かる部分を上げてみようかと相成った。

集まったのはスズカ、ゴルシ、ジャスタウェイ。マックイーンの名。ウオツカ、スカーレット。スペ。テイオーはプルトレーニングで負担をかけないようにしつつトレーニングの方に行くということ。俺たちが話しての結論を後で話すことに。

「まず、現状あちこち、おそらく学園ほぼすべてのウマ娘、チームと練習相手として移動してレースをしているターボ。全敗しているが、走りは逃げ一択のみ。スズカ、タイキなどの逃げのエキスパートがいるから対策、練習相手としての評判は良かったようだな」

「基本手抜きをしねーからなターボは。どこまでも全力全壊。気持ちいいぐらいだぜ」

「ゴルシちゃんは手を抜きすぎだけどね。後字が少し違うような？」

「そう。全く手抜きをせずに全チーム、馬娘たちと毎日走り倒している。なのに、故障、ボディバランスのアンバランス、足の違和感が関わったトレーナー全員から見て全く見えなかったそうだ」

そう。毎日の練習。ウマ娘の身体能力で毎日このペースは普通壊れる。オーバーワークもいい所だ。しかし、それがない。美柚樹シェフの料理での回復。気になってもらった飴をドーピング検査しても全く何も出ない。恐ろしいほどの回復力の増強と体力をつける過密トレーニング。その事故を起こさないようリボアのケアと観察眼あつてとんでもないほどの過密トレーニングと模擬、練習とはいえレース経験を積ませている。

それ以外にも、気になることがあつた。

「……これは……フォームのブレや崩れるのが極端に少ない？」

「気づいたかマックイーン。そうだ。ターボの全力時と、へとへとになっているときの走り。それでも腕の振り、体幹のブレ。走法の変化が少ない。大逃げをする以上、後半でスタミナが減ろうとも差されないために、フォームがずれて一気に減速することが無いように体力の有無関係なしに身体にしみこませている」

「文字通り無意識のうちでも、気づけば最適のフォームが出来るように短期間で徹底的に仕込まれ、かつそれゆえのいびつき、ツケが出てこないようにした……考えると、恐ろしいですね」

正直、中等部でこれほどに完成させたフォームをしみこませているのが恐ろしいの一言だ。これでいて骨や肉体に何らかの故障が起こるどころか血肉に変え、余計な脂肪を落としながらも肉の鎧をまとわせていっている。

「ほーん・・・？ スタミナも相当だな。こりや、2500メートルくらいなら難なく走り切るぞ？」

「ゴルシはそう思うか？」

「ああ。最近の走りとメニューの密度を見ればステイヤーもドン引きの心肺機能を持っているとゴルシちゃんは思うし、ターボは体が軽いだろう？ アタシとは逆。負担の軽さと加速の速さを生かせば中距離ならかなりやばいと思う」

「今はただだけど、疲労抜きをした後の変化が期待しちゃうわね。骨に関しても相当強そうだし、確かマックイーンちゃんのお医者様の健康診断結果もすごかったんだっけ？」

スタミナとパワーを用いた豪快な追い込みをできるゴルシからの意見。あと普段はふざけているが地頭の良さは間違いなく学園でもトップレベルだがスタミナの強化。これを使い逃げの戦法を維持できるようにしていることを気づいた。

「え。ええ。カノープスの皆さんも心配してメジロ家お抱えの医者に私の定期健診に付き合わせましたが、骨密度、強度がすごく、あと・・・血中酸素濃度も凄いみたいです。登山家のそれだって」

「そうなると大逃げの戦法は崩れることなく実行できますね。・・・それと、ターボちゃんの強みもありますし、強敵でしょう」

「ほう。その強みはなんだ？」

「コーナリングで外に膨らむことをせず最短を走れることと、減速が極端に少ないです」

スズカの発言に俺も頷く。そう。ターボのコーナーでの曲がり方は普段から逃げばかりして先頭を走っているせいなのか常に最短距離を自然と走るし、全力で走る中で体が覚えたか曲がりでの減速もない。それは手にしたスタミナと回復力を合わせれば大逃げの際に外に膨らまずに最短距離で突っ走る。

しかもスズカ、タイキよりも小柄ゆえに坂での足の負担も軽いからそれこそゴルシのように上り、下りどちらかで仕掛けてペースを乱すことも視野に入れられる。

「異次元の逃走者。マイルの女王。そこにターボが肩を並べる可能性は？」

「あります。個人的予想ですが・・・仕上がった際はすごく早いと思います」

「スズカちゃんにそういわせるほどかあ・・・楽しみだわ。ふふ・・・もしかしたらリギルから声がかかったりしてね」

「あり得るな！ なにせ下手すりゃスズカの再来みてえなもんだぜ？ これは一つゴルシちゃんも応援のために念を送る練習を」

「しなくていいですわ。というか貴女も走るかもでしょう？ 200メートル内でどれほどのものを見せるか・・・テイオーさんをライバルだと公言しているターボさんの万全の走り。楽しみですわ」

スズカ直々の大逃げの選手としての大成のお墨付きをもらうターボになお戦意を燃やすメンバーたち。全く頼もしく、元気な奴らだ。この話しをテイオーたちにも伝え、これからの練習のモチベーションアップに役立てたいところ。

後、できれば完成したターボの足はどんな感じか是非とも触れてみたい。後リボーも。

「よしターボちゃん。練習はいい感じに仕上がったし、へとへとになりながら毎日よくこなしたわ」

「おー！」

「なので・・・これから一週間練習禁止!! 疲労抜きと、もう一つの武器を磨くわよ!!」

「えー！ー！ー!!?」

賑やかな二人の会話を聞きながら私は私でのんびりとスープの仕込みを仕上げていく。いやー・・・沖縄、良い買い物でした。スピカ、リギルにマンゴーとパイン。東京だと万単位の高級品が4割安で買えたから送れたし、カノープスにもちゃんとお届け。

で、塩に關してもちようどいい。というか私の今仕上げているスープの素材に求めていたものだ。これと・・・あれを使えば、90%までは再現できる。

「超回復とスタミナで一見元気そうだけど・・・ほい。眼の下の疲労と筋肉痛から来るクマはかすかに見えるし、肌艶も前より少し悪い。チョーつと残った疲労が表に出ている。それを抜いて、心身リフレッシユさせなさい」

「走るのは？」

「駄目」

「スクワットとかミット打ち……」

「駄目」

「筋トレ……」

「駄目」

「でも、それだとターボ練習できないで死んじゃうぞー！」

いやー帰ってきたって実感がするわね。この騒ぎを聞くと。

「ん……よし。この塩と……これをこつそり……」

で、その間にスープに少し入れますは、干したフグ鯨のひれ。グルメカジノで見つけてどうにか景品としてゲット。再現できるようにしてよかった。疲労回復効果もあるし、基本スープに入れてもいいし。辛口の酒と合わせたひれ酒はもう珠玉の一品。

香りも大変いいし、スープも透明。よしよし……これはいける……

「じゃ、プールに通いなさい」

「プール？」

「そ。学園の、空いていないのなら近所の市営健康ランドでゆった

り湯につかってサウナを満喫してストレッチをしておくように。学園のプールでなら歩くのと、ビート版を使った泳ぐのを少しなら許可するわよ」

「んー……でもなー……」

「打倒スピカ、でしょ？ ほら、お土産もあげるから」

そういつて渡すのはここ最近世間をにぎわす覆面ウマ娘ダテ・ナオトのぬいぐるみとか、グッズ。レースの走りと勝利後のパフォーマンスの高さで非公式しか出ていないのに人気を出しているウマ娘だ。

正直、見目麗しいウマ娘のぬいぐるみだというのは、筋肉もりもりマッチョマンの宝庫、プロレスのイメージが出ちゃうのが面白い。実際トンボを切ったり、軽業を披露するからそういう人気も高いみたいだし。

「ほらほら。二人とも完成したわよー私特性スペシャルスープを食べなさい」

「待ってました♪ お……おお……？ 塩ラーメン……よりも透明……だけど……！」

「凄いいい香り……！ だけど、なんだろ？ すんごい多くの匂いがするね」

流星美食家のリボーと素直な感受性を持つターボちゃん。気づくか。このスープはいわゆるセンチリースープ。……の私流アレンジの未完成。私の再現できる食材とこの世界での食材で再現したものに、フグ鯨の干したひれと、仕入れた塩でさらに味を高め、疲労回復効果を高めた逸品。

透明度もまだまだだし、味も未完成・・・いや、あれは再現できてしまう小松シェフと節乃様がおかしいのだ・・・私なりに頑張った。うん。ともあれまあ、数十、百以上の食材を煮込み、うま味と味を引き立てつつ栄養バランスも整え尽くした一品。

「んー!! はあ・・・うんまい・・・凄い濃厚なのに、するりと余韻を残して消えていく。コンソメ、日本の豚汁どころじゃない程に多くの具材の味が出まくるのに、凄い・・・はあく♪」

「いくらでも飲めるぞこれ！ 美柚樹さん。おかわり！」

「はいはい。二人にあげるわよー」

「ありがと。美柚樹お姉さん。・・・？ む・・・疲労が抜けていく感じ。ほほう。これはいい感じ♪」

リボーはすぐ身体にいきわたる活力に回復効果に気づいたか。よしよし。おかわりをよそい、私も一つ・・・うん。前よりいい。塩を買いに行つて正解か。

「デザートにマンゴーもあるから、飲みすぎ注意よー」

「はーい。これ食べたなら、デザート食べて私も一度疲労抜きだなあ。ターボちゃん。明日サウナはいろつか」

「ん・・・つ、んぐ・・・ぷは。了解！ それとプールもだな！」

「私水着持っていないからパス」

ワイワイ話しながら夜は更けて、ターボちゃんが部屋に戻る時間を

オーバーしてリボーが頭を下げに向かったのが面白かったわ。詫びとしてニンジンジュースとお手製おかし、パインを渡したけど大丈夫かしらね。

さて・・・残った時間でどう動くかりボーと確認しないと。

疲労抜き

「なんでプールも泳ぐの強く駄目なんだー……」

「体に残っているかもしれない疲労抜きのためでしょー。一応、一部は許可ももらったし、遊ぶためのお小遣いも貰ったんだから焦らない焦らない」

トレセン学園のプールの端。歩いたり、泳ぎが苦手な子たちのための場所でビート版を抱えてぶかぶかと浮いているツインターボ。その隣で私、ネイチャさんが変に筋トレしたり暴走しないかターボを監視している感じ。明日はイクノちゃん。明後日はマチちゃん。その後は南坂トレーナーと。これを2巡してターボの監視をする。

「それにさ。ようやくあのキツいトレーニングを終えたのよ？今のうち休むほうがいいって」

「うーん……そうかもだけど、今もスピカの皆は鍛えていたり、リボさんは走っているんだろ？ 妥当スピカを目指すけど、大丈夫かなって」

「むしろそうするための今の時間よ。気がまぎれないのなら放課後に一緒にゲーセン行く？ リボさんのぬいぐるみ、またクレールンゲームにあるみたいよ？」

まあ、なんやかんや最近過密……いや、超過密スケジュールをこなしてけがもなく鍛えて脂肪もある程度削いだターボ。美柚樹さんとりボは今度は休憩で心身を休めつつ、心の刃を研いでいるのだろう。フラストレーション。今までは練習漬けでひたすら前だけを見るだけしかでき鳴ったが一転考えられる時間を増やしてレースへの気持ちを再度高めていく。

プールもふよふよのんびりしているだけで関節とかに余計な負担はかからず、けど肉体も部屋で休むよりは程よくほぐしつつ負荷が来るから筋肉を落とすすぎない。余分なストレスは食事と休養。そしてカノープスの皆で解消させていく方針。

「おー！ あ、じゃあみんなで行こう!? ちょうど福引の引換券もあるからさ」

「そうしょつかー。私、ちよつと泳いでくるからターボも泳ぐにしても軽めによー」

「わかった。んっー・・・」

でも、ちよつとだけ泳ぎたいのでターボは少しビート版を持たせて、私は反対の角で軽く50メートル泳ぐ。ウマ娘の身体能力。あとタイキから教えてもらったコツを使えばあつという間だ。

「ふは・・・」

もう少ししたらプールトレーニングの予約を入れたチームのためにどかないといけないし時間をチェックしておかないとなー。トレーナー、もう少し増やしてくれるっていうけど、どうだったか。ん・・・?」

「ターボだっけ。勝負投げちやったのかな。ずっと休んだりフラフラしているし」

「スピカに勝てるわけないからでしょ。日本総大将、孤高の天才、緋色の女王、常識破りの女傑、ターフの名優、黄金の浮沈艦、世界を取った覇者、更にはこの前アメリカで重賞とった異次元の逃走者。このメ

ンツになんて無理無理」

「だねー、リボーさんは？」

「いやーもう引退して五年。あのレースもあつたけどそれも前だしリギルには負けるでしょ。客寄せじゃないの？ でも、リギルのチームレースは楽しみだからアタシ見に行く」

「……こいつらは、会長も言っていたけどレースに絶対はないでしょう。その覇者。ジャスタウェイ先輩も化ける前までは2着、3着続きだったのに、そこから鍛えて、世界トップの座と評価をもぎ取ったのに。」

それに、少しでもしつかりと関わって、知ればわかる。あの時代の最強と無敗を取れるリボーさんの怪物ぶりが。それに、まだわからないけど、休みが終わった後のターボはきつと……はあ……気持ち、抑えよう。レースで見返せばいい。せつかくの疲労抜きなのにイライラして消耗するのが馬鹿らしいわ。

私を見てそそくさといったし、あほらし。はあ……トレーナーも少し食べていいって言ってくれたし、今日は少し食べちゃお。

「ターボー。行きましょ」

「もういいのか？ ネイチャ」

「いいのいいの。それに、ほらもう少しでチームのプールトレーニングの時間だし、早めに遊んでゆっくりしましょ？」

「うん。あ、そうだ。ダテ・ナオトのぬいぐるみも探したいけどいいかな？」

「いいわよー」

はあ。早いところ疲労抜きを終えたターボの走りを見てみたいなー。ウッドチップコースでするらしいけど。アタシも、ターボに負けないよう鍛えないと。弟子入り。頼もうかしら。

この後、ゲーセンでリボーさんのぬいぐるみを幾つかゲットして、ダテ・ナオトのぬいぐるみもゲット。こういうのが好きそうなのオツカに渡したら喜んでいた。憧れのリボーさんと、最近話題の覆面ウマ娘だもんね。しかも無敗でリザードンポーズするサービス満点だし。

非公式レースのみの参加だけどインタビューも日本オタクぶりが出て面白いのよね。

「ほっほっほ……」

一通り仕上げをして、後はクールダウンついでに身体の間隔チェックがてら学園の外をマラソン。江戸川沿いを走り、桜並木を眺める。もう桜は散って青々とした若葉が美しい。

いやーせっつかくだし年単位でここに過ごすかなんかしていつか花見したいわねーカーノープスの皆、スピカも、リギルもいい子ばかりだし。アメリカ以外では基本どこ行ってもイタリアでいきっている田舎娘扱いだったし。

川原の土手の公園で遊ぶ子供たちもみんな元気そうで……む？

ウマ娘・・・ほうほう・・・いいものを感じるけど・・・落ち込んで
いるわね？　なんだろう。

「チケット売り切れだった・・・せつかくお小遣いも貰ったのに」

「しよがないよ。日本有数の最強メンバーの模擬レースだも
の・・・ね」

ほうほう。あーそういえば、もう模擬レースの前売り券販売開始
だっけ。即完売して、予定よりも席数増やすことになったとみんな騒
いでいたっけねー

「でも、テイオーさんやリボーさんたちの走りを見られるかもつ
て・・・」

「ハアイ。お二人とも。どうしたの？」

「だ、誰です？」

「ああ。ごめんごめん。一応トレセン学園のトレーナー。驚かせ
ちゃってごめんね」

サングラスに帽子、サウナスーツで走っている大人が急に來たらそ
りや驚くわ。トレセンの職員カードと腕章を見せると落ち着いてく
れた。黒髪に白の一筋が入る子に、薄い茶の髪にダイヤモンドの白が
入る子。どっちも伸びそうねえ・・・こりや、掘り出し物か？

「トレセンの!?　へえー・・・お姉さんみたいなトレーナーもいるん
ですね」

「それは失礼しました」

「いいのいいの。どう見たって私不審者だし。今は雑用さんよ。で、まあウマ娘だから二人が落ち込んでるのが気になってさーどうしたの？」

「それが・・・」

二人の。キタサンブラックちゃんとサトノダイヤモンドちゃん曰く、キタちゃんやんはテイオーちゃんに、サトちゃんはマツクインちゃんにアコがれているらしく、模擬レースで二人そろって試合を楽しみにしていた。けど参加メンバーの人気と模擬レースゆえの安さのあまり前売り券は即売り切れ、二人ともお小遣いをもらって買いに行ったら既に完売。意気消沈していたと。

実際、将来レースで走りたいウマ娘たちならリギル、スピカのメンバーを見るのはかなりいいからね。ほんとあらゆる走りのスタイルが高水準で揃った怪物、精鋭ぞろいだし。

「せっかくの休みで、サトちゃんと一緒に応援できるかもって思ったんだけど・・・」

「ふーむ・・・じゃ、そうね。ちよつとこれ飲んで待っていなさい」

「ふえっ？」

私の気まぐれだけど、これくらいいいでしょ。ということ近くで近くの自販機でジュースを二つ買って渡し、学園に戻る。あれは・・・あったあつた。ものを用意してすぐ戻ってくる。

「お待ちせ。ハイこれあげる」

「これ・・・チケット!? しかも最前列と、サービス付きの!!」

「い、いいんですか?」

「いいのいいの。二人とも、いずれトレセン学園に行くつもり?」

関係者に渡されていた前売り券。まあ、知り合いとか招きたい人にどうぞって感じで日本の知り合いは少ない私にも配られていたのでそれをプレゼント。二人とも目を輝かせつつも驚いている。ま、いわば先行投資だしね。気にしないでほしいわ。

「もちろん! テイオーさんたちに追いついて、立派なウマ娘になるつもり!!」

「わ、私も! マックイーンさんのような優雅な淑女として、強い選手として」

「なら、これで学ぶといいわ。学園により行きたいと、生のレースのすごさを感じてほしいしね。・・・あ、やべ」

タイマーで軽く走る時間を決めていたがもうそろそろ戻る時間。戻って柔軟と、ドリンク私も飲まないとなー。腰をよいしょとあげてまた戻る用意を。

「もういい時間だし、私は帰るわーその前売り券、ちゃんとレース当日まで持っておくのよ。あ。それと私の事、怪しいのなら学園に連絡したら確認とれるから」

「ありがとーお姉さん! 学園に来たらよろしくね!」

「ありがとうございます! あの、お名前は?」

ステップを整えて戻ろうとしていたらサトちゃんが私の名前を聞こうとする。あーそういえば名前言っていなかったわね。

「私はリボー。レース出るから、よろしくね。チャオー♪」

サングラスと帽子を外し、素顔を見せてからまたクールダウンのために学園に戻っていく。二人とも背丈は伸びそうだし、いやーどんな子になるかな。スピカに来そうだし、これはテイオーちゃんたちうかうかしてられないだろうなー

「さーて・・・この食材を使いましょう。ん・・・」

二人とも疲労抜きと微調整にうつったので、しばらくは食材も疲労回復をメイン。滋養効果の強いものが欲しい。ということでした。このゴールドにんじん。そして、疲れるけどこの・・・メテオガリツクを用意することに。

隕石の降った場所に生えて、周辺の土地を枯らすほどに強烈に栄養を集めたそれは、あの色々ぶつ飛んだ食材も多い中で国際的法律で使用する制限を求められるほど。まあ、私も一気に使うつもりはないけど。

「トリコさん達ですらびっくりするほどの滋養強壮効果だし・・・一粒の4分の1。これを潰した専用の醤油ダレと・・・残りはスライスしたものをコンソメスープ用に使いましょう」

一粒そのまま食べただけでムキムキになるあれで軽く流しても骨がどれほど強化されるか不明だからねーうちの実家の近所のウマ娘

たちにも食してもらったけど、あれだけの運動と燃費の子たちですらこれくらい薄めて使わないと適した回復効果にはならない。何だったら変に眠れないせいで精神疲労が起こるのでタブー

「焼肉と、コンソメスープ。後は・・・あーパリポリキャベツあったし、その千切りとクルトン混ぜてのシーザーサラダにしましょう。カノープスの皆には・・・後でおやつでも持っていけばいいか」

ほかの子たちにも配りたいけど、チームの食トレの都合もあるだろうし、カノープスの皆には軽めに美味しいおやつ。そこに滋養効果を少し入れたもので日々快調に過ごしてもらえれば幸い。

模擬レースとはいえ、日本、世界も注目しているであろうものなのは間違いない。それが開かれるまであと2週間を切った。私も見る限り問題ない走りタイムを見せているけど、どうなるかしら。

「ただいまー。美柚樹お姉さ・・・おお・・・いい香り♡」

「お邪魔しまーす美柚樹さん。ししよー！ あはは。これは今日もおいしそうだぞー！」

「おかえりなさい。二人ともまずは手を洗ってからお風呂入ってきなさいな」

さて、この後疲労を抜いたターボが夜の自主練をしないように見張っておかないとねー

レース前

「ねえ。ゴルシちゃん」

「なんだ？ ジャスタウェイ」

パチリ、パチリ。駒を打つ音、ちやりちやりと小銭とは違う駒を手中で転がす感触が心地いい。

「今回のレース。ターボちゃんどれくらいに仕上がると思うかしら」

「そうだなあ〜」

私とゴルシちゃんでのトレーニング。一見ふざけている。さぼりのように見えるけど、実はそうじゃない。ゴルシちゃんは頭がいいし、その上でふざける程度を見極める。勝負勘も鋭い。

それと自分の肉体の限界、使いどころをわきまえているからこそ勝つときは圧勝。その才能を生かしてまるでエンターテイナー。一部は手品を見ていると思わせるような。ワープしたとしか思えない走りで年齢、性別を問わず広い人気を持つ。実はスピカでも話題に事欠かないトリックスター。その勝負勘。マルチタスクの鍛錬とイメトレをするのがこの将棋だ。

「少なくとも、タイキ、スズカ、マルゼン、タマモ、オグリレベルは来ている」

「その心は？」

互いの先行、逃げ、差し、追い込み。それぞれをイメージした戦術

を将棋に投影して差しつつ、頭の中でそのイメージを何度も繰り返し。ゴルシちゃんは天性のセンスと知能で。私はお父さんの仕事柄作画のチェックや雑用の手伝いもあって差異を見つけたりイメージする力は養われた。

だから今は多分ゴルシちゃんはターボちゃんの大逃げをイメージして、私はゴルシちゃんと私で追い込みを戦術に変えて駒を打つ。こういうのは意外と有効だし、走る最中も戦術の組み換えと切り替えに便利。

将棋とレースの落とし込み。慣れると楽しいもの。

「プールトレーニングの際に身体を見たが、仕上がり具合とバランスの良さ、バネが別もんになっていたし、あの徹底した疲労抜きをしながら精神面も良し。ちよつと気味が悪いくらいにいい仕上がりを作っていた」

「私たちがミット打ちとか教えたし、スタミナも二重、三重底に鍛えていたのは感じていたしね。じゃー・・・スピカの中でそれに対処できそうなのは？」

「アタシ、ジャスタ、スズカ。・・・ギリギリマックイーン、あとスペ」

全く、攻め込む布陣を作る間でも攻め込めば駒損をする守りを見せる。私の方もちゃんと手を打っているのに直感と基礎があるから攻め込めないんだよなあ・・・持ち駒で守り固めるか。

「テイオーちゃんはレースに真摯だけど、それ以上にルドルフとりボーさんのレースに釘付け、ウオツカちゃん、スカーレットちゃんは天才肌だけど、勝気な部分が過ぎてターボちゃんの逃げに巻き込まれ

て潰れかねない。ついでに言えばヘリポスさんとリボーさんの二人の前で下手かきたくないと緊張もありと」

「スペは基本油断とかする余裕はないだろうし、真面目だ。そこは問題ない。マックイーンはスタミナもある。万が一スズカとターボの大逃げに面食らっても立て直せるだろ。スズカは基本大逃げだし回りは関係ないか」

「それでジャスタは世界の圧を感じているのとリボーさんを知っているから油断しない」

「ゴルシちゃんは珍しく興味だしているし、遊び相手がいる分モチベは良しと」

ぐ・・・痛いところを取られた・・・5手後で起点にされるか？
こつちもと金と桂馬で小隊は用意しているしそれで攻めあがる用意を・・・

「そうなつてくると、私とゴルシちゃんふたりでペースメーカーになつて後半攻めるほうがいいかもね」

「だなー世界を経験して一皮むけたスズカ、そして周りを巻き込んで破滅的大逃げをするターボ。あんな個性と天才の塊二人が大逃げかますんだ。おもしろーレースだが、正直言つて想定している二回は上と考えていいだろ」

「いずれ海外に行けばチーム戦の機会も増えるでしょうし、そういう意味ではリボーさんとターボちゃんに感謝しかないわね」

「その分勝つたらシェフからケーキ貰いに行こうぜ？ 副賞つてこ
とでさ」

あ・・・本命の攻めに刺された・・・くっそ・・・こうなるともうじり貧だわ。

一つ目の攻めの起点は私たちと世間の評価。二つ目のこの攻めがターボちゃんの大逃げって再現でしようけども・・・

「そうね。模擬レースの打ち上げにっことで頼めないか聞きましょうか。材料費は私達で出して」

「お。珍しい。いつもなら迷惑かけるなーっていかと」

「みんなで料理は楽しいし、打ち上げでしょ？ スピカ、リギル、カノープス、そしてシェフにリボーさん。ヘリポスさん。楽しいじゃないですか」

二人でのんびり話している間もぱちぱちと駒を打ち合い、勝負も大詰め。とはいえ、私負けているんだけどね。トホホ・・・

「そうと決まれば、一つ皆のケツ叩きながら遊びに行きますかねー」

「練習よ。ゴルシちゃん・・・参りました」

「うーし。今度は囲碁でもしようぜ」

「その前に休憩終わったし、走りに行くわよー」

休憩の合間、というよりはのびて練習時間まで食い込んだ一局も私の負けで終わり、将棋盤と駒を片付けて練習再開。

・・・飛車まで使った超弩級の田楽刺しでゴルシちゃんの勝

利。それくらい、凄い逃げを見せてくるってことかしらね・・・
いたい、ゴルシちゃんのイメージするターボちゃんの仕上がり、ゾクゾクするほどね。

「マチちゃんは泳がないのか？」

「私もちよつとオーバーワークで・・・あと、授業の後で少し眠気が・・・」

「ちゃんと寝ていないと聞いたけど、大丈夫かー？ 休んだほうが」

「ターボちゃんのレースがもうすぐで緊張していたかも。あはは」

「んふふ。ターボは絶対スピカに勝つからな！ マチちゃんも応援に来てほしいぞー！」

プールでの休憩と疲労抜きの日々も今日で一応ひと段落。明日はようやくレースに向けての練習に行けるぞ！・・・といっても、結局それも5日。疲労を抜く休憩もまたあるから結局3日だけだ。

美柚樹さんの料理トリポーターのマッサージもあつて疲労はないのに、もどかしい。

「はあー・・・ちよつと潜るぞ」

「気を付けてね？」

一度雑音の中じゃなくてプールの中で考えたくて、角に移動してから水の中にターボの身体を沈める。ぶくぶくー……………

(スピカの試合は、ターボのだけじゃない。支えてくれたカノープスの皆と、師匠たちにどれほど強くなったかを示すものでもある。カノープスのリーダーはネイチャだけど、エースはターボ。だから……………思いきり戦う。勝ってみんなの助けてくれたことを証明して、最高のバトンパスを師匠にしたいんだぞ)

プールの中から見える光の揺らめきと青のきれいさ。あちこちで泳いでいるウマ娘の皆の泳ぐ際に水をかいて出てくる泡。全部が綺麗だ。ネイチャたちは勝てないことを、キラキラしたものに縁がないという時がある。けど、そんなことはない。

テイオーも、スピカの皆も天才で、努力もする。みんなすごい。けど、だからって届かないことはない。届かせていけるつてのを見せたいし、ターボもサイキョーのウマ娘を目指すために頑張りたい。ずっとプールの水で頭を冷やしつづつと考えていた。

(見てろよスピカ、テイオー、リギル。ターボたちも最強のチームだって、走って見せてやるんだからなー……………!)

水の中から見える光と水と泡の光景に見蕩れつつも気合を入れ直していると、何かマチちゃんが心配そうにして飛び込もうとしていた。

あ、危ないよ？ 待て待てと手を振ってゆつくりと上がっていく。また鼻血出したら痛いもんね。

「ぶは……………どうしたんだぞ？ マチちゃん」

「え？ あ、あの・・・大丈夫なのターボちゃん??」

「え〜？ ちょっと潜っていたただけけど」

「ちよつとじゃないよ?! 8分はずつとぼーつとしていたから不安で不安で・・・ターボちゃん。髪の色もあって顔色も水の中じゃわかりづらいし」

そんなに潜っていたのか・・・つつい水の中がぼんやりできるからつい・・・でも・・・かなり肺活量も上がった。これなら・・・ずつと走り続けられる???

「でも、凄いよターボちゃん！ 素潜りの時間で世界を狙えるかも！」

「ターボはレースで世界を狙うぞ？ マチちゃんも、カノープスの皆と一緒にだ！」

「ありがとう。でも、その前に日本だね？」

「おー！ そうだ！ 美柚樹さんが今晚はカノープス皆ご飯食べに来なさいって。マチちゃんとイクノは明日レースでしょ？ 元気づけなさいってからあげくれるようだよ？」

この後、みんなでから揚げパーティーをしたけど。今までに食べたことないくらい美味しかったぞ。

「ふー・・・よし。気持ちタイムも文句なし。ヘリポス、美柚樹お姉さん。タイムとフォームはどう?」

「タイムは1000メートル58.2。最後の上がり3ハロンは32,2。それを維持できているし、良い感じですよ」

「フォームもぶれ無し。日本の芝の感触もつかんだのもいいみたいだし、靴も問題なさそう?」

体調もよし。フォームもぶれ無し。2000メートルを走つてみたけど大丈夫。骨の具合も筋肉も関節もよし。うん。これなら最高の状態でリギルと戦えるわね。少し抑えてのこれなら。

さてさて・・・後はまあ、ターボちゃんだけ。問題は無いでしょ。朝に見ただけ、あれなら距離を覚えれば私が暴れたレースでもいい感じに行けそうだし。

「それじゃ。今日はこれで。マッサージ、柔軟重点だけが防止と、芝で怪我しないようにね。日本の芝はほんとパワーの反動がそのまま来るから私には合っているかもだけど」

「あっちもこの前イクノちゃんとかちちゃんが勝利してノリに乗っているしね。ただ、疲れもあるから多分今はターボちゃんの手伝いメインかも」

「お二人ともナイスガッツ。無事1位を手にかけてうれしかったですよ」

なんやかんやチームを管理できるほどのトレーナーと契約できる地力。あと、ブロンズコレクターと言われているみたいだけど距離も相手も違う中であれだけ戦える。レースをこなせるのはほんと一押

しさえあれば化けるのよね。

前に世界を沸かせたキンイロリョテイ、ジャスタウエイちゃんみたいに。スズカちゃんはずでに覚醒していた感じだけど、それをより強固にして、格を上げた感じ。

三人で話しながら反対側のコースで練習していたターボちゃんたちの方に移動。疲労回復用のスポドリ、飴がおいしいわ。

「ヤッホー。トレーナーさん。ネイチヤちゃん。どう？ タイムは……へえ？」

「うわぁ……中等部でこれ？」

「……疲労もさほどなし、歩きに関しても異常はナシ。フォーム……レース。これは分かりませんよ」

固まる南坂トレーナーさんの後ろから2000メートルを走っているタイムを見れば思わずニヤリと笑みがこぼれる。これはいい感じ。最高の仕上がりを見せてくれたようじゃないの。

「リボーさーん！ 美柚樹シェフ！ ヘリポスさーん。へへへ！

ターボ、これならいけそうだぞ！」

「いやー……これにはネイチヤさん驚いたわ。3日後のレースが楽しみね。日本どころか世界がわきかねないわ」

「お疲れ二人とも。いやーこれは私も負けられないし、頑張るわよ」

後はこのコンディションを維持。そうすればまたちよつと世間をにぎやかすには十分だわ。待ち遠しいわねーレースが。こんな気持ち

ちをまた味合わせてくれる日本の皆に、支えてくれる皆に感謝ばかりだわ。後で神社にお礼を言いに行くべきかしらね。縁結びの神様に。

作法。美柚樹お姉さんから聞いておくか。

世界への入門

『本日の東京レース場は晴天、バ場の状況は良。観客も天もこのレースを期待しているような熱気に雲一つない青空です』

「沸いているねーG Iレベルじゃないの？」

「タイムマシン使わないと見れないレースが行われるんだもの。しかもそれが皇帝率いる最強と前の時代の伝説。凄いわよねー」

いよいよ来た模擬レースの日。お客さんはG Iレース：いや、それ以上。この東京レース場が満員御礼。どころか普段は使わない場所さえも使って集まった人数約19万人の人が集まっている。普段は開放しない場所も客席として使うあたり、ほんと凄い光景。

「凄い・・・声で地面と空気が揺れているみたい」

「おおお・・・こ、こんなに人が集まるんですね・・・初めて見ました」

「レースだけなのにこれだけ人が・・・ほんと、伝説と当代最強様様よねー」

その声だけで空気がびりびりと震え、熱気に知らずと体が熱くなる。世界のレースでもこれほどの熱狂はちよつとなかった。ゴルシちゃんと一緒に行った凱旋門賞でようやくか。その理由も納得だけど。

「わはは！　すごい人数だ！　ターボの事応援してもらえよう頑張るぞー！」

「どつちかてーと、アタシらは前座で、リボーさんや会長じゃないか？ ターボ」

「ですわねえ。わたくしもテレビでしか見たことがなかった伝説のレースが行われるんですもの。皆様、来たいはずですよ」

『今日行われるのは模擬レース。しかしそれだというのにこの満員！ 三冠レースでもこれほどの人数の集まりようは数えるほど。それもそのはず！ 今日のレースは特別！ 三冠ウマ娘3名在籍!! 間違いなく日本最強と言って差し支えないリギル。遠征中のミスターシービーを除いてオールキャスト、そして新進気鋭！ リギルに追いつくポテンシャルを持つスピカ！ どちらも日本最高峰!! 常に彼女たちが我々を、日本中を沸かせてくれます!!』

実況の方も自ら売り込んでタダでもいいからこのレースの実況、解説を、生で見させてくれと頼みこんで参加（学園の方からギャラを追加したとか）テレビ局も海外の記者も来ている当たりかなりの気合の入れよう。

『そして、その2チームとの練習相手もまた豪華かつ個性的。私、このレースの実況したいために休日返上で来ました。タケさんもその口で?』

『ウマ娘のレースに関わる仕事をしていてこのレースに関わりたくないわけなんですからね。有休返上ですよ。一人はレースを盛り上げ、大逃げと元気でみんなを盛り上げる子ですし、もう一人はありえなかった一戦。しかもあの時代の頂点の一人ですしね』

それもそうだろう。ターボちゃんはなんやかんや大逃げ、スズカのように華やかさはないがその愚直さ、全力の姿勢と明るさはウララちゃんのような清涼感と熱さをくれる。まだ公式のレースは一年を

立って勝っているのは少ないが、その実ファンは多いし、見ていて面白い。スズカ、タイキレベルの覚醒をすればと期待するファンもいるし、ウマツターでの練習の事を聞いてスピカにどれほど戦えるかを期待するファンもいる。ターボの声援も多い。

そして、そんな若き新鋭たち、間違いなく次代を担うメンバーの対決もかすみかねないのがもう一つのマッチング。私にドバイの挑戦権を軽くくれるほどの実績を持ち、世界が彼女に魅了された。天衣無縫。電光石火。そして今も輝きは失われない。綺羅星達が集う伝説時代の中の伝説。

『そう。ここに来た皆様も知つての通りの今日のレースはまさしくドリームマッチ！ 大逃げを得意とするツインターボのスピカ打倒宣言！ 間違いなく勢いのある実力派チーム相手に全く引かない大胆不敵の宣言！ これだけでも大変面白いレースになります!!』

『普通の逃げではなく大逃げをする子が二人。そして実力派の揃うスピカ。そして、その後に行われるもう一戦はまさしく国際新旧最強対決と言って過言ではないでしょう。リボー選手とリギル。少し前はあり得ないと思えた勝負の実現に私もワクワクしています』

彼女たちの時代で世界中のレース場でのレコードが最低でも1年で30以上変わった年さえもあるというふざけた時代の中を駆け抜けた王者が日本での模擬とはいえ、勝負服ではないとはいえレースをしてくれる。子供たちが憧れた、大人たちを魅了させたイタリアの美しき名匠が現日本最強たちと当たるのだから。

リボーさんの名前が出ただけでまだ会場に顔さえ見せていないのに会場は割れんばかりの歓声に包まれ、また温度が上がった気がする。

「やっぱりリボーさんとリギルの方に皆夢中だね」

「しょうがないさ。俺がまだ学生の頃に無敗伝説を作りあげ、その美しさとマジックのような走りを見せたんだ。テイオーたちがようやく小学生になるかどうかの時に彼女のレースを、若い俺らがあの走りを見て魅了されるのもしょうがねえよ」

「おいおいトレーナーまさか、リボーさんにお熱か〜んん〜?」

「いやいや・・・俺らトレーナーからすればあれほどの女僕には早々会えないからな」

「しょうがないわよゴルシちゃん。私もキングジョージでのあの出来事は痺れちゃったし」

「リボーさんはすごい・・・けど！ ターボたちだつていずれ越えていくんだ！ スピカみんな、テイオー！ 今日勝ってやるからな！！」

「ふふ。ターボちゃんの走りも強いわ。けど、先頭は譲らないわよ？」

「私も負けませんよターボちゃん！ でも、よろしくね」

「ふふ。無敵のテイオー様だもん。負けるつもりはないよ。ターボ」

控室にこっそり移動しながら握手やハイタッチをしながら移動していく私達。その中でひらひらと手を振ってくるのはリボーさん。

「おはようスピカの皆。ターボちゃん。一応レース前だけど、よけ

ればどうぞ」

人数分の冷えたドリンクの入ったクーラーボックスをトレーナーに渡してからターボにちよいちよいと手招きする。

「あのね。……………」

「ふんふん……………!……………」

こっそり耳打ちであれこれ話すりボーさんとターボ。何やら子供じみた。本当にウマ娘の中でも整った顔で可愛く笑うりボーさんと、その話を聞くうちにどんどん表情が明るくなるターボちゃん。うーん。何を話しているんだろう？

「じゃ、みんなのレース楽しみにしているわ。みんな頑張つてねー」

その後はカラカラ笑いながら控室に戻っていくりボーさん。ほんとは自由だなあ。ゴルシちゃんの暴走とは別ベクトルで。

アップも終わり、お客さんへの紹介も終わってゲートに入るだけ。今回は模擬なのでゼッケンの番号がそのままゲート枠になる。ゴルシちゃんは「びったしの方がいいや」と言つてゲート前で新喜劇やバックで入ろうとすることもなくすんなり入る。

『ゲートイン完了。出走の準備が整いました』

- 1番1枠 サイレンススズカ
- 2番2枠 ウオツカ
- 3番3枠 ゴールドシツプ
- 4番4枠 トウカイテイオー
- 5番5枠 ダイワスカーレット
- 6番6枠 ツインターボ
- 7番7枠 ジャスタウェイ
- 8番8枠 スペシャルウィーク
- 9番9枠 メジロマツクイーン

ま、悪くないでしょ。ただまあ、レースに気合が入りすぎてかかり気味のウオツカちゃんとスカーレットちゃん。この二人が心配かなあー

一呼吸入れて気持ちを切り替えたしばらく後でゲートがガシャンと開いて一斉に一歩を踏み出す。・・・ゴルシちゃん以外。

「よっしやあああああー！！！」

「っ!?!」

『スタートしました。各ウマ娘、まずまずのスタート。帰国一番の

走りですがサイレンススズカはどうか？絶好のスタート。ハナを切ります。おっと、この逃亡劇に早くも並びかけるはツインターボ。今日のエンジンの調子はどうか？大きく大きく後続を離して二人並んで逃げていきます』

『ツインターボの大逃げはよく見られる光景ですが、サイレンススズカに負けないほどの速度。これには皆驚きも大きいようです』

まず思いきり前に出たのはスズカとターボちゃん。スズカの速度、ペースは世界から見てもすさまじいもので、覚醒と成長をした今ではアメリカでも連日ニュースになっていた。その美貌と性格も相まってトップアイドルもかくやだったけど。そこについていくターボちゃんにみんな驚く。

こんなペース。中等部で基本レースでは大逃げした後逆噴射して大敗。そのターボちゃんがスズカに追いつくほどのスタートダッシュを切って並走。みんなの表情がこわばっているのがわかる。

(うーん・・・みんなの空気にあてられてしまいそうだし、追い込み気味の先行くらいでいいか)

スズカに対抗するために皆今日はいつもよりハイペースで仕掛けていっているけど、これはここから更に焦りが出るかも。差しのための体力は欲しいし、ウオツカちゃんより少し後ろの位置へ。

「ちっ・・・！どこで仕掛けるか・・・」

「す、スズカさんと同じ逃げ・・・！」

『スペシャルウィーク、ああいたいた。丁度ダイワスカーレット、ウオツカ、メジロマツクインが追いかけている集団の中央につけてい

ます。既にスズカとターボだけが1000メートルに差し掛かろうとしています』

『その後ろにはジャスタウェイとゴールドシップがうかがう。大変縦長に伸びていますね。後ろの二人は鬼の末脚、スタミナと経験があるゆえの判断に思えます』

テイオーちゃん、スペちゃん、スカーレットちゃん、ウオツカちゃん、マツクインちゃんの順番で固まり、その後ろに私とゴルシちゃん。はるか前を走っているターボちゃんとスズカ。この二人に引つ張られて2000メートル走だというのに1400、1600を走っていると思いきやペースだ。

(でも、流されちゃ駄目……今回はスズカもターボちゃんとの走りです。少し意識しているし……焦れば負け。仕掛けるなら……400……いや、500メートルね)

そうこう走っているうちにもう残り1000メートル。

『1000メートルを通過しました。タイムは……な、なんと57秒ジャスト!!? 早い、早すぎますサイレンススズカにインターターボ!!』

『以前のタイムを大幅に短く、かつぶれも感じません。流石大逃げの天才。そこに食らいつくインターターボも負けていません。これはこのまま逃げ切る可能性もあり得るでしょう』

「「「!!!?」」」

57秒……! この速さに誰もが驚きを見せる。当然だ。スズカちゃんは以前のベストタイムを1秒近く縮めて、ばてる様子もまるで

見せない。そして、そこに食らいつき続けるターボちゃん。

「この・・・!!」

「負けるか・・・!!」

「しようがないですわ・・・」

『非常にハイペース。後続集団はついてこられるのか？ 2コーナリーのゆるやかな上り坂。トウカイテイオーかかり気味か？ スペシャルウィークもペースが上がる。その中でゴールドシップ、悠然と後方の位置にジャスタウェイと共にこの位置につけています』

『長距離もいける二人ですし、何せワープ、周りの時間が止まったと言わしめるほどの加速と追い上げを見せますからね。タイミングを計っているのでしょうか』

タイムを聞いて焦ったウオッカちゃんとスカーレットちゃん、マツクインちゃんも仕掛けていく。けど、1000メートルの距離からやるのは三人とも、スタミナでごり押しできるマツクインちゃんでも少し厳しいだろう。

(スカーレットちゃんは早く仕掛けつつ後続を潰して二人の間に割り込もうとしているのだろうけど・・・焦りが見え見え・・・フォーム少しずれているわね)

『下っていった後続が続々とペースが上がっていく。二人旅の道中は残り800。逃げ切れるかサイレンススズカ？ 突き放せるかツイーターボ？』

「お先に行くぜー」

残り800メートルを切ってゴルシちゃんが徐々に加速して私を追い抜いて仕掛けに行く。ゴルシちゃんのスタミナなら問題はない。

残り・・・600・・・テイオーちゃんも仕掛けに行つたか。私も・・・あと・・・2，1・・・今！

『ゴールドシップ！バ群を大外からかわしつつロングスパート！そこにジャスタウェイも仕掛けていく！後方から一気にゴールドシップに並びかけつつ先頭のサイレンススズカとツインターボを掴みにかかると！』

『黄金の浮沈艦と覇者の追い込みが始まりましたね。これで先に仕掛けていたメンバーは後ろからもせつつかれる形になりますし、追いつくのは誰かわからなくなりました』

「ぐう・・・ううおおお!!」

レースももう残り600メートル・・・ここまで全力で走つても前よりもずつと苦しくない、足が重くない!! ターボはまだまだいける!!
けど

「はっはっは・・・!」

「スズカ先輩・・・早すぎるぞ!!」

「そつちこそ・・・!!」

『600メートルを切つてなお二人の熾烈な争いを続ける！ サイレンススズカとツインターボ！ 異次元へとも逃げられる足を持つてもこのエンジン全開のツインターボを振り切れない！ 互いに譲らないデッドヒートをレース開始時から繰り広げています！』

ずっと隣にいるスズカ先輩が離れない。むしろターボが遅れそうなのを気合で必死に前にくらいついて、追い越そうとしてもできない。もどかしいレースをしていた。

そうこうしていたら後ろから迫る影を感じる。

「やるねターボ……！ でも、ボクだつて負けないよ……！」

「ちよつと本気を出してもこれとは、やっぱすげえなお前」

「ここから……出し切る……!!」

『ゴールドシップとトウカイテイオー、ジャスタウェイが必死に必死に食らいつこうとする！ 3バ身までサイレンススズカとツインターボへ急接近！』

『先に仕掛けたメンバーは後ろからの追い上げでペースが崩されて足が残っていないようですね』

声でわかる。テイオー、ゴルシ、ジャスタだ。まだまだ差はあるはずなのに、その足の速さと音が聞こえてくる。ずんずんとここに迫る津波……まだ、まだだ……まだ出せるんだ!!

残り400メートル

「負けない・・・わ!!」

「ぐ・・・ぬおおおお!!」

『ここでスズカが突き放す！ いよいよ異次元への突入開始か!!?』

ここにきてさらに加速をするスズカ先輩。異次元の逃走者。あれだけの大逃げをしてもさらに差しで差を広げて走る天才。ずんずん差を離されていく。同時に、後ろから三名が・・・スぺも追いついてきそう。でも、ターボもまだいける。全力を出せる。負けてない。もっと走れる!! まだ早くできる!!

「あああああああ・・・!!」

「マジか!?!」

「うそっ・・・!!? まだよ!」

「ええっ!?! こ、ここぞ!?!」

『突き放したスズカを逃がさないとターボもエンジンをふかして追走だ! 伸びる伸びる! もう一度並んでの叩き合いだ! 二つどころか三つ目のアフターバーナーでも隠していたかつインターボお!!』

『サイレンススズカ以外にも逃げて差すをできる選手がいるとは・・・!』

苦しくて顔を上げそうなのを抑えて姿勢を低くしてがむしやらに前に走る。もう少しで、もう少しでゴール、スズカ先輩もテイオーも、スピカの皆とのバトルに勝てるかもだ。

打倒スピカを応援してくれたカノープスの皆と、師匠たち。みんなとの成果を出し切るんだぞターボ！ 飛ぶような走り。綺麗な走りじゃなくていい。ただただ、このかつこいいチームに勝ちたい！ 勝ちたい勝ちたい勝ちたい……!!!

スズカ先輩にも追いついた。でも、まだ追い越せない。後ろからどんどん迫ってくる。譲らない。勝ちたい、負けたくない……最後の、どこにあるかわからない元気も体力も全部ぶつけ切る。ぐんぐんと足を進めて、眼と鼻の先にゴールが見えた。

「ターボが……勝つんだ……ッ!!」

「まだ……まだあ!!」

「ちえっ……今日の主役は譲るぜー」

「ぐう……ここまで……ね……」

「……!!」

『完全に直線の一騎打ち！異次元の逃げだサイレンススズカ！ターボエンジン全開だツインターボ！ 逃げウマ娘二人の一騎打ち!! 行けスズカ!!負けるなターボ!! どっちだどっちだどっちだ!!? 内か外か内か外か内か外かあああああ!!?』

後ろの三人も底力を振り絞っていく。けど、それでもターボとスズカ先輩には追い付けなくて……

『今同時にゴオーール!!! サイレンススズカか、ツインターボか!!? おっと!!? 写真判定となるようです!!』

「ゼハ……ゼヒユ……かふつ……こほお……げぼ……」

「はっ……は……あ……はあ……はあ……」

会場が壊れそうなほどの歓声を上げてターボたちを応援している。スズカ先輩とはどっちが早いか……掲示板に出るのは……

『同着！ 同着となります！ かつてのスペシャルウィークとエルコンドルパサーの一騎打ちと同じ幕引き!!』

「同着……でも、1位……だ……テイオーたちに勝ったんだ……！ ど、どーだ！ ターボの実力……!!」

フラフラの身体を起こし、ターボが両手を上げて応援に来てくれていたカノープスの皆と会場に声を出せば大歓声が会場を包んでくれる。えへへ……やつたぞ……！

『恐ろしいことになりました!! 世界でも最速の逃走者。まさしくほかのウマ娘からも異次元の領域へと足を踏み込んだと言われるサイレンススズカ。彼女の走る世界へ今、新たに足を踏み入れるウマ娘が一人現れました!! その名はツインターボ!! まさしくターボエンジン全開で更なるスピードの世界に殴りこんできたあぁっ!!』

『逃げの完成形を手にしたスズカとツインターボ。今後の大逃げはこの二人になりそうですね。そしてほぼほぼツインターボの打倒スピカ達成。トレセン学園最強チームにカノープスも名乗りを上げた形ですか』

「はあ……は……強かったわ……ツインターボ……また、よければ勝負しましょう」

「わっ・・・!? お、おう！ スズカ先輩もありがとうだぞ!!」

「ちえーボクのライバルになっちゃったか・・・今度は負けないからね。ツインターボ」

「にひひ。今度も負けないからなテイオー!!」

また出てくる歓声にふらついてしまうのをスズカ先輩と、テイオーに支えられてどうにか立つ。も、もう本当に足腰がぐがく手立てそうにないぞ・・・

「うーし！ おもしれーやつがライバルになったついでに、休みながら戻ろうぜー!! そらくぞ!!」

「うわわわわっ!?お、た、高いぞゴルシ！ 揺れる！ 揺れるう!!?」

「あっそーれ！ ほれほれーみんなもけえるぞ！ へばってる場合じゃねえー!」

いつの間にやら背後に回っていたゴルシに肩車されながらレース場へと出ていくよう動くゴルシ。おっおお・・・高い、揺れる！ 怖い！

「ああー・・・ゴルシちゃん・・・はあ・・・ま、いいか。ターボちゃん。手を振って帰りましょ。みんながコールを飛ばしているわよ」

「ん・・・えへへ・・・応援ありがとうー!!」

「うふふ・・・」

会場から聞こえるターボとスズカ先輩コールが鳴り響く。だんだ

ん、疲れも飛んで嬉しさでいっぱいになってきたその気持ちと復活した元気で肩車してもらったまま手を振ってスピカの皆と一緒に移動。師匠の・・・リボーさんのレースも楽しみだぞ!!

生ける伝説

「さーて・・・次は私たちの番だわね・・・んっ・・・」

「あの子の走りを見て、気合は入ったかい？ リポーター」

ターボちゃんの素晴らしい走り。まさしく逃げの完成形を見せての勝利。アップのために控室のテレビから見ただけで、圧巻の一言。スズカちゃん相手に、スピカの面々相手にあれだけでできれば大したもの。

「もちろんよへりポス。それに、んあつく・・・は。今の世代の子たちも強い子ばかり。久しぶりに全力で行けるわ。あ。これお願いね」

「分かったよ。私は会場のほうで見させてもらう。日本でも自由に駆けてくるといいさ」

トレセン学園のジャージでのんびりしていたが体を起こしてへりポスに荷物を渡し、移動。パドックから選手紹介となる。模擬レースとはいえ、一応テレビも来て、お金もかかっている。ちゃんと出ないとねー

へりポスと拳を軽く合わせてから移動。私は同にも出る順番が最後らしい。大トリ扱いって感じか。

「お。ルドルフちゃん。タイキちゃん。二人も今から？」

「ハァーイ♪ もちろん。今からデス」

「私たちは後ろからだね。今日はよろしく頼むよ。伝説の力。思いきり学ばせていただく」

二人と握手を交わして歩いていけば紹介と共にパドックを出ていくリギルの皆。改めて、感じる力量はなるほど。強い。中等部だという子たちも既に一回り上の実力はあるし、最強と言われるのを何度目か再確認させられる。

「それはこっちもよ。日本の選手たちとはレースの機会がなかったし、アメリカでもレースの数が多すぎて多くは触れられなかった。皇帝率いるチームの実力。学ばせてもらうから」

「うふふ。リギルの皆もいい勉強になるしね。お願いするわ」

「ええ。間違いなく世界最強。その実力を是非とも」

「まあ、勝つのは私達ですけどネ！」

「女帝という名を持つものとして全力でぶつからせてもらいます」

「・・・ワクワクするな。今日はよろしく頼む」

何名か先に出ちやったからここからはレース場のゲートに入る前でしかできないけど、いやーどれもこれも最高の原石ばかり。怪物って感じだわ。オペラオー、アマゾン、フジキセキちゃんたちもやばそうだしねえ。

「じゃ、私も手を抜かないし、思いきり来なさい」

私の言葉に全員瞳に戦意を灯した。そうそう。それくらいでちようどいい。このひりつく感覚。遠征して単身戦っていたのを思い出しちゃう。

「おつとと・・・おお・・・凄いわねえ」

しかしまあ、改めて聞える紹介とその際に出ていくリギルの面々への歓声。模擬試合、彼女たちの魅力を引き出していく勝負服、公式でもないのにこの人気は本当にスターなんだとわかる。

「それでは、先に」

そうこうしているうちにルドルフちゃんの番になり、出た瞬間に天井が震えていそうなほどの歓声が。皇帝。無敗の三冠かつ最強か。勝ちよりも負けを語りたくなるほどの圧勝劇。面白い。こういう相手とぶつかり合うのが最高なんだと心の奥でふつつつと火がついていくのが、燃え盛っていくのが。

(待ち遠しいわねー・・・させてきて・・・一応、今回はどうしかけていくか・・・ふふ・・・)

『これでリギルのメンバーは全員がそろいました。そして、最後に登場するのはやっぱりこの方!』

『彼女たちが中等部からデビューし、二十歳まで戦い続けた時代。ウマ娘世界大戦と呼ばれるほどの数の天才、怪物たちがひしめき、彼女たちが世界中を渡り歩き、そこかしこで激戦を繰り広げていました』

パドックに上がりつつ聞こえてくる解説。うーん。最近バラエティーの方でしかやっていなかったし、こういう紹介は久しぶりでなんだか少し気恥しい。

『その時代の中にあって無敗! 引退後も現役選手たちと競り合っ

て尚無敗！ 伝説のエキシビジョンマッチでも最後の直線であのB I G R E Dと互角に渡り合い引き分け。最強の一角としてなお馳せる伝説！ 欧州最強というのなら、彼女を越えてみる!! リボアの入場です!!』

トレセン学園のジャージを脱いでそばにおいて体育着と短パン姿で歩いていく。周りからは大歓声と。うん。いつも通りの声が聞こえる

「でけえ！ 腰ほっそり!」

「なによあれ・・・羨ましい・・・！ 腰も身体も細いのにでかい・・・！」

あははー・・・少し大きめの体育着にしたけど、ウマ娘のレースを見続けて目が肥えた人達、女性の皆さんからは気づかれるか・・・でも、この体格のせいでレース前に運営からも心配されたり、背が伸びるまでマジで心配されたからね・・・大丈夫だって言っても健康診断に問答無用で投げ込まれたり苦労はあるのよ。それなりに。

『体の仕上がりも文句なし！ 細くしなやか。一見不安なほどですがこれが彼女のナチュラルウエイト！ まさしく自身こそがイタリアの最高の芸術品といっても過言ではないでしょう』

『背丈はありますが大変細い。けれど鍛えた肉体は無駄がない。本当に素晴らしい。ただ、レース数日前に何度も健康診断をさせられたりでいろいろ大変だったようです』

実況でますます盛り上がる会場を見ながら歩いて・・・あ。キタちゃん。とサトちゃん。ターボちゃんたちもいる。手ふつと。

ゆったり歩いてゲートに入っていく皆に倣って私も入る。
んー……狭いけど、ちよつとくらいから眠くなりそう……ふう……

『各ウマ娘ゲートに入りました』

1番1枠 シンボリルドルフ

2番2枠 ナリタブライアン

3番3枠 エルコンドルパサー

4番4枠 タイキシヤトル

5番5枠 フジキセキ

6番6枠 エアグルーヴ

7番7枠 マルゼンスキー

8番8枠 テイエムオペラオー

9番9枠 グラスワンダー

10番10枠 ヒシアマゾン

11番11枠 リボーン

「ふわ……はあ……んー……」

息を吸い込んで、思いきり吐き出す。そして吸い込んで……本気
になりながらちよつと圧を出す。

「「「「!!!?」」」」

『さあ、ゲートが開きました!』

「よし。いきまっしょ」

『スタートしました。リボー、絶好の滑り出しでハナを切りました。やや当てられたか各ウマ娘、ゲートから出遅れ。しかし流石はリギルに集った優勝達。スタート後は自分のペースを掴みます』

『スイッチの入ったりリボーは別人だと言われるほどですからね。プレッシャーにあてられたかもしれません』

ゲートが空いたのでまずは最高速度のちよつと手前で一気に前に出る。他の子たちは・・・軒並み圧でちよつと怯んじやつたかスタートが遅れちやつたわね。

ついてきているのは・・・タイキちゃん、マルゼンちゃん。一気に抜くんじゃなくて、あえて逃げよりの先行で行く感じだろう。私についてきてはいるけど、焦ったまま変に前に出て潰れるよりはマルゼンちゃんは足を残しつつついていく。タイキちゃんはマルゼンちゃんをマークしつつ得意のマイルよりも400メートル長いレース。足を貯めることを選んだ感じ。

『今日のマルゼンスキーは大きく逃げない。タイキシャトルと共にやや先行目につけてリボーをうかがう。先頭集団からも縦長の展開になっております。リボーが先頭。2番手の位置に3バ身程でマルゼンスキー。差がなくタイキシャトル』

『普段は逃げを主体としているマルゼンスキーですが先行も一級

品。タイキシヤトルはついていきながら一気に仕掛ける腹積もりで
しょうか』

「出遅れた……！」

「なんなのよ今の圧力……」

『シンボリルドルフはこの辺り。並んでナリタブライアン。テイエ
ムオペラオー。ヒシアマゾン、最後方からのレースになります』

『全員の爆発力は目を見張るものがありますし、今は脚を残すこと、
出遅れでの動揺を抑えているところでしょう』

その後ろにルドルフちゃんを先頭に固まって、アマゾンちゃんが最
後尾から追い込みを狙っている感じか。リギルもそうだけど、基本戦
術は追い込み、差しの方がいいからねえ。逃げで勝負をしようとはし
ないか。

「……やるか」

『コーナーをカーブ。リボーがペースを握っているところでは
うか？ 各ウマ娘の動きはぎこちなって来ているか？』

『大逃げをしたツインターボとサイレンススズカのレース直後。更
にリボーは逃げでも無敗ですからね。このままでいいのかと内心考
えていると思われます』

ちようどいいかなと感じたのでちよつと仕掛けを始める。逃げで
勝負をしないのなら、ちようどいいくらいだし。少しづつペースを落
として、わかりづらいように走法も変えておいてと……うん。後ろ
から追い込んでくる足音も聞こえない。距離も空いているし、私とマ

ルゼンちゃんをペースにして後半に一気に追い上げていく感じでしょうね。

「……はまった。スタートダッシュで遅れて、先のレースでのターボちゃんとスズカちゃんの大逃げに焦って潰れたスピカの皆のレースを見て慎重策を取ったんでしようけどね。うん。正解だけど間違いよ。」

大体15バ身つてところかしら……うんうん。いい感じ。

「……?」

「なんだ……違和感が……」

『もうそろそろ1000メートルを通過する直前。依然大逃げのりボー。それを追いかけるタイキシャトルとマルゼンスキー。後続も好位置につけられるままレース出来るか? 2コーナーをカーブ』

『この大逃げをしておきながら、どうにも……変な感じがします』

客席も実況の皆さんも違和感を感じたみたいね。フジキセキちゃんどルドルフちゃんは気づきそうね。そろそろ……1000メートル

『1000メートルを通過しました。タイムは……59秒8。思った以上にローペースの大逃げだ!!』

『おそらくコーナーで足元が見えづらくなる。減速をするところで絶妙にごまかしたのでしょう。これが芸術的技法のひとつといったところか』

「What!？」

「は……嵌められたのか!!？」

「くそ……焦りを利用されたか？」

曲がり角、足の回転と歩幅をぐまかせばペースダウンしているのに
ぐまかせるからねー非公式、引退後含めて何十戦と曲者、怪物たちと
しのぎを削った経験は伊達じゃないわ！

(それにまあ……このメンバー相手にはしつかり加速用の末脚。長
めに残しておかないとやばそうだし……削りももう一つ欲しいわね)

「……仕掛けてみるか？」

「惑わされる前に逃げマースー！」

『エアグルーヴ、エルコンドルパサーが前に出る。続いてタイキ
シヤトル、テイエムオペラオーが続いてリボアの前に。リボアは競り
合うことなく下がっていく』

『逃げ以外にもリボアの武器はありますからね。しかし、ここから
末脚を残した面々をさらりと前に出したのは果たして正解かどうか』

ここで私のペース崩し、逃げるに付き合いたくない。後はまあ、最初
のペースで少し消耗、足が落ちたかともという希望的観測からオペラ
オーちゃん、エルちゃん。エアちゃん。タイキちゃんがグイグイ迫っ
てくる。

「並んで来たわね」

「恐ろしいわ・・・スタートからこれを仕掛けていたなんて」

『マルゼンスキー抜け出した！大ケヤキを越えて4コーナーで仕掛けて来た！残り400メートル！』

『全員の足は残っているでしょう。ここからは全員が得意な位置につけているのでわかりません』

マルゼンちゃんも前に出て、ルドルフちゃんたちは私に合わせるように後ろのまま。そろそろ・・・うん。前に出たメンバーもそろそろ効く。スタートダッシュで焦りで余計な力みで脚を使って、また私に騙されたと追いついていくためにいつもより早いところから仕掛けた。

(こうなってくると・・・ルドルフちゃんとブライアンちゃんの加速。徹底マークからの爆発を見せるグラスちゃんが不安要素でトップか。タイキちゃんは得意のマイルより400メートル長い距離かつ、二度引つ掻き回したから見るからに動きが鈍っている)

「さあ・・・いくわよ・・・ッ!!」

『リボーが来たぞー！リボーが来たぞー！ 凄い脚だ！ 凄い脚で突っ込んで来るぞー！ 今イタリア最高峰の弾道ミサイルが発射されました!!』

『この加速で多くの怪物たちを、世界中で置き去りにしました。これはすさまじい!!』

後はもう。たっぷり溜めさせてもらった脚で駆け抜けるだけ。思いきり息を吸い込んで、止めて。一気に世界が遅くなっていく。息を止めることで集中の深度を深めるスイッチを入れる。ありったけの

力を両手足に込めて地面を粉碎する勢いでぶっ飛んでいく。

「な……くっ……!」

「ものが……違う……!!?」

『リボーが先頭だ! リボーが先頭だ!! シンボリルドルフ行く! ブライアンも来た! しかしリボーだ!!リボーだ!! 4バ身5バ身! まだまだ伸びていく!』

『怪物と皇帝の足も決して遅くありません。しかし……リボーだけ早送りをしているような、周りの時間が遅くなったようなほどの加速』

歓声も、周りの声も、自分の心臓の音や揺れる髪も、全部全部がスローに見えて感じる。やっぱりの感覚はいい……好きなレースが長く感じられるし……高揚感が心地よく染みて、身体に活力を無限にくれるよう。

前にいた子たちは追い抜いた。ギリギリ……私の感じる感覚についてこれそうなのが……ブライアンちゃん……ルドルフちゃん。マルゼンちゃん。うん……でも……

(まだ届いていない……!!)

『東京のホームストレッチ!! リボーが行く! リボーが行く!』

おおっと、ここでマルゼンスキー追いつかれるか!? 追いつけるか!? ナリタブライアン突っ込む! シンボリルドルフ食い下がれない!! 速い速い速い!! スピード違反じゃないのかこのウマ娘!』

『この加速に追いつける三名もまた異常の中の異常。しかし、巨匠

の筆さばきは止められないようです』

今はまだ届かない。でもこれからまだまだ伸びる。スイッチの入った私相手にここまでついてくれるのだから。でも今は私が勝利をもらおう。ぐんぐん横から感じていた視線を背中に感じるようになるのを感じつつ最後まで加速しながら。ゴール。

『リボーだリボーだ大勝利!! シンボリルドルフが2着! マルゼンスキーが3着うううう!! ターフの名匠。世界の頂点に挑んだ日本の勇者たち! 色褪せぬ神話に懸命に挑みましたが未だ及ばず! しかし、5バ身差まで食らいつきました! そしてこの3着全員がコースレコード更新!! 弱者は一人もいない! まさしく最高峰のレースでした!!』

『魔術師の血をひく芸術家の孫娘はここでも芸術的、魔術的なレース、そして芸術作品を見せつけたようですね。・・・おや?』

「ぶはっ・・・はぁー・・・よっし・・・へりpos!!」

「OKリボー!」

しっかりとゴールの声を聴いてから息を吐いて流しつつ、ロンダートからトンボを切る。私の合図にへりposも用意していたものを投げしてくれた。勝利した後のゴールでやると決めたパフォーマンスだ。解説のおじさま。私の勝利レースが芸術品なら、これも入れなきや今回は完成しないの。

投げてくれたマント、そして覆面。最後にくるりと宙返りをして着地後にまだ空を舞うマントを取って羽織り、私の表情が見えるくらいに軽く覆面を取ってかぶり、リザードンポーズを決めれば完成。

『おおっ・・・!? こ、ここで緊急情報!! なんと、ここしばらく日本各地の非公式レースで暴れていた覆面ウマ娘ダテ・ナオト選手の正体は何とリボー!! 日本の芝、そして勝負勘を取り戻すために短距離でレース参加。負けた際は正体をその場でさらすことで自身の無敗記録をかける過激な調整をしていたようです!!』

今まで参加していた非公式レースの運営さんにも私の勝利と同時にこの情報を流すようにしていたのでちょうどよく私のポーズと実況の話すこともあつて会場は大盛り上がり。うんうん。やつぱアメリカとかではこういうパフォーマンスも多いから勉強になるし、やると楽しいわね♪

そしてまあ、最後にサービス。このマントとマスクを・・・っと!

『なんとなんとおー、ここでウイニングサービスか! リボーのマントとマスクが観客席に投げ込まれる! 模擬レースとはいえ、非公式とはいえターフの巨匠のもう一つの勝負服ともいえるマントとマスクのプレゼントとは粹の一言に尽きます!!』

キタちゃん和サトちゃんにプレゼント。ふふ。これからも頑張つてね。若き新星候補ちゃん。そういう意味も込めてウイंकを飛ばす。あ。ほほ紅くしている。かわいいなあ。

「は、はは・・・完敗・・・ですね。いやはや、世界の教えてもらいました。疾風迅雷とはこの事か」

「お疲れ様。ルドルフちゃん。強かったわよ? 今回は引き出しの数で勝っただけ。戦歴でいえば軽く倍はあるからねー」

「ぐ・・・ふ・・・は・・・あ・・・い、一体どこから仕掛けていたのですか?」

「あ、足ががくがくデース……お。オオウ……」

『リギルのメンバーはみなくたくた！ それもしょうがないです。この実況席ですら感じるほどの圧！ そして迫力はまさしく現役時代のそれ！ ミサイルのような加速！ 怪物ですら怯む魔王と言わしめたプレッシャーは未だ衰えていなかった!!』

汗だくのルドルフちゃんに、あーほかのメンツもみんなフラフラ、ないし汗まみれだわ。そりゃ、スタートから圧かけたしね。

「パドックの前の時点で。のんびりと気を緩めて、みんなが出たあたりから徐々にスイッチを入れる。で、ゲートの時に圧を出しての最初は最速手前、その後ですぐペースと走法を変えてから脚と距離を貯める。まあ、二回くらいかしらね？ ペース崩しをやってみたのよ」

「最後のあの加速。あれは一体……？」

「ああ。ゾーンって言えばいいのかな。私、最後の加速の際は息止めて思いっきり集中するようルーティーン作っているの。その際はもう。全力のさらに上を出せるし、レースも長く味わる感覚があるから心地いいの」

最後の加速、末脚はこれで後押ししている感じだしね……ただまあ、それでようやく張り合える連中が数名。ほんと……公式でぶつかっていたら私無敗で終われなかっただろうなーおっと危ない危ない。遠い目をしていた。

「……日本の頂点、三冠ウマ娘と言われていたが、上には上がいる。あらためて思い知らされたよ。……いい勝負だった」

「ええ。まさしく。早い段階であなたと経験をつめたのは私にとって最高の指導です」

「クッソー!! 負けたのはすげー悔しいが、最高だったぜ! よければまた勝負してくれ」

「私もデース!! 今度はマイルで勝負しましょう?」

「あ、タイキ先輩ずるい! 私も、今度は2400で勝負!!」

どうにか立ち上がり息も整えてきたリギルの皆からまたレースの申し込みをされちゃう。うーん。元気だわ。マイルはちよつと不安だけど、エルちゃん。むしろ2400は私の得意距離だけどいいのかしら。

「女帝と言われ、そうあるべきと鍛えていましたが、自惚れていたかもしれませんね・・・負けました。よければ今後もご指導ご鞭撻。お願いします」

「私からも。ターフの巨匠の描く勝利を私たちもできるよう。お願いしたく」

「ボクからもお願いするよ。より美しく、素晴らしい勝利を飾るためにね」

「なら、今は美しく愉快にターフを降りましょうか。ありがたいわね。日本でもここまで歓声をもらえるなんて」

オペラオーちゃんの言葉にそう返しながら観客に手を振りながらレース場から退場。日本のレベルはアメリカに負けない・・・いや、もしかしたら高いわね。うーん。あいつらに頼まれていることもある

し、どれ・・・ひとつやってみましょうかね？ 頼まれただけ。

『さあ、レースを彩ってくれた選手たちが下りていきます！ その中でも華やかさ、明るい笑顔を振りまいていく日本と世界のトップ！ まさしく全員が強者であり弱者無し！ 強者、怪物のみのぶつかり合ひであったことを語っています』

「ああ・・・いいわね。これが最強の一角。負けたのに・・・ワクワクが止まらないわ♪」

「ふふ・・・まだまだ、勇往邁進すべきだな・・・目指す高みがより見えるのがいい」

うーん。負けた悔しさはあるけど、それ以上に次へと炎を燃やして瞳をぎらつかせている。これは・・・のびるわね。ああ・・・マジで指導したくなっちゃうわ。けど、レース後のインタビューもありそうだし、あー・・・めんどい。

レースを終えて

トウカイテイオーの日記

今日は・・・最悪の日というか、悪夢と言ってもいい日かもしれない。ツインターボの成長は知っていたし、逃げをするからと一応スズカと併せをしたりしていた。けど、映像を見ても。その上で予想の二回り上の想像をしてもボクの勝ち。むしろチーム内のメンバーでの戦いになると思っていた。

だけど、それは結局ボクの悔りだった。あの走り。常に全力の速度で脚を落とさず走り抜けられるのもそうだけど、あの二の足での加速についていけなかった。マックイーン。スペがライバルだったと思っていたけど、またライバルが増えた。だけど、だからこそ嬉しさもある。ライバルが増える分より強くなれるし、ボクの伝説がより輝くし、燃える。

問題は、その後のレース。リギル。かいちよーのいるチームは強い。グラスもエルもいるし、間違いなく世界でも指折りのチームのはず・・・なのに、あの人は、リボーさんはまとめて切って捨てた。引退して5年。非公式やテレビで走っているとはいえ、現役。しかも円熟した強さのかいちよーが負けた。もうないと思っていたはずの4つ目の敗北・・・

あの子のインタビューでも、同世代に間違いなく自分と同じかそれ以上が3名くらい入ると言って、更に今の自分なら負けるかもという。世界の広さ、キチガイ世代と言われているのがよく分かった。だからこそ、尚更にあの人は尊敬できるし、技術を盗んでボクのものにする。そしてリボーさん以上に公式で無敗を続けていけばかいちよーも弱くなかったと言えるし。あの人も越えた証を見せられるから。

！
今後もトレセンで訪問トレーナーをしてくれるようだし、頑張るぞ

サイレンススズカの日記

日本に帰ってから模擬レースとはいえ、この熱気。歓声はGIでも早々聞くことが出来ない程だった。そして、何よりも珍しいものを見れたし、味わえた。

ツインターボちゃん。チーム・カノープス所属の中等部の子。私と同じ大逃げが得意な。というかそれしかしたくないという面白い子だ。今回はチームメンバーにその子が加わってのレースだったので調べていたのだが・・・本当に短期間であれ程に化けているとは思いませんでした。

コーナリングの上手さと、フォームはもう体に叩き込まれたと思えるほどこびりついて落ちないと言えるほどの仕込み具合。ただ、公式、皆との併せを聞いてもスタミナが切れて逆噴射していると聞いて、どこかで息を入れる際に私が少しリードを取って、最後に差せばいけると思ったのだけど・・・

ついてきた。スタミナのギリ押しをもつて最後の加速さえもついてきて、私と同じ・・・先頭でしか見れない景色、世界を同じ場所から見るという今までなかったことを見た。正直・・・譲りたくないと思える反面、面白さも感じている。あの子と競り合い、磨き合えばきっとより早く、きれいな景色を。気持ちの良い走りが出れると思うの。

後、あんなに元気で、素直に誰かをほめて、励ませる気持ちの良い

性格は本当にきれいな心を持っていると思う。カノープスの皆が支えるのもよくわかるな。今度もチームの合同練習があつたら是非ともいろいろ学ばせてもらおうし、教えていきたい。

メジロマツクイーンの日記

今日のツインターボさんの逃げ。それで恐ろしかったのはそのスタミナと速度にある。わたくしも長距離のスパートと加速を活かしての戦いは得意とするところ。スタミナを武器に自分のペースに持ち込んですりつぶすのがわたくしのスタイル。

でも、逃げは最初から常に先頭を保つたまま息を入れ、けれど追いつかれないようにペース配分をするという、ある意味では追い込み以上に難しいとも言われるもの。スズカ先輩がそれを自身でコントロールしつつもあれだけの大差をつけ、更にはスタミナを後半まで残して差しをできるからこそ天才。大逃げの完成形と言われましたわ。でも・・・中距離とはいえ、そこにがむしやら・・・技術ももちろんありましたが、それ以上にひたすら2000メートルスパートをかけ続け、最後の直線間近でも根性でさらに二の足を出すというツインターボさんには圧巻・・・いえ。すさまじいものを見せられました。

ステイヤーとして、メジロ家に天皇賞の盾を持って帰るために、家をより盛り上げるためにも彼女とは今後もいろいろ磨き合いたいですわね。逃げスタイルはあの大逃げコンビもいますし。

最後に、リボーさんですが・・・憧れましたわ。並みいる強敵すらも・・・リギルさえも掌で躍らせ、勝利したと思えばあのパフォーマンス。引退して尚名家、最強としての威厳を失わず、そして常にウマ娘の世界を盛り上げてくれる。いずれは我がメジロ家も、わたくしも日本を起点に家を、後輩たちを支え、一族を盛り立てる立場になる。

そういう意味でも、私はあの方からもより学ばなければ。

スペシャルウィークの日記

おかあちゃん。今日は本当に多くの事がありました。ツイントーボちゃんが先にスズカさんの世界に、場所に踏み込んでくるという大波乱！ 私が先に届きたかった分悔しかったし、同時にここまで成長して私たちをライバルとしてくれているツイントーボちゃんの覚悟を見誤っていた私も悪いと思う。

でも、最後にターボちゃんは言ってくれたの！ 『ライバルだからこれからも一緒に頑張つて良い勝負しよう！ ま、勝つのはターボだけだな』そう言つて明るく笑つて一緒にジュースを飲んでカノープスの皆と一緒に次の試合を見れて、とっても嬉しかったです。

今度はターボちゃんに負けないし、公式戦では私が勝利をもらうんだから！

あ。それとね。世界の有名人のレースも見れたの！ しかも日本で！ 三か国のG Iレースで優勝。ブロワイエさんも優勝したあの凱旋門を2回も優勝したりボーさん！ アメリカ、日本では公式レースをせずに引退したからできなかったはずなのに、模擬とはいえレース参加！ しかもあのシンボリドルフ会長たちに勝利と会場は大騒ぎでした。テイオーちゃんが落ち込んでいたけど、どうにか持ち直したので安心です。

日本一のウマ娘、日本総大将と呼んでくれる人も増えたけど、それでも世界の壁は厚いよ。あのブロワイエさんよりも段違いのプレッシャーを見せていたし・・・現役の頃つてどれほどやばかったんだろう？ あと、戦つたのは一度だけだけど互角に渡り合つていたギン

シヤリボーイさんやハリボテエレジーさん。話が聞けたら聞きたいな。

ジャスタウエイの日記

今日のレースは、最後の最後に予想をひっくり返された。その一言に尽きる。スズカ相手にスタミナ勝負をすれば後半にはばててしまう。たとえ同じペースを維持できたとしてもスズカの二の足には追いつけないだろうと思っていたのだけど・・・まさか同じ速度で追いついての同着。

私も一気に伸びた：・ゴルシちゃん曰く覚醒した時があるけど、それをターボちゃんはこのレースでやってのけたのだろう。後輩に負けたのは悔しいが、それ以上におめでとうという気持ちと、努力の日々を一端とはいえ見ていた分、嬉しいものがある。きっと、中等部のレースは今後ターボちゃんも交えて相当カオスになっていくに違いない。

先行、差し、逃げ、追い込みすべてにスペシャリストがいるし、適正距離もまた違う。ただ、全員中距離でも十分暴れられるのでやっぱりそこは地獄絵図になるんだろうなって。

最後のレースは・・・私を推薦してくれたリボーさん。あの人はドバイでのレース経験はないのにもかかわらずそれを通せた実力と実績を垣間見たし、なるほど世界の反応を見てもあの人の推薦。眼を持っての判断は間違いないとだれもが考えているのだろう。そう思うと、私が推薦されたのは認められたということだし、なんだかうれしくなる。

そろそろいい時間だし、今日はこれまで。久しぶりに全力を出して、疲れたゴルシちゃん髪の毛のお手入れもさせてもらえて、爆睡しているゴルシちゃんを起こさないためにも部屋の明かりを消さないのだし。

ダイワスカーレットの日記

今日のレースは負けたのは悔しかった。模擬とはいえ、あそこまでの大差は悔しい。絶対に次は私が勝つんだから!! 大逃げならスズカ先輩から教えてもらえるし、その対処法も学んでいく。ウオツカよりも先にターボにリベンジしていくわ。

そして、それとは別に。今日、私は素晴らしものを見れた。リボーさんのレース。その逃げの上手さが本当にすごかった・・・600×1200メートルまで余裕をもつて逃げていたし、それを会場にいる私達でも1000メートルのタイムを見るまでは違和感があまりなかった。

リボーさんを追いかけて、一部はペース崩しに付き合わないと更に出る。これをしたせいで、焦って脚を使い過ぎたせいでほぼほぼ全員がまたペースを崩していた。そこにくるリボーさんの末脚は・・・引退したというのが、実年齢が嘘だと思えるほどの加速。

まとめて全員追い越してのゴール。その後のパフォーマンスも含めて本当に盛り上げていくし、かつこよかった・・・あれが無敗の王者。常に一着を取り続ける人なんだとわかる。それに、あの相手をコントロールしつつねじ伏せる逃げ。あれこそ私の欲しいもの。

その後のインタビューでトレセン学園に残っていてくれるそうだし、早速合同練習の嘆願書を書かなきゃね。ウオツカにも書いてもら

いましよ。あのパフォーマンスでますますのめり込んだみたいだし。

シンボリルドルフの日記

皇帝と呼ばれ、7冠を達成した私だが今回は改めて世界の広さを思い知らされることとなった。無敗の王者。凱旋門賞連覇のリボーさん。彼女の実力は衰えていないとは考えていた。が・・・まさかあかも手玉に取られるとは思わなかった。

逃げもできるゆえに最初は泳がせておこうと思えばスローペース。焦って追いかけてみればペースが乱されてそこから一気に加速。完敗というほかないだろう。

その後聞いてみればゾーンを使ったという。ゾーン。時間間隔が引き伸ばされるほどの集中。動きながらする座禅とも言われるけれど、実は私も何度か経験したことがある。2分ちよいのレースなのに、体感5分ほどに感じたり、周りの声がやたらスローに聞こえたり。そう言ったことはある。だが、リボーさんはそれを特定のルーティーンをスイッチに自在に引き出すという。しかもより深く。

野球選手などがバッターボックスに立つ際に特定の動作をして集中、パフォーマンス向上をするためにすることがあるが。リボーさんはそれをするだけで集中の極致に行けてしまう。

私達ウマ娘のみならず、スポーツに携わるものならだれもが喉から手が出るほどの特技。それを引き出したからこそ、対戦相手がどれほど豪華だろうともあの大差をつけて勝っていたという。しかし、さらに上が同世代にいたというリボーさん。彼女はそのまま日本にいてくれるという。まさしく僥倖。

世界の實力、指導を受け、私もまた世界に挑戦したい。それを支えてもらえるのはまさしく値千金。今度こそ、アメリカ、フランスで勝利を手にしていく。そのためには是非ともおハナさんにもまた合同練習を打診しなければ。

エアグルーヴの日記

模擬レースはまさしく大敗。でもその理由をつけるのも私の不調でも、距離の適正でもない。シンプルにリボーさんが強かった。それの一言に尽きた。

レース映像を見返せばスタートの時点からもう翻弄されていた。あの放たれるプレッシャーで思わず猛獣に追い詰められたように感じ、やられたといつも通りのペースを保とうとしたらそれすらも体内時計を壊されて翻弄。追いつき、ペース崩しに付き合わないようにしたら最後の加速についていけないだけの末脚が無かった……いや、あったとしてもあの末脚に追いつけたかどうか。

女帝と呼ばれ、会長の、皇帝を補佐するものとして油断もしていなかった。だけど、それだけでは足りなかったのだろう。天才という枠組みではなく怪物。そういうべきなのだろう。だからこそ、世界の猛者たちと渡り合い、世界を飛び回って尚負けなかった。

あの人は基本嘘は言わないと感じているが、それをもとに考えれば私たちも弱くはなく、これからも伸びしろがあると云ってくれた。才能のつぶし合いが起きていると言っても過言ではないほどの世代。だからこそ、今の日本のウマ娘たちは面白いことになるとも。

記者、そしてほかのウマ娘たちは一部半信半疑という感じの人もい

だが・・・ツイインターボをあかも成長させ、そしてスズカに追いつかせるほどに仕込んで見せた。あの辣腕ぶりと才能を伸ばしたそれを見れば認めざるを得ない。

世界に向けて日本に残り、今後も才能を見ていくと宣言してくれたしこれからトレセン学園のレベルは大いに上がることだろう。そして同時に、それに負けじとリギルもレベルアップをしていかなければならない。日本最高にしてトレセン学園最強チームとしてあり続けるために。

明日からも楽しみだが、ひとまず今夜は美柚樹さんからもらったお茶と飴玉で一息入れて休むことにする。昂る気持ちを鎮め、心地よい眠りをくれるこれは本当にありがたい。もし多く貰えるなら母にも送りたいものだが・・・今度聞いてみよう。

訪問戦争と巨星

「ふわあー・・・二人とも、足の方は大丈夫く・・・？」

レースが終わって早二日。インタビューも追えてリボーが自ら火種をばらまいて色々ウマ娘業界が騒がしいことになったが、まあ目の前の二人はそんなことは気にしていない。むしろ楽しんでいるだろうか。

「んにゃああー・・・おはよおお・・・」

「かふえ・・・もう朝・・・おはよ・・・お姉さん・・・たーぼちゃん・・・」

「おはよう。ほら、早く顔洗って、歩いてきなさい。ご飯作っておくから」

心底眠そうな。瞼にのり塗ったんじゃないかといいたいほど目を開けないのに体を起こす二人。なんやかんや眠いとか言いつつも行動に移すあたり、体に染みついた習慣と回復力の速さがなせる業か。

顔を洗い、ジャージに着替えてから髪を梳かし、準備を整えるリボーと、起きれるようにはなったけどまだ動きが鈍いターボちゃんをリボーがせっついて着替えさせ、髪の毛を整える。

「いって来まーす」

「いってきまあーふ・・・んふう」

「はーい行ってらっしゃー」

出ていく二人はレース後みんなで検査をして大丈夫だったスズカちゃんと一緒に朝の軽いロードワークに三人で行くそう、せっかくだからスズカちゃんも学校が休みなので私の部屋でご飯を食べにくるとか。

「んー：スぺちゃんたち、ネイチヤちゃんたちにもあげたいし：多めに作るか・・・」

私もまだ残る眠気で言葉がゆつたりとなりつつも調理を進める。レースの労いも兼ねているのでリギルにも後で渡すが、それよりもすぐ来てくれるスピカ、カノープスの分を用意。

すでにみそ汁は土鍋一つ分作っているし、野菜炒めもフライパン4つ分用意した。おかずもおしんこやあれこれあるのと、ちよつともらえた規格外サイズの野菜でスティックと特性ソースも用意したからまあ、朝ごはんには十分だろう。

「んー・・・いい味・・・じゃ・・・今日は濃厚チーズケーキとアツプルパイを軽くつまめるサイズで・・・」

お菓子の仕込みと入れる容器を用意をしつつ、早朝のニュースを流し聞きするためにテレビをつけてもまあ内容は未だリボアの発言で持ちきりだ。

「ふっふ・・・危ないわよターボちゃん」

「えへへターボが弟く子♪ 日本でのいっちばんでしゅ♪」

「ん……リボーさん。あのニュースの発言。大丈夫ですか？」

朝、早朝もいい時間にリボーさんとターボちゃんを誘つてのロードワーク。逃げを武器にする私とターボちゃんはスタミナが何よりも必要。いつ息を入れ、何時二の足を使うかが大切なのでどうでしょうと誘い、こうして空が白み始めるかくらいの時間、まだひんやりとする空気を感じながら走っている。

「ん？ ええ。私の弟子は結構いるし、基準も低いからね。日本出身がないだけで、ふふ。アメリカとフランスは割といるのよ？」

「でも、日本初はターボだぞ！ テイオーも倒したし、ここからサイキョー伝説を作っていくんだ！」

「あらあら。でもそれならターボちゃん。しっかり走らないと。ふむ……確かに高名な人は多いですね。でも、それとしても日本にそのまま在住というのは流石に」

あそこまで大逃げをしておいてすぐに回復するスタミナ。スピカだとスカーレットちゃん以外はアマリしていなかった分、併せて学びたいのもあったが、こう、ターボちゃんは読みづらい。今は軽くだからだろうか？ 練習だとひたすら限界まで追い込むのが常と言っていたのだけでも……

それと、リボーさんのレース後のインタビュー。これがまた見事に世界に火種を放り込んだ。簡単に言えば

『ツインターボちゃんは日本での私の弟子、面白い子だし、大逃げかますからよろしく』

『美柚樹お姉さんを雇えばすぐアメリカに帰るつもりだったけどここ面白いし、しばらくここで手伝いしつつ過ごすわー。あ。これからももしかしたら弟子取ったり、推薦枠で海外に送るかもだから』

この二つだが、それでももう日本中が、そして多分世界が大騒ぎになった。弟子がすでにアメリカの三冠レースを手にしたものもいれば、凱旋門を取った子もいる。まだ若いのにそれほど才能を見出して鍛えられるリボーさんの手腕と、それを示したターボちゃんのレース。

自分自身も勝って自己管理も他者を育てるのもできるのを示したうえで日本にとどまり実力がそのレース取れるとわかれば自身の実績とコネで推薦で選手を送る。日本からの刺客が増える。海外のトロフィーを、皇帝シンボルドルフですら取れなかったレースを手にできるかもとそりやあもうお祭り騒ぎだった。

現にジャスタウェイもリボーの推薦でドバイシーマクラシックに入り、そこで優勝。世界一という評価を引っ提げたのもあって殊更大騒ぎだ。

「おっとスズカちゃん落として落として。ターボちゃん。そこはコースじゃないし走りすぎ。で、まー大丈夫よ。日本でのテレビの仕事も断っているし、なんなら学園もお賃金だすそうだから生活も困らない。食堂使っているいいそうだし」

「おっとと・・・これからもリボー師匠と一緒にするのは嬉しいし、ターボは強くなった分今度はカノープスの皆を鍛えてほしい！ 師匠お願いしますー！」

「ならよかったです。ふふ。私の方からもお願いしていいですか？あのコントローलする逃げ。息を入れるタイミングにも使えそう

なので」

そんな中でも私たちは練習再開に向けてのロードワーク。今回は普通に走るのではなく、三人同じ距離感覚を維持。リボーさんが呼吸とペースを落としたり上げたりをランダムで行い、それに私たちも合わせる。自分のペースで走れない分少しもどかしいが、いつものコースを走ってわかる。

これは3〜600メートル間隔で一度息を入れ、脚を溜める。最後に逃げ切るための用意をする練習と、相手の呼吸に合わせてそれができるか。最後の直線で追いつかれでも対処できるかの軽いものだろう。私もターボちゃんもはつきり言って最初のころは迷走、負け続けの方が多し。私に至っては焦りと早くみんなに会いたいからとゲートが開く前に走ってゲートを壊しちゃったり、ターボちゃんみたいな破滅逃げに付き合えずぎて逆噴射したり・・・うん。負けが多いなあ・・・スピカに移ってから走れるようになったけども。

「いいわよーアメリカでも中距離、快速レースでさんざ逃げは相手してきたし、併せて追い込み気味の先行でもできるし」

「師匠。出来ないのはないのか？」

「基本は逃げと先行よ。ただ、指導しがてらいろいろしていたらやれるようになったっただけ」

「非公式では本当にあれこれしていましたものね・・・そしてセクレタリアトさんがレース場荒すほどの走りをしたりとで」

「あいつ、冗談抜きで心臓が普通の倍あるし、肉体の密度も私よりもちよっと高いらしいのよ・・・怪物と言っていいわ」

偉大なる二代目にして怪物セクレタリアト。日本でも初めてウマ娘の世界大会レースを開いたギンシャリボーイ先輩たちもみんな大概な肉体的特徴や技術を持っていたりで個性の塊。その後にはセクレタリアトを筆頭にまた怪物たちがしのぎを削ったキチガイ世代。

その人の見る景色は・・・場所も距離も選ばずにレコードを連続で塗り替えた人の景色も見てみたいと思ってしまう。

「おっと。いい感じにゴール。ターボちゃんは当然として、スズカちゃん。着替えはあるわよね？」

「もっちゃん！ ターボも着替えは・・・へ、部屋に忘れたかも・・・と、取ってくるぞ！」

「はい。では、ターボちゃんと一緒に取りに行きますね？」

「了解。行ってらっしゃいな。あふあー・・・あー・・・空気がおいしー」

そう思っていたらゴールに設定していた寮についたのでそこで美柚樹さんの寮に持ってくるのを忘れてらしく私と一緒に戻ることに。うふふ。かわいい。

この後、正直・・・今まで食べたことがないほどの料理とデザートに思わず食べすぎちゃったわ。アップルパイなんてほっぺが落ちそうだと本気で思ったもの・・・スピカの皆の分だって小箱分もらったし、うふふ。このスイーツが週一以外でもらえるのが嬉しいし、リボーさん、美柚樹さんたちと話せるのも楽しいわ。

「さてきてー・・・第二回目の嘆願書だけど・・・すっごいわねえ。あふれてるじゃないの」

「前の倍は来ているしね。リボアのターボちゃん弟子認定も大きいし、あれよ。リボアの活躍していた時期って、この学園でも小さいころで記憶も朧げかつ海外だから侮っていた部分もなくなったのかも」

「あー実際に見ないとわからないってやつね。まーリギルの存在もあつたし、スペちゃんもいるからねえ。もう何年も前の選手はそりゃーそうなるか」

ターボちゃんたちの指導とケア。南坂トレーナーさんにターボちゃんに息を入れるタイミングの練習のプラン相談と、みんなのマツサージ、整体をしておいてもう夕方だ。

で、その後にフジキセキちゃんから渡された訪問トレーニングの依頼、嘆願書・・・段ボールギチギチになっているその山を見てまた整理している。

「後・・・あー弟子にしてほしいというものも多いわね。特にスカレットトちゃんとウオツカちゃん。何でか竹に挟んで」

「この国の文化？ まあーいいけどねー弟子入りくらいは。あの子たちは光るものあるし、根性もありそうだし」

「そう？ なら最初はスピカにして弟子認定のこと伝える？・・・それと、読んでいるその本は？」

「あーサンデーの自伝。日本語訳もあつたしちよつとこつちで読んでみたくてねー」

サンデーサイレンス・・・確か、映画にもなったまさしくガッツあ

ふれるドラマあふれる人生を歩んだ2冠ウマ娘。同時にまあ、彼女の境遇もまた不遇極まりないのだけど。確か今はリボーもいたアメリカの事務所にいたはずだけでも・・・？

「そういえば、サンデーサイレンスは今はどうしているの？」

「あー・・・一応、トレーナーの仕事していたはずだけど、テレビの仕事はなかったし・・・うーん。事務所の手伝いをしているかも・・・」

「こっちでもイージーゴア・・・セクレタリアトの後を継ぐと言われた選手を勝ち越して引退したと大人気だったしね」

「それは嬉しい。サンデーは口は悪いが根はいい子だし。境遇も・・・まあ、あの国の価値観が強いからね・・・なんやかんや実家の問題も解決したし、今は多分草レースとかに混じりつつ事務所で頑張ってるでしょ」

ふうむ。実際、二冠馬娘で実績も確か。あの事務所所属なら仕事も困らない。それなら確かに最近話題に上がらないが仕事はあるだろうと思う。

「そう。それなら明日以降はまずどこから回る？　実はだけど2名くらいちよつと助けてほしいって声もあるのよ」

「そうねー・・・んー・・・一応どんなものかじっくり聞きたいし、まずはスピカに私が行くから、美柚樹お姉さんはそのトレーナーさんから事情を聴いてもらってもいい？」

「了解よ。若いけど才能はある人だし、何があったのか・・・お？」

二人で予定を決めていると何やらインターホンが。ちゃんとここ

に来れる時点で警備と学園からの許可をもらっている人だけど、誰だろう？

「はい」

実家なら前もって電話をするし、ゴルシちゃんは突然変なところから現れる。他の子たちもこんな時間には来ない。もう夜中もいい所だ。ガチャリとドアを開けてみると。これまた驚いた。

「あんたが噂のシェフだな。それに・・・いたか。リボー。邪魔しに来たぞ」

マンハッタンカフェちゃんそっくりな風貌に、少しだけ成長した肢体。ただ瞳はぎらつきを隠さず、孕んでいる空気は威圧感に溢れる。脚は少しうちに閉じているのが特徴的だ。

「貴女・・・どうしてここに？ サンデー」

サンデーサイレンス。運命に噛みつき、三度も死にかけても這い上がって栄光をつかみ取ったアメリカを代表するウマ娘の一人がここに来ていた。

時代を作り出す

「うー……日本のジュースは甘さ控えめなのな……」

「ええー……?」

「アメリカの甘さがゲロ甘すぎるんよ。で、毛布はあるけども。どうしたの急に」

急にやってきたキチガイ世代の一人にして二冠ウマ娘。セクレタリアトの後継者になるはずの名家出身イージーゴアをボコボコにして成り上がりウマ娘の代名詞たるサンデーサイレンス。そんな彼女が何で来たか。私もリボーも意図がわからずに困惑している。

「正直、アメリカじゃ私はテレビの仕事も無ければ、トレーナーとしてもてんでだれもしないもんでな……この脚と、生まれもあつて取り付く島もねえ。あの事務所の力でも、無理にし過ぎても訴訟が面倒だ」

「はあー……そのなかで栄冠をつかんだ貴女だからこそ価値がある指導をもらえるとと思うけどねー……で、こっちでトレーナーをするって……?」

「ああ、国際トレーナー免許の資格もある。それと、姉御、セク、リムジンのやつから私の新天地を探しつつお前の手伝いをしろってな」

「よいしょ……歯ブラシの予備と……えーと……んー……あ。お菓子とお代りいります?」

「ん……サンキュ。朝飯まだなんだわ……かふあー……あー……ジャパニーズ畳……気持ちいい」

その理由はどうにもサンデーの足・・・少し歪んでいることもが原因で走れないと言われ、それでもなお美人なのだがあちらの国のウマ娘に関しての外見は文字通り髪のとっぺんから足のつま先まで整う美しさを重視する。

更に言えば、家柄。レースでの経歴や名門の出身かでその扱いや人氣がデビュー前からかなりあり、それで扱いの差も出てくるとか。サンデーちゃんも既に二冠。しかもイージーゴアをはねのけ、二度も死ぬような羽目に会いながら、用意できる設備も時間も格差がありながらなお勝利した。

選手の間のは人氣だったが、引退してからはまた血筋や若いトレーナーということもあって完全に人氣がないとかなんとか。本人はもう自分へのそういう扱いは慣れているのか気にせずにジューズを飲み終えて息を吐いて畳でリラックスしているけど。

「ま、あんたの実力と指導ならすぐトレセンも受け入れるし、国際トレーナー資格は大きいわ。で？ 私の手伝い？」

「とぼけんなよシスター。・・・リボー。また日本を起点に私らの時代とは別の形でにぎわすつもりだろ？ ここを起点に世界に強者を送り込んで世界中のウマ娘のレベルアップとお前さんが惚れこむほどのこの学園の子どもたちに栄冠を取らせるために」

「んー・・・ばれたか。まあね。またギンシヤリ先輩たちのように世界大会を開いたり、私たちに負けないほどの才能がひしめいているこの学園を起点にまた世界各国のウマ娘たちが交流しまくるついでに勝利目掛けてばんばか移動して戦いまくる時代にできたらってね。ちやうど、私たちがトレーナーやそれ以外でも業界に口出せるようになったしね？」

「いつの間になんかことを・・・はあー・・・つまりは、時代そのものを芸術品のように作ろうとしていると・・・あ、サンデーちゃん。これ。チーズケーキとアップルパイ。あとは自家製オレンジジュースです」

私の目の前でキチガイ世代がまたキチガイじみた考えを持つていることについて。でもまあ、簡単に言えば海外遠征を増やして経験を積ませるといふことだし、海外のデータが増える分あちらでのケガやレースでの調整ミスが減ることにつながるので悪くはない。

おハナさんが聞けば間違いなく普段の冷静な表情を崩して喜ぶだろう内容を話しつつ。サンデーちゃんは今日のケーキの余りと今用意したジュースを楽しみ始める。

「それとついでに、ちよつとその若手を遠征する際助けるからリクエストがあるんだと・・・うんま!!? なんだこれ!!? 今まで食べたことないぞ!! 病院のスイートでの飯が比べ物になんねえー!」

「リクエスト? ま、内容次第。でしよー? 私の国の一流シェフでもこの味は出せないし、ここだけの話・・・お姉さんの農園の野菜、全部最高グレードよ」

「マジかよ・・・くうー・・・うめえ・・・はあー・・・でも、もう寝るしこれ以上は駄目か・・・」

おお、アメリカのウマ娘でもちゃんと甘味は大丈夫なようだ。うふふ。我が家の規格外のサイズのにんじんからのジュースだけど、それでも甘さはしっかりあるからね。

で、まあ食べ終えると今度は水のボトルと薬を出して1錠のんで水

で流し込む。

「む？ サンデーまだ病気？」

「いやいや。アメリカから来たから時差ボケ対処の睡眠薬。安心しろ。弱いやつだし、病気に關してももう完治。肉体、内臓年齢も10代のころを維持している。でー・・・あー美柚樹さんよ。今夜一泊させてくれ」

「大丈夫よ。しっかりと予備の布団もあるから。朝ごはんも用意しておくから朝はここで食べてね？」

「世話になります。リボアの姉貴分なら、私にも姉御みてえなもんだ。それじゃ・・・んふう・・・それじゃあ・・・」

頭を下げてからすぐさま歯を磨いてすぐさま布団に潜り込んで寝息を立て始めるサンデーちゃん。うーん。かなり気性が荒いと聞いていたけど、案外優しい？

「ねえリボア。サンデーちゃんは結構優しいの？」

「基本身内には優しいが・・・気に食わなければ普通に暴れるわよ。私も一度喧嘩売られたりしたし。美柚樹お姉さんの態度が基本余計なもの考えずに優しく接してくれたから気に行つたのかも」

「そう？ ま、とりあえず明日は私がスピカに行くし、その際にサンデーもつれていくから、お姉さんはその・・・お悩み相談？ とうかその聞き込みよろしく」

「分かったわ。それじゃあ、寝ましようか」

「了解。んふうー・・・」

とりあえずまあ、予定はそのままにスピカの方にリボーは行かせ、私はヘリポスさんと一緒に頼まれているトレーナー・・・チームシリウスのトレーナーさんの方に行くことにしようということでした。私も歯を磨いてから就寝。明日の献立・・・うーん・・・なにがいいかな。

「さてと・・・どうしましたか？ 近藤トレーナー」

「お久しぶりですヨー」

「はい。美柚樹トレーナー、ヘリポスさん・・・実は折り入ったの頼みが・・・」

朝、ウマ娘二人、人間二人の朝ごはんとおやつ。差し入れのお菓子を作る激闘と寝起き最悪で殴りかかってきたサンデーちゃんを思わず投げてしまったりとあれこれありながら私はチーム・ジュピターのトレーナー近藤さんに会いに来ました。

ハルウララ、キングヘイローを指導する人で。誰が呼んだかゴリラ。一応私より年下なのに、その風貌と包容力で年上に見られたりともまあ大変。でも、とても心優しく、指導も確かなので本当によく慕われているいい人。今日はミーティングルームに呼ばれたのですが果たして？

「その・・・ウララ、キングを勝たせるためにご指導、手伝いをお願い

いしたいんです!!」

「うえっ!? いやちよっ・・・頭を上げてください! キングちゃんにウララちゃんも実力も増しているではないですか!」

「そうです・・・確かにウララの足の問題も解消して、走りも、勝利も徐々に目指せるようになりました・・・でも、もう一押し、その一押しが俺では二人に渡せない、足りないのです! お願いします。ぜひとも助けてください!!」

「ドゲザしなくても近藤さん・・・貴方は十分に立派ですよ」

そんな人がいきなり土下座してウララちゃん、キングちゃんの助けをしてほしいという。実は以前、ウララちゃんの足の歪みと爪のケガ、靴合わせなどで助け、ダートに路線を移してからというもの最下位脱却。この前のレースでも2着に食い込むほどの成長を見せた。

勝ち負けの悔しさも少し芽生え、フアンのためにもと走る姿勢も変わってきたがまだ足りないということだとか。キングちゃんも強い。だけでも中距離に怪物が多くいることもあり中々に勝ち星に恵まれない。二人ともスランプになっているとか。

「わかりました。しますが・・・私はマッサージや整体、食生活から変えていくくらいですし、ダートの方は始動した経験も浅・・・ああ・・・まあ、できますかね」

「おお! で、では・・・!」

「でも、本格的に教えるのは私じゃないですよ。フォームチェックと体調管理。それと体質改善をします。後・・・あ・・・その人の指導具合ですが、大丈夫ですか?」

「? リボーさんです? ヘリポスさんです?」

「いえ、もう一人、多分ウララちゃんとキングちゃんの助けになるんですが、キングちゃんがどうなるかなーって」

「? それはどういう?」

「・・・アー・・・」

土下座からすんごい明るい笑顔で起き上がり頭を下げる近藤さん。ただ、私の場合は基本ケアをしつつやりたいことをやらせる。支えるのが主でトレーナーとしてのブランクも大きい。それよりは、ちよūdい人材がいるし、そこにしごかせつつ、私が支えるほうが早い。

問題は・・・彼女の人生から見ても、キングちゃんの性格を見てキレないか。暴れないかというのが問題といえる。

ヘリポスさんも察して苦笑しているし。まあ、うん。指導というか、下地作りは私達三人でキングちゃんと一緒に助けていけるけど、一番ダート、短距離に秀でていた人材がいるし。

「今、指導するのに一番いい人がいるんですよ。勝負根性も、ウララちゃんのダート路線を鍛えるにもばつちりな人材が。あと、キングちゃんも鍛えるのならカノープスに打診します」

「私ももう一度ウララちゃんの道具をチェックしますが、予備を含めて経費もらえるよう理事長サンに打診したほうがいいかと」

「分かりました! では、早速チーム予算でできないか打診してきます。よっしやあー!!」

私たちが協力するとわかるとうつきうきで立ち上がってミーティングルームを出ていく近藤さん。その後、ニアグループちゃんの怒声と張り手の音、近藤さんの悲鳴が上がった。恐らくビンタされて吹っ飛んだんでしょねえ。

「とりあえず、近藤さんの治療と、整体と食事の用意しましょうか」

「私は足型の再チェックと道具の用意ですネーそれと、私からも動きまますよ」

さてさて、カノープスはターボちゃんを起点に皆を強くしたし、道具のチェックとケアで体の悪癖を直した。今度はジューピター。頑張らないとなあ。

「ほーん。これがチーム・スピカね・・・」

おかあちゃん。私は今、目の前で殺されそうなほどの視線にさらされていきます。

「みんな、私の友達を紹介するわ。サンデーサイレンス、トレーナーとしての国際ライセンスもあるから指導はばっちり。美柚樹お姉さん、ヘリポスはちよつと席外しているけど後から来るからよろしく」

カフェちゃんそっくりの風貌を成長させているのに、ぎらぎらと金色の瞳が光ってすごく怖いです・・・でも、なんでか・・・こう・・・それも受け入れちゃえるのが不思議で。

「まあ、リボアの言う通り私がサンデーサイレンス。長いし面倒だからサンデーでいい。お前らこれからよろしく頼む」

「は、はひー！ よろしくお願いしましゅっ……あつづ……舌噛んだ……」

「よ、よろしくお願いします……」

私は応えようとしたら舌を噛んで、ウオツカちゃんも怖いのか声が震えているし、スズカさんは……あれ？ なんだかじつと見つめているし、ゴルシさんは普段のはじけぶりがなく首をかしげている。ジヤスタウエイさんはほえーと見つめているし、なんだか不思議な感じ。

で、素直に私と一緒に怖がっているのがスカーレットさん、テイオーさん。マックイーンさんは……うーん？ 気おされていない？

「アメリカの2冠。ドラマにも映画にもなった、あの時代を代表する戦士の一人だな。此方こそよろしく、サンデー……お？」

「おう……お前さん。名前は？」

「ツ……め、メジロマックイーンです」

「……あー……あの名家のね。どれ……」

トレーナーさんの言葉も無視してサンデーサンはマックイーンさんの方に近寄り、顔をガシリとつかんで、目を合わせて見つめる。

「お前さん……何を背負っている……名家にしちやあ……余裕もねえ……ぎらついてやがんな……」

「メジロ家に天皇賞の盾を・・・三代そろって天皇賞制覇を目指します。メジロ家にふさわしいものとして」

「いいねえ・・・ゴアのやつと違って最初からキマツてる。ボンボンのくせに覚悟しているやつは大好きだ・・・よろしくな。マックイーン。それとトレーナーに皆、さつさと練習始めんぞ。ほれほれ用意しろ」

「今日は私も併せをするから逃げ、先行でのやり方を教えるわ。体で覚えてきなさい。スカーレットちゃんは特に。私のやり方を覚えなさいよ?」

「は、はい!!」

「今日はウッドチップで走るのなら、短距離での加速の練習は私もする。お前らもみんな見どころあるのは分かるし、ついてこいや」

マックイーンさんから手を放してにやりと鋭い笑顔を見せて先頭を走っていくサンデーさんとリボーさん。私達も釣られて後を追ってウォーミングアップが始まる。

予想外の参加ですが、これは楽しみです!

「ふーむ・・・スカーレットちゃんは今後この戦法と、先行を織り交ぜる感じでいいのよね?」

「はい! ぜひともお願いします!」

「いいわ。それと、弟子も認定してあげる。代わりに、私と美柚樹お姉さんの部屋に練習終わりに来なさい。ケアとチエックしてあげるから」

「で、弟子認定・・・あ、ありがとうございます!!」

「おいスカーレット!? 抜け駆けはするいぞ! リボーさん、アタシにも教えてくれよ!!」

一通り練習が終わって一時休憩。約束通りスカーレットちゃんを弟子入り認定させるとすんごい目をキラキラさせて喜んでくれた。で、ウオツカちゃんも頼んで来たりでぎやいぎやい大賑わい。あー・・・可愛いわねえ。

「スぺ。覚えるのが早いな。大したものだ」

「あ、ありがとうございます!」

「毎日よく食べているらしいから、そのエネルギーをしつかり爆発させているのもあるだろうね。しつかり肉もついている分骨の負担も少ない。ただ、スズカもだが練習で必要なら手を抜いたり、走らない時間をフォームチェックと体幹に使い。たとえひびが入らなくても骨に負担はくる。常に全力でやり続けるのが美德じゃねえんだ」

「は、はい・・・」

あつちはあつちで、大勢に練習を教えつつもさぼるタイミングを入れると教える。まあ、実際にスズカちゃん、スぺちゃんは練習も人一倍するからねえ。二人とも片や編入。片やスランプだったのにそこから急成長してあの強さを見せたからねえ。サンデーはすぐ見抜いたか。

「はいはい。ウオツカちゃんも教えるわよ。取り合えずしたい戦術と、トレーナーともすり合わせて教えていくわよ。いいわね？」

「うつつす！ お願いします！」

「んふふ・・・さてさて、ウオツカは作戦も幅広くできる分どうしようかしらねえ」

「ライバル二人の師匠が同じってすごい話だなあ。ああ、リボーさん。それに関してだけど資料があるから一応それに目を通してほしい」

はいはい。二人の頭を撫でた後によいしょと移動してトレーナーさんの資料に目を通していく。ほんほん・・・

「ふーん。こゝ、ほんと色々なメンバーがいるのね。でも、ダート、短距離専門はいないと」

「まーアメリカと違って日本は芝が多いからなーで、だ。サンデーはさー焼きそばに興味あるか？」

「焼きそば・・・？ あーあのパンにはさむとかいうヌードルの」

「合って・・・いるのかな？ まあ、ゴルシちゃんの焼きそばはおいしいですよ。なんやかんやりピーターもいますので」

うーん。練習をして、変な練習をするゴルシにちよつと付き合っただけがわからないからしばいて続行させたが、どうにも気が合う連

中がスピカには多い気がする。

アメリカでもいつつも喧嘩腰だった気がするから、ほんと馴染むのが早いのが自分でもわからん……

「あ、あの……私、一時スランプの時期があつて……その時にサンデーさんの自伝に支えてもらいました……よければ、さ、サインをしてくれませんか？」

「あいあい。それくらいならな。アメリカでもすごかったぜスズカ。誰も影を踏めない、孤高の姫、大和撫子って大人気よ」

「あう……ありがとうございます」

そしてまあ、今を煌くスズカもまさか私のファンとは。アメリカじゃ……ウマ娘にも、人間にはもつと嫌われまくったりしたり、引退したらまた掌返しだったもんなあ……実家の方には今までの養育費と、治療費諸々含めて全部利子付けて渡してけりつけたからよかつたけど。トレーナーとしても鳴かず飛ばずだったし……

いつの間にやら持ってきた、カバーもしつかりした私の自伝にサインをかいて頭を撫でてやる。アメリカにはそうそういないタイプだなあ……

「スぺ。お前さん。私のコーナリングを覚えかけているな？」

「は、はい！ ターボちゃんもそうだったんですが、サンデーサンはとにかく上手で……」

「ウッドチップでダートにやや近い感覚で走れたからな。後でもう1本やる。お前さんは口でいうよりも併せで、身体に叩き込んだほう

が早い。私の背中追っかけて覚えやがれ日本総大将。あの戦い。アメリカでも盛り上がったんだぜ？ 本当の強さを見せるとかよーリボーやセク越えていつてみるってんだ!! おもしれえもん見せてくれてありがとよ」

「わわっ！ あ、ありがとうございます！」

実際、当代欧州最強なのは確かだが、うちの世代を知っているとビッグマウスだったからな。あれはみんな大盛り上がりした。スペの背中をバシバシと叩いて笑い飛ばす。こっからも面白いものを見せてくれそうだし、凱旋門賞に殴り込みに行かせられたら面白そうだけだなあ。

「あ、あの・・・」

「ん？」

「離してもらえますか？」

「ああ、悪い悪い。どうにも落ち着くもんで。マックイーンも気合は入れすぎんなよ。リボーのやつがダイエットに良い漢方を紹介するそうさ。そっちの医者に見せて聞いておけ」

「だ、ダイエットですって!?!」

おーやっぱ食いつくか。私も軽く調べたが、どうにも体質的にダイエットをするのはいいけど、ストレスであんまりうまくいかないというか、非効率っぽいからなあ。アメリカでも漢方などの東洋医学の注目度合いはすごいし、リボーから勧められたがほんと困っているように。

「ああ。アメリカは食生活もあってダイエットに力を入れていてな。クツソまずいし臭えし、散々だが、最近は漢方の粉末を包むカプセルも市販である。それ使って食前に毎日飲むようにしろ。そっちのお抱えの医者に許可取ってからよ」

「分かりましたわ！ 早速教えていただければ」

「あいよ。えーと・・・あつたあつた。この漢方。代謝改善と発汗効果、通じも良くなるから身体に余計な毒は余らない。食前でもいいらしいから、飯も楽しめるだろう」

んー・・・セクに勧められて、ついでに頼まれごともあったのだが、居心地いいなあ・・・トレーナー業。頑張ってみるか。リボーにできない部分は私が補う。ついでに・・・珍しく気に入ったマックイーンの夢の先も見て見てえし。

「おーいみんな、休憩終わり、第二ラウンド行くわよ」

「今度はダンスの練習だ。今回はちよつと大きく動く分、もう一度体をほぐしてくるように」

リボーとスピカのトレーナーさんも来たし、私も動くか。しかし・・・ダンスは・・・苦手だ。

私らアメリカさいくだ

くドルルフSideく

「喧々諤々。いやはやますます賑やかになってきているものだ」

「ええ……不屈の闘将・サンデーサイレンスさん。まさかアメリカの二冠ウマ娘がトレーナーとして来てくれるとは」

外から聞こえる悲鳴と怒号。なぜか一部は笑い声。それはスピカの練習している場所から聞こえる。新しい声の主は今朝がた理事長から伝えられた新しいトレーナー、サンデーサイレンス。

彼女の発する声とその威圧感。それに追い回されて逃げるという併せというよりは別の何かをしつつ涙目になっているメンバーもいるスピカ。ただ、それでもフォームが乱れれば、間違った走りをすれぱりボーが指導。危うい、けがをしそうなメンバーは美柚樹、ヘリポス、スピカのトレーナー三名が見極めている。

至れり尽くせり。しかもまあ、アメリカのタフさ、回復力を求められる。何より世界からウマ娘たちが集まって行おう一大イベント。アメリカの三冠。そのうちの2冠を手にしたダートの天才、脚や生活境遇のハンデを背負って尚それを手にした選手がアメリカ仕込みの、本人のびりびりと刺すような気迫にあててスピカを追い込んでいるのだ。

「ああ、どうしても三冠を目指すウマ娘が多い以上どうしてもトレーナーの指導の技術のノウハウ、進んで学ぶものも芝レースの方に寄りやすい。そこで国際トレーナー資格持ちかつダートの名手たる彼女が来て指導をしてくれるのはまさしく僥倖」

「はい。実際にダート路線の子たちは既にこの話で持ちきりのようですから。それとなんです。同時に現在美柚樹さん含めて現在4名で行動しています。しかも全員が腕がいい。チームを作らないかと、彼女たちの直接指導をずっと受けたいという声が多く」

「当然だな。あのレースでトレーナーとしての力量も見せつけた。理事長も特例で認めている以上、彼女たちは今後もあの人数で動くし指導する。才能を磨くうえでたまさしく最高の場所といえるかもしれない」

実戦経験豊富。自分の作戦で勝ち抜いてきたリボーとサンデー、そしてこの前特例で世界の料理人の格とで星3つをもらった美柚樹。遠征をひたすら繰り返すリボーの体調を管理し、最後の仕上げ、レースの作戦以外は全部を支えたヘリポス。

誰もが腕を認められるトレーナーであり、芝、ダート、距離も国も問わずにそのウマ娘に合わせたトレーニングを実施できる。しかもそれを4人でそれぞれの得手で支えるのだ。まさしく最高。誰もが彼女たちの元へと思う。

「ただ、それをしてしまうと今までは時間を気にしなければ指導と、ケアをしてもらえたウマ娘たちの多くがケアをもらえないと不公平が起こる。更には一流かつそれぞれの視点で外から見た意見を失いかねない。そうなればウマ娘たちのモチベーション、楽しみの喪失と同時にトレーナーの成長、刺激、負けないと発奮する材料を失うリスクが出る」

「間違いなくチームとして起こせばおハナさん、スピカの・・・変態トレーナーが4名いて、かつ互いに助け合っているようなものですね・・・今後最強となれる数名を生み出す代わりに、学園全体の士気は下がる、トレーナー全体の刺激も減ればのびる速度も落ちると・・・」

「勝負の世界だ。誰よりも先に100歩先に進ませる方が本来は正解かもしれない。だが、私としては学園全員のウマ娘、それに携わるトレーナー全員が1歩を踏める。それも早いペースで行けるようになるあの4人はこのままの体制がいいと思える」

なんだかんだ言っても、この発言は私が皇帝と呼ばれるほどの実力と実績。そしてその4名が生み出す次代の戦士たちを相手しても負けないと思えるからだと思う。彼女たちと付きつきりでこそ才能が目覚める子たちもいるかもしれない。でも、それでも私は出来れば学園全体のウマ娘たちが彼女たちのケアと技術の伝授を受けて前に進んでほしい。

そして、互いに成長してレースでまた磨き合ってウマ娘皆が思う存分結果を出し、スポットライトの当たる場面を。そのためのかきつけにあの4人はなれると思うのは考え過ぎだろうか。

「それに。だ、早速だが既にその1歩を踏み出すものが出てきたようだぞ?」

「カノープスですか? 確かに全員があれ以降GⅡ、GⅢ、地方交流戦とあちこちで遠征を繰り返して戦績とレース数を稼いでいるようですが」

「いや、先ほどハルウララに会ってね。近藤トレーナーやキングヘイローと一緒にリボーたちに何やらダートと短距離を教わると笑顔で話してくれたよ」

「それは……」

「おそらくだが、また何らかの形でチームに刺激を与えるのだろう。」

あの子はテストの時でもめげなかったのが印象的だったし、ふふ。砂の女帝が生まれるかもしれんな？」

チーム試験で3着と最下位。でも、負けん気を最後まで見せ、それ以降も常におれずに戦うキングヘイロー。最下位だがそれでもほかのメンバーと違い頑張り続け、ダートでも負けて尚ファンに笑顔を振りまいて厳しい世界に清涼をくれるハルウララ。それぞれ光るものがあるのは自分も感じていた。

近藤トレーナーもまだ経験が浅いが無能ではない。その三名がツインターボのように化けていくかもしれない。リギル、スピカ、カノープス、ここに食らいつく可能性があるのは現在桐生院トレーナーのいるシリウス、そしてN、まだまだ弱小チームのジュピターだが、どうなるか？ ふふふ。こうして化けるかもというのをじっくり想像できるというのをくれたあの人達には感謝ばかりだ。

「楽しそうですね。会長」

「もちろん。こうしてどんどんみんなレベルアップして、ライバルや、競い合える友が来てくれるんだ。ハルウララはダートだからないかもしれないが・・・キングヘイローは私たちの喉元に食らいつくかもしれないぞ？」

「そうならばねじ伏せるのみです。成長しようが、私も易々と負けるつもりはないので」

「そうこなくては。ああ。それと、嘆願書の方が通つてね。近々リボーさんたちが来てくれるそうだ。エアグルーヴ、最近君は疲れの色が見える。整体術と食生活で何か聞くといい」

おハナさんのトレーニングは食生活も管理するが、やはりそこは食

べ合わせ、相性や薬膳などプロの資格を持ち、食の面から長くウマ娘たちと付き合い、整体術も持っている人に助けを借りるほうがいい。

ストレスや疲労による肝臓、胃腸の弱りから食べることが出来ても栄養がうまく吸収できていないケースもある分そこはしっかりと。

「ありがとうございます。サウナとストレッチはしているのですが、お言葉に甘えさせてもらいます」

「そうかしこまらずとも。私も私とおハナさんで見えない視点やあのケア、食事が楽しみなのは事実なんだ」

頭を下げてくるエアグルーヴにいいと手を振る。実際、私も楽しみなのだ。あのふわふわのスポンジいっぱい広がるニンジンの甘い香りとそれを包む心地よい酸味の混じる果肉入りのショートケーキ、濃厚な、牛乳や渋いお茶と楽しみたいほどのプロテイン入りブラウニー・・・ふわふわの生地とトロトロのカスタード生地の織り成す食感のオンパレードなシュークリーム。

そして自家製ジュース・・・ああ・・・あの指導の日はおハナさんに申し訳ないが、練習終わりも含めて本当にやる気が上がるのだ。常に最上の状態であるべきなのだが、本当にワクワクしてしまう。

「実際皆さんからは面白い練習を取り込んでくれたりしますものね。私も待ち遠しいです」

「ああ。それまではサンデーサンがあいさつにくれたというあちらのニンジンジュースと、このブドウ。一粒どう？ エアグルーヴ」

『エアグルーヴのやる気が下がった』

・・・む？ このダジャレは受けなかったか。うーん。より勉強しなければいけないな。

くりボーSide

「ふっん！」

「ぴぎやあ!? いろいろいいだ・・・あれ・・・ほにやああ・・・」

「相変わらず美柚樹さんの本気の整体術はすごいですねエ。激痛からの気持ちよさへの変化がもはや化学反応ですよ」

スピカでのトレーニングを終え、合流したジュピターとのみんなと今後の方針のために相談ついでに晩飯食べて、その後に整体術でウラちゃんとキングちゃんのケアを開始。

「おーおー一流だのキングだの言う割には、体のあちこち変な鍛え方してんなア？ もう一本いくぞー」

「く・・・い、今はこっちの筋肉を鍛えているんですの」

「あ?」

「い、いえ・・・すいません・・・ん・・・」

美柚樹お姉さんが整体術でウララちゃんの身体からベキバキ、ゴリゴリと凄い音を出して激痛に悶絶するウララちゃん。先に整体を受けたキングちゃんはサンデーから針治療を受けさせている。出会い

頭に一流だとか高飛車具合にサンデーがメンチ切ったら涙目になっていたりで。まあ、ファーストコンタクトは悪かったけど、うん。どうにかなった。

「さてと・・・じゃ、近藤トレーナー、私達から提示できる道は二つあるわ。ウララちゃんは・・・聞けないでしょうし、キングちゃんも一応聞いておいてね」

「はい。よろしくお願いします」

近藤トレーナーも一緒に食事に舌鼓を打って人心地ついたらしく、しやつきりとした表情で正座して向き合ってくれている。うんうん。

「まずは、この学園に残ってレースをこなしつつ私たちの指導を受ける。これは基本ホームグラウンドで戦えるし、バックアップも重厚だし、ウララちゃんたちも安心できるでしょう。これは安定志向のほうね」

「ふむふむ・・・そうすると、二つ目は？」

「二つ目は海外・・・アメリカで戦うという選択肢。あちらにいる私たちの知り合いのダートの名手、指導者と一緒に日本以上に公式、非公式でレースが開かれるあの国で戦い経験を積む。アメリカのダートは土だから固い場所とかなら砂よりも芝に近いし、ウララちゃんの得意なレースで戦いつつ徐々に芝への適正も伸ばせる。それにアメリカの芝も固く高速バ場だから」

「キングのレースもしつかりできるし、日本に帰ってきててもその経験を丸々活かせる。ウララに関してもアメリカはダート王国・・・なるほど」

近藤トレーナーもやる気満々みたいで何より。あつちの場合はほんとはあちこちでレースを行う分一部のGI以外は参加条件も緩いのも多いし、二人の稼いだ賞金額、勝ち数関係なく殴り込み参加は喜ぶでしょう。話題にもなるし。

「で、まあどちらを選ぶ？ アメリカの方でも一応サポートは出来るけど日本で戦うことはできない。こっちでやるのならいろいろ気持ちも楽でしょうけど、私たちの助ける人達とも関われない」

「はふう・・・あー・・・ウララ。アメリカ行ってみたい」

「ん・・・私も挑戦するのはいいことですし・・・リボーさん、サンデーさんの認めるメンバーでのサポートは受けてみたいですね。あと、トレーナーもいい加減経験を積んでいく上ではいいのではなくて？」

「二人とも・・・わかった。リボーさん。サンデーさん。ぜひとも、アメリカ遠征プランをお願いします。俺たち三人のレベルアップのためにぜひ」

「お願いしますと頭を下げる近藤トレーナー。よしよし。それなら用意していたこれを出すか。」

遠征用にと学園に取り寄せていたうちの実家とアメリカのウマ娘、サッカー業界で開発されたアイテム。これを出してと・・・卵型の端末と、ワイヤレスイヤホン。そして充電器。

「それじゃあ、これをつけて頂戴」

「はいはい」

「うちの実家・・・ウマ・テジオ、アメリカの新聞王、そして私のいた事務所で合同研究、開発した翻訳機。これを・・・ちよつと失礼」

百聞は一見に如かず。経験をさせたほうが早いということ。三人の耳にイヤホンをつけて、端末のスイッチを入れる。で

「(イタリア語です) さー私の言っている意味が分かる?」

「(英語です) 聞こえなかつたら耳掃除でもしてもう一度聞きなつてな」

「おおー! それぞれの言葉の意味が分かるよ!」

「おお、よしよし。ようはまあ、このイヤホン、端末に入る音声が全部設定した国の言葉になるの。遠征をしても言語の壁で困ることもないし、その端末で翻訳モードを使えば自分たちの言いたい言葉を端末に話せばあつちの言葉に翻訳して返してくれるわ」

今度は端末に私がフランス語で話してみれば端末から日本語に翻訳して返される。買い物、手続きなども問題ないようだし、相変わらずいいもの用意してくれるわねえ。

「文章を書きたい際は端末に文字を打ち込むか書き込んで翻訳させるようにすれば文章も翻訳されて出てくる。契約、誓約書なども問題はないだろ。ま、そこはサポートに当たるメンバーがしてくれるだろうが」

「そういうわけ。じゃ、これを3名分。それと、充電器と予備の端末。イヤホン。使ってちょうだいね」

「あ、ありがたいのですがこれお値段とかは・・・」

「ああーそれね。試供品つてのと、トレセン学園でも遠征用のメンバーには経費などで落す。貸し出すように打診しているの。で、そのテスターが三人ってわけ。だからガンガン使って、感想とか、改善点を述べてくれればそれでよし。遠慮せずに使って?」

実際、私はマルチリンガル。通訳もいたりで大丈夫だったけど、その費用とか、手間とか考えたらこれの方が手軽だし今後も使えるしねえ。ハリボテ先輩たちもそこら辺苦労したそうだし、これで楽になればいいけども。

三人は喜んで端末とイヤホンなどを受け取って嬉しそうにしつつも近藤トレーナーはしつかり説明書などを読んでいる。通訳モード、言語の切り替えとか色々あるものね。

「ああ・・・そういえば、わたくしたちを現地で支えてくれる方というのは・・・その、セクレタリアトさんとか、イージーゴアさんとかですか?」

「セクはリムジンのやつと一緒にロボット映画の撮影してるから今は無理だし、ゴアのやつは教えんのドヘたくそだから無理。だから代わりのやつらにしている」

「でも、二人にはぴったしの人材なのは確かね。ああ、失礼をしたらやばいから気を付けてね。下手すればアメリカで走れなくなるかもだから」

「どんな人物をつけるつもりよ二人とも・・・ほら、晩酌とつまみ。近藤さんもヘリポスさんも一献どうぞ」

「やや、ありがとうございます。いやーありがたいことです」

この後は大人組で酒盛り開始。子供組はジュースで乾杯。いやーサンマとビールの組み合わせはいいわね。しかも小骨が無いからもりもり進むし、焼き魚とビール最高。

一週間の間食生活とサプリメント。整体で体の調子を整え、基礎的なトレーニングをしてからアメリカに遠征。・・・さてさて？ 人材は文句ないのを用意したつもりだけどねー

サンデーの一日

「んおお・・・くふうあ・・・ああ・・・ねむ・・・」

「はっああ・・・あー・・・おはよう。サンデー・・・ほれ・・・起きるわよー」

「うるせえー・・・ああ・・・」

朝。夜明け前に目が覚める。が・・・いつも朝は機嫌が悪い・・・これでも大分ましなもんだ。起きるたびに仕事がねえとか、キャンセルをもらってむかつく心配をしないでだけ天国だぜ。

アタシの認めるリポ・・・こいつに目を覚ませと言われ、起き抜けに冷えたコーヒをそばに置かれ、私もそれを飲むことでスイッチを切り替える。

「おはよう二人とも。ご飯はもう少しで出来るから走ってきなさい。ほれ。これー」

「んぐう・・・あー・・・サンキュー・・・」

「ありがとう美柚樹お姉さん。それじゃ、いつてくるわー」

軽く歯を磨いていると、既にエプロン姿で料理をしていた美柚樹姉貴と、相変わらずどうやって調理をしたかわからないほどのいい香りを出しながら厨房で私らの食事を作ってくれている。

にっこりと笑い、優しくスポーツドリンクを薄めたものをそばにおいて、綺麗なジャージを渡してくれるのでそれにそでを通す。そうして口の中をゆすいでドリンクともって外に出ればつめてえ空気が、ア

メリカよりへばりつく空気を感じながら歩く。

「おはよー三人とも。元気みたいねえ」

「おはよ。ふわあ・・・律儀なもんだねえ」

「おはようございますリボーさん、サンデーさん♪ よろしくお願
いします」

「おはようございます」

「おはようございます。これからよろしくお願いますわ」

そうして歩いて寮を出たすぐ横の歩道に待っているのは・・・リボーにべた惚れしたらしいダイワスカーレット。私とリボーになついているサイレンススズカ。そんで、なんだかおもしろく気に入ったメジロマツクイーン。

こいつら三名と私らで朝の軽いランニングをやっている。スカーレットはリボーと併せと逃げのノウハウを学ぶため。スズカはいつもの朝練だが賑やかなほうが楽しいということで混じり、マツクイーンは食事制限をしすぎない減量とスタミナ作りのため。まあ、三者三様。それぞれ向上心があるのはいいこって。

「んじゃーいくぞー・・・レース直後なのもあって疲れを出しすぎないようにな。後、雨で地面も濡れているし」

「今日はジグザグダッシュは出来ないわねえ」

「坂の練習に良いのですが、まあしょうがないですよ」

「私はみんなで走れるだけでも」

「ですわね。ああーサンデーさん。リボーさんと貴女の教えてくれた漢方。実際に良いようですので朝夜飲ませていただいています。感謝しますわ」

で、まあそこから走るが、あえてリボーから言い始めたことだが、会話をしながら1列になってみんなで走る。

一つはほかの歩行者の邪魔にならないため。そして、後は走りながら考えて対応するために会話を続けていく。要は走りながら考えて会話をする。マルチタスクの練習と相手の息、走り方に合わせてペースを自然と作ることを養うためだろう。

「お？ そいつはよかった。アメリカじゃ肥満がやばくてな。こういうアジアの技術を求めるやつは多いのさ。スズカ。そういう割には目がぎらついているが駄目だぜ？ 走り過ぎちゃーな」

「ええ。主治医もこれならと言ってくれましたし、糖質の吸収を抑えてくれるので頑張ればよりスイーツを食べられるかも・・・」

「は、はい。軽く、手を抜きつつ合わせる。ですよね？」

「ほんほん・・・靴とか、新しい服が欲しいねえ」

「ええ。ウオツカはかっこいい重視、基本アバウトな時があるのでリボーさんと是非・・・」

「いいわよ？ んじゃ、買いに行きましょう。この前レースに勝利したご褒美ってことで」

マックイーンはしっかりと抑えて、でもウキウキと今後のスイーツ巡りの野望に嬉しそうに手を振る。ピッチを上げ、スズカは・・・ほんとうマ娘の走りたいという本能が形を取ったような子だから制御して逃げの練習と余計な負担を抑えさせる。こんな大人しくかわいい顔してんのにな。

で、スカーレットはこの前のレース・・・あーGIオークス？ だったか？ まだ中等部だからなあ。この肉体で・・・そのレースで勝利したということドリボーへのデートの誘い。見事成功して喜んでいる。来年のヴィクトリアマイルにも優先権がもらえたそうだし、んまー・・・いいカップルかもな？

確か、安田記念もツインターボが大差&レコード獲得で手にしたりで大化けさせているし、ナイスネイチャも目黒記念で6バ身差つけての快勝。私らの世代全員がナンバー1といえるやつの弟子入りに慣れたスカーレットは幸せだ。

「よし。私たち専用の道路に移るわよー息を2回入れつつ走って戻る。私はピッチ、ストライド、中間を入れて走るから併せて走るよーにー」

そして少し・・・まあ、時速40キロくらいで走りつつ息を入れる練習をする。ペース崩しを学ぶためのものでもあるが速度は出るの。私ら専用の自動車道にでてそこから走り再開。この後も一通りコントロール型の逃げの練習。それに並行しての呼吸の入れ方を教えたところでゴールについて解散。私とリボーは朝一番の楽しみを味わうために社員寮に戻る。

「はくはぐ・・・んっめええ！ こいつはうつまい！ おかわりだ！」

「はいはい。んふふ。これをどうぞ。サラダも食べてね？」

「私もお代りーすっかり箸の使い方に慣れたわねえ」

朝になれば朝食。美柚樹の作る料理は、最高レベルの。二冠を手にした時に手にした賞金で食べに行った高いレストランがかすむレベルだ。

親子丼は卵がまろやかで甘いうま味を米と絡めて広がり、玉ねぎの甘味とも共存してほくほくの熱を口の中に包んでくれる。そしてそこに来る甘じよっぱい。鶏肉のうまみと醤油のうまみがかみ砕くたびに米と卵、玉ねぎの甘さに混じる。

それを引き立てるのは海苔とゴマ、出汁。そのままでもうまいだろうこの親子丼の味のグレードを上げていく。引退してからしばらく食べる量は抑えていたが、これは食べすぎてしまう。

今まで食べた野菜は傷んでいたと思うほどに新鮮でうまい野菜とにんじんスティック。程よい塩味とカツオの風味豊かな味噌汁。茶碗もかみ砕きそうな勢いで食べつくし、人心地つく。

「ご馳走さま・・・で、今日はどこ行くだっけ？」

「今日はリギル。ただ、授業のある日だし私はグラウンドの整備とか手伝いつつ、データ収集してくるわ」

「私はケーキの仕込み。あとは飴玉の作成ね」

「ふーん・・・なら、私はちよっと呼ばれているからそこ行ってくる

わ」

食べ終われば予定の確認。美柚樹は基本料理人。トレーナーとしてのケアの技術を使っていくための用意。リポーターはまあ、雑務というか、園芸員しつつ授業の際に走るウマ娘たちの様子を見て情報収集としやれこむ。まあ、それでついでに指導する際に悪い癖の強制とか特性を見極めてくるのだろうか。

私は・・・まあ、生徒に呼ばれているのでそっちに行く。レース明けの長めの休養ついでに少し興味があるのかなんとか。私に興味を持つとは変わり種だが、まあいい時間つぶしだ。

二人もその予定で問題ないと確認を終わり、私らは片づけを終わって部屋を出る。そう言えば、最近やたらこの部屋にウマ娘もトレーナーも入り浸るもんだから学園から大きい寮室に移すかもと言っていたな。その際は引越し手伝わんとなあ。

「ふむふむ・・・トレーニングのやり方で骨折の負担も減る・・・か」

「ああ。格闘家の手足なんてのはそりやあもう骨梁も隙間がない。一種の結晶といってもいい。その分固いが衝撃を逃し切れずにぽつきりと言つちまう。だからカルシウム摂取と補助で骨を強くし、そしてそれを支える、衝撃を受け止める助けをするインナーマッスルを徹底的に鍛えるのがいいわけ」

「練習を押しさえろというのも？」

「やりすぎれば骨に負担がかかりすぎる。肉をつけるのもいいがベストウエイト、そしてフォームを奇麗にしてい、それをブレさせな

いようにしたほうがいい」

朝方。何やら怪しい研究室らしい部屋に通されて話す目の前の女。アグネスタキオンだったか。まあーほっそい肉体。それなりに鍛えているのは流石トレセン学園の生徒といえるが、それにしたって細かい……

「さすがウマ娘のトレーナー、レースの実地体験と知識を持つての言葉は助けになるね」

「お前さんはそういうが知識を蓄えてどうする。その爆弾を解除するためか?」

「……気づくかい?」

「トレーニングの話をしている際に足を落ち着きなく動かしていたからな。痛みはなくても自覚をしているところか。優秀だな」

脚の肉はいい。細いが余計な筋肉はついちやいねえ。レースの戦績も見ればなるほど強い。でも練習もレースもさぼる。研究が好きなのもそうだがそのの行きつく先は常に早く、強くいられるための肉体改造。そのための新薬の製作。アメリカでもそういう分野に進むやつらが多かったから察しがついたが。

「なら、サンデー氏。聞かせてほしい。私はどうしていけば速さを追い求められる? 貴女はどうにも他人の気がしない。カフェにそっくりなのを差し引いてもだ。ぜひアメリカの。私たち日本よりハードな3冠争いで2冠を手にした貴女の見解を教えてください」

「まずは……寝やがれ。それで、トレーニングの時間は短くてもいい、インナーマッスルと体幹、フォームチェックを主にして密度の

高い練習をしろ。睡眠不足とストレスは筋肉も弱くする。そこで体調を整えてから走る練習とスタミナ増強。マスクトレーニングをすることで短時間で鍛えて実験時間を確保だ。お前さんのトレーナーと私の言った内容でできるか相談しろ。いいな？」

さらさらとトレーニング内容を書き込み、段階的に。そんで一日に一回はこれを食べというもの。それと安眠に使えるアロマやらを書き込んでおく。

「ふむ・・・わかった。これを参考にしよう。しかし、リボー氏とは別だね。あの人は併せを良くするというが」

「それをしたらお前の足やべーだろうが。私が教えたメニューはアイツの練習方法とより良いレース向けの肉体を作る基礎の基礎だ。ただし、これを高密度でこなしていけるようになれば下手な練習より効果がある」

「ありがとうサンデー氏。普段の練習だとこのようなじつくりとした時間は取れないからね。助かるよ」

「その後により筋肉と走り、スタミナの下地を作る。後は勝手にしろ。あーそれとな。そのお前が作っているとかいう薬。無害なものってならまずは受け入れやすく、万が一に備えるも薬を服用させるようにしたい。お前さんが無害だと言っても体質様々。阿保すんじゃねーぞ」

ひとまず、その後は私が現役時代に使っていたトレーニング器具や鍛錬方法、タキオンの現在の薬品を聞いたりして、最後にプロテインバーを土産に、脚を触られた。「これで引退して時間がたつとは思えない」と言われたが、今も鍛えていりやお前さんもそれくらい普通に維持できんぞ。

なんでかねえーこの学園。打ち解けやすというか、変に気が合う連中が多い気がするぞ？ 年下の娘ばっかりなのになんてか。

「ん……ハロー……ああ、姉御か。あの二人はどうだ？」

昼前、あつちだと今は夜中。既にキングハイロー、ハルウララを預けてしばらくたつ。日本じゃさして噂にならないが、既に重賞を幾つか制覇。二人とも適正距離も伸ばし、ハルウララに至っては芝への適正も手にし始めたとか。

逸材を渡せたと安心していたところに来た姉御……マンノウオーさんからの電話だ。同に声色はいい感じであつちも問題ないようだ。

「ほんほん。アメリカでの金額も含めれば十分にGⅠでも多くに参加できるようになった。で？ 一応アメリカの三冠に出させるのか……？ ああ、そっちは難しいと」

まあ、ケンタッキーダービーをはじめこの三冠は世界中からウマ娘たちが集まる。20人以上で戦うのだって割とある。その中にまだウララを入れるには早いと。妥当ともいえる。

「ただし、準三冠の路線で進ませる。……は？ ああ、面白くなるかもだからテレビを見てねっておい……切れた」

言いたいことを言って電話を切る姉御。しかしまあ……あの路線に進ませるとは。アメリカの準三冠レース。7月はじめからの8月はじめ1か月で行われるレース。アメリカの伝説的ウマ娘、マンノウオー杯、セクレタリアト杯、ハリウッドリムジン杯三名の名前を持

つレース。ただ、このレースは夏場に行われることや伝説的メンバーの名前を持つものとあつてこつちもかなりの人気を誇るし、注目度も高い。

「どれほど仕上げたのやらね。さてさて。本当の一流となつて戻ってくるか、日本から見させてもらうかねえ」

暑い季節の中で疲労抜きのスパンも短い中で行われる激闘。まさしくタフであり力強く走り抜けられることが求められるレース。そこで日本の春を見せ、桜吹雪をアメリカのダート場に見せられるか。知らずとにやにやしていたのは内緒だ。

「フジキセキおらああ!! 脚を使うタイミングが遅え!! んな加速で二段ロケットなんぞ言われてんじゃねえぞ!!」

「んなつ!? あ、く・・・!」

「そうだ!! そつからもつと踏ん張つて地面砕く勢いで蹴り抜け!!」

「よーしこゝまでー! いったんクールダウンはいるわよー」

放課後までのんびり筋トレしていて、その後はリギルのやつら、フジキセキら数名と併せをしていたが一度クールダウン。

「おいフジキセキ」

「なんですか？ リボーさん」

「フォーム崩れていた。ちっと肉が固いのとずれがあるかもしれない。美柚樹に整体今すぐしてもらえ」

「わかりました。ありがとうございますすりボーさん」

「気にすんな。また必要なら併せて教えるからよ」

水を飲みつつ一つ息を吐いてぼんやりと歩いてクールダウンをする。その後ろで「ぐはあっ!?」っていう声とグギリと音が響いたがまあーしばらくは悶絶と気持ちいい声上がるんだらうなと無視。

その一方でおハナさんにリボーがきてカメラ映像を見せてほしいと頼んでいた。どうにもシンボリドルフとナリタブライアンの走りで違和感を覚えたか。

「んー・・・ヘリポスに道具を見てもらうのと、この二人は今日はフォームチェックに移行したほうがいいのかもしれないね」

「分かったわ。なら、二人にはフォームチェックとチューブトレーニング、もしくはダンスの方に時間を割きましょう」

「デスネー・・・お二人とも、フォームは一見綺麗ですが、中敷きと蹄鉄のすり減りにそれぞれ差があります。恐らく以前怪我した場所がまた無意識に力み過ぎているかもしれないデス」

「では、私はフォームチェックに移ります」

「ああ・・・ありがとう。それじゃあ私はチェックを手伝うよ会長」

しつかりと練り上げられたフォームチエックが崩れているか。ちよつと気合が入りすぎた状態が続いたか、興奮気味かねえ。後で聞いてみるか。

残りのメンバーは・・・んー・・・リボーが指導して、美柚樹、ヘリポスもいればおハナさんも教えている。私はすっかりマッサージで骨抜きにされたフジキセキの方に行くとするかね。

「おおー・・・蕩けた顔してんなあ。どうだったよ?」

「ふあ・・・足に少し、疲労がたまりすぎている。固くなっていると
言っていました。多分、脚をしばらく力み過ぎたのかもしれないで
す」

「こつそり練習とかしてないよな? あと、これ使え」

私の発言にばれましたかと苦笑いするフジキセキにカバンから持ってきたものを渡す。

「これは・・・足つぼマット?」

「寮長としてのストレスもあるだろうしな。事務仕事しつつも自分の部屋で軽く踏みながらほぐせ。風呂の入る前後でもいいし、ストレッチをほぐせる。力みから来る気持ちの落ち込みや不調も敵だ。それとまあ、疲れのケアもできるツボも足裏にある。やるよ」

「ありがとうございますサンデーさん」

身体を起ここして水を飲むフジキセキ。いい顔だ。しっかしまあ、リギルのメンバーはほんとエリート、学園の顔だっけのお高くまと

まったやつがいねえのもすげえわ。

チームメンバーが寮長、生徒会を務めて、更には日本のウマ娘の顔ともいえるメンバーが勢ぞろい。それでいながら気さくだし、石頭でもねえ。

自由の国でありながらウマ娘ではカーストが見えるうちの国とは大違いだ。うちのひいばあ様だったかも苦労したみたいだしなあそこから辺。

「今後、私らが来ること以外でも美柚樹に見てもらおうといい。あの人のケアと食育での腕は私もちよつと見たことがないレベルだ。それと、靴もあとで変えられるのなら変えたほうがいいな。パワーとフォームに靴の方がついていけずガタが来てる。もう新しいのに変えな」

「分かりました。ふふ。よければこの後も指導願えませんか？もつともつと面白くレースを、みんなを盛り上げるためにも」

「いい心がけだ・・・つと・・・うっし。そんじや、動くぞーせつかくほぐれた関節や筋肉もこれ以上は固まってしまう」

ぼんやり二人で夕日を眺めていたが、この心地よさにかまけてこいつを鍛えるのをさぼるわけにはいかねえ。肩を叩いて私も身体を起こして次のメニューに移る。

アメリカよりもずっと心地よい。何度目かもわからんその気持ち思いながらほかの連中を鍛えるために時間いっぱいまでリギルのメンバーをしごいた。

で、この後に皆整体術でバキバキと体をほぐされて、今夜用意され

ていたパフエをみんなで食べて幸せそうな笑顔で解散。愉快でいい日々だった。

女王様とのデート

「ふわあー・・・かふ・・・よし・・・時間通り・・・うん・・・うん・・・」

朝、いつもより少し早めに起きて身だしなみを整え、正直何度目かのチェックかわからないけど鏡の前で髪型と顔を確認する。

「汚れも無し・・・髪艶よし・・・うん・・・うん・・・」

レース前、インタビュー以上に見た目を気にしてしまうが、本当にこればかりはしょうがないのだ。自分のミスであの人の評価を落とせない。ミスパーフェクト、緋色の女王と世間は呼んでくれるが、パーフェクトはきつとあの人にあると思う。

その背中を追いかけて、教えをもらえ、こうして今日は一緒に出掛ける。舞い上がるのも無理がないはず・・・よね？

「よっし・・・行くわー!」

準備は大丈夫。香水もいいものをつけた。どこもおかしくはないはず。それを確認し終わると白のワンピースとそれに合わせたサンダル。薄麦色の帽子をかぶってからまだ爆睡しているウオツカを見る。

こいつも普段はかっこいいウマ娘になるため、アタシに負けないうめにと日々の鍛錬を欠かさない・・・欠かさな過ぎて授業のトレーニングがぬるいときぼって自主練に励むほどだ。

その練習の虫が爆睡するのは・・・アタシが今日デートする相手。リボーさんにしごかれたからに他ならない。

こいつと一緒に弟子入りしたのだが、アタシはいわゆるコントロール型の逃げ、先行を鍛えてもらっている一方で、ウオツカは追い込み、追い込みに近い差し型を鍛えてもらっているのだが、なんやかんや繊細な部分がある。リボーさん曰くウオツカは「器用な不器用」

アタシはこのスタイルをきわめてスズカ先輩とは別の逃げでねじ伏せるがウオツカは器用な分どれをしようか迷う部分があるゆえにその戦法とパターンを散々に叩き込みまくった結果、最後はへばって一人じゃ動けないほどになり、風呂と食事を終えれば爆睡。目覚ましもしばらく放置したが起きる様子がない。

「・・・まあ、ぐっすり休んでいなさい」

リボーさんに何度も戦術を叩き込まれ、実践するためにターボにリボーさん、サンデーさんと併せて散々走り回らされていた。オーバークを越えたところで美柚樹さんたちのケアと料理で回復したとはいえ今日は爆睡、筋肉痛は確定なこいつを見つつ私は部屋を出る。

リボーさんとのデートを差し引いても久しぶりの買い物だ。心がウキウキしてしまう。

「あらー早いわねえ。スカーレットちゃん」

「い、いえ！ お待たせして申し訳ないです」

待ち合わせの場所に行けばリボーさんは既についており、黒のへそ出しの服に、ロングのジーンズときまっている。細い腰の括れとその肢体、美貌は周りの人達も男女問わずで見るほどで注目の的になっていた。

私よりも早く来ていて笑顔で手をひらひらと振って迎えてくれるのが嬉しく、私も釣られて笑顔で返す。

「大丈夫よ。私も今来たばかり。それじゃーまずは荷物にならない小物から買いに行きましようか」

「あの、それはいいのですが眼鏡とかで隠したりしないでいいのです?」

「ここらへんはウマ娘の子たちも多いでしょ? 意識しなければそこまで目立つほどじゃないわ。ささ。エスコートしますよ女王様」

リボーさんと気づかずともそのスタイルと顔で注目を浴びているんだけどなあと思っていたら私の手を引いて手の甲にキスをしてくれたのだ。

世界のスター、ウマ娘として、レースで勝利を目指すものなら憧れないのが嘘なほどの英傑がアタシに……!

「ひょえっ!? い、いいい……!」

「うふふ。かわいい。それじゃ、えーと……まずはたしかい小道具、アクセサリーショップがあったからここに……」

にっかりといたずらっぽい笑顔を見せつつ私の手を引いて歩きだすリボーさん。アタシは……あー……もう、思考が定まらずにそ

のまましばらく呆然としていた。

「あーあったあった。このティアアラシリーズ。スカーレットちゃんのものでよさげなものがあったからどうかって」

「オリーブの冠に・・・花冠・・・赤、青のリングのものもあるの？
ほえー・・・」

「スカーレットちゃんと同じものもあるわね。あらあら」

さつきまで真っ赤になってあわあわしていた可愛いスカーレットちゃんと一緒に移動してついたのはウマ娘たちの勝負服などのアクセサリー、そして小道具などを売るお店。海外の名デザイナーの作品なども置いてあるということであたりのようだ。

私達イタリア、欧州周辺のウマ娘のレースではオリンピア、そしてローマなどの影響もあって優勝トロフィーや盾以外にも冠などをもろうこともある。そしてそれをつけてレースに臨む者もいれば冠に合わせた新しい勝負服を新調することも。

日本だとそういうノリは薄いと思っていたのだが、スカーレットちゃんやマチちゃんなど帽子やティアアラの人気も伸びてきている様子。

「あ、あったあった。このティアアラどうかなーって」

「オ리콘ベルトティアアラ・・・って高!? ちょ、ちよつとこれは・・・」

「ああ。今日は私の奢りだから気にしないでいいわよ?」

で、せっかくの愛弟子なのだ。ターボちゃんたちには専用の靴と技術。もろもろを渡していたがこの子たちには何もしていないなーということではプレゼント。大粒のルビーが3つはめ込まれたプラチナのティアアラ。デザインとその名前も私の知る名匠で間違いないので即買い。

「い、いやそれでも・・・」

「こういう時は大人に頼りなさい。デザインも悪くないんじゃない?」

「もちろんいいものですけども・・・」

「なら決まり。ま、飾るなり使うなりは任せるわー」

「ありがとうございます! 大切にします!」

それ以外でもオリーブの冠とかも買ってから今度は髪の毛としっぽの手入れに使うブラシの購入。私とスカーレットちゃんは髪を伸ばしている。その分髪の手入れには時間がかかるし、冬は静電気の問題もある。なのでまあ、豚の毛を使った猫のブラッシングに使うもの人間、ウマ娘用のものを数点購入。

あとはアロマでウオッカちゃんにも合いそうなものを数点選んで次の場所に。

「んー・・・この靴もおしゃれ・・・あーでもヒール高いなあ」

「ヒールが高いのは怪我もあるかもだし、後は壊れちゃうしねえ。あ。これはどうかしら？」

「あ・・・確かにいいかも♪ ふふ。じゃあこの靴と。後は・・・外出用の予備で・・・」

今度は靴屋さん。なんやかんや普段は制服やらジャージ。靴も運動靴か学生の靴。とはいえなんやかんや外出もあるしウマ娘はアイドルの面もある。学園でもアイドルかつ優等生のスカーレットちゃんだし、色々外間も気にしているんでしょうねえ。

でも背伸びをしすぎて変に奇をてらうのは避けつついいものをちよいちよい。ここら辺。ウオツカちゃんと言い合いをしつつ逆の声を聞いたりして選択するから磨かれているのでしよう。

「じゃあ、これを買ってと・・・あ。そうそう。よければちよつとクレーンゲームしに行かない？」

「大丈夫ですよ？」

「ありがと。それじゃースピカの皆の人形集めに行きますか」

「うふふふ・・・これで芦毛コレクションコンプリート・・・後は・・・あ、ゴルシちゃんとマックイーンちゃんの運動着バージョン！ これ取ってゴルシちゃん！」

「飽きちゃったでゴルシ・・・」

「うーん。あそこで取るのは後にしましょう」

「そ、そうですね。そのほうが」

何やらゴルシちゃんとジャスタちゃんがかバン一杯に芦毛のウマ娘のぬいぐるみを取りまくっているので私たちは別の台に移動。

スカーレットちゃんも「下手に絡まれたら何が起こるかわからない」と言われたのでそれに甘えつつ、スピカの皆のぬいぐるみの取れそうな台を探す。あ。ちなみにカノープスの方は既に保存用含めてコンプリートしている。

「さてと・・・じゃあまずはスカーレットちゃんから・・・」

「あ、あのー・・・」

「ん？ どうしたの？」

「良ければですけど、あれも取ってくれないです？」

ちよつと台を変えるだけでスピカ、カノープス、リギルのメンバーのぬいぐるみがわんさかある台があるのだからやっぱりこのチームの人気がかがえる。どれから行こうか。そう思っていたらスカーレットちゃんが私の裾をひいて隣の台を見ると。あつたのは私とサnderーのぬいぐるみがある台だった。「世界の名バシリーズ」と銘打たれている。

あーそういえば前に許可したわね。ダテ・ナオトバージョンまでご丁寧にあるのだから驚く。後、何気にヘリポスまであるのはいいのだろうか？

「いいわよ。ふふふ・・・今度セクレタリアトとか、うちの世代たち

もどんどん出てくるかもねー」

日本の技術は高いし、いやはやどうなることかと思いつつお金を入
れてクレーンを動かして私たちのぬいぐるみをゲット。

「よしよし・・・ほい。スカーレットちゃん」

「ありがとうございます！ ぜひとも部屋に飾りますね！」

「ありがと♪ さてきて・・・ぬいぐるみの方はと・・・」

喜ぶスカーレットちゃんを見つつ今度はスピカのメンバーのぬい
ぐるみを集めにかかる私。私たちの世代のぬいぐるみを頑張つて集め
ていたのでクレーンゲームの腕前はそこそこあると思う。

で、まあいくつかのぬいぐるみを取っていたのだけど、妙に視線を
感じるようになってきた。ざわざわと何か噂しているのと、スマホと
私を交互に見比べている感じ・・・あー・・・おそらく私に気づいた
人が出始めたか。ぬいぐるみとかあるから私の特徴を見たうえで判
断しやすいし、ここに来る以上意識しちゃうわよね。

ウマ娘のぬいぐるみ、グッズ関連のクレーンゲームだらけだしこ
こ。

「よし・・・最後にスペちゃん取れたし。帰ろっか。荷物も多いし」

「え？ あー了解です。じゃあ、私がこれを・・・」

私が目標をこなし、アイコンタクトで周りを見ろと言いつつ荷物を
まとめればスカーレットちゃんも意図を理解してくれたので一緒に
そそくさと移動。私はともかくスカーレットちゃんにもあれこれと

付き合わせて疲れさせるのもねえー

その後は一緒にレース生活送っているためつたに味わえないジャンクフードに舌鼓を打ちつつサンデーが以前これを注文した際に「これでLサイズとかふざけんじゃねー!!」とアメリカンサイズとジャパンサイズの格差に怒ったのを思い出したり。

美柚樹お姉さんの料理のアイデアになるかなと人參ケーキを買いに行けばマックイーンちゃんやんが店の前で懊悩している様子をサンデーがびっくりするくらいに穏やかな顔で見ている様子を見たり。うん。賑やかな時間だったわ。

「えへへ・・・」

「ちえーいいなあーリボーさんからのプレゼントだらけか・・・」

デートが終わって、リボーさんと選んだティアラと靴、ぬいぐるみを並べて悦に浸る。隣でウオツカが何か言っているが気にしないし気にならない。

「そういわないの。アンタこそ昨日は散々にしごいて戦術を叩き込んでもらったんでしょ？ それこそ何百万も積まないともらえないものよ？」

「そりゃそうだけどさー・・・あー・・・でもなー」

気持ちは分かる。世界のスターとの二人きりの時間。しかもアタ

シも見惚れる美貌。ゴールドシップに負けないレベルなのだ。それが優しく過ごしてくれるのだから。普段は練習でビシバシ指示を飛ばすし、やりたいことをやらせてもらえつつもそのトレーニングで必要なゆるみがあればすぐ。

そんな人との時間。羨ましがれる声も今日は流してあげよう。それにまあ、抑えるための材料もあるのだ。

「あんたも今度頼めばいいわよ。それにほら、これ二人からのプレゼントよ」

「え？ おおっ!!? いいのか!?!」

「二人からむしろ喜んでくれるのならって」

そういつてウオツカに渡すのはサンデーさん、リボーさんのぬいぐるみ。サンデーさんのサイン。そしてデビュー当時の勝負服の一つである黒のロンググレザージャケット。

本人曰く「お古だが軍に頼んだ特注品だし頑丈。バイクのる際にも使えるからやる」とのことです。中々いいデザインをしている。

「ヒヤッホー!! これいいなあ、いいなあ!! いい感じに年季が入ってヴィンテージ、ダメージの入った感じがいいじゃんかよ!」

「大事にしなさいよ? サンデーさんの名前もジャケット裏に刺繍されているし、多分百万はくだらないものよそれ」

「もちろんよ! アメリカの英雄の一品だぜ? 大切にするって」

子供のようにはしゃぐウオツカを横目で見つつ、ティアラとリボー

さんのぬいぐるみを見る。

もうあの人のように無敗ではない。まだ世界に飛び立てるほど実
力があるとも思っていない。だけど、あの人たちと、スピカの皆と強
くなつてアタシもいつかあの人たちのように世界にも名をとどろか
せる選手として立ちたい。今日の一日は改めてそう思えた。

勇者か変態か

くアグネスデジタルSide

「はあ・・・はあ・・・ああ・・・」

今、トレセン学園社員寮のある部屋を目掛けて走る私はごく普通のウマ娘。

しいて違うところを上げるとすれば私以外のウマ娘に興味津々のオタクってところかな。

今日は私の性癖を一層狂わせてくださった・・・もとい目覚めさせてくれた方々からの写真撮影許可と練習同行許可をくれたウマ娘とトレーナーさんに出会いに行くところ。

あともう少し、社員寮に来るとトレーナーの美柚樹さんが手を振ってくれています。ああーもうこの人についている料理の香りとウマ娘の香りだけでもああーたまらねえぜ！

「おはよう。デジタルちゃん。大丈夫かしら。早起しちやっただ」

「おはようございます美柚樹さん！ いえいえ！ 推しのぬいぐるみに祈りをささげて、今日という日に備えて体調を整えたので問題はありません!!」

「そう？ なら一緒にご飯食べましょうか。まだまだ皆寝ているけどそろそろ起きるだろうし」

美柚樹さんのケアと体の違和感を治す技術。料理はトレーナーを

目指す私にとつても理想像！ いつかトレーナーになった際は担当ウマ娘の胃袋をつかんでリボーさんのように何年も想われるように・・・あ、ダメだ妄想しただけで鼻血が・・・

いかんいかん。料理に私の血を混ぜるわけにはいかない。イタリアの宝玉にアメリカの英雄にそんなものを入れてしまうのはファンとして失格。気持ちを抑えるために深呼吸をしながら美柚樹さんの後についていく。

我慢だ。我慢すれば世界も認める美食を味わいながら伝説たちとの朝食とできる。何なら走れる。そう。我慢だアグネス。耐えるのだ理性。

「よし。それじゃー入って頂戴」

「はい。失礼しま・・・」

美柚樹さんたちの、最近は3名以外にも多くのウマ娘、トレーナーたちが押しかけて相談したり、止まったり、晩御飯を食べたり、ケアを受けるために来たりとで狭くなったので大きな、それこそ6人くらいで暮らすような大部屋に移動したのだが、部屋に入っただけに寝室に視線を移せばそこには・・・

ベッドの上でメジロマックイーンとサンデーサイレンスさんが互いに肌着で幸せそうに抱きしめ合って熟睡。

隣では布団の上でリボーさんを中心に右にダイワスカーレット、左にサイレンススズカ、そして頭に抱き着くツインターボ。

あ、あかん・・・鬼コーチと優等生。芦毛と黒と見えるほどの青鹿毛。名家のお嬢様とどん底からなりあがってきた女傑の歳の差恋愛。

そしてもう一方はイタリアの無敗の英傑と学園のアイドル。儂げな美しさをもつ美少女に元気印でもう純真マシマシな大逃げの勇者。全員が逃げで戦えるという師弟関係のあられない関係と夜・・あ
ばばばばばばば

はー？　なんですかこれ？　立場も何もかもが真逆な年の差カッ
プリングに師弟関係のハーレムですかあ？　しかもスレンダーとグ
ラマラスな肉体の対比に甘える顔に落ちて着いた安らかな顔にあけど
なさを見せる顔の詰め合わせ。なんですか？　フアンを萌え死させ
るつもりですかいくらでも推せますありがとうございます。もう・
あ・・あ・・あ・・あ・・あ

「ん・・・にゅ・・・ふ・・・もう・・・朝・・・ね・・・」

「かふあ・・・今日もまた・・・走るか」

「ほわあ”あ”あ”あ”ア”ア”ア”ア”ア”ア”ア”
!!!!!!」

カメラのシャッターはばつちり切りつつも、私は早速尊死をかまし
た。我が人生に一片の悔い・・・な・・・し・・・かふ。

「あーびつくりした・・・で？　落ち着いたか？」

「手当ありがとうございます！　そしてサインも感謝します。もう
私一上手を洗いません!!」

「いや、流石に洗ったほうがいいわよ？　お姉さんみたいに料理で

トレーナーを助けるのなら手は清潔に。エチケットよ」

「は、はひー！ しつれいしましたー！」

尊死した私を介抱してくれたみんなと一緒にまた走って、旭に輝く色とりどりの絹のような髪にしっぽ、踊る肢体をもう思う存分堪能させてもらい、会話で耳を癒されてもらった後は学園でも週一しか味わえない最高の料理を味わいながらみんなでテーブルを囲んで談話。新進気鋭の最高峰のウマ娘ちゃんたちと伝説たち、そして私の目指すトレーナーの在り方を見せる人と一緒でもう・・・ご飯一つ食べるたびにいつちやいそうですよえへへへ・・・

「スズカ先輩。今夜も一緒にここに泊まります？」

「ええ。そうするわ。スペちゃんもグラスちゃんと一緒に実家に帰っているようだし、その・・・ここは落ち着くから」

「ほーんと寂しがり屋だなスズカは。ま、それならそれでしつかりほぐしてやるよ。お前さんは早すぎるのと背丈もそれなりにある分足の負担がな」

スピカのとりとめのない会話に少し投げやりだけどしつかり状態を覚えたうえでケアもしつつ気遣う姉御肌の美女。はふ・・・これだけでもご飯が進みますなあ。そのそばではすぐに腕が触れそうなほどにいるマックイーンさん。はふう・・・んー・・・極上。

「なーなーシシヨー!! ウララとキングって、いつ戻ってくるんだ!?」

「えーと・・・確か8月くらいだったかしら。マンノウォーさん、フオグたちが参加させるレースがそれで最後だって」

「ロストインザフォグの旅番組好きなのよねー衛星放送だけどレース場の解説と歴史も教えてくれるから学園のテレビで見れるけどついつい録画しちゃうわ」

「わたくしもいずれは海外のレースで戦うのも積み重ねになると思っていますし、あの方の番組はちょこちょこ見えていますわ」

おおつと？ これはいい情報。アメリカに遠征しているウララちゃんとキングヘイロー。あのふたりが戻ってきたときはぜひぜひ成長した二人とアメリカのウマ娘ちゃんの事を教えてほしいもの。

「あ。そう言えば近藤さんから何やらテレビを見てみてほしいと言っていたわね。えーと朝のニュースを・・・ええー?」

「わーお。あの二人、鍛えるついでに何してんのよ」

「姉御。やることやってんなあ」

テレビを美柚樹さんがつけると朝のニュース番組と映画の宣伝。アメリカで作られた巨大ロボット映画。日本のロボットアニメ、特撮へのリスペクトバリバリの映画。そこに移っているのはアメリカのウマ娘の最強であり映画スターのセクレタリアトさん、ハリウッドリムジンさん。これまた私のスイッチに入る英雄。なのだが私も見逃さない。

宣伝の映像の中に移っているエキストラ、ちよい役の中に近藤トレーナー、ウララちゃんにキングがいることに・・・！ まさかの学生で映画デビューですか？ 選手のみならず役者デビューとか色々ぶっ飛んでいませんかねえ。

近藤トレーナーは基地内の食堂の職員。ウララちゃんは売店の看板娘。キングはサブオペレーター。おおう。これ、後で掲示板が盛り上がることを待ったなし。スクショ画像とかをもとに作品のネタがはかどるはかどる・・・

「あ。そうだわ。明日以降から芝の張替えとトレーニングマシンのメンテナンスを行うそうだから今日の夕方のトレーニングはウッドチップ、ダート、もう一つの芝のレース場になるみたい。今日は個別指導でタイキシャトルちゃんとの訓練にターボちゃんは行くけど、残りはどうする?」

「私はターボちゃんの付き添いついでに二人の指導。マイラーだしうまくいけばアメリカとかから招待を狙えるくらいに仕上げたいわ」

「私はスピカだな。スズカにウオツカ、マックイーンやゴルシたちをしごいてやらんとな」

「私も今日はサンデーさんに鍛えてもらいまーす」

「私も・・・ふふ。いい練習になるし」

今日は大体スピカとタイキシャトルとのトレーニングに分かれる・・・うーん・・・どっちも捨てがたい。どっちにも行けるようになりたい。具体的には分身の術が欲しい。うーん・・・うーん・・・あ。そうだ

「スズカさん。よければですが・・・私に今日のスピカの練習風景か、何かほほえましい光景を写真に撮って送ってくれませんか?」

「え? いいわよ? それじゃフリーフリーで互いに通信できるようにして・・・出来たわ」

「ハウツ!? はあふ。あ、ありがとうございます」

あー夢なげな美人ウマ娘ちゃんの微笑みが天使すぎます。これはもう今日の朝ごはんのメインディッシュですわ。デザートの激甘にんじんジュースと羊羹の前に腹いっぱいになってしまいそうです。

それをこらえて私たちは食事を終えてまた練習に移っていく。今までにない以上にやる気が滾っている。今なら遠距離でも走れる気がする!!

「イエース!! 私の勝ちネー!」

「くっそー! 負けたあー!! でも、すっごく楽しかったし強かったぞタイキシヤトル先輩! 練習ありがとうだぞ」

「ノンノン♪ 貴女のような大逃げ相手にどこまでやれるか、勉強させてくれて大助かり♪」

「はああく尊い・・・先輩と後輩の友情・・・しゅきい・・・」

マイル戦での模擬戦。2000メートルからならターボちゃんの上だが、マイル。短距離になるとタイキの方が上手のようだ。接戦とはいえ差を開けられての敗北をしたターボちゃん。だけど悔しがりつつも素直に明るい笑顔でタイキの手を握り、タイキも笑顔で握手をして満面の笑顔を見せる。

私？ 私も頑張ったけど二人には及ばず。だけど二人の激熱なバトルを間近で見たくてどうにかギリギリターボちゃんに1バ身で済ませた。

チームが違えども、ライバルだろうともバトルが終わればすぐに握手を交わす青春真つただ中のスポーツマンシップを目の前で見れた私はもう・・・ああ・・・鼻血が出そうやべえ・・・尊すぎて召されちゃう。

「ん？ デジタルちゃんもカモーン!! 練習終わりのハグよ♪」

「むぐっおお?!? ひよおおおおおお・・・」

「むぐっぷあ!? もみや・・・おお・・・柔らかい・・・ネイチャたち以上・・・」

それを眺めていたらタイキからの抱きしめられて長身美女のハグで胸に頭をうずもれさせる。ふおおお・・・！ アメリカンカウガールの甘酸っぱいすっごいい匂いと胸のメロンの感触がジャージ越しでもわかる！ ああー私にもこうしてくれるタイキの感触を生で味わえるなんて最高・・・！ 今日は超ハッピーデーですぞおおおおおおお!!!? ヒョアアアアー!!

あ、あふう・・・ああ・・・幸せ。私、この暖かな母性の海の中で幸せで昇天されます。どうかありがと・・・

「おおっとーそれは待った。興奮してやべー顔しているけど、ダウンがまだよ。ほれほれ。ダウンのために風呂場目掛けてジョギングー。柔軟してからサウナとストレッチして、今晚の晩御飯行くわよー」

「OK！ 今日にはんじんハンバーグステーキデース!!」

「タイキちゃんには五段重ね、そしてフルーツパフェもあるそうよ。さー帰るぞー!」

昇天する前に私をタイキから引きはがしてから戻してくれたリボーさんの説明を聞いて私も踏ん張って戻る。サウナ・・・湯の中のウマ娘ちゃんたち。滴る汗・・・うえへへ・・・まだだ・・・まだ終わらんよ私。

この後、そりやあもう素晴らしい時間を過ごし、スズカさんから送られてきた今日のスピカの写真を送ってもらい、ネタも家宝の一つにするものがいくつも手に入りましたよ。いやあ・・・たまらんね。

よしよし・・・このデータは・・・うん。写真は3枚焼き増しして・・・ああ。うふふふ・・・これは・・・このベストショットはナイスですズカさん。これはみんなのデータ&写真集が出来上がる。非売品の最高のもの。数日後にはこれで作った予備を推しのぬいぐるみの神棚のそばに添えて一緒に拝むのだ。

「ふわぁ・・・でも・・・もう寝なきや。ちゃんとトレーニングできるように・・・」

しかし、良い時間。もう休むことにして今も尚何かのデータとにらめっこしているタキオンの邪魔をしないように片づけを済ませ、寝られるようにする。

「おやすみなさい」

「ああ。おやすみ。デジタル」

明日はどんなウマ娘ちゃんの尊い光景が見れるのか。ワクワクしつつも、心地よい疲労に身をゆだねて私は眠る。女神様。明日もどうかウマ娘ちゃんたちが元気でありますように。

逃げ切りシスターズ&対策班

くりボーSide

「さてと・・・今日はみんなで改めて逃げのスタイルとその完成度を見るために来たけど、大丈夫?」

「いいぞ! ターボは何時でも行ける!」

「問題ないわりボーさん」

「はい。私も・・・」

今日はスピカは練習休みだったのだけどトレーナーさんから2時間だけの短時間練習と言われて許可。内容はまあ説明する必要はないけど逃げ、大逃げをするメンバーに改めて逃げのスタイルを説明。その利点がどこにあるか。逆に欠点は何かを教えることに。で、まあ私はスズカちゃん、ターボちゃん。スカーレットちゃんに教えるつもりだったけど今回はゲストも追加。

休日だったのにスピカ大体3つに分かれて練習したがるからみんな元気ね。オーバーワークにならないよう気をつけないと。

「マックイーンちゃんもうまくいけばスタイルにできるだろうけど、大丈夫?」

「ええ。その・・・サンデーさんが『お前の肉体なら逃げもできる』ということに参加して来いと言われまして」

「そうね。スカーレットちゃんに近くなりそうだしぜひ見ていきなさい。やり方によってはだけど・・・マイル、中距離でも強くなれる

わよっ。」

「本当ですよ!?!」

「出来ると思うし、まあそれに関してはみんなの走りを見てからね」

もうお前らくつついちゃえよ。そう言えるほどに仲良しイチャイチャしているサンデーから背中を押されてきてくれたマツクイーンちゃん。最近は漢方と寝る前のストレッチを仕込んだおかげでダイエットも無理させないようにしているし肌艶もいい感じ。ストレス溜めこまないようにできているからよかったわ。

「じゃーまずは4人で軽く走って一回につき一人ずつそれぞれの逃げのスタイルをする。まずはターボちゃんから。加減難しいだろうし最初だけは全力でね」

「よーし、全力で行くからみんなよろしくな!」

「ターボの逃げか。あの全力スタイルは見ていて痛快よね」

「よろしくねターボちゃん」

「よろしくお願いしますわ」

気合は全員入ったのでさっそくレース場に立たせてスターターとゴール係に。あ。ちなみに今回は抑えさせるとはいえ足の負担軽減を取ってウッドチップの練習場。

「いえーいりボーさん。ゴルシちゃんも参加していいか?」

「ん? いいわよー」

「よっしゃ。それじゃ合図を出してくれ！」

「じゃ、良いスタート」

急な飛び入りが参加して、まずはターボちゃんがいつも通りの大逃げ。残りは抑えめの速度で先行の逃げ。ゴルシちゃんは原付で追いかけてメガホンもってみんなに檄を飛ばしたりするけど、まあいいか。ちようどいいから数人で走っている分複数人分のプレッシャーというかそんな感じで。

「お疲れ様。それじゃーそれぞれのスタイルと距離、利点を言うわよ」

それから三人の逃げをそれぞれ軽くやって見せて、ゴルシちゃんの焼きそばと美柚樹お姉さんの特性ドリנקを渡して小休憩。というよりはほぼほぼ今日の練習は終わり。みんなレース出た後なのに練習したかったのでスタイルの再確認に至る。

「まずターボちゃんの大逃げ。スタートからずっと休みをほぼほぼ入れずに走り切る。これで怖いのは相手に後半追いつけないかも、そのまま逃げ切られちゃうかもと思わせる。それが大きいわ」

「ふふーん。追いつけないくらいに走ってゴールを独走。それが最強だぞ!!」

「でも、ゴール前は今でもへろへろですわよね。今回も1600でしたけど」

「そう。ターボちゃんはもう少し息を入れる練習をするのが課題。コーナリングでうまい具合に息を入れつつ脚を溜められるようにできれば走れる距離をもっと伸ばせる。今は2000メートルがベストだけど、息を入れられれば2500メートルでも戦えるわ」

ターボちゃんの大逃げは行ってしまうえば目の前でエンジンフルスロットルなマシンが走るようなもの。それは速度以上にその姿勢。本人の気迫が回りにプレッシャーを与える。このままいくんじやないか、逃げ切っちゃうから早い段階から捕まえないといけない。そう思わせていくのが凄まじい。

差し、追い込み組さえも巻き込んでレース全体をぶっ壊す破滅的逃げ。それはターボちゃんが速度とスタミナにものを言わせて常に走り続けて、息を入れる練習をしてもまだ常に全力疾走を続ける癖が抜けないせいでもあるけどもう少し息を入れる時間を増やしつつ出来れば有馬記念などの2000メートル以上の大舞台でも戦える。

「息を入れる練習をもう少し頑張りましょうか。出来るのなら、凱旋門賞にも推薦してあげる」

「本当か!? ターボが凱旋門に!？」

「ええ。私連覇しているし、レースの走りを推薦材料にすれば行ける行ける」

「つ、つまりターボが世界一の舞台に：よおーし！ トレーナーさんともっと練習頑張るぞ!!」

「やりすぎないようと、疲れ感じたら私らに相談しなさいよ〜現在の適正距離は1400〜2200ってところね」

私の弟子だしいいだろと言つてもいいけど、そこは実力で。実際世界でもターボちゃんは注目されているし、今年一年は国内で実力を磨いてから遠征すれば面白くなるだろう。

「で、次にスズカちゃん。貴女は……まさしく大逃げの完成形にして到達点の一つ。ぶっちゃけ、欧州の芝に慣れさえすれば速攻で各地で戦える。あつちは土地が広い分、直線のマイルとかあるし、何だったらドイツは直線でひたすら長いレースもあるからむしろあつちの方が思いきり楽しめるかも」

「ありがとうございます」

「ただ、スズカちゃんは手足が長いし背丈もある分小柄なターボちゃんと違って一歩一歩の負担が大きいし、故障の不安はある。今後は直線で思い切り離して、カーブの際は勢いを抑えて遠心力を抑えて足に負担をかけすぎたりとか、踏ん張りすぎる機会を減らしていきましよう」

「は……はい……」

あー耳がしゅんとしなつて顔も落ち込んで……大丈夫大丈夫。ちゃんといい所もあるから。

ポンポンと頭を撫でると顔をあげてくるスズカちゃんにっこりと笑う。

「ただ、その背丈を活かした走り。カーブを抑えていくぶん直線は思いきり、何の駆け引きも考えずに先頭目掛けて走りなさい。そうすれば貴女はそうそう負けやしないわ。ターボちゃんよりも長い距離で戦える。マイルとか、短距離はターボちゃんだと思っただけ」

「ん・・・ありがとうございます。リボーさん」

「適正な距離は20000〜25000。30000もやれるけど、速度を落とすのと息を入れるのをやって念入りに調整しましょう」

よしよし。いい笑顔だし、しっぽも嬉しそうに揺れちゃってーおハナさんはスズカの才能を知りつつもスランプから抜け出せてやれなかったととぼやいていたけど、この子はしようがないわ。性格も気質も、脚質も全部全部が大逃げ一本の極振り。私でもちよつと記憶にないくらいの特化型かつ天才肌だし。

基本それ以外は噛み合わないという具合でしかもまあ、大逃げの怖さと不安を感じず、息を入れるタイミングもすぐ覚える。・・・滅茶苦茶なのよねえ。色々。これで中等部の時天然コメディアンな具合だったってのがまた。

「最後にスカーレットちゃん。貴女の逃げはいわゆる・・・」

「いわゆる・・・?」

「うふふ♪ 捕まえて御覧なさ〜い♡ スタイルな逃げよ」

「んぶふつ!! ぶはははは!! ら、ラブコメかよ!! あーははははは!!」

「わ、笑わないでよゴルシ先輩!! そしてリボーさん!? 何でアタシだけこんなコメディなのよ!!」

うーん。わかりやすく説明と、ちよつと空気を変えようと思って言ったのになあ。ゴルシちゃん爆笑してくれているし、マックイーン

ちやん笑いこらえているし。あ、ターボちやんとスズカちゃん吹き出しちやった。

顔を真っ赤にして素を見せてくれるようになってくれたスカレットトちゃん。いやーでもある意味これが一番えげつないかつ先行策に近いくらい負担を抑えられるスタイルだしいと思うけどなあ。名前。

「まあまあ、聞きなさい。スカレットちゃんは先の二人と違っていわゆる大逃げを打たないスタイル。で、更に二人よりも肉付きもよければ骨格もいいから肺活量もある。身体もしなやかだから省エネ最高率で戦える肉体があるのよ」

「え、えへへ〜いやー・・・そ、それほどでも」

「ちよろいな。で？　そこがどう強いんだ？」

「つまりはスタミナもある、速度も出せるのに追いつけるかも。という距離を常に保って相手をすりつぶし、最後で残した力をもって突き放す。逃げの基本形で相手をとことんペースを乱しつつ潰せる。それをしやすいの」

ターボちやんやスズカちゃんの場合はどこかでつぶれるかも。周りが焦って追いかけたところで抜け出せるかもと考えるウマ娘も多い。だから力を蓄えて一か八かにかけていくウマ娘もいる。

ただ、逃げの中でも距離を作りすぎずに先頭を立つ。そうになると先行組は自分が前に出てペースを作れるかも、ブロックされないように前に。仕掛ければ勝てるかも。そういう心理を誘発しやすい。先頭に立てるかも。そういう誘惑が前に出たい、レースに勝ちたいウマ娘の心に入り込む。そうなって脚を使えばまた突き放される。そのう

ちに脚を使い切って負けている。

そうでなくてもスカーレットちゃんは先行も使える分前に出てペース崩しを狙えるから強い。安定感のある戦い方かつ心をへし折りに行けるのが強いのだ。私も現役時代似たような手段使うときあったし。

「乾坤一擲を狙う相手に戦術をブレさせるのを狙えるし、自分でレースを支配するからスタミナ配分もやりやすい。ターボちゃんとスズカちゃんの大逃げはスタミナの不安と迫ってくる相手を認識しづらいデメリットがある。それを抑えつつやれる。負担も調整できる分怪我しにくいのもスカーレットちゃんの逃げなの」

「ようは永遠においでおいでして、気が付けばへとへとになっていてスカーレットは元気ってことだなー」

「特化のターボさんにスズカさんと違い、高水準でバランスのいいスカーレットさんというわけですか」

「あーなるほど。でもリボーさん。その名前は・・・」

「似合っていると思うんだけどなー。スカーレットちゃんは中距離が主戦場ね。スタイルもあるんだけど2000以下は短いし、2500以上は長いと思う」

スカーレットちゃんみたいな美少女にそれされたら私もお姉さんもホイホイついていきそうな気がするし。で、これらの逃げを見て、付き合ってくれたマックイーンちゃんの方にも振り返る。

「で、マックイーンちゃんもだけど、スタミナにものを言わせて序盤の逃げをしてから息を入れ、ロングスパートをかけて戦うやり方で逃

げをできると思うのよ」

「わ、わたくしもですか？」

「そ。それにだけど今売り出し中の大逃げ・・・じゃない。爆逃げシスターズやターボチャン、スズカちゃんはテイオーちゃん相手なら普通にやり合えば今は全員勝てるし、マックイーンちゃんも同様。そこに逃げの引き出しもさらにあればライバルのテイオーちゃんもコテンパンにねじ伏せられるでしょうねー」

「そ、それは本当ですか!!? テイオーさんとの勝利も・・・!」

「ええ。私が保証する」

テイオーちゃんたちの弱点もおおよそ分かったし、私の引き出し、レース経験からも分かってきたしね。それに、爆逃げシスターズも大逃げを選んでしっかり勝てる。華のある勝負を見せる時点で才能も並じゃない。体も心も強い。スズカちゃん同様に海外の直線レースでぶつちぎって戦えるだろーなー

わくわくした表情のマックイーンちゃんだけどこれ以上の練習は今日はなし。

「じゃ、この後はダウンして、サウナで汗流してからスイーツ食べに行きましようかあーく近所の商店街の喫茶店。美味しそうな新メニューあるし、私の奢りよー」

この後はみんなと一緒に商店街に移動。ゴルシちゃんの変な着ぐるみつけて移動していたのはスルー。後でジャスタウェイちゃんがどうにかしてくれるでしょ。

〈サンデーサイレンスSide〉

『・・・ねじ伏せられるでしょうねー』

「ま、妥当な判断だわな」

「えー!! ボクが負けるわけじゃないじゃないか!! 無敵のテイオー様だよ? もう二冠も手にしたし、骨折もしないで済んだしやれるって!!」

「ふーむ・・・あー・・・納得」

「うーん・・・? なんでだ? サンデーさん、ジャスタ先輩」

今回はスピカを二つに分けて野外トレーニング組と私ら室内トレーニング組に分けての練習。その際に逃げ、スタミナお化け組と競り合いの天才組で分けることに。

リボアのやつに頼んで練習中の映像をカメラ仕掛けて音声もきかせてもらったが、ほんと逃げの天才多いな此処のトレセン学園!! で、まあ流石にテイオーの弱点も気づいていると。目の前でうるさく騒ぐ二冠の王者様は元気に言っているが、わからねえか。

「んーまあ、お前らの言う競バはよ、瞬発力や駆け引き、いつ息を入れるかいつ仕掛けるか。ここの要素が強いだろ?」

「そりゃーそうさー! そしてそこでの競り合いならボクは負けないよー!」

「もちろん。競り合い叩き合い、ドッグファイトならテイオーは強い。レース勘、駆け引きもいいし²、³ハロンの仕掛けならすげえものがある。マツクイーンは瞬発力がないからなおさら最後の競り合いならテイオーが10回やって8回は勝つだろう」

「まー実際テイオーの脚はすげえからな。地面を跳ねるように走るし」

あの柔軟性で体格に見合わない力強さを地面にしつかり伝える独自かつ素晴らしいフォーム。バネもしつかりあるし競バにおける強さでいえば天性のものがあるだろうさ。

「ただな。マツクイーンやスズカ、ターボはそういうものじゃない。勝負のレギュレーション。土俵自体が違うんだよ。スタミナと速度でギリギリほかのウマ娘より1センチでも前に出て勝利。じゃなくて1秒でも早く勝利。駆け引きも呼吸をいつ入れるかくらい。マツクイーンに至っては自分のスタミナで自分以外全員をガス欠にさせてレースではなくただのウマ娘のかけっこにするそういうものだ」

「ええ。ですからテイオーちゃんやウオツカちゃんが仕掛ける脚を残させずに自分は加速し続けて最高速度のままゴールをする。しかも早い段階で仕掛けていくぶん周りも変に焦って仕掛けられこそゴール前で沈没と」

リボーはふざけた末脚と心肺機能でお構いなしの逃げと差し。スズカは大逃げ一本で最強に。ターボは最初から全力ゆえにペースもへったくれもないからみんな潰される。マツクイーンは気づけばスーツと前に出ている、最後はみんなの視線を釘付けにする。一騎打ちをさせてくれない。自分が主役だと美貌と強さを見せつける。競り合い押し合いなんてするもんか。自分のペースに付き合ってしまった

えというスタイル。しかもそれでごり押せるものを持っている。

ゴルシの場合はそこに加えて後半の追い上げでみんなを驚かせつつ、更に末脚と時にぶつ飛んだレースをするから強いのだが・・・スタートが出遅れるのと、あいつレース中にエンジンがかかることがあるくらいには気分屋だからなあ・・・

「実際、前の模擬レースでも併せでもテイオーやりづらかったろ？脚の筋肉の質もあるんだろうけど変にペース乱す相手に合わせて急激に動きを変えたら気持ち以上にスタミナが削られるし、お前さんは小柄な分肺も小さい。ため込めるスタミナの下地に差がある」

「あー速筋と遅筋。そして体格か・・・」

「ターボちゃんは普段から限界まで追い込んでいる分心肺機能が高いし、リボーさんにしごかれてさらに強化。大逃げだからペースも基本変えずに済むと」

「駆け引きを考えて脚を残す計算も全部知ったことかとやられるとその分テイオーは立て直しをできても身体がついていけない感じだな。後、ペースが崩れた時に一気に脚が疲れを自覚して落ちやすい」

「むー！じゃあどうすればいいのさ！相手が土俵違いでレースをしてくれないのならサンデーさんはどうするの!?!」

カッとなったテイオーをジャスタが抑えつつまあまあという。ウオツカも抑えてくれてるしそろそろ話すかねえ。

まあ、いうこと自体はシンプルだけど。

「そりゃ、要所要所で消耗を抑えるのと、気持ちを思いきり爆発させ

る。闘志や負けん気、ファンや仲間からの期待。いろんな気持ちを取りつたため込んでぶつけて戦う。そのほうが思いきり脚も速くなるしな。それとマックイーン、ゴルシの弱点というか、スタイルゆえの穴を突く」

「スタイルゆえの穴？」

「ゴルシちゃんとマックイーンちゃん……あーロングスパートゆえにコーナー前からスピードを乗せていくぶんどうしても内回りがうまくできないから……」

「そ。大外回りになってしまう。その分こっちはコーナーで脚を残しつつスパートするための溜めを作っていく」

「えー……それっていわば基本じゃないの？」

あの速度を出しつつもコーナリングがうまいスズカ、ターボはほんとはすげえんだよな。しかもターボは小柄だけどスズカはそれなりに背丈もあつたうえでそれをできちやうし。

期待外れと言わんばかりの表情を見せるテイオー。ウオツカもえ？　みたいな顔しているが……お前さんらなあ。まあ、今まで自分の強みを押し付ければ勝てた相手ばかりだっただろうしなあ。

「そうだ基本。だが、相手のロングスパートに必要以上に付き合わずにしつかりと脚を残して戦う。焦りを抑えて修正をしつつも自分のペースを維持する。それは難しいぞ？　レース場を知り、ベストなやり方をしつかりとらないとだからな」

「私もゴルシちゃん相手には脚を残して戦うのに苦労しましたしね……勝つときは大体みんな驚く顔をするかへ口へ口かの二択でし

たし」

「そういうものなの〜?」

「そういうものだ。特に長距離だところら辺の駆け引きがやばい」

ステイヤーたちの指導、そしてレース後の振り返りなどをするのだがほとんど情報量と判断がえげつない。距離がある分作戦を立て直し組み直しを3つ4つするのはあるし、息をいつ入れて休むというのも中距離以上に長い分間違えれば撃沈待ったなし。

それこそテイオーみたいにガラスの脚だと変なところで負担をかけすぎれば骨折さえも普通にあり得る。

「中距離ならテイオーが有利だろうけど2200以上だとマツクイーンががぜん有利になる。お前さんらが今後ライバル対策を練るのなら逃げを打つ相手には息を入れるタイミングを見切つての距離を詰める戦術眼。ロングスパートをかけられようともひるまない胆力。そして省エネのテク。これらを磨いていく。スタミナもこれから夏だ。ちようどいい」

「夏合宿ですか? 今年も海でするそうですが」

「ああ。海でのトレーニングは加速力もスタミナも着けやすいし関節や骨の負担も減らせるからな。チームないだろうとバチバチに決する分常に意識しつつ練習して互いに高みを目指せる。それに、あれもあるからなおさらな」

「あれ?」

「まだ内緒だ」

リボーと姉御たちに黙ってもらっているからなー気づかれてもおかしくないが、今はどうか大丈夫そうだし。ただ、この内緒ごとはテイオーの性格を考えればばれづらいし、わかれば多分いい刺激になる。もちろん全員にもだがテイオーは特に。

「ま、あいつらが戦術を磨くのならこっちは鍛えつつもそれに惑わされないようにする。俺らもマシントレーニングは終了したし、肉でも食いに行くか。私も給料貯まってきたしよ。それからウオッカ。お前に追い込み型の戦術を教えたのがわかったか？」

「ご馳走になります！ ええ。分かりました。あいつの逃げに翻弄されないため・・・オレが変に迷わないようにするためですね？」

「んふふーそれと。多分だけど余計な邪魔が入らないようにするためじゃない？」

「焼肉！ ボクも食べるよー!!」

とりあえず私らも練習を切り上げて昼飯に移る。この人数でスペのやつもないならまあ・・・大丈夫だろきっと。今日はグラスと一緒にリギルで練習しているみたいだし。

で、ジャスタウェイよ。お前ほんと鋭いな。ゴルシの読めないレース運びとか世界で戦った分読めるようになったのか？

「そうだ。レースでお前とスカーレットがかち合えばスカーレットは逃げ、お前は追い込み型の差し。スカーレットの前は軒並み翻弄されて、お前に追い越されて心身すりつぶされて最後は一騎打ちに持ち込みやすくなるだろうさ」

「前で自分のペースで逃げつつねじ伏せるスカーレットちゃんと、後ろで貯め込んだエネルギーを爆発させてそんなの効かないと迫るウオツカちゃん。絵になりそう♪」

「タイプも違う分ますますライバルとして映えそうだねー」

「おおお！ カツケエーじゃねえか！ よっしや！ あいつに今度も勝ってやるぜ!!」

こつちもこつちで収穫はあったようで何よりだと感じ、リポーターがいる商店街の焼肉屋さんにも私らも移動。ウマ娘用食べ放題のメニューを頼んで私はメニュー外のビールで昼から一杯。日本に来てからというものの米と肉の相性に気づいて太らないように調整すると運動を気をつけねーと思う程だが、やめられない。

酒が入ってきたところで私がかまんしてその分を足に乗せて走れとテイオーに教えていたからその戦法はどうやって覚えたのと聞かれ、現役時代に私に我慢を教えたトレーナーとの大騒ぎとか、レースの際にあった当時の放送での対決とか評価でブチぎれてそれを糧にしたと話した際みんなドン引きしていた。

「映画は嘘じゃなかった」とか「特番って抑え気味だったのか」とか言われたが・・・いやー大統領選挙に出てすぐ当選できると言われたセクもいるしそんな多いぞうちの国は。

トレセン学園御用達商店街

くキングへイローSideく

「ふう……いい仕上がりにじゃないですか？ 前よりへばるまでの時間が伸びていますよ」

「あ、ありがとうございます……ぐ……」

「おいおいキング。無理はするな」

「だ、大丈夫ですわ……」

カラツとした、日本よりも乾燥した熱気の中身体が限界を迎えて思わず座り込み、胃の中からすっぱいものがせりあがりそうのを抑えつつ、どうにか体を起こす。近藤トレーナーが心配そうにしています。がもう何度も見た光景でしょうと目でいいつつそのまま日陰に移動して休む。

アメリカに来てはや二か月……アメリカ全土をまたにかけた条件戦からGⅠレベルの短距離、マイルまであらゆる場所で走り尽くし、その合間合間に来る地獄のような特訓。

フォグさんも一緒に練習に付き合うのだが自分にまけない走りを見せて尚へばらない。一緒にアメリカ横断レースの旅をしているというのに疲れの色を見せない。リボーさんやサンデーさんもそうですが……これが本当の一流。まさしく時代の頂点に立つものなんだと、一流と口にしても憚れない怪物とはこういう者なんだと思い知らされる毎日です。

「じゃー3日後のGⅡレース、私の名前を関したレースには出走登

録してますので、限界まで追い込みますし、その後にある10日後のGIレースも出ましようか」

「ちよちよちよっ!? 待つてくださいいフオグさん!」

「なんですく?」

「さ、流石にこれ以上は...! キングももう3週連続の短距離レースで優勝もしていますし、一度休んでも」

「大丈夫ですわよトレーナー...この程度でへばりませんわ。私は...」

本人も走った後だということにかぶっている帽子の下で涼し気にレースの予定を組んでいく。近藤トレーナーも止めようとしているが私はそれを制する。望んでアメリカに来たのは私達。ウララさんも頑張っている中で私たちが足を止めるのは許されない。

信じて送り出してくれたリボーさん、サンデーさんたちのためにも、アメリカでも元気でいてほしいと保存食や日持ちする食べ物を作り、ケアをしてくれた美柚樹さんたちのためにも...

「ふー...まあ、近藤トレーナーも一つ休みつつ話を聞いてください。キングさんを見てね。私少し思っただんですよ、才能は文句なし。努力も怠らないまさしく最高レベルの原石の一つですよ、でもね。リボーさん、サンデーさんがウララちゃんをダート天国のアメリカに行かせるのはまだしも、キングさんも行かせるのか、私に頼んだのか。その理由が分かったんですよ」

黒鹿毛の長い髪をゴムで後ろにまとめ、帽子をうちわがわりにぱたぱたと仰ぎ水を飲むフオグさん。私がアメリカに送られた理由...

「設備も日本ならそもそも中央トレセン学園所属。キングさんの家柄と名前を使えばいいものが用意できるし、ファンのエールをもらって背を押してもらおうこともできる。追い込むことが出来る。GIレベルのレースであれ程戦えるしそれこそ日本の方が鍛えるには適しているでしょう。でも、私に預けた理由は心でしょうね」

「心……ですか？」

「ええ？　でもキングの精神の強さと根性は並じやないですよ!？」

レース場のそばに座りつつもストレッチでほぐし、空を見てどこか遠くを見ているフォグさん。昔を思い起こしているのだろうか。それと同時にまだ走ることはあると感じた私も身体を軽くほぐして固まらないようにしておく。

「ええー心も強い。けど、心のどこかに負け癖がついているのと、プライドが高いゆえに勝てる策を持つてもどこか踏み出せない。あれこれとやろうとしても泥臭さの極致に行けないんですよね。同期にすでに自分らしさを出して勝利したりしているのに自分だけらしさをかなくり捨てるなんて。とか、身体が癖になっているんですよ。セクさん、サンデーさんたちと戦ったメンバーでどこか心が折れている子たちと同じものを私は感じました」

「……私は、いつの間にかどこかで負けるかもと考えていた……それが足を引っ張っていたと？」

「座学もレース運びもいいのに負けている。映像も見ましたがいい走りと素質があるのに負けはどの距離でもとなると日本国内で悪循環になるかもと考えたのでしようね」だから、一度日本から離れる。レース環境も対戦相手も何もかもがここでは違う」

確かにレースに関していえばどんどん成績が落ち込んでいたし、更
に言えば最近はようやく掲示板入りしても4、5着がせいぜい・・・
オーバーワークになり気味になったり、レース前の不調に焦って悪循
環になったりとで・・・日本は何もかもが充実している一方でし
みも多かつたと思うのは事実だ。

けど、アメリカではウマ娘もレースの間隔も違っていて、そこで自
分を知らしめてやると、あるいはちよつとしたイベントでシンプルに
レースを楽しんだりで・・・小さい頃を思い出せたときもあった。あ
る意味いい息抜きにもなっていたかもしれない。

「日本とは違う環境で一度戦い続けてその負け癖の心を潰すくらい
に勝利を味わい、味わうために鍛えまくる。そのためのハードな訓練
も、レースの数もアメリカは用意できます。三冠からしてタフさが求
められる場所です。キングさん。ここで戦い続けなさい。貴女の負
けん気とプライドを研ぎ澄ませ、勝負勘をより磨きなさい」

「言われなくても！ 必ず私より先に勝ち進んでいったライバルの
皆さんにリベンジをするためにも負けませんわ!!」

「そうです。貴女の作ろうとしていた栄光の王冠をここで作りなお
して、どこかで踏んでいたブレーキを壊しなさい。泥まみれだろうと
へとへとだろうがゴールにかじりついて戦いなさい。アメリカでリ
フレッシュと鍛え直しとはいえアメリカのウマ娘たちもパワーとタ
フさは伊達じゃないですしダートも芝も日本に負けないほどの高速
バ場。帰国する8月まで走り倒しますよ」

失われた栄光を取り戻せる。そう言われて燃えないはずがない。
このチャンスを無駄にはしない。回復してきた手足に力を入れ、吐き
気もおさまって大きく息を吸いながら立ち上がる。

「もちろんですわ！ 5週連続レースもあと折り返し！ こなせば5連続重賞制覇!! エルさん達にも負けない記録を手にしていけますもの!!」

「よし！ キング。もうひと踏ん張り行くか!! 目指すは日米レース最優秀ウマ娘だ!」

「その意気ですお二方♪ それじゃー軽く流した後すぐに飛行機に乗って移動。レース場の間隔を確かめつつそこでディナーとケアをして挑みますよー酸素カプセルにアロマも充実している選手御用達のいいホテルですし楽しめるでしょう」

さらりと過密スケジュールを笑顔で伝えるフォグさんにちよつと驚きつつも「これくらいならまだいい方ですよー」というので抑える。アメリカを横断した短距離王。彼女の元でキングとして強さを磨きまくってやるんだから!

マンノウオーさんに鍛えられているウララさんも今どうしているのでしょうか。気になりますわ。

く美柚樹Sideく

今日はちよつと商店街会長さんに頼んで店の皆さんを集めてちよつとした依頼を頼むために足を運びます。ここの八百屋さんは私の農園の野菜を積極的に仕入れてくれますし、料理店の皆さんもウマ娘たち御用達の美味しいご飯が多い。なので私とも仕事のつてだったり、互いに料理研究のために会う機会も多い。なのですんなり

と集まってくれたのが幸い。

商店街の八百屋さんは時間もあってもう閉まっているのでそこにパイプいすを並べてもらい、私も裏口からノックをして入る。

「皆さんこの度はお集まりいただきありがとうございます。お仕事でお疲れの後だと思えますのでささっと本題に入らせてもらいます。今年のトレセン学園の合同合宿においてなんですが皆さんに食品や嗜好品、チームTシャツ、タオルなどを用意してもらいたいのです」

そして本題を切り出しつつ夏の合宿の企画とそこに商店街の皆さんの力を借りるために来たと言えばみんな驚きつつも大口の依頼にどこか喜色を見せる。

「すいません美柚樹トレーナー。具体的にはどのようなにするのでしょうか？」

「ええ。今回私たちはトレセン学園の所有する施設などで複数のチーム、トレーナーと個人契約しているウマ娘などで合宿を行うのですがその際に昼食、弁当などの用意、場合によってはこの期間の間雇って施設で調理を手伝っていただくかと思えます」

「シャツに関しては？」

「既に学園の方でデザインは決定していて今は色などのバージョンでアンケートを取っていますね。タオル含めて大体3000円くらいですが既に数百名は購入を確定させているのでかなり大口になるかと」

しかもまあ学園有数の実力派チームリギル、スピカ、カノープス、N

などが決めている。後リボーたちも喜んで頼んだこともあったりしたので後から欲しいと服屋さんにも依頼が来るだろうと言えは嬉しそうな笑顔を浮かべる。学園の近くなのでまだまだ活気はあるほうとはいえ、すたれつつある商店街に来た大口依頼。

私の実家から野菜を買ってくれる八百屋さんもいるし、こちらへんでうまい具合に刺激を与えられたらと思っていたのでこの機会に楽しませていきたい。

「八百屋さんやお肉屋さんなどの食品関係のお店ですが、市場で競り落とした食材をここにこのくらい送ってほしいです。予算以上になった時はこちらでカバーできるよう理事長からも許可をいただいています」

「お、おお・・・！ これはすごい・・・全盛期の売り上げを優に超えるほどだ・・・！」

「ま、待ってください！ 本屋さんや雑貨品店などには何か・・・」

「本屋さんは最後になりますが、雑貨品店さんに関してはこの備品、寮で使う備品の再点検と入れ替え、補給を行います。評判と値段次第では学園の学生、社員寮で使う備品にも契約を取りたいとも言っていましたね」

まあ、学園から近いし運送費用も浮けばアクセシビリティがあってもカバーしやすいからね。今回の合宿で品選びのセンスを見せて、そこから学園で長く契約をできるようにするチャンスを与える。生徒200名以上。社員寮も300名を超えるマンモス学園のお風呂場のシャンプーやタオル。掃除用具などの発注先になれるという言葉に雑貨屋さんが何か口が開いたままふさがらなくなっている始末だが大丈夫だろうか？

「そして最後に本屋さんですが・・・あー・・・すみません。確かプロジエクターってありましたっけ？ 商店街会長さん」

「ああ。あるよ。これでレンタルしてきたDVDを大画面で見るのが楽しみなんだ。あ、やすさん。手伝ってくれ」

そういうと一度ここを離れてから八百屋さんの店主と一緒にプロジエクターとスクリーンを持ってきてくれる。プロジエクターをパイク椅子に置き、スクリーンをセット。

私のスマホとつないでから映像データを入れて見せていく。そこに映っているのはレースを優勝して勝者インタビューを受けているハルウラちゃん。しかもまあ、首にかけているタオルは商店街の名前がばっちりカメラに映るようにしている。

『カルフォルニアンスを勝利。そしてこのハリウッドGCを勝利しましたハルウラ選手。日本からの遠征でGI2連勝おめでとうございます』

『ありがとうございます！ キングちゃんやトレーナーさん、みんなが応援してくれたからだよー！』

『可愛らしく、レース後というのに元気澆刺ですね！ あのマンノウオーさんやサンデーさん、リボーさんに鍛えられ、こうして重賞レースを既に4つ手にしたわけですが、今後についての目標はありますか？』

『もちろん!! 私が目指すのはアメリカの準三冠レース! そっちへ挑むつもりです。そのためにこのレースでも勝てるように努力し続けました』

『伝説のウマ娘たちの名前を聞いたレースへの参加ですか！ 今日本で日本のウマ娘の選出たちは誰も手にできていない未知の領域への挑戦。獲得賞金も満たし、そしてあのスペシャルウィーク、エルコンドルパサーの同期としてアメリカの高みへの挑戦ですね!! では、せつかくです。日本にこの映像が流れるかもしれないですし最後にもう一言お願いします』

『スペちゃん！ キングちゃん！ リボーンさん！ 美柚樹さん！ フォグさん！ トレーナーさん！ 師匠!! セクさん！ リムジンさん！ 商店街の皆様!! ウララはアメリカだけど三冠を目指して頑張るよ。時差もあつてみるのは難しいかもだけど応援してね!!』

『小さな体に秘めるガッツはこのアメリカの固い土に足跡を残せるか。桜の少女がどこまで挑めるか。アメリカンドリームをつかめるか今後が楽しみです。私も一押し of ウマ娘ですしレース日すべては有休をとり・・・いや、ぜひアナウンサー、もしくはインタビュートイ所存です』

そこからはほかのウマ娘たちのインタビュを終え、スタジオに戻ることのでその動画は終了した。

「今後ウララちゃんはアメリカの準三冠旧レースに挑みますし、キングちゃんも芝のGⅡ、GⅢですが連勝記録を重ねて現在アメリカで名をあげています。すでに特集も組まれていますし、雑誌も作られていくでしょう。これを発注して、売ることできますし、ウララちゃん帰ってきたら商店街で交流会とミニライブをしたいそうです。」

その際に色々と手を回してあげるのはどうでしょう?」

ウララちゃんはよく無償で、何の見返りも求めずにここの商店街で

手伝いをして、人助けをしてみんなのアイドルになっていた。レースに関して勝てずとも手の空いている皆で横断幕を作り、鉢巻を巻いて法被をつけて応援するほどに。

負けても負けても笑顔で頑張っていた。そんな子がアメリカの地で大成の兆しを見せ、ここを忘れずに笑顔を見せていく。何名かは感極まって泣いている人いるし。気持ちも分かる。

「それとですが、合宿の時期あたりにウララちゃんの三冠の戦いは始まりますし。戻ってきてからも合宿というよりはバカンス、休養がてらアメリカのレースの経験を皆に話して遠征の際の助けにしましょう。その際に商店街の皆さんの力をお貸しいただければと。彼女と学園のウマ娘たちへの一助となつてくれませんか？」

大盛り上がりで応えてくれる商店街の皆さんに笑みを浮かべつつ、早速細かな打ち合わせと今後の予定。そして皆さんスポーツバーでレースを見れる場所がないかと探したりとで大忙し。

いやはや。これは暑い夏になりそうである。

後継者みーつけた

くへりポスSideく

「フーム。いいセンスをしていますねえ。それに、ちゃんと選手の使用道具の消耗の速さも理解している。流石と言えます」

「ハハハ、こ・・・光栄です！」

「あ、あはは。こちらこそいろいろ話をできて幸いで」

シンボリドルフさんたちの後にさらに日本のウマ娘たちのレースを盛り上げた不出世の大スターオグリキャップの専属サポーターにして学生ながら中央トレセン学園スタッフ見習いのベルノライトちゃん。中央トレーナーの資格を手にして大スターを支え続けた北原ジョーさん。

二人とも中央に来て数年というのに、その含蓄、道具の選別とトレーニング方法の議論を交わしていますが私も刺激になるばかり。

おそらく二人ともオグリキャップと側にいることで覚えたのも、刺激されたのも大きいでしょう。一緒に立てた作戦をすぐさま実行できる柔軟な思考と判断力。いざとなればアドリブや底力で対策をされようがねじ伏せる実力。日本最高水準、世界でも通用するウマ娘と一緒に関わり、策を立てればどう動くのか、封じられて尚どうするか、それを見て考える。オグリキャップを支えつつ自分たちもレベルが上がっている。

「デハーですが。お二人の今後のためにですが、私の使っている道具などを見せましょう。コレデス」

「これは・・・勝負鉄に鉛・・・以上に重いもの？　がつま先に。あれ？　これは逆にカーブの両端に・・・」

「中敷き・・・ですけど、すっごいフカフカですねえ。衝撃を殺すためです？」

「ソウ。これはいわゆる走り方の矯正用蹄鉄と、リハビリ用、休養明け用の中敷きです」

私が見せた道具。それはリボーが日本好きだったゆえに出来たウマ・テジオで作った蹄鉄シリーズ。世界で戦う以上洋芝であっても気候や土地柄もあってかなり変わってくる。レース場での感触を合わせて走り方を矯正していくために作ったもの。

リボーの無尽蔵のスタミナで体に常に鞭打ってトップスピートで走り回り、細く長い手足で起こすインパクトを地面にたたきつけるためにおこる骨への負担を練習で減らしつつ、偏り具合を見て変な癖が出ていないかのチェック用の中敷き。

「今後はですが、こういった道具と、中敷きも複数種類あるのでどんどん教えましょう。お二人ともどんどん大変になるでしょうし、教える子たちも増えるはずですから」

「へ？　いやいや。俺よりも六平おじさんとかリギルとか、スピカに皆行きますよ」

「あはは。私もそう思います」

今後は二人も使うだろうと思いついた。なにせまあ、二人が関わったオグリキャップという大物の放つ光は日本中に届いている。そしてさらにここで新鋭たちが出てきた。あのチームに匹敵するところ

はどこだ。で、まあかつて日本を席卷した有名処。何もかもがドラマチックなチームがいる。そこにも人はくる。

「オグリさんの事は調べました。あれだけの大スターの功績はそうそう消えませんしー今活躍中のチームにはいれなかった。若しくはライバルがいるから別の所で力をつけたいとなるとそちらにもたくさん来ますよ」

「うーん．．．まあ、確かにうちの方に来るかもですが．．．」

「リギル、スピカ、カノープスのようにチーム内でもバチバチやり合う方が珍しいですからネ。地方から大スターを見出した経験豊富なトレーナーに、若い秀才で柔和なお嬢さんで道具のサポートばっちりなスタッフ。はつきり言えば、こちらもかなりのものです。」

「う．．．た、確かに．．．」

「でもみんな夢を見てきます。大スターオグリキャップを見出したトレーナーと、そばで支え続けた。地方から中央スタツフ学生見習いとして来れる秀才のそばで鍛えてほしい。オグリさんか貴方たち目当てでどんどんやってくる。私に指導してくれと。教えてくれと」

これが悪いとは言わない。なにせウマ娘にとつての、レースで頂点を目指すうえでの最高教育機関でさらに上を取れる選手を見出した。支えたのだ。ミーハー気質から本気で指導を狙うもの。あるいはただただそういうチームにいたという箔付け狙いで来るウマ娘たちが今後絶えないだろう。

そしてまあ、二人も思うところがあるのでしよう。私達もそうだった。イタリアの中で中央トレセン学園にいたとはいえ欧州では二流三流と呼ばれる始末で、中央にあっても腐っていくウマ娘、ファツ

シヨン、就職に役立つからとしか考えていないウマ娘たちも多かった。

「その際にですがオグリさん、その周りにいた三強たち。気を抜けばバツサリと倒していくメンバーたちといきなり同じレベルで、同じやり方で通用するわけではありません。皆に合わせた方法を教え、あった距離とコース、場合によってはレース場も選ぶのが私たちの仕事。

・・・少し話がそれましたね。ベルノさん。その蹄鉄ですが、サムライエッジと違ってとことん固い金属を表に、中に鉛などの重く柔らかい金属を入れることで衝撃を受け止めて蹄鉄が割れづらく、長持ちします。重いのでこれ一つで長期トレーニングでも使えますし、脚の指の付け根から足指へと思いきり地面をける方のやり方を覚えさせるために蹄鉄の両端に鉛を多めに入れていきます」

「ほうほう・・・では、この妙に蹄鉄の隙間などが少ないのは？」

「アメリカのダート用ですねー日本の砂とは違い土でのレースですので土の塊が変にくつつきすぎないようにしているのデス」

「ふむ・・・じゃあ、この中敷き、結構分厚くしているのと開くようにしているのは？」

「衝撃を殺すのと、中に鉛などのシート、もしくは衝撃吸収材を入れるためです。地面の蹴り方で変な踏み方をしてしまう癖などがある子のために特定の場所にクッションを仕込んで矯正のために使うこともあります。蹄鉄もそうですが、意識して走り方を変えるのは難しいのでそれをしやすくするために使う。いわば自転車の補助輪みたいなものですね。」

更に言えば差し込む素材の組み合わせで市販のシューズを更に選手にあわせられます」

ファツシヨン。ミーハー気質の子たちも追いかけるだけではなく自分たちが時代を引っ張るような馬娘になれるようにいろいろ教えていけるように。リボーとの。最初は喧嘩もしつつだが互いに学んだケアと世界各地の芝に合わせた走法やペースの微調整で利用した様々な手段。この子たちなら教えていいかもしれない。

「はえー・・・ヘリポスさん！ この夏の間だけじゃなく色々教えてください！ オグリや、オグリにあこがれてくるウマ娘らにもばっちり教えられるように！」

「わ、私もです！ 実家の関係でいろいろ道具を見てきましたがまだまだ知りたいですし、もっと頑張りたいです！」

「イイデスヨ。では、まずはレース用の靴のレギュレーションのなかでいかに走りやすく、怪我をしにくいようにしていくかの調整の例ですが・・・」

日本というのは面白い。中央とはいえずぶついていた子が超大逃げでぶつちぎり、善戦チームと言われていた子たちが最強チームの一角となる。地方から一気にここまできてスターを支え続けた。多くの子たちが光り輝くものを持っているし、支える人達もまた個性豊かな。

リボーの自由ぶりで来たがよかった。私の後継者も出てきてくれそうです。

美柚樹Side)

「あげません」

「ちよつとだけでもダメか・・・？」

「駄目です」

練習が早めに終わった子たちが大広間兼キッチンがある場所で休んでいるのですがタイミングが悪いかオグリちゃんがいて私の後ろにあるエンジンを狙ってよだれを垂らしている。くそう・・・サウナ室を使用禁止にして蒸していたけどまさかこんなに早く来るとは。

「し、しかしこのサイズと匂いは魅力的だ・・・一口だけでも」

「異次元の速度で食べつくすオグリちゃんは信頼できないのよ。食事面では。後、ほんとにこのままでは食べられないの」

私がかばっているのは私の農園で作り、完成したオリジナルブランド人参。とはいってもオグリちゃんの言う通り普通じゃない。そのサイズのでかさは150センチ。太さも最大100センチ越えという化け物人参。それでいて栄養も匂いも甘さも次元が違う。

グルメ時代の知識と再現できる能力でゴールドにんじんとメテオガリック。それ以外にもいくつかの根菜で品種改良した特別調理食材。しいて名付けるのならギガントキャロットとでも名付けようか。これが完成したので持ってきたのですがいやあーうん。ほんとうの前でダラダラよだれを垂らすオグリちゃんを見ればウマ娘から

しても魅力的なおいと。

完成した時は土壌の栄養吸い尽くしすぎてこのにんじん以外雑草一本も生えていなかったそうなの。

「食べられない？」

「ええ。このにんじん。でかいのもあるんだけどそのサイズを支えるためにすごい固いの。だからまずは手順を踏んで柔らかくしていかないともじゃないけど食べられたものじゃないの」

「ほうほう・・・」

「その仕込みをしている最中だし、食べられるのは夜ね。だから今は我慢なさい」

ただまあ、このにんじんもいわゆるちよつと変わった手順を踏まないと食べられない。超ギチギチに詰まった繊維で大きくなれるし重さを支えているから普通のにんじんどころか岩石張りの固さ。実家のウマ娘がかじったらかじり取れずに歯の方が痛くなったという程だし相当。

なのでまずはそれを緩めるために人参にまんべんなく水をぶつかけた後にスチームサウナで気温90度以上の温度の中で軽い蒸し焼きにして、そこからようやく調理が可能という。まあー比較的簡単だけど時間がちよつとかかる。捕獲レベルでいえば1以上2未満？

その後の甘さは最高の一言。ハニーバターとか、かつおだしつゆ、醤油、柚子塩レモンなどでいただければおやつでありつつメインディッシュというそりゃあウマ娘たちにすれば最高ランクのご馳走になる。

「分かった。ち、ちなみにだがそのにんじんで何を作ってくれるん

だ？」

「うふふふ・・・超極厚にんじんステーキと激アマにんじんジュース。特製卵マシマシコンソメスープ。ナイスネイチャちゃんおすすめクルミ味噌とにんじんスティック。これを用意するわ」

「おおお・・・」

「それを一番おいしく楽しむために休んだ後は練習頑張つて、お風呂入ってサウナで汗かいて、そこから食べるといいわ。格別の美味しさになるから。保証するわ」

目からもう光線が出てきそうなほどに輝いているオグリちゃん。もうよだれだけで脱水症状になりそうなので拭いてあげつつスポドリを渡す。

「今は少し休憩してからまた頑張つてきなさい」

「わかった」

すでに腹の虫がなりそうになりつつ移動していくオグリちゃん。と入れ替わりに出てきたのはライスシャワーちゃん。メイショウドトウちゃん。二人とも不調なのもあって私がつきつきりでケアしつつ薬膳料理で養生中。ツボ押し、整体術、その後に岩盤浴に放り込んでいたけどぐっすり眠れたようね。

というかまあ。本当に毎日ストレス感じまくっていたんでしょねえ。胃腸も肝臓も弱っていたしほんとここまで持ち直してよかったわ。

「ありがとうございます(ぎ)いました美柚樹さん・・・」

「はあー・・・極楽でした」

「ふふふ。いえいえ。疲れは抜けた？　ひとまず明日までは安静に。ゆっくりほぐしつつ、足つぽ踏みましようかあ」

ドトウちゃんと言イスちゃんは少しネガティブな部分はあるし、ちようどいいからここで休みつつ合宿の空気でほぐしてから再度熱を入れるようにしないとね。

「んぐー・・・きくう・・・ねえ。美柚樹さん・・・ライス。もう一度頑張れるかな？」

「ほえ？」

「その、みんなすごい強くなっているけど、私は出来るかなあつて」

「出来ると思いますよ私は。触診しても、医者に見せても文句なしの肉体をしていますもの」

「あー・・・分かります。みんなのような頑張りが出来るかとか、あれだけやれるかなあと思って動けないで・・・」

何というか、あれだけいい顔をしていたのにちよつとしょんぼりし始めちゃったふたり。いやいやいや・・・日本最強格ステイヤークつ中距離もいけるメジロマックインちゃんにミホノブルボンちゃん。永遠に遠い半バ身。最後の競り合いでテイオーちゃんにも引けを取らないテイエムオペラオーちゃん。なんやかんや二人が戦う土俵の相手は日本最強格。それに相手出来る時点で既に最高水準なんだけどなあ。

「でも、それでもと思っちゃって」

「んー・・・ああ。だったらだけどね。ちよつと私頼まれてある人に野菜チップスとかいくつかの贈り物を頼むのよ。その人、凄い教えるのがうまいのと、元気にさせてくれるの。その人に私から手紙書いておくから、一つ会ってみない？」

「そ、それで救いがあるんですか？」

「あると思うわよ。私も一度会ったことがあるけどリボアの師匠でもあるし、すっごく優しい人だから」

このまえお仕事もやめて、リボアが会いに行ったら久しぶりに私の作った野菜も食べたいということで頼まれたし、暇しているからリボアたちの弟子がどうなるか期待していると書いていたし、一つ私からも頼みましょうか。

ギガントキャロットを下ごしらえした後真空パック詰めしてあつちで料理できるようにしたのも渡してお願いしますと。

「後、今夜いいものが見れると思うわ。多分やる気が出ちゃうようなものがね」

「?」

「ま、とりあえずのんびり休むといいわ。必要だったら釣りでもしてくる？ もしかしたら練習抜け出したセイウンスカイちゃんとかゴルシちゃんいるかもよ」

外でちよこちよこスピカのほうからトレーナーとゴルシちゃん、サnderの悲鳴が聞こえてくるからどうせ何か起こっているんでしょ

うけどねー・・・

今は料理の仕込みで時間が空いたし、ちようどいいわ。リボーからこの子たちなら面白くなると言っていたメンバー預けられないか頼んでみましょう。えーと・・・ライスシャワーちゃん。メイシヨウドトウちゃん。ダイタクヘリオスちゃん。メジロパーマーちゃん。この四名面倒見れないかと・・・

くサンデーSideく

「ほーん。スペ。お前大分腕のフォーム良くなったなあ」

「そうですか？　ありがとうございます！」

「グラスと一緒に走っていたのもあるんだろうが。お前ら北海道に行ったついでに草むら走ったろ。地面をかき分ける力も大分ついているし、そういうフォームが出来ている。洋芝でもそこそこ行けるわ」

「え、えへへく♪　サンデーさんにそういわれると嬉しいですよお」

ふーむ。しばらく里帰りとどうやらグラスと恋心が出来ちゃったらしいスペだが練習は忘れず頑張つて来たらしく走りが前よりさえている。

グラスのやつも天才肌かつ、学園での余計な重圧とかを気にせず恋人の家でランデブーしたり旅行したのもあつて絶好調の中での二人

きりでの練習。いい感じに互いに一皮むけたという感じだなあ。

「んでーグラス。お前さんはいいんだが、ちよい腕の角度をこう…：な？　そうそう。思いきり腕も地面をかく。プールのクロールやバタフライで思いきり水を押し出すようにやるといい。その腕のパワーはお前さんの加速力の大事な部分だ」

「ふふふ。ありがとうございます。では、泳いだりしたほうがいいのですかね？」

「そうだな。クロールで300メートル泳いでこい。スペ、テイオー、マックイーンあたりと練習。大体胸に海水があるくらいの高さで泳いでくればいい。必要なら浮き輪とか、身体を浮かせてから腕の動きだけに意識を向けるようにしな」

「了解です。では行ってきますね〜♪」

すつげえウキウキで、まさしく我が世の春が来たと言わんばかりの笑顔で走っていくグラスにそれを追いかけていくスペ。あ。そういや聞くことあったわ。

「おーいスペ！　ちょっとまってくれ。聞きてえことがあったわ」

「あ、はい。サンデーさん。どうしたんです？」

「いやーキングヘイローとハルウララ。こいつらお前の親友であっているよなっ..」

「もちろんです！　キングさんは弱音を吐かず常に全力で優雅で。ウララさんはいつも明るくみんなを元気にしている子たちです。二人とも凄い努力家ですし、強いと思います」

「ほうほう。んならお前気を抜いたら負けかねえぞー？ おもしれえ情報来ているからよ。晩飯の後に見ようか」

フオグと姐御が思った以上に鍛え上げたというか、本人たちから『覚醒した』とメール来たほどらしいしなー日本最強チームがりギルなのは今後も揺らがなほほどに強いし、才能ぞろいだが来年は分からない。あとはまあ、ギンシャリらと相談していた件もできるかもしれないな。

「もしかして二人からのビデオレターとかですか？」

「あーある意味それだ。あ、あとな。晩飯が文字通りのにんじんのステーキというものらしい。思いきり泳いで腹減らしてこい」

「文字通りのにんじんステーキ・・・はい！ 思いきり食べるため、二人に負けないために頑張りますよー！」

飯の話と同じチームへ入るレースやらで競ったりであれこれ仲がいいと言っていたがあつという間に燃え上がりつつ海に走っていくスペと先に海に入っているメンバーら。マックイーンもスイーツをパクパク出来るようになってコンディションもいいしよかつたわ。後合宿だから飯の持ち込み難しい分夜中につまむのも抑えられるし、良い仕上がりになるだろ。

「頑張れよーで・・・大丈夫かい色男さんよ」

「うぐぐぐお・・・おっ！ 助かったぜー・・・いやーゴルシのやつさぼるためにまさかあんな落とし穴を掘るとは」

「楽しめそうなメニューとお前さんのさせたい練習方針を合わせて

できてよかったがな。あんたの柔軟性は勉強になるぜ」

今どきそうはいねえ素直な子を見送りつつ、地面に埋められた。とかゴルシのやつが仕掛けた高性能落とし穴にはまっていたスピカのトレーナーを救出。さぼろうとしていたゴルシには流石に合宿ではやれとアームロックで仕置きしてからジャスタに預けて練習開始。

今はスピカ&グラスを二つに分けてそれぞれ監視しつつの休憩タイム。指導者つてのはつらいねえ。この時間もライフセイバーよろしくちゃんと見ていないとだし。

「俺も助かっているんだぜ？ 最近はマックイーンが落ち着いてからプロレス技を仕掛けに行く機会が減ったからなあ」

「あんたくらいだよここまでしばきまわされるの。アメリカでもそうはねえや。で。なんだけどよー一ついいかい？」

「おう。どうしたんだサンデー」

「んまあーあんたにはさつきりいうわ。スピカメンバー皆で遠征しないかって相談だよ」

サングラスと麦わら帽子をつけて麦茶すすりつつ全員の肉体を見る。うんうん。疲労の色もねえし、脂も載っている。テイオーの骨折もマックイーンの屈腱炎も完全復活してさらに成長した。問題はな
いんだよなマジで。

「遠征？ んまーそれはいいかもだがどこだ？」

「ドバイ。ジャスタウェイは時間差を開けての連覇。スカーレット

もいけるだろうし、残りのメンバーもいける。何より、凱旋門賞に近いレベルで国際評価の高いレースが多いからなあ。スぺの日本総大将としての、あいつの夢をより強固にしつつ世界を目指して上に行けるし、ライバルを育てられるぞ」

「うーん・・・確かにうちのメンバーも軒並み国内で戦い尽くしたし、一度国外を知っているゴルシとジャスタを筆頭に外の経験を積ませつつ、その間に日本で勝ちを手にして成長してきた次世代と帰国した後には戦えると」

「あとなーいい加減懐潤せお前」

ドバイDF以外にもそうだがドバイは賞金と評価含めて世界最高峰だ。トレーナーにもいくらかは入るのでこのトレーナーの、日本最高学府のなかでこれまた最強格のチームを率いるという誰もが羨む経歴の持ち主でありながら万年ぺらっぺらの財布をどうにかしておきたい。

いろいろスピカへの投資とか、あれこれ手厚くしていることからウマ娘への愛情も分かるのだが、スズカやマツクイーンたちの心配ももつともだ。この男下手すりや私以上の変人だわ。急に足に触れる悪癖含めて。

「スズカやマツクイーンが心配してんだよ。あれこれ手を回してくれるし優しいのは分かるが、生活が心配だよ」

「あー・・・それは分かるんだが、トレーナーとしてついなあ」

「あんたさんが心配しているようにあっちも心配しているんだ。変に成金、羽振りよくとは言わねえけどそれなりに貯金くらいしておかないとあっちの練習にお前が水差す羽目になるからな？」

「まいったね・・・」

「もう一度ジャスタを世界一へ。そしてその高みの舞台へとスピカの皆を挑ませつつあんたも稼げ。そのほうがスピカの皆へのサービスマもいいものになるし、今後やってくる子たちへの貯金も兼ねてな」

確か来年か再来年くらいには有望株が二人トレセンに来るかもとリボー言っていたしなーしかもまあ聞けばテイオーとマツクイーンにあこがれているとかなんとか。マツクイーンにあこがれるのは目がいい。やるつもりはないが。

「分かりましたよサンデーさん。あんたに金の話をされたらなあ」

「わかりやいい。ごねたら海にぶん投げて痴漢しやがったと言ってスピカの皆にしばいてもらう算段だったし」

「そ、それは流石に勘弁してくれ。今度はマツクイーンにどんな技を仕掛けられるか」

冗談・・・で済ますかは別として。スピカはドバイへの予定を一応という感じで出来た。で、後はリギルだが・・・

(ま、あの練習方法をしているリボーの意図をすぐに組むだろ)

んなことより足つったり、波に連れていかれないか監視しつつマツクイーンの水着姿をカメラに収めなければ・・・後は浴衣姿も。あく日本最高。マツクイーン最高。

くりボーSideく

「はいここまでどうだったかしら？ ルドルフ」

「き……きつい……ですね。ちよつと記憶にないくらいです……」

リギルの練習に関してはおハナさんと私らで練ったメニューで鍛えているゆえにぶつちやけ私ができるのは微調整と、ある目的のための練習となった。

砂浜と合えて芝を一部植えて伸ばしていた場所をぐるりと回る1800メートル走。ただしチームを二つ分けて私の方にフジキセキ、マルゼンスキー、ヒシアマゾンを入れてのチーム戦。

フジキセキちゃんと私でルドルフのコース取りを絞りつつ逃げた先がバ群のなかで動きづらい状況をつくり、ヒシアマゾンちゃんは最後尾からつつついてペースを崩しつつ追い込みをうかがう。で、マルゼンちゃんは逃げつつこっちもペースを崩してルドルフ側のペースをメタクソに壊しまくつての完勝。

一着から5着までほぼ私達。その中に入り込めるエアグルーヴちゃんとタイキシヤトルちゃんは流石の一言。エアグルーヴちゃんは私たちのルドルフを起点にしたマークとブロッキングの隙間をすり抜け、タイキちゃんは大外からのぶっこみで加速。芝じゃなく泥のような不良バ場である強さなものも納得。

「とことん足を取られる砂場に足に絡みつく芝。そして私たちはルドルフの土俵に上がらず、ルドルフを土俵にあげず。何もさせずに潰したもののね。他のメンバーもルドルフをペースメーカーにしていたから困惑。そこからすぐに切り替えたエアグルーヴとマイペースに戦ったタイキシヤトルが喰らいつけたけど」

「ふっ……ふう……し、しかし何で急にこのメニューを？」

「そりゃーあなたたちもう一度凱旋門賞。フランスに挑みたいんでしょ？ そのためよ」

ルドルフがフランス語を覚えていることやリギルの過去の海外遠征の経歴。過去にリギルからエルコンドルパサーちゃんも出ていることからそりゃ分かる。

「おお!? ワタシもまたリベンジできるんですネー！」

「世界への殴り込みかい？ 燃えるねえ！」

「私はやっていいと思うし、それ以外にも欧州のG1レースでみんな戦えるようにとね。で、その際に問題なのがやっぱりというか芝の問題とチーム行動なのよ」

欧州だと基本レース場をあんまり整えない。自然に近い場所をありのまま駆け抜けるウマ娘たちの場所という感じなのか日本が厳しすぎるのかは分からないがこちらと比べるとレース場が少しくワングワンしていると感じるだろうし、なにより日本の芝が世界でも特殊かつ、固く高速だ。

そこはこういう場所で慣らせるが次の問題はあちらの方ではチーム戦が多いし、そういうのが抜群にうまい。私との模擬レースの件でもリギルのメンバーの実力はすでに世界に知れているし、その中でも凱旋門で二位。しかもブロワイエ以外も決して弱くないメンバーでそれをした。間違いなくリギルメンバー来るとなれば警戒されるし普通に意気揚々と乗り込んだところで勝てはしない。

「あちらで戦う場合、チームごとに何名か送り込んで本命以外は策を使ってペースを崩しつつ狙えれば勝利をかつさらえとももあるし、リギルは基本肉体が仕上がっている。洋芝、そして柔らかいバ場に慣れるために軽い走り込みと、チーム戦をする方がいいでしょう」

「リボーさん。そうなりますと・・・ジャスタウェイ、ゴールドシツプ、ナカヤマフェスタなどに頼んだほうがいいでしょうか？」

「それとカノープスに頼めばいいわ。私が仕込んだからみんな強いのと、逃げのターボちゃん。ペース崩し、差いで戦えるネイチヤちゃん。ハイペース勝負でスタミナ潰していくイクノちゃん。爆発したと思わせるほどの加速勝負のマチちゃん。全員個性派かつ連携も・・・うん。取れるからいい勝負になるわ」

「アー・・・ターボちゃんは確かに連携は無理ですネ！ ケツ!？」

「そういうことを言わないの～イケイケでふかしちゃうターボちゃんのスタイルはそのスタイルだけで場をひっかきまわすからね」

ナイスフォローマルゼンちゃん。大逃げは実際心理面で不安を植え付けるのと、自分のペースがわかりづらくなるからねえ。レース初心者でも玄人でもはまると怖い。ターボちゃんは連携は・・・してくれるんだけど多分途中レースに全力になりすぎて忘れちゃうんだよなあきつと。

「ゴルシちゃん、ジャスタちゃん、フェスタちゃん、後はヘリオスちゃんにパーマーちゃんのチームとカノープスのチーム。それとリギルを2つに分けて紅白戦をしたらいいかもね。ちようどこは個性派ぞろい。オグリちゃん、クリークちゃん、タマモちゃん、イナリちゃんのメンバーでもいいと思う」

「ふむ・・・では、今夜にでも打診をして、早ければ明日、可能なら明後日くらいからでもぜひ頼んでみたいですね。おハナさん。どうでしょうか？」

「そうですね。実際悪くない提案だし、ここにきているメンバーは貴女たちが相手だろうと尻込みする相手もほぼいない。世界を知るリボーさんとサンデーさん。世界で戦った現役メンバーもいる・・・いいわ。私の方でもできないか相談してくるし、みんなは休憩しなさい」

おハナさんの一声でみんな解散。ちやうど時間を見てもいい時間だし、後は軽めに流して、夕暮れ前には上がれるようになればいいか。

そんでまあ、マルゼンちゃんは何でか残って私とおハナさんと一緒にいる。

「ねーリボーさん。チーム戦の練習だけど、私みんなの気分をアゲアゲにしちゃうために商品を用意してみたいのよ」

「ああー私もそれ考えていたし、そうねえー・・・何がいいかしら？
とはいってもお菓子とか、食べ物とかくらいで現金は出せないけど」

「ふっふっふくナウなヤングにバカ受けのモンスターパフェを近くの喫茶店が夏限定で売っているのよ。だからこれを商品にできないかなあって。提案している私もお金出すし、どうかしら？」

ほうほう。念のためにスマホで検索してみても確かに歩いて2分の場所にある喫茶店。夏の観光客に合わせて季節限定のデカ盛りパフェを売っているし、持ち帰りも可。うん。これなら美柚樹お姉さんの手を煩わせる問題もないわね。

「いいわよ。ただしマルゼンちゃんはまだ学生だから背伸びせずに素直にパフェ狙うために頑張る側に回りなさい。これくらいなら問題ないしね」

「オツケイ♪ それじゃおハナさん。私も軽く流してきまーす」

「水分補給を欠かさずにね。迷惑をかけますりボーさん」

「いいのいいの。私もあらためてチーム戦でみんなの走りや連携を見たいし。こう・・・練習じゃなくてミニゲーム、レクリエーション？ とかテレビ番組みたいなノリで楽しんだほうがいいし」

んーマルゼンちゃん。すっごい奇麗でかわいい子なんだけど言葉遣いが独特ねえ。ヘリオスちゃんとパーマーちゃんもだけど、これが今はやりのギャル語というのだろうか？ 遠征漬けたっせいで国の流行とかよくわからなかったしなあ私。

で、頭下げているおハナさんに大丈夫だよと頭をあげさせる。ぶっちゃけ貯金だけで一生豪遊して暮らせるし、学園からトレーナー候補ってことでお給料もらっているから懐は万年余裕。好きにしているからねえ私も。

「しかし、その負担をりボーさんだけで終わらせるのはあれですの
で参加するウマ娘のトレーナーには裏で割り勘してパフェなどの景
品のお題を持つようにします」

「じゃーそれで。私ちょっと店に行ってくるからリギルの皆よろしく〜」

この後件の喫茶店に行ってみるとちょうどカノープスの皆と合流。

なんでもイクノちゃんとかマチちゃんが前々から調べていた名店らしく休憩時間に皆で食べに来たのかなんとか。で、その店主はカノープスの大ファンで、私もファンだといってすんごい声出された。よく見ると店にほんとにぬいぐるみ飾ってあって自宅にも保管用と観賞用であるとか。

頼まれたサインと写真を渡しつつ今回の件を話すと首がちぎれるんじゃないという勢いで縦に振って是非とも提供させてくださいと逆に頼まれた。そしてそこに「ターボたちのファンならせつかくだし明日みんなでデザート食べに来るぞ!」と言い、南坂トレーナーとネイチヤちゃんはウマツターに書き込み。

ウマ娘たちがこぞつて来るし、それが世界を取ったジャスタちゃんやほかの子たちが来た名店。今名前売り出し中のカノープスのメンバーからの高評価・・・うーん。この店過労でぶっ倒れないわよね？

ばれちやった&お前ら世界を見ろ

くりボーSide)

「おし。俺も経費の3000円を入れてと・・・それじゃ、おかわり!! くっはあー! 刺身にうまい飯が多いぜ。それににんじんステーキがうめえ・・・うめえ!」

「はむ・・・あー気持ちは分かるけどのどに詰まったら大変よ・・・でも、うん止まらない・・・おかわり!」

ギガントキャロットとかいう。これまた化け物激うま人参のハーブ蒸しステーキの特性ソース掛けを食べながらのビールで一杯。風呂上がりにはこれはたまらない。人参の甘味とうま味が段違いな上にそこに来るハーブの香りが程よい薬味となつて味を引き立てるし、絡んでくるハニーバターの塩味と蜂蜜のまろやかさがたまらない。

今度は柚子塩でお代りもいいなあ。サンデーも明日以降のチーム戦で賞品として出すパフェやそのほかの賞品の経費を受け取って飯に舌鼓を打つ。

「うふふ・・・朝から昼までは汗をかいた分染みるわ」

「ですねえ。んぐ・・・ぷはあー・・・そういえば、皆さんはこの国への遠征をいくので? 私たちカノープスはオーストラリアです」

「俺は六平さんと一緒にフランス経由してからオランダとイギリスですね。何でも爆逃げコンビにいい場所があるのもありまして」

「こっちはイタリアだな。ミラノ大賞やそこから辺でひと暴れしてからできれば香港の方でも一つ暴れてくる」

「私はイギリスからちよつと別の場所に行くみたいねえん。ドトウちゃんとライスちゃんと私に良い師匠つけてくれるみたいよ」

二人のトレーナーをしている京水さんもすっかり日本酒で出来上がっているらしくすごくいい笑顔で応えてくれる。うんうん私の師匠にあの二人はちょうどいいだろうなあと。そしてまあ、同時にこれで世界のケツぶつたたくにはちょうどいいですよ。

ちゃんと前もって私と美柚樹お姉さんで手紙と贈り物沢山送ったし、うん。大丈夫かな。

「いやーしかしまあ、ほんと考えられないことになったなあ。うちのスピカでもジャスタとゴルシだけだったのに、一斉に世界への遠征と殴り込みだなんて。こっちはドバイ。もう一度ジャスタが世界最強の称号をもらつてくるわ！ あはは!!」

「リギルの方はフランス・・・私のリギルだつてみんな強いわ。スピカやほかのチームも追い上げてきていますが最強の格は揺らがないです。凱旋門賞を日本に初めて持つて帰るのはリギルです」

「あらあーみんな燃えちゃつて。お酒もあつて熱くなつちやうじやない。でも、ドトウちゃんやライスちゃんもそこに入れちゃうわよ。あんない燃料をくれたリボーさんたちには感謝してるわ」

「わっははは。シンザンを越えろ。を思い出すような熱だな。ま、前にブロワイエが日本に乗り込んできたんだ。それを俺たちがやつて挑戦しつつ実力を測るいい機会だ。ほんと嬢ちゃんらには感謝している」

「よしよし・・・酒の交代とお代りのにんじんステーキ・・・ふふ。」

私達はその間は日本にとどまってほかのメンバーの指導ですね」

おうおう。いい空気になって盛り上がっている。世界で戦える。近いようで遠い世界のトロフィーや盾を手に行ける。その栄冠を自分達のウマ娘たちに与えられるともなればそうなるかあ。

遠征って大変だしねー場所に早く慣れるために私、ヘリポスの欧州の経験と、サンデーのアメリカの経験からそれぞれの芝、ダートの特徴に合わせられるようにしないと。オーストラリアはピーピードーナッツに頼んでいるけど・・・まあ大丈夫か。現世界最強格と日本の最強個性派軍団でのマッチアップできるぞと言えば絶対乗ってくれるし。カノープスの皆面白いと言ってくれたし。

「はあー・・・」

「ん？ どうしたよキタハラジョーンズ」

「き、北原ですサンデーさん。いやー中央にどうにか来た。日本の頂点の戦いを見れている、選手たちと関わっている今も夢のように思っている俺には、世界だとか色々遠い出来事に思えちゃって」

「わはは。そんなもんだよな。でも、オグリキャップやここにきている皆は間違いなくそれが狙える器だし、正直つぶし合っているよりはそうしているほうがおもしろえことになる」

「と・・・いいますと？」

「おっと北原さん。サンデー、それは後でね？」

「はあー・・・下処理と片付け終わり・・・私もビールを・・・あー・・・からあげと濃い味のにんじんステーキと合う」

北原さんにはまだ言っていないのだとしたら、それは内緒にしておこう。世界に遠征して戦う。この超大規模の戦いがどういう結果を生み出すか。それに関しては後でわかったほうが衝撃が大きいだろう。

こういうサプライズは残して後で驚くさまを見て笑いつつ、それほどに衝撃を受けてくれる方がやったことを実感できるしね。そして美柚樹お姉さんはお疲れ様。なんやかんや一人で100名近いメンバーの食事を一人で切り盛りってやっぱ頭おかしいわ。トレセンの料理主任といい調理場には私らとは別ベクトルの怪物と女傑しかないのか。腕力なら私らに張り合えそうだしさあのおばちゃんとか。

「うゝ えーい・・・ああー・・・酒が進む・・・こない酒久しぶりだぜ」

「飲みすぎよ？ 貴方酒はそこそこ飲めなかつたっけ？」

「いやーなんやかんやスピカのメンバーの前では酒は抑えていたかなあ。こんなに飲むのは久しぶりだ。合同合宿様様、そしてプラン様様だぜ！」

横では久しぶりのお酒の痛飲ぶりに酔いが回りに回り始めたスピカのトレーナー。あーあの悪癖&割と無遠慮な部分あるし、失言しないようにいろいろ気を使っていたんでしようねえ。

「しかしなあ。こんな酒を味わえて、世界に皆をいかせられるのならほんと美柚樹がトレーナーを続けられるように俺らでかばえればよかつたぜ。そうすればもっと早くこんな酒が味わえるかもだったし」

「バツ・・・！ ちょっと!？」

「いいいい・・・今それを言ったらやばいですよ!？」

「何言っているんだよおハナさんに美柚樹。お前のケア技術と指導ならもっと早くリボアの目に留まっていただろうし、あんなことさえなければ・・・」

え？ こいつらいまなんつた？ お姉さん進んで料理に進んだんじゃないの？ 何があったんだろうか？ しかもトレーナーの道を断念するほどのものが。

「・・・・・・・・ハァー・・・逃げ場はねえからな」

「おいお前ら。残らず知っていること吐け」

とりあえず聞かせてもらおう。ちょうど酒が入って色々聞けそうだし、日本に来てずっと気になっていたことがわかりそうだ。事と次第によっては・・・学園。軽くやばい状況になりかねないけど。

くおハナSideく

私たちは今宴会ムードも吹っ飛ぶほどの殺気と威圧感にあてられている。美柚樹さんがトレーナーの道をあきらめて料理人として進むきっかけになった彼女が指導していた有望株の子たちを裏から先輩トレーナー、ベテランたちが引き抜きしていた件。更には根回しをして彼女がトレーナーとして動けないほどになったことを一切合切話すことになった。

結果。怪物二人がとんでもない覇気と殺意、怒気を放っていた。正直この近くに誰かウマ娘が、いや人でも近づきたくないと思えるほどのこのオーラにあてられると思えばトレーナー。スタッフと学生たちの部屋が離れていたのは不幸中の幸いか。

「……あー……これつまり。あれよね。自分よりも人望や選別眼を持っている美柚樹お姉さんを利用して有望株引き抜いたあげくに最後は妬みで干したと……まじかー……これ、まじかあー……」

「かはあー……分かりたくなかったが分かってよかったか……」

そして、その中でその威圧感が終わりをづけ、今度は二人とも腰を下ろして頭を抱える。助かったわけではないが少し緊張が緩む。ルドルフの持つオーラ、覇気ですらまだ未熟。成長した戦士の持つそれが向けられないだけでも心臓の負担が減った気がする。

「……美柚樹お姉さんはもうこれを恨んでいないのよね？」

「過ぎたことだし、料理の腕を磨いての今があるのも確かだしね。リボーには心配かけたくないから黙っていてごめんなさい」

「あー……いいのいいの……で、六平さん。その野郎ども。もう今はいないのよね？」

「お、おう。理事会の一部とそのトレーナーは資格はく奪と給料の一部を返納。地方に飛ばしたがその後は一切この業界に関わっちゃいねえ」

「それならと言いたいがなあ……私らもこれは公言しねえから。少なくとも処分済んだのと数年前だからいいが……ほんとタイミング

次第では大騒ぎだぞこれ」

「世界大規模遠征すら取りやめになりかねなかったわマジで」

遠征が取りやめになるかもしれない。その発言に驚く私達だが、その理由も何となく察しが付く。

「北原さんも中央トレセンに来れたからよかったけど、地方のトツブレースを目指そうとしていたトレーナーとウマ娘を『皇帝』ルドルフの勧めでチームメンバー根こそぎ引き抜いて中央に来たらダービーは忙しいのに手伝いせずに手続き自分でしていないから出さねえよと言う……そしてこの件。いや……もうこれがばれたら世界の恥だわ」

「第三者から見れば生徒もトレーナーも強権振り回して地方や中央で芽を出そうとした人材を奪ったり潰したりする上にそいつらが学園のメンバーが遠征したら……と見られれば世界各地で有望株取られると変な目で見られるからなあ……マジでこういう情報は洒落にならないよ……」

美柚樹さんの件とオグリキャップの移籍のあれこれ。しっかりとケリをつけたし、当事者たちはそれでよかったと言っているが傍から見ると確かにそうなのだ。それをこの日本メンバーが世界各国への一斉遠征と噛み合わせるとそれは悪く見るだろう。

こんな強引なスカウトをしているのかとか言われるのは確かだし、今留学している学園のメンバーへの風評被害。今後の学園の運営にも何かすれば煙が立つようになりかねない。ルドルフの件は悪意あつての事ではないが、それでも他者の目からどう映るかは別。

「はあ……とりあえず後日理事長からもきかせてもらうけど、こ

ういうことしていないのよね？　もう」

「は、はいもちろんです！　というかそんなことをしても本当の信頼は出来ないし意味がねえ!!」

「それをお前らの職場でやっていたから聞いてんだろうがスカポントン。私らの姉貴分かばいきれなかったやつがよく言うぜ」

「あー・・・あー・・・学生たちにはこの件は言わない。ちょうど皆あのニユースに夢中だろうし。それに遠征への熱もやばいことになっていくだろうしね。ただ、ほんと再発防止はしてよ皆さん。今後の日本ウマ娘業界に関わる一大事なんだから」

頭が痛い。眉間に深くしわを寄せて渋い表情でイラつきを隠せないリボーさんと文字通り人を殺せそうなほどに鋭い視線で全員をにらみつけるサンデーさん自身も楽しみにしていた遠征の前にこのニユース。ハルウララとキングヘイローのニユースもあつた分落差に相当参っているようだ。

二人の言うことももつともだし。そうなのだ。流石にルドルフももうしないとは思うが似たようなことをして、オグリキャップのを知っている海外の人から中央へ行く際の件を想起されればそれだけで悪評が飛びかねない。些細なこと一つでも学園と国の評価につながるかねないのだからそれを企画していた二人の心労は相当と分かる。

「うう、あゝ・・・もう・・・私屋上で飲み直してくる。美柚樹お姉さん付き合って・・・」

「了解。つまみ持ってくるから」

「私も行くぜ。つたく。後でスピカの皆と絡んでくるかねえ」

遠征のためと、もう起きないということに期待をかけて話を切り、出ていくリボーさんとサンデーさん。その二人についていく美柚樹。アイコンタクトで「二人をお願いします」と訴えれば「もちろんですよー」と返してくれた。

理事長たちの言う懸念は解消されたけど、下手にこれでリボーさんが本気で遠征取りやめにして、この件を表にばらしたらと思うと・・・それだけで酔いがさめた頭に痛みが、身体に悪寒と冷や汗が噴き出る。

「やれやれ・・・一応、一難去ったか・・・？」

「こ、腰が抜けた・・・」

「ふう・・・ひとまずあの事件をもう起こさないように気をつけつつ飲み直しましょう。今日はなんやかんや目出度い日ですから」

「そうですね。私達が元気じゃないとウマ娘ちゃんたちも不安がるし、もう一度元気入れましょう」

京水トレーナーの言葉でひとまずもう一度食事を再開。お互いに気を付けて、遠征中は特に彼女たちに目を光らせておくと誓いつつ酒を飲み直したが、先ほどよりうま味が減っている気がした。

くスペシャルウィークSideく

日本一のウマ娘に、凱旋門賞制覇のブロワイエさんに勝てた。あのレースで會長たちとも負けないレースが出来た。その時点でどこか私は頑張っていたが少し緩んでいたかもしれない。

『キングヘイローバ群を叩き割ってど真ん中直線加速していく!!
ほかのウマ娘も追うが追いつけない! キングヘイローまだ伸びる!
! 王の走りに追隨できるものはない!! 今ゴオール!!』

『キングヘイローユニテッドネイションズSを勝利! これでG
Iレース3連勝! GI、III、オープン戦を含めれば6連勝! アメ
リカの芝で日本からやってきた麗しのキングの連勝街道は止まらな
い!!』

海外を舞台に戦い、連勝記録を伸ばすキングさんの強さに、短距離も中距離も問わず一週間間隔でレースに挑んで勝利し続けるその姿は前とは別物。

特にアメリカから来た留学生組。エルちゃんにグラスちゃん。そしてタイキ先輩は目が点になっているくらいだ。

「ワオ・・・夏の一大レースの一つでレコード2秒更新・・・? 遠征してから2か月も立っていないですヨ?」

「参加メンバーも弱くなく、しかもレコード出されて周りも反論できさない。まさしく完封をしています・・・とんでもない」

「オーウ・・・エルとスペちゃんと一緒にリギルのテストを受けていたキングちゃんと同一人物だと思えないデース」

アメリカの芝のレースは少ない。スズカさんも言っていたがアメリカはダートメイン。文字通り砂と土のレース王国。その中でレースの格を選ばず、長距離以外とはいえそれ以下は全てを選んでの戦いの日々。日本ではそうそうないほどのハイペース。ルドルフ生徒会長のハイペースローテーションが有名だが長さでいえばキングさんはそれを超えるほど。彼女の元気な高笑いが響きそれに続くレース場のキングコールが出たところで場面が切り替わってコメントーターの場に。

『いやー日本から来たフォグさんの弟子。彼女日本ではいまいち勝ち切れていなかったって信じきれないですねえ。つまりは日本には彼女以上に強い子たちがあと4人いるんだろう?』

『世界レコードをたたき出したセイウンスカイ 凱旋門賞二位のエルコンドルパサー、ブロワイエを下したスペシャルウィーク、そのスペシャルウィークを倒したグラスワンダーで黄金世代と言われているんですよ?』

『まいったね。私の娘にウマ娘がいたら留学を選んじやうほどだ。そして、その黄金世代はさらにダートの舞台でもいたらしく、しかもアメリカで旋風を巻き起こしているんだから驚きだ。映像頼むよ』

『もちろん。では次の日本から殴りこんできたウマ娘のニュースです。アメリカの準三冠セクレタリアト杯に殴り込んできたハルウララ。彼女もまたアメリカのウマ娘の歴史に刻まれる偉業を成しました』

そして、次はハルウララちゃんの番。動画で見ているアメリカで昨日放送されたこのニュースに目が離せない。ウララちゃんはすごくいい子だ。ただ、自分の記憶を掘り返しても最下位の方が多いし、前

向きで強いメンタルと優しい心を持っていたが実力じゃ……その。晩成かなあと思っていた。

しかしアメリカではそんなウララちゃんを信じられないという声が多数。フロックではない強さを持っている。アメリカにさわやかな春と勝利を運ぶ最強の一角とまで動画感想欄にも書かれている。

「アナザー三冠……ここにウララちゃんは挑んだんですか……」

「あ、あのー……アメリカの準三冠ってなんですか？」

ただ、準三冠と言われても正直よくわからない。海外遠征を考えていなかったのもあるし、スズカさんも芝で戦いに行ってきた。セクレタリアト杯とかもここ数年で来たG1レースだけど人気があるくらいしか知らないのです。うう……勉強頑張らないと。

「アー私たちの母国アメリカの三冠はケンタッキーダービー、プリークネスS、ベルモントSなんですが。それとは別で大統領選挙に出れば当選確実と言われた人気と強さを持ったセクレタリアト、初代ビッグレッド。アメリカの殿堂入りになるのなら彼女の称号を持つのは条件の一つと言われるほどの強さを見せたマンノウォー、伝説のJWCでアメリカ代表になるほどの実力を持ち、大女優としても有名なハリウッドリムジン」

「この三名の名前を関した3つのレースで夏場に短い間隔で戦うレース。より暑い季節で行うのもそうですが賞金の高さとお走枠の多さ、何よりアメリカで最強と呼ばれるメンバーたちの名前の格もあって毎年25名以上のウマ娘たちが戦う世界レベルの大会がこの準三冠」

「手にできたものは莫大な賞金と名誉。三冠を手に行ければ三つの

レースの合計賞金を更にもう一度もらえてアメリカのいかなるレースでも優先出走権を手にできる。まさしくアメリカンドリームを凝縮した国際ダートレースデース!!」

タイキ先輩。グラスちゃん。エルちゃんの三人がかわるがわる分かりやすく説明してくれるので理解できたが、なるほど歴史は浅いが賞金の高さや伝説のウマ娘の名前を背負うレース。しかも三冠を達成すれば名誉も賞金も次の舞台も何もかもが手に入る。とんでもないといしか言えない。そんなレースにウララちゃんは挑んでいるんだ・・・

そうこうしていたら目の前で行われているレース。今始まったばかりでよかつたあ。

ウララちゃんの新勝負服は桜色を基調とした浴衣で背中に桜の大樹と桜吹雪が舞う模様がとっても美しい。ウララちゃんは後方につけてじりじりと外に移動。その際に見てすごいのがぴたりと最後尾と自分の前のウマ娘の距離をつけている。

なのに気配はほかのウマ娘たちに紛れて周りには意識することもなく前の方への意識が強い。その間にウララちゃんはじりじりと外へと移動していいよいよ大外枠へと移動。

「・・・おそらく、現在二番手の子をマークしていますね」

「フム。確かにそうですね。彼女に合わせて出ていますし、最後の追い込みの際に自分はルートがつぶされないようになっていますよ」

「確か・・・この二番手の選手はステイヤー気質の選手でロングスパートとトップスピードで長距離を主戦場にしていますね」

「それもだけど・・・ウララちゃんのフォーム。すつごく奇麗」

真夏日に行われている中距離レースということもあってどのウマ娘たちも汗の量がすごい。特に前で走っている逃げ、先行組の表情は最前線のカメラから見ても辛そうでありフォームも少し、ほんの少しだけど最初に比べると鈍っていた。けどウララちゃんのフォームは崩れていない。表情も汗をかきつつも心底楽しそうに笑っていて余裕の走りでもバ群の最後尾付近を離れない。

だけど第3コーナーについたその瞬間。ウララちゃんが仕掛けに行っただけが・・・地面が爆発した。そうとしか言えないほどの砂が吹っ飛び、そこからウララちゃんが加速を仕掛けていく。桜色の髪としっぽと勝負服なものもあって桜色の流星が地面を踏むたびに地面が爆発したように砂が舞い上がりぐんぐん距離をつめて第4コーナーに行くころには先頭に立っていた。

キングさんの走りは軽やかに風を纏っていくどちらかと言えば軽やかで優美なもの。けどウララちゃんのは違う。地面を砕きながら力強く。そして誰よりも早く駆け抜けていく。直線になったところでようやく全員が仕掛けていくけど大外回りから減速をほぼほぼほしないでトップスピードに乗っていたウララちゃんはここでさらにスパートをかけて周りとの距離を開ける。

「What!!? ちよちよちよ・・・この速度でタイムは!!」

「周りの加速が止まって見える」

「おう・・・ファンタスティック・・・」

「凄い。これが今のウララちゃん・・・!」

大外からの距離のロスも消耗もものともしない。地面が爆ぜて砂が舞っているのを見て、次の瞬間には何メートルも先へと行く。後ろのウマ娘たちが追いつけているのはその砂の爆発の後だけ。しかも追いつけたとしてもウララちゃんは第4コーナーからの加速をしつつ一番走りやすいであろう場所を走り抜けているので打つ手がない。

そのままウララちゃんは大差で勝利。レコードも4秒縮めるといふ誰も文句のつけようのない内容で勝利を決めた。ここからまた場面がスタジオに切り替わり、コメンテーターたちのテンポのいい会話が続き、最後にキングさんとウララちゃんのインタビューに変わる。

「……まさしくBIG REDの名前を関するレースにふさわしい勝利。みんな訳が分からないという顔しているワ」

「遠征して慣れないはずのダートレースを炎天下の中で大外からの仕掛けをして、大差勝ちかつレコード4秒更新。アメリカではウララさんの実力は最強候補筆頭どころかこのままいけば殿堂入りも狙えるでしょう」

「みんなどんどん進化して……あ。始まりますね！」

『一流のウマ娘であるのは私の使命であり目標。ですがそんな私に応援してくれたアメリカの皆様にも感謝を。勝負の場をくれたことへの感謝を。だからこそ、応援してくれるファンの方々のためにも、何より私の同期のライバルたちと更に戦えるよう高みを目指すために今度はBCターフを目指しますわ！ アメリカ芝レースでの最強は誰かを決める！ そこで私はようやくアメリカ最強のキングとして胸を張れます!! ここはまだ途中。我こそはというウマ娘の皆様!! 秋に会いましょう』

『ウララはねー今まで一番遅かったし、勝てなかったけど走れば楽しかったの。だけど、一位を取って私を応援してくれる皆と一緒に一位の喜びを味わいたいし、トレーナーたちと頑張っつて、でも負けていたの。それでも頑張っつて、リボーさんたちがマンノウオーさんたちと会わせてくれて、こうして走っつて勝利できました。だからね。商店街の皆ー！ スペちゃん、エルちゃん、グラスちゃん、スカイちゃん、キングちゃん!! ウララ頑張っつて三冠目指すから応援してねー!!』

あまりにも面白いと言える二人のインタビュ。だけどアメリカのショー？ というか盛り上げるような言葉を加えているのは二人ともアメリカンらしいのが混じっつているのだろうか？ 商店街のタオルを見せてピースサインを見せるウララちゃん。観客とテレビに向かっつて頭を下げた後に腕を組んで仁王立ちで力強く言い切っつて去っつていくキングさん。どっちの方も大盛り上がりの中で映像は終わり、直後に動画も終わっつた。

「くうあああー!! あああー!! キングもウララもずるいデース!!
こんなカツコいマイクパフォーマンスされてアメリカで燃えないわけないじゃないですカー!! 間違ひなく今年の後半で盛り上がることナンバー1待っつたなし!」

「うふふ。これは楽しみですね。一度こっちに戻っつてきてからは非とも手合わせ願ひたいです。8月半ばくらいに帰っつてくるとしたらアメリカ最強格となっつた二人が、天皇賞やジャパンカップ、ダートマイルでどれほど暴れるか」

「ぜひとも戦っつてみたいデース!! あと私がいたころの芝と今のアメリカの芝の変化とかもきいたりできればおハナさんも喜びマース!! そして何よりレース結果も二人もグレイト!! リギルに入れておきたかっつたくらいデース!!」

「キングさんもウララちゃんも強くなって帰ってくる。私も・・・もつともつと・・・上を目指さない」と!

心の中に熱い火がついて、カツカと体が熱くなって武者震いをしてしまう。二人とも日本を離れて戦い続けて強くなった。その二人からライバルだつて言ってくれているのにこのままではいけない。強く鋭く。それこそ今度は世界一の。アメリカ最強となったキングさんでも戦えるくらいに強くないと。

今からでも外で走り込みをしたいがそれは怒られちゃうし明日トレーナーさんに頼まないと。もつとハードなトレーニングを。私もより早くなれるようなものを!!

走りたくて、燃え上がる感情を体を動かして発散したくてたまらない。合宿の最初あたりでこれを見てよかった。この勢いで必ず合宿をやり切つて、帰つてきた二人にふさわしい強さになるんだ!!

くメイシヨウドトウSideく

「アメリカの芝の頂点に足を進めて、ダートの準三冠の一冠を手にした・・・」

「ああ、これはすごい! まさしく旅路の果てに自分を磨き、王者としての武器と器を手にしたアーサー王! 桜吹雪と春一番を運んだ風神!! カノープスもそうだったがどんどんみんなが化けてきている!! ここにきてまた盛り上がりどころが来るなんて!!」

練習が終わり、お風呂もすごくおいしかった食事も終わっての夜の自由時間。そこで全員に通達されたこの動画を見ろというサンデーサイレンスさんの指示で見た動画。キングヘイローさんは連勝街道をハイペースで走り抜けてアメリカでも一躍スター。ハルウララさんもその明るさとやさしさ、そしてレースでは圧倒的な走りのギャップで期待の星。

カノープスのツインターボちゃんがリボーさんの弟子になってから始まったように私の回りでどんどんみんな強くなっていく。上のステージへと、前へ前へと進んでいく。

(わ、私なんかじゃ相手にならない・・・芝のレコードも私のベストを越えている。アメリカの固いダートであれなら日本でも慣らせばウララちゃんとも戦うかもだし・・・う・・・うう)

「ドトウ！ これはボクらも負けられないな!! 改めて鍛え上げて帰ってくる二人を迎え撃つようにしないと」

「ふえ!?! え、で、でも私じゃ敵わないですよ!?! あんな走りを私は」

「それはキングたちもできなかつた。でもできるようにしたんだろう? ボクらだつてできるよー」

「で、でもお・・・」

どうしたつて後ろ向きに考えてしまう。誰も付いていけない異次元の末脚のキングさん。2000メートルなら常にスパートをかけて大逃げでやり切ってしまうターボちゃん。地面を破壊するような速度とパワーで大外からコースを奪っていくウララちゃん。私の

知っている皆との変化の速さに気持ちも身体も追いつかない。

オペラオーさんのように負けられないとは思うけどそれ以上にしり込みしてしまう。あんな怪物たちにどうしろと思ってしまうのだ。

「・・・大丈夫だよ。ボクの認めたシンデレラなら必ずあの王様にも、美しい春の風神にも負けない強さと輝きを見せるはずさ。それにね」

「それに？」

「君がいつも言っている救いはある。今ここにはリギル、スピカ、カノープス、六平さん、そして僕たちを支えている。あのカノープス、スピカを化けさせたりボーさん、サンデーさん。そしてあの人たちが知っている怪物たちがいる。君一人で辛くとも手を取ってリードしてくれる人は必ずいる。運命を手繰り寄せてくれるよ」

「あ・・・」

「まあ、ボクはおハナさんやリギルで最高の環境だから問題ないがね。ドトウも彼女たちのように環境を変えてみるのも一考じゃないかい？」

「はい。ぜひ後で京水トレーナーとも相談してきます。もう美柚樹さんからも私も実は遠征を考えていて」

そうだった。私もまた遠征先で京水さんと一緒に鍛えてくれる人を用意してくれていると。霧のようにとらえきれない短距離の王者に二着と100バ身を着け、レコードを6秒以上縮めたた伝説の怪物。そんな人たちがジューピターについて近藤トレーナーさんにキングさんもウララちゃんも鍛えられた。

私達にも欧州の怪物が師匠と仰ぐ人がついてくれる。もしかしたら・・・もしかしたら私にもチャンスが来たかもしれない。

「おお？ 流石じゃないか。もう次の用意をしているなんてね。ボクのライバル。最強なのは君だからね。より美しく強くなっているのが楽しみにしているよ。だからこそ勝つボクの強さと美しさが輝くだけだ」

「私も負けないうよう頑張ります。よろしくお願いします」

この夏と、遠征でオペラオーさんたちに負けないうように・・・同級生たちに置いていかれないように私も頑張らないと。

サンデーサイレンスって靈感ありそうですね

く美柚樹Sideく

「ぐおお・・・ぽ・・・ぽかり・・・水でもいい・・・くれ・・・くれええ・・・」

「あー・・・軽めとはいえ・・・これひっさびさ・・・あづう・・・」

「大人組がつぶれてどうするのよもう」

あの騒ぎから翌日。どうにも私たちとトレーナー組は大半が酒を飲み過ぎたように見事にほぼほ全員が撃沈。大丈夫だったのは私とヘリポスさんくらいでどうにか大丈夫そうなのがリボー。ヘリポスさんは昨日ベルノちゃんに資料とか諸々渡していたりで酒飲んでいなかったのが功を奏したか。

「い、一応今日は模擬レースになっているから・・・私はもう少ししたら回復するからお昼からくるわ・・・ぐお・・・」

「うえく・・・もうだめ・・・シャワー浴びてくる」

うーん・・・酒が残っている状況でぎらぎらの日差し差す夏の海に大人組放り込むのもなあ・・・今日のレース関連では養生メイン出来ていて参加させなかったライスちゃんとドトウちゃんいるし・・・頼むかあ。

「今日はもう大人組は休んで水とか飲んでいなさい・・・ライスちゃんとドトウちゃんに頼んで残ってもらうから全員寝かせるわよ。で、リボーは午後の模擬レースや練習の監督お願いよっ」

「了解・・・」

「ウコン茶とスポドリ、水は置いておくのと、蜆の味噌汁作っておくから。ちよつと肝臓と胃に優しいサブメニュー用意しておくわ。ほら寝た寝た」

おハナさんと南坂さんもぶっ倒れている始末だし、無理させて酒でトイレ近くなっている上に汗かいて脱水症状とかシヤレにならないし釘指しつつ見ていくか。

「えー・・・まあそういうわけですので今日のレースは私とヘリポスさん、ベルノさんで見っていくことになります。賞品の手配もしっかりあるので皆さんでミニゲーム気分で楽しみましょう」

「ははは・・・まあ、普段から我々のために粉骨砕身助けて導いてくれる方々ですし、羽目を外してしまうのはしょうがないでしょう」

「なんだよ〜大人組が昨日騒がしかったのはそれか。ゴルシちゃんも交じればよかったぜー」

とりあえず始まった今日の朝からのレース練習の前にトレーナーメンバーほぼ全員二日酔いで撃沈。酒でトイレも近い分汗とトイレで脱水症状と熱中症が怖いのでレース中の対応は私達ですることを伝えるとルドルフちゃんが苦笑しつつもしょうがないという感じに締めくれたので騒ぎにならずに済みました。

それでゴルシちゃん。貴女ぜつたいこれ幸いとみんなに悪戯仕掛

けるでしように。」

「いやーのん兵衛どもの酒の香りの強さはウマ娘にはつらいかもね
〜で。えー今日はちよつとしたレクリエーションと調整を兼ねての
砂浜、砂芝のレースを行います。距離は2400、2000、160
0メートルで分かれて朝二回、昼に二回を行っていくのと、チームで
参加。若しくはチームを作ってレースに挑んでもいいです」

「・・・美柚樹さん。えーと。それはスピカやりギルみたいな大所帯
も分かれて行動してもいいんです?」

「問題ないですよジャスタちゃん。スピカ以外の子たちとも組んで
参加してもよし。団体レースの経験をするもよし、今の自分の力量を
見極めるために一人で挑んでもよし。大事なのは経験を積むこと
ですから」

実際は海外のチーム戦、そして柔らかい、脚を取られやすい洋芝の
感触をつかむための海辺、海辺に植えた芝のコースを感じることで
どね。ジャスタちゃんはとつくに気付いているのかもね。さつきか
らしきりに考えているようだし。あ。ゴルシちゃんがその顔見て面
白そうに笑っている。

「そしてせつかくですので今回はそのレースの賞品を用意しまし
た。1位から5位まで入った子たちは貰えますし、チーム内の誰かが
2位以上に入れば残りの子たちにもプレゼント。これです」

後はまあなんやかんやと用意出来た賞品とその一覧表を開示。ホ
ワイトボードをグルんとまわしてみせればみんな色めき立つ。

1位 地域限定スペシャルスイーツパフェ 2位 美柚樹オリジ
ナルかき氷、アイス詰め合わせ 3位 各種プロテインセット 4位

スポーツドリンク、ビタミンドリンクセット 5位 プロテイン
バー、人参チップス

「マジマジ!? これを勝利できれば手にできんの!? 激やば。マジ燃える!」

「ふふ。テレビでも紹介される人気喫茶店から頼んで今回のレースの賞品として出してもらいました。それ以外もたくさんありますので思い切りやりましょう」

「では、これより距離別、チーム別の登録を行います。開始時刻は今から20分後になりますので焦らずに決めてくださいね」

ベルノちゃんの言葉で早速皆相談をし始めていく皆。実力や距離適性、戦術などを含めてどれがいいかと考えている様子。特に凱旋門賞、ドバイDF参加経験ありのジャスタちゃんとゴルシちゃん。カサマツでダートの経験豊富なオグリちゃんらは人気者。

「私は1600メートルで行きマース!!」

「ターボは2400メートルで行くぞ!」

「私は1600メートル参加を」

そんな中でぐさま申し込みをしに来たのはタイキちゃん。ターボちゃん。イクノちゃん。最初の二人は分かっていたけどイクノちゃんがマイルとは珍しい。

「了解。でもイクノちゃんは珍しいわね。今はステイヤー、中々長距離の方が得意でしょう?」

「ええ。ですがダート、柔らかい場所でどれほどやれるかというのが未知数なのでマイルをたたき台に。私のスタミナがどれほど持つか、押し切れるかを計れたらと思ひまして」

「なるほど。いいチョイスだと思ひうわ」

マイルのレースコースは少し波打ち際に近くしている分砂が水分を多く吸っている分泥に近い部分がある。基本整備されて固い、トラップリンと言われるほどの芝とはまるで別物の場所で本気で走る分負担の短い距離で見極めを行うのは流石。

「ウエーイー！ アタシとパーマーもマイル決定！ ウチラのコンビでみんな倒すつしよ！」

「イエーイー！ イクノちゃんにもタイキちゃんにも負けないよ！」

爆逃げコンビことヘリオスちゃんとパーマーちゃんもマイル参加。うーん。スタミナごり押し組が2人にマイルの王者。そして大逃げかまし放題のヘリオスちゃん。ここはかなりカオスな戦いになりそうねえ。

「私は・・・うーんスペちゃん、グラスちゃんと一緒に2000メートルを」

「ゴルシちゃんはジャスタと一緒に2000行くぜ」

「ボクはマックイーンと一緒に2400かな。かいちよーもそつち行くみたいだしみんなと勝負だ」

どんどん決まっていくなメンバーたち。距離による偏りもなく、逃げ、先行、差し、追い込みと気持ちよすぎるくらいにばらけたのでこ

れはいい練習になる。

「ベルノちゃん。カメラを用意して頂戴。後で資料用に送る映像で必要だろうし」

「分かりました！」

「あ。美柚樹さん。私も終わったら手伝います」

「ありがとうジャスタちゃん。さてさて。どうなるかなあ」

こうして始まる大レース。格としては十分にやばいレベルよねえ。日本最高峰のスター軍団が水着姿で楽し気に走り回る。デジタルちゃんはもう熱中症と鼻血と過呼吸でぶっ倒れている始末だし。ちゃんと2000メートルで走ればいいけども。最悪部屋で寝かせておこうかなあ。

くジャスタウェイSideく

「くっはあー！ このアイスうんめえ!! ほれマツクちゃんもジャスタも食べえ食べえ！」

「もう。ゴルシちゃんもパフェ私ばかりにあげないで自分で食べなさいよ」

「いいーんだよ。今はこのかき氷の気分なんだし。ウメー」

あの子の2000メートルレース午前の部。どうにか先行で始められた私とゴルシちゃんを1、2フィニッシュを達成。パフェとアイスの山を手にできたのでみんなでわけあって昼休憩。あー・・・世界の腕利きシェフと日本でも有名な喫茶店のお菓子を食べられるのが幸せ。

「あぁー・・・幸せですわ・・・こんなに気楽にパフェを食べられるなんて・・・ありがとうございますゴルドシツプさん」

「おうよ。ゴルシちゃんの優しさに触れて眠れ。そういえばさー今年の肝試しとどうするんだろうな？ 企画とかしていないのか？」

「それなんだけど今年は中止するんだって、サンデーさんとカフェちゃんからの提案で」

「あら。今年はしないんですね。それ以外のイベントをするのでしょうか？」

で、まあとりあえず二日酔いで大人組がぶつ倒れても生徒会で行う毎年恒例。夏合宿の夜に行う肝試し大会。今回はそれが行われないこととなった。生徒会で行うのと毎年同じ場所で行うのもあって生徒だけでもやれるものなのだがその理由がまたある意味納得なものだった。

「いや。サンデーさんたち曰く『この場所は本気で危ないからやらないほうがいい』というのと『今回は合宿のグループ分けを細かくしている分用意に時間を割けない』ということまで止まったみたい」

「サンデーさんが止める・・・あ、なるほど・・・」

「はむ・・・ん？　それが何で駄目なの？」

「えーとね・・・サンデーさんの場合アメリカで起きた事件とかあれこれでそっちの方にも心配を感じるのと、カフェちゃんも色々見えている人だからね？　それで」

テイオーちゃんがプロテインバーをもぐもぐ、ドリンクをもらって（やっぱりというかまだまだルドルフ先輩には勝てなかったようで）しながら首をかしげていたのでサンデーさんとカフェちゃんのエピソードを話していくとどんだん顔を青くしていくテイオーちゃんとマックイーンちゃん。あ、その顔可愛い。

二人とも一応夏の合宿と肝試しは経験しているし、場所も同じ。そこでまあこの二人が『冗談抜きでシャレにならん』といった場所に過去肝試していましたとなれば・・・あーうん。ご愁傷様。

「ね、ねえマックイーン・・・今夜サンデーさんと一緒に寝させてもらえないか頼めない・・・？」

「い、いいですわよ？　その・・・安全のため、念のために・・・ですわね？」

「ちゃんと一年過ごして無事なんだし大丈夫だろー」

「まあ、必要なら近くに神社あるし、お守り買いに行く？　午後の予定もトレーナーさんたちほぼほぼ全滅したせいで自由時間多めらしいし」

ルドルフ先輩たちもちよつと不安がっているので提案しておくのと、割と真面目に来年から肝試しする際にはお祓いも頼んでいたほうがいいでしょうね。んふーあ。あつちではヘリオスちゃんとパーマー

ちやんがマイルでもぎ取ったパフエを二人で交互にあーんさせている。撮影しとこ。ああー・・・いいなあー私もゴルシちゃんに・・・駄目だ、こっそりミカンに隠してからしねじ込まれそう。それが無くても変なことになる。

「ところで、二人は怖くないの？　ぼ、ボクは大丈夫だけど」

「ん？　幽霊だろ？　遊び相手が増えそうでもいいじゃねーか。塩味のお菓子と砂糖菓子どっちが効果あるか見てみたいしな」

「幽霊って騒がしいのが苦手っていうし、ゴルシちゃんがそばにいれば大丈夫かなーって」

ぶつちやけ、幽霊ですら度肝抜かれたあげくにハジケスイッチ入ったゴルシちゃんなら誰だって振り回しそうだしねー。この話を聞いていたウオツカ、スカーレットちゃんもみんな今夜はサンデーさんの部屋に突撃。スピカメンバーほぼ全員とサンデーさんで過ごすことになりましたとき。

春ノ風神、ターフの女王帰国

（リボーSide）

9月になって夏休みも終了。私の弟子が宿題の回答をミスりまくっていたので勉強を教えたり、美柚樹お姉さんとサンデーのダブル講習会でみんなの宿題を手伝ったりとで合宿が終わっても忙しなかった。

そしてまあ、日本もアメリカも、世界もこのニュースで連日もちきりだ。

『日本から来た春ノ風神 真夏のアメリカに春一番をもたらし準三冠制覇！』

『三レースすべてを大差勝ち、レコード更新平均3秒以上！ 日本総大将の同期組世界に旋風を巻き起こす！』

『キングヘイロー、ハーリング大統領と会食。BCターフ優先権獲得。今年と来年のアメリカ芝レースの覇権を狙う』

『黄金世代さらに増える!? 日本総大将スペシャルウィーク、怪鳥エルコンドルパサー、栗毛の怪物グラスワンダー、トリックスターセイウンスカイ、ターフの女王キングヘイロー、春ノ風神ハルウララ。彼女たちの実績を再調査』

とまあこんな感じでどのニュースを見てもスポーツ関連では必ず彼女たちの名前が載り、そして特番も組まれている有様。改めて考えしてみると凱旋門賞二位のエルコンドルパサーにブロワイエを倒したスペシャルウィーク。3000メートルレースでワールドレコードを出したセイウンスカイ。彼女らを倒しているグラスワンダー。

負けはあるが先着、順位では上の経験もあるキングヘイローにダート路線とはいえ準三冠レース。真夏のハードで厳しい季節と日程の中すべて大差勝ち、レコード更新を果たしたハルウララ。うん。これはやばいわね。間違いなくかわったレースが違えば先の4名はその国で無敵を思うままだったろうなあ。いや、磨き合っているからこそその強さもあるかも？

「みんなー！ 来てくれてありがとうー！」

そしてただいまアメリカで大暴れして世界ランキングにも割り込むこと確実にされたウララちゃんが商店街でミニライブを開いているのだけどこれがまー大盛況。

美柚樹お姉さんと商店街のメンバーで用意していたグッズや屋台料理。となぜか屋台を出しているゴルシちゃんたちも飛ぶように売れているようで忙しそう。このライブは2週間のうち週末土曜日に行う予定で既にテレビスタッフも詰めかけての大忙し。

「キングヘイローさん！ ハーリング大統領との会談で一言!!」

「え、ええ。そうですね。やはりあの方は優しい方でしたし、レースへの理解も深い方。BCターフに来るであろう有力メンバーの戦い方。意見交換で盛り上がりましたわ」

そのなかでアメリカ遠征組、芝レースで6連勝。しかも週ごとにレースに挑み、非公式レースも含めれば10連勝。フォグの後継者と言われているキングちゃんはアメリカ歴代でも有数の優和派。聖人君子でナイスミドルなハーリング大統領家族と食事会。最後はサイン交換と握手をしてウマッターも交換したりとで名家のお嬢様だったけど国の頂点からファンです公言されることもあっているいろいろ凄

いことだ。

「マンノウォーとフォグの後継者とアメリカから認められるとはやっぱ持つもん持っていた。いや磨いて、アメリカで見つけてきたか。見ろよこの記事」

「あらサンデー。貴方もよ？ あの会談で大統領サンデーの名前を出してファンだし、日本で楽しそうにしているすごうれしかったと」

「キングから聞いたぜ。それでサインできればほしいとも言っていたしな一年末、新年過ぎたら一度あつちに出向いていくかねえ。私が現役のところ、病気になっていた時に議員時代のあの人が応援してくれたんだわ」

記者からのインタビュを終えたサンデーも戻ってきて嬉しそうに週刊誌、ウマ娘のレース、情報雑誌を片手にバシバシと叩いて喜ぶ。アメリカで送り出した子たちがしっかりと成果を出して笑顔で錦を飾る。トレーナーとしてアメリカじゃ干されていたサンデーがそれを見れたんだしそりや嬉しいわよね。

「う〱お〱お〱お〱くくく!!ウ〱ラ〱ラ〱ー!!」

「「ウララちゃん！ おめでとおお!!」」

「はふうー・・・はあ・・・ああ・・・尊い。風神ライブの熱風マヂ死ぬ・・・尊さに導かれて昇天しちゃう。ホヒョオ!!」

ライブも2曲目。自身もトレーナーとして経験を積み、二人の栄光を目の前で追いつけた近藤トレーナーが鼻水も涙も垂れ流して男泣きしながら応援し、商店街の皆さんも泣きながら応援。隣でデジタル

ちゃんが尊死した。ばつちりカメラを置いている当たり録画して見直すのだろうけど。

「ウララはアメリカからダートレースの招待状が山のように来ているし、キングはBCターフに向けて今から番組がアメリカで製作。アメリカの短く中距離業界が盛り上がっているし、それが来年まで行く。この間に有望株が増えれば面白いだろうよ」

「アメリカの名伯楽たちに若き芽が出てくるかしらね。あーそれとサンデー。私もう少ししたらちよつと外すわ」

「? どうした。実家に帰るのか?」

「いやいや。美柚樹お姉さんの農園で人参が収穫シーズンになったみたいだね。あのギガントキャロットも収穫できるのとなんでも親戚のウマ娘で海外とかで活躍できないかかって子がいるようだから見に行くの」

あの美味しい人参の収穫だし人手もいる。ちよつとした息抜きと有望株かもしれないしいやあ楽しみ楽しみ。

「ほーん? お。海外メディアまで来ているわ。こりゃー面白いことになるなあ。ダート路線で今後アメリカのメンバーが来てくれるかもだし」

日本に挑戦してくるメンバーも増えそうだし、こっちは賞金もいいしねえ。逆にこちらからダートの本場アメリカに殴り込んであのお祭り騒ぎの頂点ともいえるレースを味わうのもいいし、うんうん。私達の時代、ギンシヤリ先輩らの時代になりそうだし、場合によってはこれも越えてくれそう。

「後はまあ、来年か。来年の暴れ方次第では世界の尻に火がついて慌てふためくだろうぜ。日本のウマ娘のレベルは高いけど、芝やレース場の関係で内弁慶だって意見も多いから」

「実際少し前まではそうだったしねージャパンカップの賞金の高さもあるからオーストラリアからの日本ツてルートも普通にあつたし」

「今後はどうなるかしらね。オーストラリアも私を超える器がちらほらいるし、日本は今絶頂期。キタサトコンビも来年来るから鍛えれば化けるしでむしろやべーやつらの巣窟扱いになるかしら。」

春の女神、風神と呼ばれ、アメリカの土に桜を咲かせた大和撫子とウララちゃんが言われていたり、姿がかすむほどの速度、走りを見せる王者と呼ばれて心底嬉しそうに大笑いするキングちゃん。夕暮れ時まで人の波は引かず、いやあー商店街の賞品がすっからかんなるほど売れるとはね。これは八百屋とか食品店以外明日の仕入れ大変そうだわ。

「さて・・・と。私の方の仕事もしましようか・・・じゃ、準備はいかしらキングちゃん。ウララちゃん。ターボちゃん」

「もっちろん！」

「当然ですわ」

「楽しみだぞ！ アメリカで修業を終えた二人と師匠と走れるなん

て」

一通りやることが終わり、仮眠を取った二人とターボちゃんを呼んでトレセン学園の芝での夜間併走。ナイターもつけてくれたので気兼ねなく走れる。

芝を主戦場に行っているキングちゃんだけならまだしもウララちゃんを何で呼んだかというところ、マンノウオーさんのメールにあった。

『アメリカのダートに慣らしつつ芝に近い状態を作って適正あげておいたからいったん見てあげて』という割とふざけた、ぶつとんだ内容。ただまあ、あちらのダートもぶつ飛び高速バ場。お祭り騒ぎ、ガチンコレースがメインのアメリカなので日本の芝に近い部分があるっちゃあるのでやれないことはないだろうけど……

さすがアメリカは愚か世界最強のトップ。今でも下手な現役相手じゃ千切るからなああの人。どんな鍛え方したのやら。

「疲れもある、加えてしばらく三人は忙しくなること確定なので距離は短めマイルで。ウララちゃんは基本ダートが主戦場なので脚に違和感、痛みがあればすぐに休むこと。本当ならあのキチガイ準三冠に出た後は最低でも一月は休みを与えたいくらいだしね。キングちゃんもあのフオグのしごきは堪えただろうし」

「あ、あはは……キチガイ世代の短距離、そしてアメリカ横断してのレコード連続更新の覇者……確かにつらかったですが……でも、それでも今は愛しい日々だと思えますわ」

「うん！ マンノウオーさんは怒ると怖かったけど、凄く優しくして、近藤さんとも一緒に頑張ったよ！」

「よし。なら思いきりその成果を私に見せなさい。日本でも戦える
か見せなさい。うまくいけばだけど・・・ふふ。全員有馬記念、ジャ
パンカップやマイルで年末大暴れできるわよ」

そしてその成果を見るのは私。みんなが文句なし、もつと早くで会
えればこっちのトレセン学園にスカウトしたかったと言う覚醒を見
せたこの子たちの結果や如何に。

「今回は私達だけでの練習だし、私が合図を出すわ。よい・・・
スタート！」

私の合図で始まる模擬レース。まず先頭に出たのはやっぱりとい
うかターボちゃん。マイルなら大逃げを維持したまま逃げるスタミ
ナを持っているからいい選択。そして私は今回は先行気味の距離を
維持。

追い込みを得手とするウララちゃんとキングちゃんは私の後ろ、4
バ身くらいの距離を開けているけどなるほど悪くない。

(ついついてきているし、このペースも驚く感じはなし。アメリカのお
祭り騒ぎのノリのレース運び、観客たちになれてきているのがよくわ
かる)

あの国のレース場で走り回っていたからわかるが、私の故郷、イタ
リア、欧州とは対極、芝もダートもレース運びが真逆もいい所なのだ。

欧州最後の直線が長いこともあって基本スローペースで運んで、最
後の方でいかに脚を使うかという戦術が重きを占める部分がある。
しかしアメリカは最後の直線が短いレース場が多く、そしてダートは
高速バ場。そういうことがあって兎にも角にも最後の直線、コーナー
付近で先頭に立っていないと化け物みたいな末脚がない限り、それほ

どに脚が無くてもいい場所につけて前にいないと勝つことは難しい。

必然、スローペースとは基本無縁。誰もかれもが前に出てのガチンコのスピード勝負での先頭争いを中盤に差し掛かるところから、早ければ最序盤から始まる。だからこそ、この二人の戦いぶりはすさまじくアメリカでも高く評価された。

（高速バ場、短い直線のレース場で最後に仕掛けてまくる『追い込み』や『差し』であの連勝記録とレコードを持つてくるのは異常も異常。アメリカでも追い込みで大成、怪物的強さを見せたものは少なめ・・・どうなるか・・・）

目の前で気持ちよさげに走っているターボちゃんを見ながら早くも第二コーナーからの直線。どれ・・・耳をしぼって後ろの様子は・・・うん。ふつつーについてくるわね。あっちのダートも高速、反発強めだし問題なし。キングちゃんも来ている。

で・・・来る！　ここから仕掛けてくるわね。

「・・・シッ！」

「なに？　し・・・え!?　二人も!!？」

ここから前に出ての直線勝負で有利に持ち込み始めるのだろうかけども・・・この速度は予想の一つ上ね！　既にギアを90%引き出しているのに差が思った以上にのびない・・・ほんとあの連中どうやればここまで短期間で魔改造したのよ!!　私だってターボちゃんを今の形に変えるには一月二月必要だったってのに。

私、が先頭。後ろでは三名が叩き合いをしながらあつという間にもう最後の直線。コーナリングも良し。そして足音が三つ。高い背丈

からくる長い手足を活かした軽やかな走りはキングちゃん。しつかりと地面を踏みしめつつも接地の時間を最短にして加速を続けるのがターボちゃん。そして、地面を砕く、踏み込む音を出して走っていくのがウララちゃん。

速度に乗って加速を続けていく私とターボちゃん。逃げと先行以上で足を溜めてくる。自分以上に力強い踏み込みと加速で追い込んでくるのはいつだってヒリつく緊張とプレッシャーが来る。けどこのレベルは世界でもそうはない！ 様子見だとかそんなのはもう捨ててギアを最大まで入れて思いきり最後の加速。

「っ……は……！ はあ……はあ……ああ……
くきつつう」

「くっそー……粘ったけど、どうにか二着かあ」

「ふ……だ、ダメでしたわね。流石……世界最強の一角と、その技を継承したターボさんですわ……」

「はあ……あはは！ でもすっごく楽しかった！ 二人の背中が縮まらなかったなー」

「はあー……えーと……カメラの映像だと……」

私が一着。二着はターボちゃん。三着はウララちゃん。四着はキングちゃん。着差も1〜4着で2バ身しかなし。タイムも、おお。ワールドレコード一歩手前か。

この内容を帰国して、記者対応やライブ、イベントをこなしたうえで出来るフィジカルとメンタル。しかもそれを夜にできる。……うーん。これは文句なしの百点だということ。マンノウオーさんにメー

ルで映像つけて送りましょう。

「ふーむ・・・これはすごいわね。私からもみんなに走ってくれたお礼と、コーナリングとか追い込みでも使える技術を後日教えるわ。ターボも私の技を教えるから、ふふ。いいレースさせてくれたお礼よ」

「さっすが師匠！ 太ももだ!!」

「それを言うのであれば太っ腹ですわよ。・・・その極地のくびれの腰の細さですけども。しかし、いいのですか?」

「いいのいいの。引退した老兵の技が役立つのならあんた等には教えるわ。どのみち主戦場が海外にも行けそうだし尚更けが防止とベストを出せるようにね」

「おお！ 師匠もリボーさんの技術は盗んでおきなさいと言っていたしありがとうございます！」

「アメリカの皆なに吹き込んでいたのよウララちゃんに・・・まあいいわ。今夜はもう帰りましょう。寮長と保護者の皆さんにも連絡しているから今日は帰って、しばらく二人は養生・・・とはいかないでしょうけど、まあ記者対応に追われたりしつつ練習は軽めにね」

話題性ばっちりの二人だしねーここからもしかばらくトレーナーさんも大変だろうし、気を付けてほしいわ。

てこてこ4人でゆっくり帰ってから自分も社員寮に戻っていく中で思い返すはあのさっきの模擬レース。1バ身だけの着差なんてあのエキシビジョンとまだデビューしてしばらくの時期以外ではない。それがあの三名にされた。

肉体のほうは機材や走りの記録、データ、自覚も含めて衰えはない。日本芝もなれている。経験と引き出し、戦歴を考えても私は大体の子たちが18〜20で引退するのに今も動ける肉体を維持している分、戦歴は5年分プラスされている。その上でこれだ。

日本でのレースだから、歳だから。そんな言い訳はなしであの子たちは追いついてきた。私の、私たちの世代の速度と走りについてこれている。しかもこのコンディションで。

「・・・世代交代をようやく実感した気持ちねー」

いやはや、指導者としてもいろいろしていた傍ら走っていたけどもようやくそれが心から実感できてストーンと落ちた気持ちがする。まづ3名がここに来た。後は残りの子たちがどれほど上ってくれるか。世界の荒波と怪物たちの指導を経験して、揉まれて一皮むけるかどうか。

「早いところ来年にならないかしらね〜」

こんなにワクワクした気持ちで先を考えるのはいつ頃だろうと考えながらの帰宅。ひとつ走りした後もあってぐっすり眠れたわ

中央トレセン学園御用達農園

く美柚樹Sideく

「みんなついたらわよー」

みんなを乗せたワンボックスカーが数台並んでゆったりと移動するのは東京の田舎。なんでそこに行くのかと言えば私の実家の農園のバイトをしてくれるウマ娘たち。

秋のレースの合間。ちよつぴりの間だけどここの期間に収穫が出来るように仕込んだ野菜の数々。この時期に大量に用意できるように育てたのはいいけども同時に人手も必要なので学生バイトを連れて私の実家への送迎中だ。

「しかし・・・メジロ家でも取り寄せてはいましたがバイトもしていたのですねえ」

「なんだよマックイーン知らねえのか？ 遅れてんなア。学生バイト秋の稼ぎ場所ってことで有名なんだぜ？ アタシらウマ娘からすればもう一つおまけが嬉しいし」

「あはは。この時期あたりからはウマ娘の皆、みんなをターゲットにしたお店からの注文が多いからね」

そしてまあ、ゴルシちゃんの言う通りここの農園でのバイトは肉体労働だけど給金はいい。一つはそれだけの利益が出る。秋からは天皇賞にジャパンカップ、有馬記念に東京大賞典にURAFアイナル。デビューした子たちも朝日杯、阪神JFなどを中心に大きなレースがわんさか。

ウマ娘の皆の体調管理のために質のいい野菜を求めてくる人は毎年だし、レースを見るファンの皆はレースが終わってからどこかの酒場で語らうついでに飯をつまむ。そしてレースに出るウマ娘たちは勝てばチームをあげてのお祭り騒ぎだし、そのまま友人を連れて外食に行くかもしれない。

必然外食の機会が出るし味も質もいいと来れば私の実家の農園。トレセン学園のみならず多くの場所から毎度毎度駆け込みでほしい、あまりものとか規格外でもいいから是非ともという声が絶えないのだ。

「少し調べるとほんと何処にもお姉さんの農園の名前が出るものねえ。ちよつとでも使っているというのを見せたいのだろうけど」

「某アイドルが食堂企画とかで来たついでに色々ファンの皆がサーチしちゃったから一気に全国区になったしねえ。そこにトレセン学園も関わるとなつて、求人が一気に来たわー」

それを氣に一気に農園を大規模拡大してもはや凄いいことに。なんやかんや電車で東京の都心にも行ける場所だしで便利なのよね。乗り継ぎ使っただけど。

「さ、ついたわよー」

「「はああ・・・！」」

話していて見えるは東京に都会のイメージを抱いている人には驚くようなド田舎の光景、数件の家とそれを囲むようにできた数々の野菜畑があたりを埋め尽くし、9割7分はそれという山間の中に広がる光景に圧倒されている。

仲崎農園。日本有数の大農園に到着ってね。

「じゃ、みんなはジャージをつけていると思うけど一応社員用の予備の長靴に軍手、道具があるからそれを取りに行きましょう」

「ほーい。ん？ 何だこの匂い・・・」

「？ どうしましたかゴールドシップさん・・・いい匂い・・・」

「あ、確かに？ 何だろう・・・果実。ジャム？ でも野菜の香りも・・・」

母屋の方に車を止めてからみんなを下ろすと何やら匂いを嗅いでいる。土かの匂いだらけのなかだけど、何を気に・・・あーまさか。

「ここだな！ おほーなんだこりゃ？ 野菜の漬物？ ジャムみたいなものか？ すげえいい香り・・・いっただきまーす♪」

「ちよっ!! 勝手に美柚樹シェフの実家のものを物色されては・・・」

「うんま！ なんだこれ!! 超うめえ!! おいジャスタウェイも食べろよ！ 超上質なフルーツミックスジャムだぜ」

やっぱりというか・・・「それ」に気づいちやったかあ。そしてゴルシちゃんは止めきれなかったと。

「あー・・・それね。食べても大丈夫だけど、肥料よ？」

「ブツー!!? はあ!? これがあ?!?」

「ぶえっほ！ 何するのよゴルシちゃん!! もう・・・それと、美柚

樹シエフ。これが肥料って・・・本当です？ こう・・・ホームセンターで見る肥料とかとは色々違いすぎるといふか・・・」

思わず吹き出してしまふゴルシちゃんとその吹き出した肥料を顔面で受け止めるジャスタウェイちゃん。あーそうなるわよねえ。キラキラ光る果肉入りの金色のどろどろの液体。蜂蜜に果肉をカットして寝かせている蜂蜜酒の一種ですと言っても通じそうだし。

スぺちゃんとかも北海道で農業の手伝いもしていたからかしら？
一番驚いている顔しているわ。

「あーそれだけどね。ここの農園の飛躍。まあ美味しい野菜の誕生にもかかわるんだけど、この本が元なのよ」

とりあえずジャスタちゃんに手ぬぐいとウェットティッシュを手渡しつつ家に何冊もあるある本を一つ手に取っていく。それはある作家の短編集。その作品の中にあるある短編のページを開く。

「あら。星真一先生の。発想の柔軟さを培えるとラモーヌお姉さまから読まされましたわね」

「この作品の中にある。とある宇宙探索をしていた探検隊がついた星。そこで食事を振る舞ってもらえるということとで食料もなく飢え死になりかけていたみんなは喜ぶんだけど、もてなされた家にある壺の中身がすごくいい香りがしてね？ 一人がつい我慢できず食べるの。そしたらこれが本当においしいのなんのってみんなで食べちゃうの」

「ああ。その話は知っています。たしかそれはその星では肥料で、口直しに出された料理はさらにおいしくてみんなもう感動しちゃうやつですよ」

「ああーあの人の作品か。昔クロスワード解きながら読んでいたっけ。で？ それがどうしたってんだよ」

流石、小説や活字に触れていくにはちょうどいいと定評のある作品。中身もオチが読めないからいいのよね。みんな知っているとは。

「その美食の秘訣は何ぞや？」と聞かれるとその星の人曰く美味しく栄養をつめたそれを肥料にしてより良い食材を作る。という方法で作っていたのよ。美味しいものと栄養を吸収した作物や家畜はよりおいしくなるという感じ。それを実際に私のおじいさんからずっと研究してきた実現させたのがこの農園の野菜ってわけ」

まあ、その肥料には私がグルメ界、美食時代の人間界から再現したやつとかを肥料にしたり、品種改良に使ったりしてさらに良くしたものもあるけどそこは割愛。

「小説を本当にした・・・と。事實は小説より奇なり。ですわね」

「実際、これに関してはメジロ家も今の大奥方からも支えがあったのよ？ 現役のところに美味しいものを食べたいということで私のおじい様達に投資していたとか」

「そんなことが？」

「メジロ家ブランドのお菓子にもいくつか関わっているのよ」。私が小さい頃にも何度も来てはお菓子を食べたりしていたわ。さ。軍手の予備と、長靴は履いたわねー」

話しながらつい備品室でみんなに道具を渡しながら外に出る。

「今から始めるバイトは簡単に言うとは選別作業。この機械が人参を掘り起こしてベルトコンベアの上に流してくるからそれから傷のついたもの、あるいは形の悪いもの、砕けちゃっていたりモグラとかにかじられているものをはじめいてもらうわ。で、リボアの所では水のシャワーやブラシ掛けしたもので傷、サイズの選別をしながら規格外品をはじめてもらう。・・・えーと大丈夫？」

「あ、は、はい大丈夫です！」

「え、ええ。大丈夫ですわ」

うーん。毎度のことながら作業が始まるとウマ娘の皆は掘り起こされる人参の香りについて意識がそっち行っちゃうのよね。基本安全な作業とはいえ機械に乗っての選別はベルトコンベアに手を深く入れすぎて巻き込まれないかとか怖いから気を付けてほしいけども。

まあ、そこらへんは大丈夫な子たちにさせて、力仕事とかに割り振ったりしつつやりますか。

リボアSide

「・・・・・・・・農業って、こんなにむなしい部分もありますのね」

「あはは・・・まあ、みんな綺麗な野菜を欲しがりますからね。おかあちゃんやほかの農家さんも苦労していました」

「うちも農業視察はしたことあるけど、改めてみるとねー」

人参の収穫作業をして、昼休みに入った私達。で、まあほとんどの子たちがちよつと食への理解を変えられそうな感じに。

何せまあ、あれだ。野生動物に駄目にされた、腐っていた、傷んでいた。傷が大きすぎて廃棄されるのは分かる。けど多少の傷や規格外品。大きすぎて味が悪いからという理由ではじかれる。かすり傷があるからはじかれる。形が少し曲がっていたからはじかれる。

これを延々どどの作業工程でも繰り返して大型トラックの荷台に山盛りに乗ったものが売りに出せない判断されていく。まあ、これも訳あり商品として売ったり、工場に売るそうだが正規の規格品と比べれば二束三文もいい値段。捨てられる量もまたとんでもない。

手塩かけて育てて、野生動物や雑草と戦い、天候に振り回され、重労働したけど多くが水の泡になって売り物にならないものが出る。自分たちが八百屋、店を出ている野菜、食べているものが本当に一部なんだと知った子たちは多分今後食べ残しはしないかもね。基本大食いのウマ娘にその心配は少ないけど。

「はいみんな。今の時点で出た規格外品で大丈夫そうなのがあるから、好きなだけ持って行ってー」

「え、こ、こんなに良いんですか？」

「どうせ余っていても工場とか激安スーパーとかで売るのが関の山のものだしアルバイト代のおまけよ。ほらほら。実家の土産とか、食堂にこれで料理してくれと言えればいいわ。うちの野菜だし洗ってから生で食べてもいいかもね」

その声でみんな嬉しそうに人參の山に群がってカバンに詰め込んでいく。いやー・・・規格外品とはいえ世界の美食家、料理人が認める。中央トレセン専属契約のとれたての野菜とかいくらになるのよ一本でも・・・

みんな泥で汚れたジャージで嬉しそうに群がって尻尾を揺らす様子はクリスマスプレゼントに群がる子供たちの様子を思い出す。アメリカの孤児院とかで子供たちへのサプライズで乗り込んでプレゼントを置いたりとかしたわねー

あ、そうそう。そういうえば作業しながら気になっていた場所があるんだった。

「ねえねえお姉さん。あの土が固まっている場所？　はなんなの？」

「？　あーあれね。休ませている畑」

「でもその割には整備されているし、砂に近いでしょ？　あれじゃダート。しかも色々何か道具があるし」

「鋭いわね。一応ここも小さいとはいえ社員の皆が過ごす村があったり、地元で行われる運動会みたいなイベントもあるの。その際に休ませている畑をちよつと固めて使ったりとかしているの。最近だとーうちの末っ子が走る練習しているわ」

「走る？　ウマ娘なの？」

「そ。まだ小学生くらいだけど近いうちに中央トレセンと地方の方で受験するわ。推薦枠狙いみたい」

ふーむ。地元の運動イベントはいいとして、その子の適性はダートなのかしら。あと道具から見ても障害物レース向き……？ うーん。日本だどどっちも芝に比べると恵まれた状況じゃないし、ましてや障害物はなあ……ダートもデビュー後しばらくの子たちにある場所は地方交流戦が多いくらいだし、障害物も海外を拠点にしていた私から見ても少ないし人気薄。

お姉さんの妹に当たる子だし、一応才能さえあれば私からいい場所紹介するのもいいか。実家の方はデビュー前の子たちのデータ取れるぞと言えればいいし。

「どんな子なの？ 私も気になるし、障害物競走を目指す子は日本じゃ見なかったから気になるけども」

「ちよつとまってね。オジュウ〜！ 前話していたリボーが来ているわよ〜」

「え!!? あの大スターが!! 待ってよお姉ちゃん！ 今日のバイトで来るって聞いてな……つとと……」

黒気味の鹿毛にやや見える白い流星。子供ゆえにまだ未発達だけど女としてもアスリートとしてもいいものを持っている肉体。それに……

（あの道具の量を抱えてバランス崩してもとっさに足元だけで立て直したわねえ。凄い柔軟性とばね。いいものありそう）

「あら。貴方はシェフの妹ですか？ わたくしはメジロマックイーン。どうぞよろしく」

「お！ 何だ可愛いなお前！ アタシはゴールドシップ。気軽にゴルシちゃんと呼んでくれ」

「私がリボー。貴方が生まれる前にお姉さんにお世話になって、今もお世話になっているわ♪」

「お、おおー・・・ターフの名優に黄金の浮沈艦。日本総大将に白銀の末脚・・・そして伝説の継承者・・・わ、私はオジユウチョウサンです！ 今はこの近くの学校で勉強していますが、来年は中央トレセン学園に行けるよう頑張っています！」

緊張しつつも頭を下げてくれるオジユウチョウサン。うーん・・・これ、やばいわね。私だけじゃ100%の確信持てないけどもサンデーが見たらおったまげるんじゃないかしら。ぱっと見でも才能がオーラになって見えるレベルで感じるってごく一部だけなんだけども。

「ふむ・・・今度の秋休み、冬休みの時トレセンに来ないかしら？ 障害物は私も経験はないけど、欧州、アメリカ、日本の芝で走ったし基礎トレや動きくらいは見てあげる」

「い、良いんですか!? では、是非とも！」

「良かったわねオジユウくあ、リボー。作業を早めに終わらせることが出来れば場所貸すから、今日と明日もできれば見れる？」

「いいわよ。仕事の息抜きになるし、学園に来る前の子たちを見るのも楽しいから。変に走りや意識が固まる前の面白さがあるというか」

それにまあ、才能のある、それもこんな世界最高峰の宝石を見れる

となれば血が疼く。のんびりと農園で収穫作業と行くつもりだったが、
けどウマ娘。こういうので気合が出るのは性よね。

この後はなんやかんや仕事を早めに終えてオジユウチヨウサンの
動きを見て、近所で林業をしている方々の持つてきたおがくず、木片
を肥料、土壌の一つ代わりにばらまいて疑似ウッドチップを作って休
ませている畑の上で走ったりして愉快的時間を過ごして晩御飯もお
世話に。

出されたのは規格外品としてはじかれた野菜の数々。これを見て
みんな絶対出された食事を残さないと言いながらむしやむしやして
いたわ。食への意識改革をしたければ農業の収穫作業をやらせる。
子供たちへの食育にもちようどいいのでは？

あと、マックイーンちゃんとゴルシ、リョティイがオジユウチヨウサ
ンにやたら絡んでいたけど、気が合ったのかしら。